日本圖書

奉公會有功員、
『世界ニ於ケル日本人』著者 渡邊修二郎 著.

東邦關係

版權所有.

奉公會藏版.

319.211 W82t

韓山の風雲、延々日清の衝
突を惹起し、兵刃既交、
相見る此今日に於て、誰か勝敗
を策、對清の策我畫せざるも此
あらんや、韓山固と蕞爾たりと
雖、東洋乃襟喉、東亜の走集
あり、是を以て勝敗策の如何

国立国会図書館蔵書

国立国会
26.2.23
図書館

225489

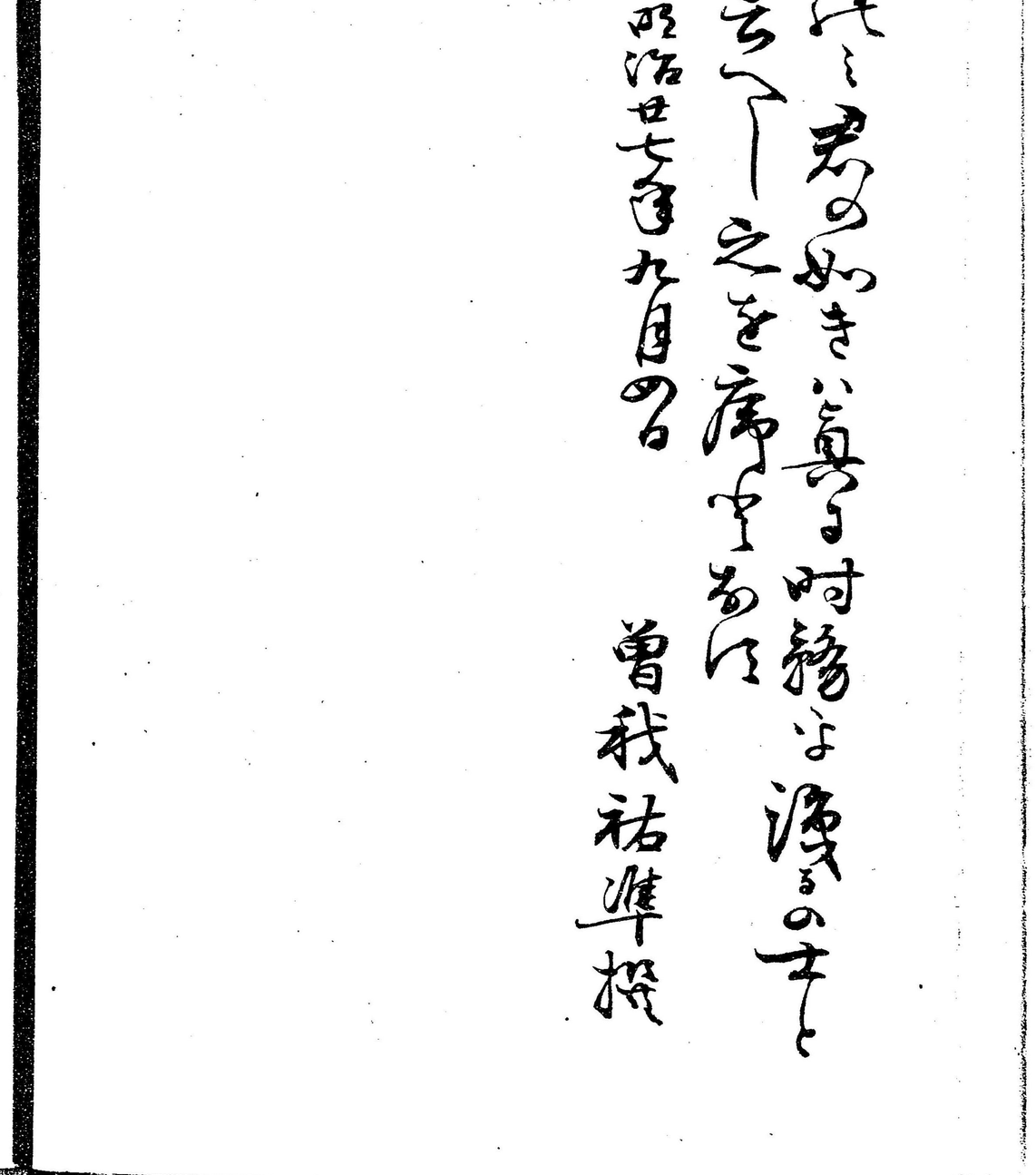
は以て東洋画一消一長に繋
り、對清策の如何に以て我帝
國は一感一衰に繋り、對歐策
乃如何に以て東亞の一治一乱に
繋る、夫れ其繋る所至且大
非れり、豈之を盡すに其道は
以てさるる可けんや、渡邊修二郎

氏茲に慨あり、東邦罪係一
篇は著し、以て之を世り公に
勢んと欲し、來て序は余に
請ふ、余搜きて之を讀む、論議
壯快、着眼警拔、佳と見るに足
新庵きこのあるはよ行はれ、而して
余豈全然其感を同りする

所のことなれば、其一片の硬骨と
満腔の義氣に在り、依て聊
一言を付すと云爾。
明治二十七年九月

近衛篤麿識

儒生法更時務を識ては時務を識ては俊
傑に在りとは古人の警語にありけれども今や豪
和操觚の士古を論し今を議するもの手
百何を限らず物ことも渡邊君乃其
作れ如く時務に切なるもの蓋し未だ
多くあらざるなり君前に「世界に於ケル
日本人」を著し壮年学弟をして契
冠を謝き腕痛を生せしむ今復東
邦関係を著はさ期する所知る爾を



本書ヲ公ニスルノ趣旨

熟〻古來國家盛衰興亡ノ跡ヲ察スルニ、素ヨリ氣運ニ係ルト云フト雖モ、又國策ノ當否ニ因ラズンバアラズ、是ヲ以テ其國民氣風ノ雄大ナルモノニシテ、未タ其國ノ衰亡シタルモノアルヲ聞カズ、又其國民氣風ノ怯懦ナルモノニシテ、未タ其國ノ勃興シタルモノアルヲ見ザルナリ。請フ看ヨ波蘭土ノ大モ、猶其ノ社稷ヲ全ウスルヿ能ハザリシニアラズヤ、又看ヨ英吉利ノ小モ、能ク其ノ國運ヲ進暢セシニアラズヤ、是レ果シテ何ノ因ゾ、蓋シ國策ノ當否ニ因ルニ外ナラザルナリ。而シテ今ヤ、宇内ヲ擧ケテ生存競爭ノ勢日一日ヨリ甚シク、國内鬩墻ノ爭ハ一變シテ域外侵略トナリ、再變シテ西力東漸トナリ、遂ニ人種ノ競爭ヲ起スニ至レリ。人種ノ競爭ハ即チ漆瞳人種ト碧眼人種トノ競爭ナリ、碧眼人種果シテ優ルカ、漆瞳人種果シテ劣ルカ、是レ將來ニ決スベキノ事勢ナリ。想フニ今日競爭力ノ燒點ハ、實ニ英露ノ二國ニ在リ、英ト云ヒ露ト云ヒ、均ク是レ歐洲ノ最強國、其爭端ヲ東歐ニ開キ、一角一逐、轉シテ中亞細亞ニ移リ、遂ニ

〔本書ヲ公ニスルノ趣旨〕

再轉シテ絶東海ニ波及セリ。絶東海ハ即チ我カ日本帝國ノ位スル處、彼等如何ニ勝敗ヲ決セントスルモ、我カ日本ニシテ一歩モ退カズンバ、二國其企望ヲ達スルニ由ナカルベシ、英露ノ角逐ニ對スル我カ日本帝國ノ地位、實ニ重要ト云フベシ、然レドモ日本ノ此ノ勢力アルハ、只朝鮮ノ國狀如何ニ依ルノミ。蓋シ朝鮮ノ位置タル、北ハ强露ニ連リ、西ハ滿淸ニ隣シ、而シテ其東南ハ一葦帶水ヲ以テ我カ日本ニ接セリ、此ノ地勢ノ勝、實ニ我カ日本ト相俟テ而シテ其用ヲナスモノナリ、故ニ若シ朝鮮國一朝不幸ニシテ外國ノ有トナランカ、我カ日本ノ勢力モ蓋シ是ヨリ挫折センナリ、朝鮮ノ將來豈ニ忽視スベケンヤ。而シテ近ゴロ端ナク朝鮮ニ事起リ、一變シテ日淸ノ衝突トナリ、竟ニ互ニ戰端ヲ開クニ至レリ、日淸ノ交戰我ニ於テ何カアラン、寧ロ好機ヲ我ニ與ヘタルモノニ非ズヤ、只此ノ好機、我ニ於テ失フベカラズ、之ヲ失ハズシテ宜シク我カ日本ノ天職ヲ盡スベキナリ、噫我カ日本ノ天職ヲ盡スト盡サヽルトハ、實ニ國策ノ當否ニ因ル、國策ノ當否ハ、是レ雄大的方針ヲ取ルト、怯懦的政略ニ從フトノ間ニ於テ岐レナム、夫レ然リ、誰カ今日ニ於テ怯懦的政略ニ從フモノゾ、我儕ハ飽ク迄モ邦家百年ノ大計ニ於テ、雄大的方針ヲ取ラレムコヲ切ニ希望シテ止マザルナリ。本會有功員渡邊修二郎君、夙ニ內外ノ大勢ニ就テ感アリ、嘗テ一二ノ書ヲ著ハシテ其意見ヲ述ブ、而シテ近時殊ニ日本ト朝鮮ノ將來ニ於テ深ク考フル所アリ、從來精覈研究シテ頗ル得ル所アリ、又一書ヲ著ハサントス、偶〻該國ニ內亂起リ、延イテ日淸ノ交戰トナレリ、乃チ益〻意ヲ銳ウシテ其著ヲ完成ス、實ニ邦家百年ノ大計ヲ較慮スルノ衷情、勃々トシテ紙面ニ溢ルヽヲ覺フ。本會依テ玆ニ刊行シテ、以テ誠意世ヲ憂ヒ國ヲ愛スルノ諸賢ニ問フ、幸ニ月旦スルノ榮ヲ賜ハラバ、獨リ本會ノ光榮ナルノミナラズ、實ニ邦家ノ裨補タラン、今本書ヲ發行スルニ當リ、聊カ其趣旨ヲ記スト云爾。

二千五百五十四年九月

奉公會幹事　鞍智芳章　謹識

【本書ヲ公ニスルノ趣旨】

◎目次。

◎緒言……一
◎本論……三
◎第一部。日、韓、清、三國近來ノ關係……二五
◎第一章。維新後日韓ノ關係……二五
明治六年ノ所謂征韓論……二八
◎第二章。日本軍艦砲撃ニ遭フ
辨理大臣派遣……五四
修好條約……五五
日本公使ト李鴻章ノ應接……五八
◎第三章。維新後韓使ノ來聘……六三
韓人ノ暴行……六九
駐韓公使……七一

日露兩國ノ事ニツキテ韓王ト宰相トノ對話
幷ニ李鴻章ノ書……七三
對韓政略ノ端緒……七七
◎第四章● 十五年ノ事變(一)……七九
大院君ノ性行……七九
攘夷ノ碑……八一
事變ノ起因……八三
大院君清國ニ拘置セラルル……八五
◎第五章● 十五年ノ事變(二)……八九
日本公使館襲撃……九〇
朝鮮ニ對スル廟議……九九
◎第六章● 十五年ノ事變(三)……一〇三
公使花房ノ再渡……一〇三
濟物浦條約……一一四
◎第七章● 朴泳孝等日本ニ使ス……一二〇
償金始末……一二一
日本政府對韓政畧ノ變轉(金氏日錄)……一二三
清廷ノ對韓政畧……一二九
◎第八章● 十七年ノ事變(一)……一三二
對韓政畧ノ試行……一三三
所謂日本黨ノ三日内閣……一六四
◎第九章● 十七年ノ事變(二)……一七二
支那黨ノ反撃……一七二
日本黨ノ敗走……一八〇
◎第十章● 十七年ノ事變(三)……一八八
大使朝鮮派遣……一八八

京城條約……一九一
條約履行、等……一九三
外人ノ所見……一九五
◎第十一章● 大使清國派遣……二〇一
天津條約……二〇五
大院君ノ歸國……二〇七
◎第十二章● 大井某等ノ朝鮮計畫……二〇九
日本人侵韓ノ風說(清人ノ驚愕)……二一三
◎第十三章● 金玉均……二一六
引渡ノ請求……二一六
刺客數回ノ渡來……二一六
遠島送致……二三一
上海ニ於テノ遭害……二三七

朝鮮ニ於テノ追刑……二四一
◎第十四章● 朴泳孝等ト刺客……二四三
公判……二四五
朴泳孝小傳……二五三
◎第十五章● 朝鮮ニ於ケル邦人ノ營業權等……二五八
十七年ノ亂後日韓清ノ關係……二六〇
朝鮮ヘ贈金ノ事……二六二
防穀事件……二六五
◎第十六章● 朝鮮ニ於ケル郵便電信事業……二六九
◎第二部● 朝鮮國事歷及ビ日本支那ト古來ノ關係……二七三
◎第十七章● 朝鮮國事歷……二七三
◎第十八章● 日本朝鮮古來ノ關係……二八一
◎第十九章● 朝鮮支那古來ノ關係……二九一

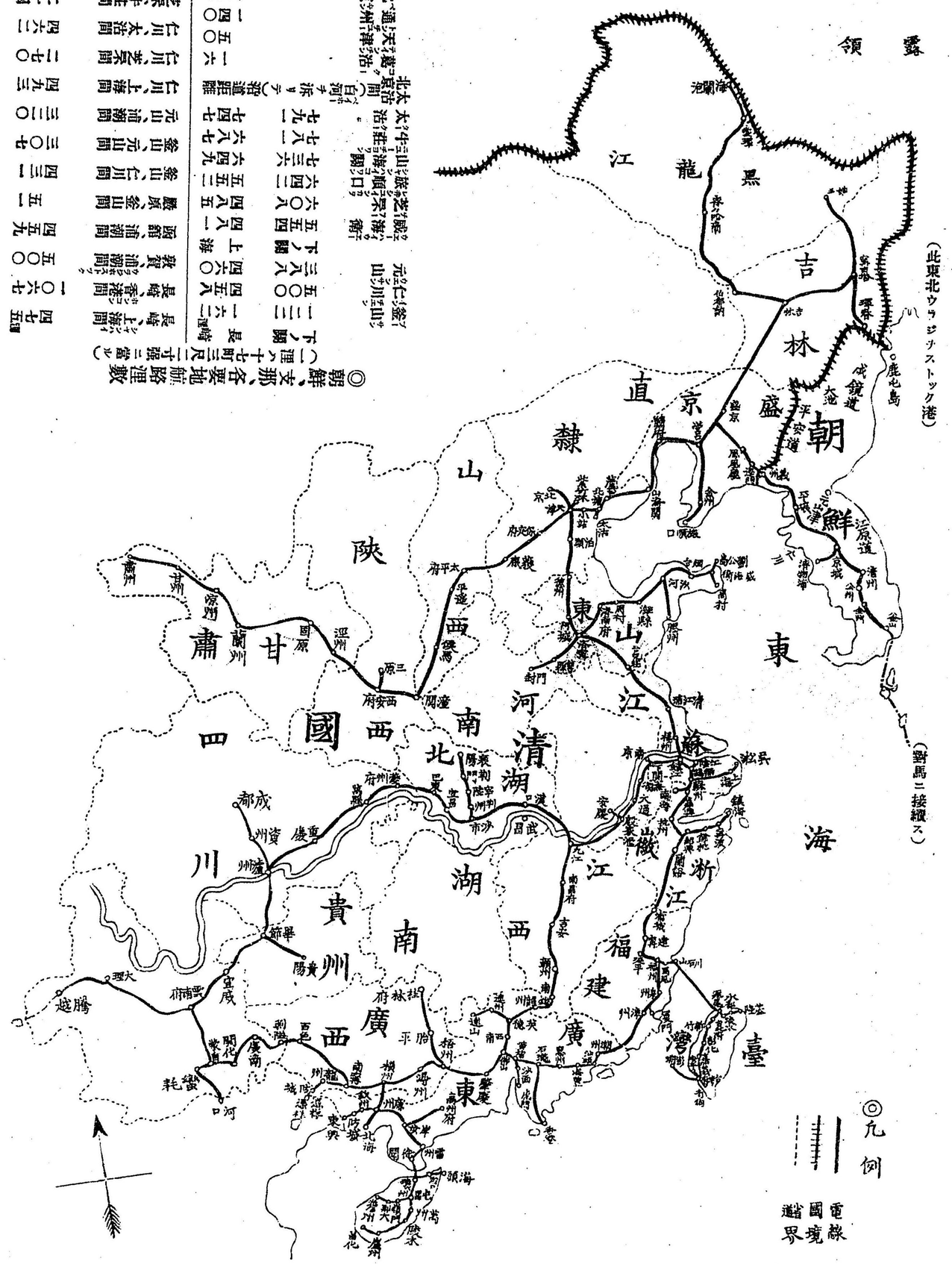
◎第三部● 朝鮮ト歐米各國ト.ノ關係……三〇五
◎第二十章● 朝鮮ト佛國トノ關係……三〇五
歐人此鎖界ニ入リタルノ始……三〇五
耶蘇教師ノ殺戮……三〇五
佛韓交戰等……三〇六
◎第廿一章● 朝鮮ト米國トノ關係……三〇九
米韓交戰……三〇九
米韓條約……三一〇
朝鮮ノ獨立ニ對シ清廷ノ妨碍……三一二
◎第廿二章● 朝鮮ト英國トノ關係……三一七
英韓條約……三一七
巨文島占領始末……三一七
◎第廿三章● 朝鮮ト露國トノ關係……三二九
露韓條約……三二九
鹿屯島ノ割與……三三九
露韓密約事件……三四〇
清官ノ威嚇(韓王廢立ノ陰謀)……三四五
◎附錄
◎第一號● 修好條規……三五五
◎第二號● 濟物浦條約……三五七
◎第三號● 修好條規續約……三五八
◎第四號● 京城條約……三六〇
◎第五號● 天津條約……三六一
◎第六號● 中國朝鮮商民水陸貿易章程……三六二
◎第七號● 英韓條約ノ要領……三六五
◎第八號● 朝鮮ニ於ケル英國ノ裁判權……三六六

◎第九號● 米韓條約……三六七
◎第十號● 露韓條約（特別約定書）……三七〇
◎第十一號● 露韓陸路通商條約……三七九
◎第十二號● 日朝兩國盟約……三八六

◎圖畫幷古碑文●
◎朝鮮支那電線幷航路圖……一
◎江華戰爭ノ圖……五四
◎朝鮮國大院君李夏應肖像……七九
◎朝熙堂謁見式ノ圖……一〇八
◎朝鮮國王一見シテ大ニ驚怖シタル畫ノ寫……一三三
◎高勾麗好太王古碑文中ノ數句（寫眞版）……二八二
◎巨文島占領ノ圖……三一九

◎朝鮮、支那、各要地航路運數
（一運ンテ十七町三尺ニ当ル）

長崎、上海間	四七五	下ノ關、釜山間	一二三〇
長崎、芝罘間	一〇六七	下ノ關、仁川間	三八〇
敦賀、清津間	四五〇	上海、仁川間	四六〇
敦賀、浦潮間	四五九	上海、元山間	四七四
函館、浦潮間	四五一	芝罘、仁川間	四六九
厳原、釜山間	四八五	芝罘、元山間	四九九
釜山、仁川間	五五二	芝罘、上海間	五〇六
釜山、元山間	六四九	芝罘、牛荘間	六八七
元山、浦潮間	六八七	芝罘、天津間	七四五
仁川、芝罘間	七三六	牛荘、天津間	七四二
仁川、上海間	七四七	仁川、太沽間	七九二
仁川、浦潮間	七八二	太沽、天津間	八〇五
仁川、牛荘間	七九二	太沽、牛荘間	八〇六
元山、仁川間	八四七	天津、牛荘間	八一四
元山、釜山間	八五二	天津、芝罘間	八一四
厳原、釜山間	八五五	天津、上海間	八一四
函館、浦潮間	八五九	天津、浦潮間	八一四
敦賀、浦潮間	八六〇	天津、清津間	八一四
敦賀、清津間	八六〇	天津、京城間	八一四
敦賀、釜山間	八六〇	天津、仁川間	八一四
敦賀、元山間	八六〇	天津、元山間	八一四
敦賀、仁川間	八六〇	天津、釜山間	八一四
敦賀、京城間	八六〇	天津、厳原間	八一四
敦賀、天津間	八六〇	天津、函館間	八一四
敦賀、牛荘間	八六〇	天津、敦賀間	八一四
敦賀、太沽間	八六〇	天津、長崎間	八一四
敦賀、芝罘間	八六〇	天津、上海間	八一四
敦賀、上海間	八六〇	天津、芝罘間	八一四
敦賀、長崎間	八六〇	天津、牛荘間	八一四
敦賀、天津間	八六〇	天津、太沽間	八一四
敦賀、牛荘間	八六〇	天津、仁川間	八一四
敦賀、太沽間	八六〇	天津、元山間	八一四
敦賀、芝罘間	八六〇	天津、釜山間	八一四
敦賀、上海間	八六〇	天津、厳原間	八一四
敦賀、長崎間	八六〇	天津、函館間	八一四
敦賀、天津間	八六〇	天津、敦賀間	八一四
敦賀、牛荘間	八六〇	天津、長崎間	八一四
敦賀、太沽間	八六〇	天津、上海間	八一四
敦賀、芝罘間	八六〇	天津、芝罘間	八一四
敦賀、上海間	八六〇	天津、牛荘間	八一四
敦賀、長崎間	八六〇	天津、太沽間	八一四
敦賀、天津間	八六〇	天津、仁川間	八一四
敦賀、牛荘間	八六〇	天津、元山間	八一四
敦賀、太沽間	八六〇	天津、釜山間	八一四
敦賀、芝罘間	八六〇	天津、厳原間	八一四
敦賀、上海間	八六〇	天津、函館間	八一四
敦賀、長崎間	八六〇	天津、敦賀間	八一四



〔朝鮮支那電線幷航路圖〕

東邦關係。

『世界ニ於ケル日本人』等著者　渡邊修二郎著。

緒言。

朝鮮問題起ルヤ、延イテ日清ノ交渉トナリ、遂ニ干戈ヲ以テ事局ヲ決セントスルニ至レリ。此問題タル、實ニ東亞各國安危ノ由リテ繫ル所、其結果ニヨリテハ、或ハ歐米各國ノ形勢ニモ影響スルニ至ラントス、其關係極テ重且ツ大ナリト謂フベシ。

今夫レ日清ノ交戰假令ヒ一タビ結局ヲ見ルモ、朝鮮問題ハ固ヨリ容易ニ結局ニ至ルベキモノニ非ズ、其前途頗ル遼遠ナリトス、吾人豈ニ一日モ之ガ考究ヲ怠ルベケンヤ。

此重大問題ヲ考究シテ、當今ノ計畫ヲ立テ、將來ノ目的ヲ定メント欲セバ、必ズヤ最モ之ガ利害ヲ感受スル日本及ビ清、露、英、等各國ノ朝鮮ニ於ケル現在ノ關係ヲ審ニスルハ、勿論從來ノ事歷ヲモ明ニセザルベカラズ。苟モ之ヲ審ニシ、之ヲ明ニセンカ、此問題ヲ解クノ其レ猶ホ刀ヲ以テ竹ヲ割ルガ如ケンノミ。若シ然ラズシテ、輕々策ヲ立テ、忽々論ヲ爲サンカ、其策論空々漠々、恰モ舵ナキ舟ヲ行ルガ如ケンノミ。　余ヤ不敏ト雖モ、從來此問題ニ就キテ、聊カ考究ヲ試ムル所ナキニアラズ、之ガ材料トシテ蒐集シタルモノ亦少シトセズ、目下ノ事狀之ヲ默々ニ附スルニ忍ビズ、乃チ此書ヲ公ニ

シ、以テ世ノ識者ニ問ハント欲ス●

此書分テテ本論及ビ三部トナス○即チ本論ニ於テハ、我ガ東洋ノ大計ヲ說論シ、亞洲ノ形勢上幷ニ日本ノ地位上ヨリ觀察シテ、日本ノ取ルベク、且ツ取ラザルベカラザル國家ノ大計ヲ言明シテ玆ニ斷案ヲ下セリ○第一部ニ於テハ、日、韓、淸、三國近來ノ關係ヲ說述シ○第二部ニ於テハ、朝鮮國ノ事歷、及ビ日本、支那兩國ノ朝鮮ニ對スル古來ノ關係ヲ略敘シテ、以テ第一部ノ參照ニ供シ○第三部ニ於テハ、朝鮮ト露、英、米、佛、各國トノ關係ヲ說述ス○又卷末ニ附錄ヲ添エ、以テ本文ニ關係アル國際條約書等ヲ參閱スルノ用ニ供ス●

今本書ヲ公ニスルニ當リ、全篇ノ大旨幷ニ其序次ヲ概述スルコト斯ノ如シ●

◎本論●

◎我ガ東洋ノ大計●

帝國永遠ノ盛榮ヲ欲セバ、朝鮮國ヲ他國ノ有ニ歸セシムベカラズ、北海道將來ノ安全ヲ望マバ、朝鮮海ノ關鍵ヲ我手ニ握ラザルベカラズ、而シテ日本海ノ南北兩口ヲ扼スルヿ是レ實ニ帝國國防上ノ一大要務ナリ●

然ルニ從來我ガ對韓政策其機宜ヲ失ヒシヿ啻ニ一二回ニ止マラズ、近クハ明治以後ニ就テ云フモ、六年ノ對韓方略俗士ノ文弱論ノ爲ニ破ラレシヨリ、八年ノ江華條約唯交際ヲ幕府ノ舊ニ復シタルニ過ギズ、十五年ノ公使館被擊ニ至リテハ我レ問罪使ヲ發ノ大ニ爲スル所アルベキノ時機タリシニ、要償ノ締約一部ノ事局ヲ結ビタルノミ、十七年再ビ時機ヲ得タルニ關ラズ、亦大ニ措置ヲ誤リ、前後ノ方略全カラズ、令セシ者決意堅カラズ、駐使最モ其人ヲ得ズ、僅ニ淸佛ノ交戰ヲ恃ミテ狐疑逡巡、彼ノ改革黨ト共ニ一敗地ニ塗レタル後、天津條

約ヲ以テ一時ノ無事ヲ粉飾シタルニ過ギズ。　此ノ如ク我ガ政事者ハ屢〻同樣ノ失錯ヲ復習シテ、政略常ニ蹉跌シ、蹉跌スル毎ニ國威ヲ損シ、爲ニ韓人ノ信倚ヲ減ジ、爲ニ清人ノ侮慢ヲ增スニ至レリ、實ニ遺憾ニ堪ヘザル所ナリ。是レ從來政事者ガ韓國ノ事ニ重キヲ置カズ、公使多クハ第一流ノ人ヲ用井之ニ全權ヲ與ヘズシテ、第二三流以下ノ人ヲ用井テ常ニ之ヲ掣肘シタルガ故ナリ。

既往ハ追フベカラズ、遂事ハ咎ムルモ益ナシト雖モ、然レドモ今日對韓政策ヲ講ズルニ當リテ、最モ妨害ヲ爲スハ韓清二國人ノ此感情ナリ。蓋シ韓人ノ日清兩國人ニ接セル者ハ日本人ノ敬愛スベクシテ、清人ノ厭避スベキヲ悟ルト雖モ、未ダ日清兩國人ヲ知ラザル者ハ、故ナク、日本人ヲ輕蔑シ、隨テ清ノ大國賴ムニ足ルト爲シテ之ヲ崇尊ス、而シテ八道中兩國人ニ接セル者ハ尙ホ少數ナリトス。　十七年ノ失敗以後、我ノ彼ニ對スル政略又一變シテ、專ラ消極ノ方針ヲ取リシヨリ、韓人ノ日本人ヲ知ル者モ亦知ラザル者ト共ニ之ヲ蔑視スルニ至リ、清人ノ侮慢ヲ日本人ニ加ヘ亡狀ヲ極ムルヿ亦一層ノ甚シキニ至

レルナリ。　韓人ハ清人ノ暴戾ヲ惡マザルニアラズ、而カモ尙ホ之ニ依賴シ、之ニ服從シタルモノハ、其政略粗ボ一貫スル所アリテ、徐ロニ多少ノ恩惠ヲ施シタルヲ以テ、韓人ハ此大國ニ賴リテ以テ安ンズベシト盲信シタルガ故ノミ。

又清人ガ日本ニ對シテ、侮慢ヲ加ヘ、亡狀ヲ極ムルト同時ニ、常ニ敵意ヲ挾メルハ深ク猜疑心ヲ蓄フルガ故ナリ、而シテ其猜疑心ヲ蓄フル所以ハ日本政府ヲ以テ專ラ他國侵略、域外蠶食ヲ主義トスルモノト想フガ故ナリ。臺灣ノ征討、琉球ノ廢王、皆ナ視テ以テ清國ノ版圖ヲ侵略シタルモノト爲セリ。是レ實ニ清國政官ノ一大誤信ナリ、明治ノ政府豈ニ一人ノ海外侵略ヲ主旨トスルノ大政治家アランヤ、有ラザルガ故ニ余ハ曾テ之ヲ慨歎シ、政事者ノ小眼國外ヲ見ルノ餘地ナク、始終內治ノ小務ニ齷齪スルノミト唱道シタルコアルナリ。若シ我ガ政府中清人ノ想像スルガ如キノ人アランカ、何ヲ苦ミテ域內ニノミ欝屈シテ僅ニ對議會策ニ汲々タランヤ。　此誤想ハ獨リ清人ニ止ラズ。韓人モ

亦同樣ノ誤想ヲ懷ケリ。『此ノ如キノ誤想ヲ懷ケル清韓人ニシテ亦同時ニ侮蔑ヲ我ニ加フルモノハ何ゾヤ、蓋シ其意日本ハ侵略ノ欲望ヲ蓄フト雖モ、國小ニ力弱クシテ能ク爲スコアルニ足ラズト皮相スレバナリ。

『今夫レ我ガ對韓政策ヲ有效ニ行ハント欲セバ、先ヅ清人ノ暴慢ヲ挫折セザルベカラズ、然ルニハ韓人ノ如キハ手ヲ下サズシテ自ラ我ニ服從センノミ。曾テ英佛ノ兵北京ヲ陷レシニ、韓人大ニ恐怖シタルガ如キ、以テ韓人ノ支那ニ對スルノ意向如何ヲ察スベシ。』然リ而シテ清人ノ暴慢ヲ挫折スルハ唯戰爭ノ一手段アルノミ、余ハ前年戰爭ノ時トシテ國家ノ利益ノ爲ニ、土地ヲ取領スルニツキテハ、之ヲ占有スルモ可ナリ、之ヲ買收スルモ可ナリ、彼歐洲強國ノ新地ヲ領有スルヤ、多ク之ヲ奪掠シタルモノナリ、我何ヲ必ズシモ獨リ德義論ヲ國際上ニ鄭守スルノ要アランヤ。或ハ誤リテ之ガ爲ニ外國ト戰端ヲ開クコアランカ、是レ亦必ズシモ避クベキ所ニアラズ、無謀ノ戰爭固ヨリ不可ナリト雖モ、國トシテ外戰ヲ怖レザルノ覺悟ナカルベカラズ、古ヨリ外戰ヲ怖レタルノ國トシテ亡ビザルモノハ殆ド

アルコトナシ、國勢伸張ノ爲ニハ一戰亦時トシテ已ムヲ得ザルモノアリ、且ツ今日ノ人心萎靡ヲ救ヒ、國ノ元氣ヲ發達スルノ一策ナリトス。事是ニ至ラバ、國人對外ノ思想勃然トシテ興リ、軍政ノ改革、艦船ノ製造、言論ヲ待タズシテ行ハレンノミ。』（廿六年六月刊行『世界ニ於ケル日本人』）

ト云ヘリ。蓋シ戰爭其機略ヲ誤ラズンバ、此般ノ利益ニ止ラズ、一タビ支那ト交戰スルキハ、世界ヲシテ日本國ヲ知ラシメ、歐洲人等ノ迷誤ヲ覺破スルノ捷徑ニシテ、後來外交上ニ裨益アルコト少小ニアラザルヤ疑ヲ容レザル所ナリ（歐人日本國ヲ知ラサル者アリ、或ハ支那ノ一部ト誤想スル者アリ、其無識笑フヘシ）、而シテ余ガ到底日清兩國ノ交戰一度ハ遲クベカラザルヲ見シハ十數年前ニ在リ、曾テ余ハ識見未ダ足ラザリシヨリ、實ニ誤リテ非征韓論ヲ唱道シタリ、其後大ニ悟ル所アリ、憫然トシテ前說ヲ改メ、爾後『維新以來ノ大失計ハ何ゾヤ』ト云フノ間ニ逢ヘバ、必ズ『ソハ征韓中止ナリ』ト斷言スルナリ、『然

ルニ近ク十數年來日韓清ノ關係起ルヤ、政府ハ常ニ讓歩ノ方向ニ出テ、益〻彼ノ傲慢ヲ增長セシムルニ至レリ、是ニ於テカ余ハ一書ヲ著シ、對韓政策之ヲ行ハバ、大ニ之ヲ行フベク、行ハズンバ、全ク行ハザルノ愈ルニ若カザルノ意ヲ述べ、從來對韓政策其計畫ヲ誤リ、時機ヲ失ヒタルヿ當ニ一二回ニ止ラズ、勞費愈〻ヨ多クシテ、功ヲ見ルヿ益〻難ク、俊傑アリト雖モ亦俄ニ之ヲ奈何トモスベカラザルノ狀勢ニ陷レリ、況ヤ半途ノ處置タル勞シテ功ナシ、寧ロ姑ク之ヲ捨テ、專ラ南洋進略ニ從事スルノ利ナルニ若カザルナリトマデ切言シタルヿアリキ。

然ルニ明治廿七年六月ニ至リ、突然韓地出兵ノ事アリ、吁此內閣ニシテ此事アルハ余ノ最モ意外トスル所ナリ、意外トスル所ナレトモ、亦大ニ贊辭ヲ呈スルニ吝ナラザル所ナリ、內閣雲深ウシテ、余等門外漢ノ思想ニ上ラザルヿ多シト雖モ、此事ヤ或者ノ評ノ如ク、那破侖ノ故智ニ倣フテ、內逼ノ銳氣ヲ避ケテ、之ヲ外ニ洩スガ爲ニ云々ト言フガ如キ淺薄ノ小政略ニ出デタルニハ非ルベシ、何トナレバ輿論ニ迫ラレ、對外硬ノ氣焰ニ脅カサレ、乃チ事ヲ擧グト云フガ如キハ政事家ノ識見ト云フベキモノニ非レバナリ。

夫レ然リ、既ニ出兵ノ事アリテヨリ數旬ノ後、未ダ何等ノ聞ク所ナカリキ、是ニ於テカ、余ハ軍國ノ事ニツキテ、前途頗ル憂慮ニ堪ヘザルモノアリ、乃チ一篇ノ意見書ヲ草シテ朝野知名ノ政事家中相識ノ數氏ニ送レリ、其文左ノ如シ。

韓清事件ニ關スル一大急要事。（廿七年七月六日記）

今ヤ大兵出テヽ外ニアリ、敵ヲ斫ル、刀劍既ニ室ヲ放ル、空手退還スベカラザルノ勢ニ迫レリ。初ハ居留邦民保護ノ爲ニスト云ヘリ、何ゾ夫レ兵ノ多キニ過グルヿ此ノ如クナルヤ。後ニハ韓國政治ノ改革ヲ清廷ニ協議スト云ヘリ、其應ゼザルベキハ當初ヨリ明ナリ。此等ノ處置ニ就キテハ大ニ言フベキ所アリト雖モ、今日ハ其時機ニ非ルヲ以テ姑ク其當否ヲ言ハザルベシ、但今後ノ處置如何ハ大ニ國家前途ノ大事ニ係ルヲ以テ余ハ帝國ノ一民トシテ切言セザルヲ得ザルナリ。

『政府ガ今後取ラントスルノ方針ニ至リテハ固ヨリ余等ノ窺知セザル所ナリト雖モ、大兵國外ニ出デ、ヨリ既ニ幾旬、清廷ニ對スル協議ノ不調以後未ダ何等ノ實蹟アルヲ見ザルガ如シ。夫レ單ニ韓國國政改革ト云フ、語意未ダ詳ナラザル所アリト雖モ、推測スルニ、其政府ノ組織ヲ改正シテ官吏ノ更迭ヲ行ヒ(例トシテ官制改革亦其一ナラン)、兵制ヲ改革シテ我國人ヲ教師ニ聘用セシメ、其他或ハ電信、鐵道、郵便ノ施設ニ關シテ或ル條件ヲ要求スル等ノ事アルベシ。果シテ然ラバ、假ニ清廷ヲシテ一旦會議ニ應ゼシムルモ、其協議上好結果ヲ我ニ得ルコト極テ難キハ理ノ最モ覩易キモノトス、何トナレバ清廷ノ同意スベキ改革ハ我ニ取リテ寸毫モ價値ナキモノタランコト昭然タレバナリ(十七年ノ變ニ事ノ敗レタルハ小改革ヲ目的トシタルニ原因セリ)。

『目下ノ實情既ニ一歩ヲ進ミ、我ガ獨力ニテ韓廷ニ對シテ改革要求ニ着手セザルヲ得ザルノ地位ニ立テリ、而シテ其改革タル有名無實ノ改革、即チ我ニ實益ナキノ小改革タルベカラズ、又清廷若シ我ガ改革ニ對シテ袖手傍

觀スルガ如キ類ノモノタラバ、毫モ我ヲ益スルノ改革ニ非ザルヤ豫知シ得ベキナリ。

『然ラバ則チ改革ニ着手スルト同時ニ清國ノ妨碍ヲ受クルハ勿論、之ト開戰スルノ決心ヲ要スルヤ言ヲ待タザルナリ。然リ、開戰固ヨリ可ナリ、早晩ウスルコト能ハザルノ事勢ニ陷リタレバナリ。

『果シテ清國ト開戰スルノ決心ナナスカ、亦之ト同時ニ迅速ニ——チ領有スルコト最大要務ナリ。此事タル、韓廷ニ對シテ或ル改革ヲ實行セシムルニ比セバ却テ容易ナルモノアリ、且ツ此策タル、清國ト開戰スルニツキテ最モ必要ナルハ勿論、早晩直接ニハ我國ノ爲ニ、間接ニハ朝鮮ノ爲ニ、斷行セザルヲ得ザルノ要務ニ屬ス、而カモ今日ハ恰モ之ヲ斷行スベキノ好機會ナリ。現ニ清國外交官某サヘモ曾テ其韓王ニ贈レル朝鮮策略中ニ『北ニ豺虎アリ、朝鮮一タビ變故アラバ、九州四國亦恐クハ日本ノ有ニ非ズ』ト云ヘリ。清人亦

此言ヲ爲ス、邦人固ヨリ既ニ之ヲ知レリ、唯今日ハ之ヲ知ルノミヲ以テ足レリトス可ラズ、宜ク日本ノ爲ニ朝鮮ニ對シテ一大英斷ヲ實行スベキノ時機ナリ。而シテ一大英斷即チ——領有ヲ斷行スルニ就テハ多言ヲ要セズ、單ニ我國ノ前途ノ利害ヲ爲ニストノ一義ニテ十分ナリトセザル可ラズ、即チ正當ノ防衛ノ爲ニスルモノナリ。我ガ隣地ノ厦屋將ニ顚覆シ、爲ニ我ガ家ヲモ傾倒セントスルモ、其主人之ガ備ヲ爲スコト能ハザルニ當リ、我レ豈ニ坐シテ其害難ヲ受クベシト云フノ理アランヤ。世ノ徒ニ名義ニノミ拘泥スル者試ニ歐米ノ所謂文明國ノ爲ス所ヲ看取セヨ、思ヒ半ニ過グルモノアラン。彼ノ阿片戰爭ハ英國ガ毒ヲ四億ノ民衆ニ賣ルノ利ヲ失ハンコトヲ恐レテ起シタルモノニ非ルカ。又一八七〇年ノ佛普戰爭ハ其實佛后ガ密ニ僧徒ト相結托シテ舊教ノ回復ヲ謀リタルニ因シタルニ非ルカ。甚シキハ印度海ヲ超エ東洋ニ來リテマデモ、歐洲均勢ノ餘波ヲ他邦ニ注ガントス、安南ノ侵略、巨文島ノ占領ノ如キ、皆然ラザルハナシ、是レ其各〻國利ヲ得、國慾ヲ逞ウセンガ爲ナリ

トハ云ヘ、今ノ世界ニ於テ、國權ヲ全ウシ國譽ヲ保タンガ爲ニ、亦已ムヲ得ザルノ實勢アルニ由ラズンバアラズ。此ノ如ク數ヘ來ラバ國ト國トノ間ニ『義戰』ナルモノ幾何モアルコトナシ、唯彼レ此レヨリ善キハ則チ之アルノミ●

議者又概ネ日韓條約ト天津條約トヲ引キテ朝鮮獨立ヲ云々シ、有識政事家ト云ハル、者ノ中亦多クハ此說ヲ主持ス、固ヨリ取ルニ足ラザル陳腐ノ迂說ノミ、其獨立ノ事行ハレ難キコト明白ナルノ今日、既ニ大兵ヲ發シテ其國(所謂獨立國)ノ京城ニ臨ミ、我ガ爲ス所ニ對シテ障碍ヲ與ヘントスルノ國ト雌雄ヲ決センコトスルノ機ニ迫リ、獨立說ノ如キ、又條約存廢說ノ如キ愚論ハ顧ルニ足ラサルナリ● 夫レ朝鮮ノ國タル、古來未ダ曾テ外國ノ爲ニ全土ヲ攻滅セラレタルコトアラズ、又大ニ領土ヲ削奪セラレタルコトアラズ、彼ノ支那ノ如ク、夙ニ文明ヲ以テ世界ニ魁タリシモ、後世ニ至リテ國民ノ氣風全ク頽廢シ、國病深ク体中ニ入リテ回愈ノ期ナク、其領域徒ニ厖大ナルモ、北胡小國ノ爲ニ屢ハ國家ヲ攻滅セラレタルノミナラズ、英佛二國ノ爲ニモ破

ラレ、城下ノ盟ヲナシテ領土ヲ割奪セラレ、又自ラ其藩屬トスル諸邦（安南、緬甸、暹羅）ヲ侵略セラレ、殆ド國トノ國ノ躰面ヲ具ヘザル者ノ比ニアラズト雖モ、又朝鮮人民ハ教フルコト能ハザルノ人民ニアラズ、朝鮮國土ハ富マシムルコト能ハザルノ國土ニアラズト雖モ、然レ𪜈從來其邦他國ノ併呑ヲ免レタルモノハ、各國交通ノ道未ダ開ケザリシ時ニ於テ、僅ニ孤立シタルノミ、其實獨立シタリト云フニ足ラザルナリ。而シテ不幸ニシテ往時屢〻接隣大國ノ侵寇ヲ蒙リテ、其疲弊未ダ回復セズ、近來殊ニ東洋要衝ノ位地ニ立チテ各國爭競ノ餘瀝ヲ受ケ、輒モスレバ強國奪掠ノ禍ニ罹ラントス、加フルニ邦内權家ノ政柄ヲ爭フアリテ、治國富強ノ道ヲ講ズルニ遑アラズ、焉ヾ對外策獨立論ノ何タルヲ知ランヤ、人民常ニ官吏ノ掊克ニ堪ヘズシテ、唯一日ノ安ヲ偷ムニ汲々タルノミ、焉ヾ智德ヲ研キ實力ヲ養フノ暇アランヤ。

『其民ヤ無氣、其王ヤ無力、其國ヤ貧弱ニシテ』齊楚ノ間ニ介マル、齊ニ事ヘンカ、楚ニ事ヘンカ、』胡人ノ巧言ヲ聽キテ東隣ヲ怖レ、北人ノ甘言ヲ聽キテ其國ニ賴ラントシ、之ニ獨立ノ要ヲ告ケバ、却テ獨立ノ價値幾何ヲ問フ、首鼠兩端、猜疑自ラ爲ス所ヲ知ラズ、國家日ニ衰亡ニ瀕シ、其危キコト旦夕ニ在ラントス。自力ヲ以テ獨立スルヲ得ザル者ヲ助クルニ他力ヲ以テス、是レ既ニ獨立ニ非ル也。試ニ問ハン、古來他力ニ賴リテ能ク獨立ヲ全ウシタルノ國幾何アリヤ。『往年金玉均ガ來リテ我國ニ投スルヤ、老傑ヲ以テ聞ユル某伯ニ就キテ朝鮮獨立ノ策ヲ叩キシニ、伯ハ冷然之ニ答ヘテ、其之ヲ空ク失ハンヨリモ寧ロ北隣大國ニ賣却スルノ得策タルコトヲ語リシニ、金ハ憮然トシテ去レリト云フ。伯ノ言少シク妄漫ニ過ギタルガ如シト雖モ、其深意之ヲ言外ニ察シテ可ナリ。』夫レ然リ朝鮮ノ前途甚ダ恃ムベカラズ、亦憐ムベキニアラズヤ。是故ニ誠意ニ——ヲ保護國等トナシテ、其人民ノ安全ヲ保持スルノ國アラバ、寧ロ其不幸ヲ救フモノニアラズヤ、之ヲ救フヤ、若シ藥瞑眩（メンケン）セズンバ、其病癒エザルナリ。前來之ガ隣邦タルモノ深ク慮リテ、東邦百年ノ大計ヲ誤ルベカラザルハ實ニ今ノ時ニ在リ。

朝鮮ノ國ト爲リ此ノ如シ、其獨立スルヲ得ザルノ國タルヿ明ナリ、他ノ助力ヲ受クルノ間僅ニ獨立ノ外形ヲ裝フニ過ギス、故ニ東洋ノ大事ノ爲ニ之ヲ保持シテ東洋以外或ル國ノ呑噬ヲ免レシムルノ要アルニ當リテハ、之ガ任ニ當ルノ國ナカル可ラズ、而シテ亞洲ノ中之ガ任ニ當ルニ足ルベキノ國ハ僅ニ日本ト支那ノ二國アルニ過ギズ。今若シ支那ニシテ此任ニ當ルニ堪ヘンカ、此朝鮮保持ノ任ヲ擧ゲテ支那ニ托シテ可ナリ、我國政事家徹ナリト雖モ豈ニ此般ノ膽識洪量ナシトセンヤ。然ルニ支那ハ前述ノ如ク、國家タルノ資格ヲ欠キ、自國ノ領土スラ保有スルヿ能ハス、其自ラ西南ノ藩邦ト稱スルモノニ對シテスラ保護ノ任ヲ全ウスルヿ能ハズシテ、如何ゾ更ニ此東亞ノ要衝ニ立ツ所ノ半島國ヲ保持スルノ任ニ堪フルヿヲ得ンヤ、是ニ至リテ、之ガ任ニ當ラザルヿヲ得ザルハ獨リ日本一國アルノミ。而シテ我之ヲ保持スルノ任ヲ全ウセント欲セバ、必ズ——ヲ我保護國トナスカ、或ハ之ヲ領有セザルベカラズ、然ラズンバ久シカラズシテ癡鷄ガ猛鷲ノ爪牙ニカヽランヿ

ヿ鏡ニ懸ケテ見ルガ如シ。嗚呼時カ、時カ、時一タビ去ラバ、悔ユルモ何ソ及バン。

惟フニ今日ノ計唯三策ニ出デズ。——我保護國トナスカ、或ハ之ヲ領有シテ我版圖ヲ擴張シ以テ我西境ノ藩屏ヲ堅ウス、是レ上策ナリ。——ヲ中分シテ日清各其一ヲ領ス（假ニ爲シ得ベシトセバ）是レ中策ナリ。國政改革ノ約ヲ爲シタル名義ノ下ニ兵ヲ撤ス、是レ下策ナリ。調停仲裁以下ニ至リテハ、其何レノ國ヲ介スルヲ問ハズ、是レ無策ナリ。殊ニ東洋國ノ關繫ニ西洋國ガ干渉スルノ例ヲ增スガ如キハ其害清ガ朝鮮ノ事ニ干渉スルノ害ヨリモ甚シキ者アリ、最モ之ヲ避ケザルベカラズ。今回某國即チ由來蠶養ヲ國是トシ太平洋ノ運動ヲ自由ニセンガ爲ニ早晩日本海ノ西岸ニ不凍港ヲ得ントシテ鋭意機會ノ乘ズベキヲ待テル某國ガ既ニ調停ヲ試ミントシタルハ該國ガ或ル時機ヿ主トシテ六年以後ノ北邊鐵道開通ノ時機ヿヲ待ツノ深意ニ根據スルハ智者ヲ待タズシテ知ルベキナリ、前鑑遠カラズ、咸豐十年ニアリ、吾人豈ニ戒

心セザルベケンヤ。而ノ調停ノ通告、ヨリモ吾人ノ一層戒心スベキモノアリ。吾ヒ恐ル或ハ更ニ幾歩ヲ進メ㆓世人ノ意表ニ出デ㆒日本ト力ヲ協セテ共ニ俱ニ朝鮮ノ事ヲ處セントス通告シ來ラン㆒ヲ、我レ豫メ此時ニ對スルノ決意ナカルベカラザルナリ。

聞ク二三ノ國ヨリ我國ニ向ヒテ試ミタル調停ハ政府斷然之ヲ謝絕シタリト、實ニ近年ニナキ政府ノ美事ト謂フベシ。謝絕ニ逢フテ一タビ退キタリト雖モ、若シ交戰久シキニ渉ラバ東洋ノ商業ニ利害ヲ有スルノ國再ヒ調停ヲ爲サントスルヤ必然ナリ。此時ニ至リテ政府ノ意旨苟モ動クコアラバ、爲ニ國譽ヲ傷ケ國利ヲ害スル㆒實ニ測ルベカラザルモノアラントス、余ハ玆ニ其徹頭徹尾強硬ナラン㆒ヲ切望シテ止マザルナリ。

余ハ二三ノ人ニ語ルニ第一策ヲ以テセシニ、初ハ一人トシテ之ヲ贊スル者ナク、皆ナ曰ク、果シテ此事ヲ實行センカ、某國決シテ袖手傍觀セザルベシ、子ノ策亦至難ナラズヤト。余ハ直ニ之ニ答ヘテ曰ク、余モ亦某國ノ傍觀セザルヲ知ラザルニ非ズ、又此事ノ難キヲ知ラザルニ非ズ、而カモ苟モ難キヲ避ケンカ、初ヨリ共ニ東洋ノ大事ヲ畫スルニ足ラズ、若シ今我ヨリ進ンデ之ヲ取ラザランカ、後年機熟シ時到ルヲ待チテ、彼ヨリ手ヲ下シ指ヲ染メントスルヤ必セリ、事此時ニ至リテモ、我唯彼ノ爲ス所ニ一任シテ袖手傍觀スベキカ、果ノ機熟シ時到ラバ、之ト爭フニ於テ、今日ニ比シ數倍ノ難キヲ加フルヿヲ待タズ、且ツヤ其國ノ利害ノ爲ニ我ニ敵抗スルノ某國アラバ、亦其國ノ利害ノ爲ニ我ニ同盟スルノ某國アランヿ疑フベカラザルノ事實ナレバ、結局我ニ敵スル國ト我ニ與スル國トヲ眼中ニ置カスシテ可ナルノミ。何レニセヨ清一國ニ對シテハ戰フヘク、其他ニ對シテハ戰ヲ辭セント云フガ如キハ即チ力能ク清ヲ制スルヿヲ得ザル所以ニアラズヤト。是ニ於テ其人皆ナ更ニ言フヿ能ハザルナリ。

先ンズレバ人ヲ制ス、我國既ニ第一着ニ於テ現ニ他ヲ制スベキノ地位ニアリ、此際取リ得ベク且ツ取ラザルベカラザルハ第一策ナリ、然ラズシテ

若シ下策以下ニ出デンカ、我國ノ大事ハ去リ、國威ハ忽チ地ニ墜チ、當局者ハ竟ニ弄兵糜財ノ重責ヲ免レザルベキナリ。

此書ヲ諸氏ニ送リシ後二十有餘日、七月ノ末ニ至リテ、朝鮮ノ海陸ニ於テ交戰アリ、始テ日淸ノ開戰トナレリ、而シテ朝鮮ニ大總督ヲ置キ、武文ノ材アル者ヲ以テ之ニ充テ、大小ノ事ヲ全任シ、以テ軍國要務ノ敏活ヲ計ルガ如キ緊急事ハ未ダ其實行ヲ見ザルナリ（帝國軍事ハ『我國之前途』中軍備論ニ詳說シタル以テ玆ニ覆論セズ）。

今ヤ開戰ノ大議既ニ定マリダル以上ハ、モハヤ成敗利鈍ヲ虞リテ之ヲ可否スルノ餘地ヲ存セズ、當局者毫モ遲疑躊躇スルコトナク、及ブ限リ急速ニ且ツ滿足ニ結局ニ至ラシメンコトヲ期スベキヤ勿論タルベシ、是レ及ブ限リ經濟ノ障害等ヲ避ケンガ爲ナリ。又一方國民ハ一時ノ小勝小敗ニ喜憂セズ、一時ノ輕擧盲動ニ雷同セズ、專ラ長日持久ノ計ヲ爲スコト最モ緊要ナリトス。唯怪ムベキハ朝鮮出兵以來、國內ノ政論俄然トシテ鎭靜ニ歸シ、政黨ノ論議、議員ノ選擧

殆ド之ヲ忘レタルガ如キノ一事ナリ。蓋シ外ニ事アルニ當リテハ國論一致ト云フヲ重ンズルガ故ナラン、殊ニ對外硬派ト稱スル政士ニ至ルマデ、公然ノ言動ハ或ハ愼ムベキニ似タリト雖モ、內面ノ運動ニ至リテモ亦幾ド之ナキガ如シ、思フニ全然當局者ノ處置ニ感服シテ毫モ異見ナキガ故ナラン、決シテ之ニ盲從スルニハ非ルベシ。此美德ニ富メル政士アリテ此順良ナル國民アリ、政局ニ立ツ者ノ爲ニハ實ニ賀スベキコトナラズヤ、賀セラル、者更ニ一大奮發シテ、大ニ爲ス所ナクンバアルベカラザルナリ。

韓淸ノ事既ニ始アリ、其終ナカルベカラズ、始ヲ爲スハ易ク終ヲ得ルハ難シ、假令日淸ノ交戰結局ニ至ルモ、東洋ノ大計ヲ成スコトナクンバ、未ダ我カ大目的ヲ達シタリト云フベカラズ。吾ガ恐ル日本ノ憂支那ニアラズシテ小政策ノ間ニアランコトヲ。

吁幾多ノ人命ヲ犧牲トシ、幾千萬一億ノ貨幣ヲ賭シテ、此大事ヲ試ム、局ニ當ル者任責ヲ重ンジ、果斷ナラザルベカラズ、又愼重ナラザルベカラズ、之ヲ始ニ慮ルヤ周密ナルベク、一タビ之ヲ斷ズルヤ勇行スベク、

左顧右眄踏跙逡巡スベカラズ、識高ウシテ手徒ハズ、功名心アリテ誠義心ナク、猛進ノ勇アリテ持久ノ計ナキハ、竟ニ不測ノ禍ヲ國民ニ及ボスニ至ラントス、豈ニ恐レザルベケンヤ。〓此ノ如キ危險アリ、憂慮アルニ拘ラズ、我國既ニ兵ヲ以テ清ニ臨ミ、朝鮮ノ扶持ヲ擔保ス『骰子一タビ投ズ、政府ノ決意果シテ動カザルコト山ノ如クナラザルベカラズ。』今ヤ戰爭ノ結果如何ニ關ラズ、我國ハ後來常ニ一旅團乃至一師團ノ兵ヲ韓地ニ駐屯セシメザルヲ得ザルノ勢ニ至レリ、然ラズシテ若シ半途ニシテ兵ヲ撤スルコアランカ、我ノ該國ニ於テ施爲セル所ハ忽チ清ノ爲ニ翻覆セラルベキハ智者ヲ待タズシテ知ルベキナリ。是ニ於テ余ハ愈〻余ノ考案ノ切要ナルヲ信ズ、宜シク今ノ實際ノ事狀ニ數歩ヲ進メテ、此一大英斷ヲ決行スベシ、是レ實ニ宣戰ノ目的ヲ貫徹スルニ外ナラズ。若シ夫レ手段方法ノ詳細ニ至リテハ自〻主者ノ事ニ屬スレバ、今縷述スルノ要ナク、且ツ爰ニ縷述スベキモノニ非ザルナリ。

〓以上論述スル所ノ旨趣ヲ概括シ、又之ヲ擴充シテ、更ニ條擧スルコ左ノ如シ。

〔一〕東洋ノ大計上并ニ日清對抗上、帝國ニ於テ――全土ヲ領有スベキ事（是レ即チ宣戰ノ目的タルベキモノヲ貫徹スルニ外ナラズシテ、實地ノ事狀ニ數歩ヲ進ムルモノナリ）。

〔二〕朝鮮ニ於ケル改革ハ先ッ鐵道、鑛山、其他交通殖産ノ事業ヲ興起シテ我ガ地歩ヲ實際ニ占有シ、以テ我ガ勢力ヲ堅ウスベキ事（制度風俗ノ細事末節ヲ俄ニ改革セントスルハ、害アリテ益ナク、事實行ハレザルノミナラズ、爲ニ民心ヲ失フニ至ルベシ）。

〔三〕朝鮮ニ常任大總督ヲ置キ、平時及ビ戰時ニ於テ軍國大小ノ事ヲ全任スベキ事。

〔四〕朝鮮ニ一旅團以上ノ兵ヲ永久駐屯セシムルノ計ヲ立ツベキ事

〔五〕西洋各國ノ調停仲裁ハ、後來如何ナル場合ヲ論セズ、斷然之ヲ謝絶スベキ事。

茲ニ我ガ東洋ノ大事長計ニツキテ我ガ目的トスベキ所ノ要領ヲ擧ゲ、以テ朝野政事家ノ注意ヲ促スコト此ノ如シ。清ニ勝ツハ難シトセザレ𪜈、亦漫ニ之ヲ侮ルベカラズ、東洋ノ大計ヲ成スハ易シトセザレ𪜈、亦之ガ必成ヲ期セザルベカラズ、吾人深ク察セザルベカラザルナリ。

（廿七年八月記）

◎第一部。日、韓、清、三國近來ノ關係。

◎第一章。維新後日韓ノ關係＝明治六年ノ所謂征韓論。

古來日本ト外國トノ關係最モ深キモノヲ朝鮮トナス、故ニ德川幕府鎖國ノ時ニアリテモ亦交通ヲ絕タザリシナリ、幕府ノ末路ヨリ其廢滅ニ際シ、國事多端ニシテ、兩國ノ交際爲ニ殆ド斷絕セリ、此時ニ當リテ朝鮮人ヲ驚カシタルハ日本人將ニ朝鮮ヲ侵窘セントスト云フノ風說ナリ。

明治元年ノ春、日本人某（或ハ八戶順叔ト稱スル者ナリト云ヘド、未ダ詳ナラズ）上海香港ノ間ニ遊ビ、論文ヲ支那新聞ニ投寄シテ大ニ日本ノ武備ヲ誇張シ、日本政府ハ數百ノ船艦ヲ艤裝シテ近日朝鮮ヲ侵略スルニ至ラントト流言セリ、淸廷ハ此論文ヲ見テ、直ニ禮部ノ咨文ヲ以テ韓廷ニ報シテ曰ク、日本旅客ノ說ニ據ルニ、近來日本現ニ火輪軍艦數百隻ヲ出シテ朝鮮ヲ擊ツノ志アリト。時ニ朝鮮王爻大院君政ヲ執ル、卽チ令シテ邊境ヲ戒嚴シ、務メテ日本人ト相近ヅクコトナカラシメタリ。韓人此報ヲ得テヨリ甚ダ鬼貊ヲ懷キ、又モ日本ノ寇擊ニ遇ハンカト恐怖ノ際、此年十一月、朝廷對馬藩主宗重正ニ命シ、使ヲ朝鮮ニ遣シテ皇政復古ノ事ヲ報ジ、舊好ヲ修メシメントセシニ、大院君謂フ、書辭印章前例ニ違フト、肯テ受ケズ、蓋シ德川幕府ノ舊例ニ異ナリテ、今回贈ル所ノ文書（幕府廢止天皇親政ノ國書）ニ大日本、天皇、詔勅ノ文字ヲ用ヰタルガ故ナリ＝本邦開國ノ初、條約ハ卽チ城下ノ盟ニシテ、日本ノ恥辱ナリ

ト論ヲ、某國帝王陛下ト尊稱スルハ即チ彼ニ臣服スルノ文例ナリト議シタル者アリシト同樣ノ事情ナリ。

元和以來、德川大將軍ハ韓廷ト往復ノ書ニ大君ノ稱ヲ用井タリシニ、六代家宣ノ世ニ至リ、新井君美(白石)ノ義ヲ採リテ、正德年間ヨリ國王ノ稱ニ換エタルガ八代吉宗ノ世ニ至リテ、又大君ノ舊稱ニ復シ、以後慣例トナリテ、大將軍ヨリ外國ニ發スル書ハ恒ニ大君ノ字ヲ用井タリ。　幕府ハ表面屬邦ノ禮ヲ以ヲ朝鮮ノ使節ヲ遇シタルガ如キモノナキニアラズト雖モ、其實ハ然ラズ、彼我共ニ交際上總テ對等ノ禮ヲ用井タルナリ、然ルニ明治政府ニ至リテ、禮式服制俄然トシテ舊慣ヲ改メシヨリ、彼ノ聖人教ヲ固信セル人民ニシテ、如何ソ一驚ヲ喫セザルアランヤ、以爲ラク、日本ガ禮式ヲ變ジタルハ傲慢ナリ、胡服ニ改メタルハ蠻夷ヲ學ブ者ナリ、斷ジテ近シベカラズト、加フルニ往古日本軍ノ爲ニ蹂躪セラレタル怨恨ノ尙ホ忘レ難キ者アリテ、頗ル交際ノ障碍ヲ爲シタルナリ。

此時ニ當リテ、議者或ハ朝鮮ヲ懲罰シテ、以テ國威ヲ張ラント云ヒ、或ハ兵ヲ海外ニ用井以テ內亂ノ焰氣ヲ防ガント云フ、是ニ於ヲカ朝鮮問題其萠芽ヲ發シタリ。

伯大隈重信ノ語ル所ニ據レバ曰ク『維新後攘夷ニ關シテハ進步主義ノ書生等ハ殆ド其意見ヲ發表スルニ窮シ、一特ノ策畧トシテ朝鮮征伐ヲ主張スルモノアルニ至レリ、其言ニ曰ク『吾人ハ坐ナガラニシテ攘夷ヲ爲ス、是レ勢ニ於テ窮策タルヲ免レズ、吾人ハ我邦ノ志氣ヲ大ニ發揚センガ爲ニ、先ヅ朝鮮征伐ヨリ始ムベシ、斯クテ一擊ノ下ニ雞林八道ヲ打破シ去リ、勢ニ乘ジテ以テ英佛露等ノ國ヲ犯サベ我國ニ居留セル外人輩ノ如キハ驚キテ皆ナ本國ニ逃ゲ歸ルベシ、サスレバ是レ此地ニ於テ攘夷ヲ爲スニ比シテ數倍ノ名譽ヲ增スモノニ非ズヤ』ト。蓋シ此種ノ論者ハ其實開港家ナレドモ、其意見ヲ

口外セバ忽チ他ノ殺傷スル所ト爲ルヲ以テ、故ラニ說ヲ朝鮮征伐ニ藉リテ、以テ書生等ガ無謀ノ擧ニ出ルヿヲ避ケシメント欲セシナリ』ト。

韓說ヲ唱ヘタルモノナリ。

征韓ノ議政府ニ起ルヤ、政士中其可否ヲ言フ者アリ、明治三年、鹿島藩ノ書生橫山正太郎ガ一死ヲ以テ政府ニ諫議スルニ當リ、其副文ニ征韓ノ不可ナルヿヲ論ジタリ(太政官日誌ニ公載ス)。其頃外務權大丞丸山作樂(肥前島原藩士)ハ私ニ其黨ヲ聚メテ、山口藩暴動ノ際、古松簡二、岡崎恭助等ト共ニ朝鮮ヲ襲擊セントシ、事發覺ノ各〻捕縛監禁セラレ(丸山ハ奪職ノ上)、五年四月ニ至リ『國憲ヲ犯ス科ニ依リテ』禁獄終身ノ刑ニ處セラレ、又古松岡崎ノ二人ハ十年十二月各〻處刑宣告アリタリ。

福岡縣士族　古松簡二　四十二年

其方儀曾テ攘夷ノ宿志アル迚、元同藩小河眞文ト竊カニ同志ヲ募リ、血盟致シ、或ハ岡崎恭助、堀內誠之進、高田源兵等申合、山口藩暴動ノ奇兵隊ニ應シ、當時ノ諸藩ヲ煽動シ、暴擧ニ及ベント相企ルノミナラズ、右脫徒數輩ヲ隱匿シ、其上丸山作樂等倶々朝鮮國ヘ暴發襲擊ヲナサント相企ル、右科除族ノ上斬罪申付ベキ處、特旨ヲ以テ死一等ヲ減ゼラレ、懲役終身申付ル。

土佐國出生當今無籍松浪信藏事　岡崎恭助　三十三年

其方儀曾テ攘夷ノ素志有之迚、伊藤源助ニ對シ、大斬奸ノ所業ハ差止ルト雖モ、其儘打過、古松簡二、高田源兵、堀內誠之進等申合、山口藩暴動ノ奇兵隊ニ應シ、當時ノ諸藩ヲ煽動シ、暴擧ニ及ベント相謀ル、右科斬罪申付ベキ處、特旨ヲ以テ死一等ヲ減ゼラレ懲役終身申付ル。

其後數年(丸山ハ十三年一月)、各〻特典ヲ以テ放免セラレタリ(丸山幽中ノ作アリ、以テ其志氣ヲ見ルベシ、曰ク『夢繞長白山、魂迷鴨綠江、獄中天地小、空使老英雄』)。

明治五年八月、外務大丞花房義質ヲ遣シ、舊嚴原藩ノ貿易ヲ止ムルノ事ヲ報ヲ、外務少錄一員ヲ釜山（プーサン）草梁館ニ駐紮セシム、是ヲ維新後官吏ヲ朝鮮ニ在留セシメタルノ嚆矢トナス○東萊府（トンクナイ）吏日本官吏ノ形貌、衣服、從前ニ異ナルヲ見テ、謂ヘラク、千百年自尊ノ國ヲ以テ、一朝制ヲ外人ニ受ケ、以テ此ニ至ルト、館上ニ榜示シテ之ヲ嘲リタリ●

此ノ如ク韓官屢ベ我カ使節ヲ拒ムト雖モ、政府ハ尚ホ其希望ヲ達セント韓官ヲ諭シ、書ヲ王ニ致サシメントシタルニ、韓官頑トシテ容レズ、唯ダ從來對馬ト通商シタルノ例ニ依ランコトヲ請ヒ、言ヲ左右ニ托シテ我カ要求ヲ拒ミ、茫茫數月、韓廷令ヲ國中ニ下シテ曰ク、日本ハ夷狄ニ化ス、禽獸ト何ゾ別タンヤ、我國人ニシテ日本人ト交ル者ハ死刑タルベシト、遂ニ日本官吏ヲ脅嚇スルニ日本館襲撃ノ變アランコトヲ以テシ、宜ク速ニ歸國スベキヲ云フ、官吏乃チ急ニ歸朝シテ其狀ヲ報ズ、外務省因テ之ヲ內閣ニ告ゲテ其處分ヲ請フ○時ニ魯人樺太ノ境界ニ迫ラントスルノ報アリ、其處分ノ議未ダ決セザルニ、復タ朝鮮ノ事起リシヨリ種々ノ論議アリ、廟議遂ニ使節ヲ朝鮮ニ派スルニ決シ、參議陸軍大將西鄉隆盛自ラ進ンデ其任ニ當ラントス○此時ニ際シ、歐米各國ニ派遣セラレタル特命全權大使岩倉具視、副使木戸孝允、大久保利通等巡回ヲ畢リテ前後ニ歸朝シ、朝鮮處分ノ議ヲ聞キテ甚ダ之ヲ非トシ、大ニ之ヲ爭フ、是ニ於テ廟議二途ニ岐レ、太政大臣三條實美（征韓ヲ可トス）病ト稱シテ朝セズ、右大臣岩倉具視（征韓ヲ非トス）モ亦朝ニ出デザルコト數日、車駕右大臣ノ邸ニ臨ミテ親諭アリ、太政大臣ノ事ヲ攝セシメ、遂ニ敕裁ヲ

以テ朝鮮處分ノ事ヲ止ム○是ニ於テ征韓論ヲ主張シタル西鄉ヲ首トシテ、副島種臣、後藤象二郎、板垣退助、江藤新平ノ五人皆ナ罷メテ去ル、時ニ明治六年十月ナリ●

征韓論ノ顚末此ノ如シ、其議一タビ決シテ又中止セラレショリシテ、遂ニ內閣ノ更迭ヲ生ズルニ至レリ○當時其議ニ參シタル者或ハ說ヲ爲シテ云ク、世人此一事件ヲ指シテ征韓論ト稱スルハ謬レリ、只問罪使ヲ發シ釜山浦ノ居留地ニ兵ヲ置キテ、我カ人民ヲ保護スルニ在リト（板垣專ラ此說ヲ唱フ）、其レ或ハ然ラン、然レドモ兵ヲ發シ、將ヲ遣ス、名ハ問罪ニ在ルモ、其實開戰ノ趣意タルハ昭々トシテ蔽フベカラズ、問罪ト開戰、其間一髮ヲ容レザルモノアリ、故ニ之ヲ稱シテ征韓論ト云フモ、强チ不當ノ言ニアラザルベキナリ●

征韓論ノ始末ニ就キテハ、明治七年中、石川縣人某々ガ鹿兒島ニ至リテ桐野利秋ヲ訪問セシトキ、其說述セル所ヲ詳記シタルモノアリ、左ノ如シ○

昨年五名ノ參議幷余（桐野）等ノ職ヲ辭スルヤ、世人傳評シテ征韓ノ議行ハレザルヨリ事此ニ到ルト爲スト雖モ、其實ハ即時ニ兵ヲ擧ゲテ之ヲ征スベシト言フニアラズ、宜シク先ヅ全權公使ヲ發遣シ、前年來彼國ノ屢ベ我カ使節ヲ凌辱シ、我國書ヲ却ケ、讒言暴狀至ラザルナキノ罪狀ヲ擧ゲ、其宇內萬國ノ公法ニ背キ、天地間比隣親睦ノ倫理ヲ傷フルヲ咎責シ、彼ニ要求スルニ、前ノ非禮ヲ謝シ、今後我日本ニ對シ隣國ノ交誼親信ヲ盡スベキノ事ヲ以テスベシ、然スルトキハ彼レ頑固ノ俗益ス暴慢ニ募リ、必ズ我公使ヲ殺害スベシ、是ニ於テカ其我公使ヲ殺害スル所以ヲ國內ニ廣布シ、又之ヲ同盟ノ各國ニ檄示シ、公然兵ヲ擧ゲテ彼ノ至罪ヲ鳴シ、以テ之ヲ征スベシトノ議論ニテ、問罪使發遣ノ事第

一ニ屬シ、征韓ノ事ハ實ニ第二ニ屬セヒ、余亦之ニ副從セント欲セシカ𪜈事行ハレザリキ。方今宇内ノ形勢、各國紛爭、大小強弱互ニ相併呑ス、此時ニ當リ、我國國力衰殘、人心惰弱、獨立ノ氣慨ナシ、此ノ如クニシテ因循セバ、多年ナラズシテ覆滅セン、今之ヲ振起作興シ、各國ト幷馳スルノ道ハ唯兵威ヲ海外ニ輝スニアルノミ、今ヤ英佛普魯ノ如キ各國相持シテ以テ未ダ力ヲ支那朝鮮滿州ノ間ニ及ボスニ暇アラズ、此時ニ及ンデ我日本宜シク其間ニ乘シ、支那朝鮮滿州ノ間ヲ跋渉シ、之ヲ略取シ、以テ歐亞各國ニ侵入スルノ基ヲ立ツベシ、然リト雖モ國ヲ攻ムルニ名義ナカルベカラズ、適マ朝鮮不禮ヲ我ニ加フ、我ニ於テ失フベカラザルノ好機會ト云フベシ、然ルニ終ニ身ヲ顧ミ國ヲ忘ル、豎子輩ノ沮止スル所トナル實ニ歎ズベキナリ。

初メ朝鮮征討ノ廟議起ル、先ツ大使ヲ發遣スベシ、大使ノ命ハ西鄉參議及ビ余ト奏請シテ之ニ當ラント三條太政大臣ニ稟議ス、大臣西鄉等渡韓セバ必ズ死スベク、死セバ大事目前ニ發スベク、且ツ他ノ三職ニ對シテ慮ル所アリ、驚懼答フル所ヲ知ラズ、唯西鄉ハ文武ノ大任ヲ帶ビ、桐野モ亦陸軍中ノ重任ニアリ、未ダ遽ニ動ス可ラズ、朝鮮使命ノ事ノ如キ豈ニ西鄉ニ代ルベキ者ナカランヤ、宜ク餘人ヲ撰ブベシト云フ、西鄉並ニ余ハ肯セズ、益ス奮ヲ自ラ之ニ任センコヲ乞フ、大臣二人ノ意竟ニ止ムベカラザルヲ見テ、乃チ之ヲ諾ス。當時主上箱根温泉ニ行幸中ナルヲ以テ、大臣親ラ箱根ニ往キ之ヲ奏聞ス、宸斷之ニ決シ、使命ノ内勅アリ、且岩倉右大臣以下ノ歸朝ヲ待テ發令アルベキ旨相國之ヲ口演ス、然ルニ右府以下ノ歸朝スルヤ、各異議ヲ生シテ之ヲ拒ム、十月十四日ノ會議ニ於テ、岩倉右府曰ク、魯國樺太ノ地ニ於ヲ暴擄ヲ極ム、先ツ之ヲ處スル所アラザルベカラズ、朝鮮ノ如キハ即今急ニスベキモノニアラズ、西鄉曰ク、然ラズ、樺太ノ事ハ兩國人民雜居ノ際私隙ヲ釀スモノ、何ゾ之ヲ大事ト云ハンヤ、朝鮮ニ至テハ兩國政府ノ交際ニ關ス、國民ノ憤激スル所、各國ノ共視スル所、是レ一大事ニアラズヤ、且ツ方今宇内ノ形勢ニ於テ皇威ヲ海外ニ張リ、萬國對峙ヲ計ル、須ク速ニ海外擁兵ノ策ヲ

立テ、先ツ朝鮮滿州ノ地方ヲ經畧スベシ、而ルニ今幸ニ朝鮮ノ無禮ヲ我國ニ加フルアリ、此機失フベカラズ、此時移スベカラズ、彼ヲシテ益ス其暴狀ヲ募ラセ、十分ノ名義ヲ我ニ取リ、然ル後之ヲ征スベキナリ、是レ我輩兩人奮テ征韓ノ議ヲ建テ、又先ツ使ヲ發セント欲スル者ナリ、然リト雖モ公必ス先ツ樺太ノ事ヲ治メ、然ル後朝鮮ニ及ベントヨリ樺太ニアルニ非ズ、故ニ西鄉等其使命ヲ乞フニ至テ其議亦止ム。右大臣又曰ク、海外使節ノ事外務卿ノ任ナリ、故ニ朝鮮ノ使節ニハ副島種臣ヲシテ當ラシムベシト、副島モ亦自ラ敢テ之ニ當ランコヲ請フ。西鄉曰ク、凡ソ海外攻伐ノ事ハ我輩兩人ノ主張スル所ニシテ、又自ラ見ル所アリ、今我輩兩人海外朝鮮ニ使スル者、則チ彼ノ罪跡ヲ糺シ、專對以テ國威ヲ損スルコトナク、將ニ死ヲ以テ之ニ當ランコトスルナリト。右大臣言ヲ左右ニ托シ、議終ニ決セズ。此日參議江藤新平辭表ヲ致ス。板垣退助會議ノ席ニ列シ、沈默シテ是非ヲ言ハズ、益ス兩端ヲ持スルニヨリ、余ハ朝ヲ退キ、直ニ板垣ノ家ニ往キ、其反覆ヲ責ム、板垣語辭曖昧頗ル陳辯ス、乃チ相伴フテ西鄉ノ家ニ往ク、西鄉亦板垣ヲ面折ス、板垣陳謝シテ益ス勉メ、遂ニ意ヲ固ウシテ說ヲ同ウス。是ヨリ西鄉、板垣、後藤、江藤、副島ノ五參議幷ニ余ハ連日右大臣以下ノ偷安黨ニ對シ奮激討論其說ヲ辯駁ス、是ニ於テ竟ニ其月十八日ヲ以テ使命ヲ西鄉幷ニ余ニ任スベキニ決ス、因テ十八日早刻西鄉以下五名幷ニ余參朝ス、三條太政大臣亦夙ニ參朝ス、而シテ右大臣ノ黨皆ナ病ヲ稱シテ朝セズ、太政大臣以下參朝ノ日ヲ待テ事ヲ行ハンコト欲ス。西鄉曰ク連日會議ノ末已ニ今日ヲ以テ事ヲ行フニ議決セリ、然ルニ右府以下參朝スルノ日ヲ待ツト云フハ何ソヤ、右府何ノ異論アラン、且ツ此議起リシヨリ遷延已ニ數旬ニ至ル、宜ク速ニ決スベシ、復タ何ノ猶豫カ之アランヤ。太政大臣曰ク、然リト雖モ此ノ如キ至重ノ命ヲ傳宣スルニ三職同列相會シテ之ヲ行フベシ、諸君請フ一日ノ期ヲ延ベヨ、明日ニ至ラバ、縱令ヒ岩倉以下參朝セズトモ、我一人ニテ之ヲ行ハントヽ。後藤モ亦西鄉ニ向テ曰ク、僅ニ一日ノ延期、之ニ從フモ損益ナカルベシト、

西鄉乃チ之ヲ諾シ、一同退朝ス○此夜三條太政大臣急病ヲ發シ、翌十九日ヨリ參朝セズ、右大臣モ亦倘ホ朝セズ、是ヲ以テ此日モ之ヲ決スル能ハズ、二十日命アリ右大臣ヲシテ太政大臣ノ事務ヲ代理セシム、依テ廿二日西鄉以下幷ニ余等右大臣ノ邸ニ徃キ、使命ノ事ヲ促ス○右大臣曰ク余固ヨリ三條ト說ヲ異ニス、今ヤ代理ノ命ヲ蒙ル、余ガ說ノ在ル所亦陳セサルベカラズ、故ニ三條ノ決スル所ト余ガ見ル所ト兩擧奏聞シ、宸斷ヲ仰テ決セント欲ス○副島曰ク、代理ハ長官ノ既ニ決スル所ニ於テ更ニ異論ヲ副ヘ、兩擧奏聞スルノ理アランヤ、且ツ其レ主上齡未ダ壯ニ至ラズ、聰明睿智ト雖モ、未ダ內外ノ事ヲ熟知シタマハザル所多シ、故ヲ以テ事大小トナク大臣參議ノ決議ヲ以テ奏聞スルニアラズヤ、未ダ嘗テ主上ノ獨斷專決ニ出ツル者アラズ、然ルニ此一大事ヲ以テ是非ヲ三職ニ決セズ、一ニ之ヲ宸斷ニ任セント欲スルハ何ソヤ、是レ難ヲ主上ニ歸スルモノニシテ不臣ノ甚シキ者ト云ハサルベケンヤ○右大臣曰ク、然リト雖モ、事兩論ニ涉リ、是非決シ難キモノハ決ヲ宸斷ニ取ルニ非レバ之ヲ定ムルノ道ナシト○西鄉以下討論辯說頗ル勉ムト雖モ、右大臣强辯私意ヲ張リ、終ニ西鄉等ノ言ヲ納レズ、則チ兩議幷ニ奏聞スルニ決ス、西鄉以下一同憤懣突起シテ退出ス、皆ナ大ニ嘆シテ曰ク、長袖ナルモノ大事ヲ誤ル、古今同シト○翌廿三日西鄉以下又參朝ス、午後宸斷ヲ以テ朝鮮遣使ノ事不可ノ御批下ル、是レ右大臣豫メ木戶等偷安黨ト密謀シテ此ニ至レルナリ、西鄉幷ニ余ハ其公議ヲ盡サズ、聖意ヲ矯ルヲ怒リ、復タ此黨ト共ニ計ルベカラサルヲ知テ、即日官ヲ解キテ去ル、繼テ後藤等四名ノ參議皆辭職ス●

是ヨリ先、朝鮮遣使ノ事廟議連日未タ決セサルニ當リ、一日岩倉右大臣余ヲ其邸ニ招キ、謂テ曰ク、朝鮮遣使ノ事ハ至當ナリ、然レニ西鄉及ヒ足下自ラ其使節ニ任セント言フニ至テハ、余甚ダ之ヲ難トス、如何トナレバ足下等兩人若シ彼土ニ斃レナバ、誰カ繼キテ其事ヲナス者ゾ、恐クハ後圖ナキニ似タリ、是レ余ガ見ヲ以テ他人ニ代ラシメント欲スル所以也○余ハ抱腹ニ堪ヘズ答ヘテ曰ク、堂々タル朝廷、賢相名臣星羅森列シテ、我輩兩人ノ如キハ宵ニ九牛ノ一毛ノミナラズ、何ゾ人ヲ欠クヲ患ランヤ、

後圖難カラズ、閣下之ヲ安ンゼヨ○右大臣又曰ク、征韓ノ事其名義ハ則チ之アリ、其方畧ノ如キニ至テハ未タ之ヲ聞カズ、朝鮮ノ地ハ魯國ニ連ル、魯國或ハ朝鮮ヲ扶クルガ如キコアラバ之ヲ如何セン○答ヘテ曰ク戰畧ハ機變ニ因テ定ム、豫メ之ヲ議シ難シ、然リト雖モ已ムヲ得ザルノ師ヲ以テ彼ノ罪ヲ問フ、魯若シ信義ヲ傷リ、公法ニ背キ、韓ノ曲ヲ扶ケテ我直ヲ伐ツト欲セバ、我ニ於テ却テ天幸トナス者アリ、夫ノ征韓ノ事、僕ガ畫策スル所ヲ以テスレバ、兵十大隊ニシテ可ナリ、魯若シ韓ト合シテ我ニ當ランニハ、我亦兵ヲ倍シテ之ニ向ハンノミ、或ハ魯我ガ北海道ヲ侵シ、遙ニ韓ニ應スルコトナサバ、我十大隊ヲ以テ直ニ軍ヲ北ニ向ケ、突然境界ニ臨マン、我ガ十大隊ノ兵員凡八千ナルヘシ、一步一人連縱セバ其府城ニ達ス、以テ奮然長驅彼カ版圖ニ侵入スルニ於テハ、彼レ勢顧ル所アリテ自ラ退クヤ必セリ、而シテ魯ト殊死決戰センニハ、我ニ於テ十分ノ勝算アリ、朝鮮ノ如キハ戰ハスシテ我掌中ニ歸スベキノミ●

此記、明治廿六年中、新聞紙上ニ出ヅルヤ(余ハ先年此記ヲ得テ之ヲ藏ス、則チ新聞紙ニ出デタルモノト對照シテ校訂ヲ加ヘ、右ニ錄出セリ)、伯板垣退助ハ事實ニ相違アリテ其名譽ヲ害セラルヽヲ以テ書ヲ送リ、大ニ論ズル所アリ、其文甚ダ長キヲ以テ、枝葉ノ議論ニ涉ルモノヲ削リ、事實ノ辯明ニ關スル所ヲ左ニ抄錄ス、蓋シ此事ハ當時ノ大問題ニシテ、政事歷史ニ大關係アレバナリ。

世ニ所謂征韓論ナル者ハ、明治六年ノ頃、內閣更迭ノ時ニ際シ、其事親シク余ノ身上ニ關係シ、余ノ能ク記憶スル所ナリ、然ルニ此記事タルヤ大ニ事實ト相違シ、殆ンド取ルニモ足ラズ、余ガ記憶スル所ニ據リ、倘ホ其事實ヲ確メンガ爲メニ、當時親シク其事ニ關係シタル山地中將ニ就テ之ヲ討ヌルニ、余ガ記憶スル所ト正シク符合シテ、其事ノ愈ゝ確實ナルヲ得タリ、此征韓論ノ起リシハ誠ニ不得已ノ事ニ發セシト雖ドモ、亦當時我國ノ形勢ニ於テ政略上ノ必要ヨリ之ヲ促

ガセシ者ナリ、我國カ朝鮮ニ對スルノ方針未タ立タズ、而シテ之カ處分ニ及フベキノ急要ハ益〻迫マレリ、且ツ創業漸ク久クシテ弊ヲ生シ、維新改革ノ精神ハ殆ンド銷沈シ、勇壯活潑ナル田舍武士モ高位顯官ニ登リテ今ハ都人士ノ風ニ化シ去リ、武人死ヲ惜ミ文人錢ヲ愛シテ滿朝ノ腐敗ヲ釀シ、彼ノ山城屋和助ノ事ノ如キ其他言フニ堪ヘザルノ事多シ、余ハ當時深ク之ヲ慨嘆シ、西鄉氏ト相謀テ曰ク、今ヤ朝鮮ニ對スルノ事ヲ爲スハ時機ノ到レルナリ、之ヲ幸トイフモ如何ナレドモ、勢茲ニ至テハ敢テ死生ノ間ニ立チ、眞面目ノ業ヲ企テザルヲ得ズト、茲ニ意氣相投シ先ヅ其實地ヲ視察セシメンガ爲メ長兵衛ノ兩人ヲ朝鮮ニ遣ハシ、之ニ次グニ薩州人池上四郎左衛門、土州人武市熊吉ノ兩人ヲ牛莊ニ遣ハセリ、

抑〻朝鮮ハ維新以來我國ノ使節ヲ斥ケ舊交ヲ修メズ、我國ハ之ヲ等閑ニ附シ去ル可ラザルヲ以テ、余ハ明治五年ニ於テ同志ヲ相會シ、其議ヲ發セシ事アリ、是レ亦タ能ク山地氏ノ記臆スル所ナリ、明治六年ニ及ンデ彼レ朝鮮政府ハ政令ヲ國內ニ公布シ、「日本人ハ西洋人ト相交リ禽獸ニ均キヲ以テ之ト交際ス可ラス、此禁ヲ犯ス者ハ斷頭ノ刑ニ處スベシ、恐ラクハ我朝鮮人ハ日本人ニ向テ暴擧ヲ企ルナラン、斯ノ如クシテ日本人ヲ悔恨ニ至ラシメサル樣宜シク諭シテ速カニ本國ニ歸ラシムベシ」トノ意ヲ以テシタリ、當時外交官多田森山ノ兩氏ハ朝鮮釜山海ノ和館ニ在リ、其中ノ一人歸朝シテ之ヲ我外務省ニ訴ヘタリ、會〻副島外務卿ハ淸國ニ使シテ不在ナルカ故ニ上野外務大輔ハ其事ヲ處センカ爲ニ正院ニ來リ、其旨ヲ述ヲ曰ク「朝鮮ハ常ニ我使節ヲ斥ケ、剩サヘ今回ハ我國ニ對シテ無禮極マレル政令ヲ國內ニ公布シタリ、是レ自國ノ人民ニ向テ暴擧ヲ煽動シ我國ノ居民ヲ驅逐セントスル者ナリ、若シ政府ハ我國ノ辱ヲ忍ヒ之ヲ不問ニ置クモ、朝鮮ニ居留スル日本人民ヲ棄テ殺シニスル事ハ爲シ得サルベシ、然ラハ則チ今マ進ンテ修好條約ヲ締結センカ、將タ日本人民ヲ自國ニ引キ退カシム

ルカ一刀兩斷ノ處分ニ出ルノ外之レ有ル可カラスト、廟議是ニ於テ動ク、是レ世ニ所謂征韓論ノ起リシ原因ナリトス●

余ハ當時之ヲ論シテ曰ク「我國ノ居留人民ヲ保護スルカ爲メニ先ツ釜山海ニ一大隊ノ兵ヲ送リ、而シテ更ラニ修好條約ノ談判ニ進メルベシト、」西鄉氏ハ曰ク「板垣ノ議論ハ尤モナレトモ、兵ヲ送ルハ穩カナラス、我國ハ是迄朝鮮ニ屢〻使臣ヲ遣ハセシモ、其事ヲ鄭重ニシ、又タ最モ平和ヲ旨トシ、所謂烏帽直垂ヲ以テ其ノ禮ヲ更ラニ大臣ヲ以テ使節ニ任シ、軍艦等ヲ率テ往クベキノ時ニ非ラス」ト痛ク之ヲ斥ケリ、余ハ西鄉氏カ議論ノ穩和着實ナルニ服シテ之ヲ贊成シタリ、西鄉氏ハ重ヲ曰ク「既ニ使節ヲ遣ハスノ議ニ決セハ之ヲ我ニ任セラルベシ」ト、自ラ進ンテ其難ニ當ラントス、是ニ於テ三條公ハ篤ト熟考スヘシトノ一言ヲ遺シ、當日ノ廟議ハ終リタリ、尋テ之ヲ上奏シ、竟ニ使節ヲ遣ハサル、事ニ御內決アリシモ、其任ハ果シテ何人ニ命セラルヽヤ未タ御決定ニ至ラズ、此際副島外務卿ハ淸國ノ使命ヲ全フシテ歸朝セリ、副島氏ハ此議ヲ聞キ同意ヲ表シ、且ツ曰ク「自分ハ外交主任ノ職ニ在レハ使節ノ任ハ應サニ自ラ之ニ當ルベシ」ト、三條公モ亦タ外國ニ使スルノ大任ヲ負フ者ハ外交ノ事ニ通スル者ヲ以テセサレハ不可ナリ、故ニ副島氏ニソ其適任ナリトノ意見ナリシ●

此時西鄉氏ハ銳意シテ自ラ朝鮮ニ使節タラント欲セリ、然ルニ桐野氏ハ余カ許ニ來リ訪ヒ、說テ曰ク「若シ西鄉ヲシテ朝鮮ニ使節タラシメハ彼ノ地ニ斃レンノミ、宜シク之ニ代フルニ他人ヲ以テスベシ、西鄉ノ行クヲ止メルハ君ニ非ラスンハ其人ナシト」懇切ニ余ニ向テ之ヲ依頼シタリ、此事ニ就テ余カ記臆スル所ト正シク山地氏ノ記臆スル所ト符合セリ、此時桐野氏ノ言ニ曰ク「西鄉ヲシテ朝鮮ニ使節タラシメハ彼ノ地ニ斃ル、ナラン、果シテ然レハ我國ノ後事ヲ如何ンセントスル能ハズ、故ニ余

ハ是ヨリ板垣ヲ訪ヒ西郷ノ行ヲ止ムル事ヲ依頼スルノ心底ナリト、此事ハ當時北村氏ヨリ山地氏ニ向テ親シク話セシ所タルハ山地氏ノ今尚ホ記臆スル所ナリ、北村別府ノ兩氏ハ果シテ朝鮮ニ使節ヲ遣スニ至ラバ、必ラズ相共ニ乞フテ之ニ隨行スベシト約シ居タリ、一日北村氏ハ別府氏ノ許ニ到タリ朝鮮ノ事ヲ話シタルニ、別府氏ハ北村氏ニ謂テ曰ク「板垣ハ朝鮮ノ事ヲ處スルニ躊躇セリトノ事ヲ西郷ヨリ傳聞セルヲ以テ、君ハ使節隨行ノ員ニ加ハルヲ得ズト」北村氏ハ之ヲ聞テ大ニ怒リ先ヅ山地氏ヲ訪ヒ、相伴フテ余ノ處ニ來リ、語ルニ此事ヲ以テス、余ハ之ヲ聞テ大ニ憤激シ、若シ果シテ西郷氏ガ余ヲ評シテ朝鮮ノ事ニ躊躇スルト謂フナラバ、余ハ西郷ト刺シ違ヘテ死センノミ、復タ卿等ト相見ザルベシト誓言シ、急ニ西郷ノ許ニ到リ、其事ヲ告ゲタルニ、西郷氏ハ大ニ慙テ曰ク「是レ全ク別府氏ノ誤聞ナラン、余ハ自ラ朝鮮ニ行ク事ニ就テ板垣ガ盡力シテ吳レヌト言ヒシ迄ノ事ノミ、別府氏ハ此言ヲ聞キ誤リシ者ナリ、願クハ之ヲ諒察セヨト」、余ハ此時西郷氏ニ謂テ曰ク「余ハ朝鮮ノ事ニ於テ一歩モ躊躇シタル事ナシ、唯ダ君ガ自ラ朝鮮ニ行ク事ニ就テ薩人ノ多數ハ之ヲ好マズシテ君ヲ止メ、他人ヲシテ君ニ代テ行カシメントノ希望アリ、又副島氏ハ外交ノ本職ニ在ルヲ以テ同氏自ラ朝鮮ニ行カンノ事ヲ乞ヘリ、蓋シ三條公ノ意モ亦タ玆ニ在リ、而シテ君ノ行ヲ止メント欲スル者ニ非ザルナリト」、西郷氏ハ余ノ言ヲ聽キ、笑フテ曰ク「桐野氏ハ拙者ノ朝鮮ニ行ク事ヲ止メニ來リタルニ由リ、拙者ハ之ヲ嚴シク叱リ、汝ノ從弟ナル別府新介ハ我ニ向テ今度コソ國家ノ爲メニ死ンデ吳レヨト言ヒシニ、汝ハ我ガ死ヲ氣遣フトハ何ゾ彼ニ劣ルノ甚シキヤト詰リタルニ、桐野ハ一言ヲ答ヘズ赤面シテ席ヲ立チ去リタリ」ト、口ヲ開キ呵々ト哄笑シ相俱ニ釋然タリ、是ニ於テ余ハ西郷氏ニ謂テ曰ク「余ハ薩人ヨリノ依頼モアリ、君ガ朝鮮ニ行クヲ勸メザリシガ、元來此行ニ就キ君ガ死ヲ氣遣フハ不明ノ至リナリ、寧ロ此行ニ於テ君ガ奇功ヲ立ツベシトハ余ガ固ク信ズル所ナルヲ以テ飽迄之ニ盡力スベシト言ヒ訖ツテ歸リタリ、當時此事ニ關シテ西郷氏ト往復ノ書翰モ幸ニ尚ホ存ズルアリ、亦タ以テ之レ

ヲ證明スルニ足レリ、其後別府氏ハ早速北村氏ノ許ニ來リ、西郷ガ板垣ニ對スルノ言ハ全ク誤聞ナリシ事ヲ謝セリ、此事ハ山地氏ノ尚ホ能ク記臆スル所ナリ、又タ西郷氏ガ桐野氏ヲ叱リシ事モ、其節余ガ直チニ山地北村ノ兩氏ニ談話シ、今尚ホ山地氏ノ能ク記臆スル所ナリ、元來此ノ征韓論ノ起リシハ桐野氏等ノ能ク知ル所ニ非ラズシテ、寧ロ其議ニ與リシ者ハ當時朝鮮ニ視察委員トシテ派遣セラレタル別府新介北村長兵衛ノ兩氏ナリトス、桐野氏ハ初メヨリ深ク此議ニ與リタル者ニ非ラザルナリ、又タ余ト相俱ニ西郷ノ許ニ到リ云々トノ事ヲ記セリ、余ハ彼ト同行セシ事サヘ無ク總テ跡形モ無キ虚言ナリ、云々●

此辯明アルヤ、豫テ征韓論ノ事實ヲ査究セル某（疑ラクハ某新聞社員ナラン）ハ之ニ對スル論駁文ヲ草セリ、即チ左ノ如シ（冗長ニ渉ル字句ハ亦削除ス）●

桐野利秋談中、板垣氏ノ事ヲ記スルハ唯僅カニ一回ノミ、實ニ明治六年十月十四日ノ事ナリ○然ルニ氏ノ辯明スル所、縷々數百千言ニ渉レドモ、此十月十四日ニ於テ、如何ナル擧動アリシト云フコハ毫末モ明記スル所アラズ○從ツテ桐野利秋談ニ記セシ如ク、果シテ沈默シテ居ラレシカ、又ハ相應ノ議論ヲ試ミラレシカ、ハ尚ホ模糊タルヲ免レズ○辯明書ニハ唯漠然トシテ「予ハ當時之ヲ論シテ曰ク」ノ語アリ、又タ當日ノ廟議ハ終ハリタリノ言葉モアレドモ、前後ノ脈絡明白ナラザルヲ以テ、果シテ十四日ノ事ナルヤ否ヲ知ルコト能ハズ、其記スル所征韓論ガ初メテ廟議ニ上リシ日ノ議事ノ如キ摸樣アルニ徴スレバ、或ハ十四日ノ事ニハアラザルガ如シ○吾人ハ先ツ試ニ板垣氏ノ口ヨリシテ明白ニ氏ガ十月十四日ノ會議ニ於ヲ如何ナル議論擧動ヲ爲レシカヲ聽カンコトヲ欲スル也○氏ニシテ萬一ニモ此ノ沈默シテ居ラレシガ如キアリトセバ、兎モ角モ彼ノ記事中ニ於テ氏カ沈默シテ可否ヲ言ハザリシトノ前半一句ハ何人モ之ヲ抹殺スルヲ得ザル也●

十月十四日の會議には、西郷大久保ノ如キ一二重立タル人々相論議シ、他ハ多ク沈默シタルカ如

シ○木戸孝允氏ノ如キハ病ノ故ヲ以テ初ヨリ會議ニ列セズ、大隈重信氏ノ如キハ會議ノ半バニ於テ、外國人ト會宴ノ約アリトテ席ヲ退カントス、大西郷顧ミテ大眼一睨、斯ル國家ノ大事ヲ議スルニ方リ、區々タル一外國人ト會宴ノ約アル位ヒノ事ヲ以テ席ヲ辭スルハ何ソ哉ト言ヒタレバ、大隈氏再ビ席ニ復シタリト云フ●

氏ハ又タ大西郷カ使節ノ命ヲ奉スルコトハ最初ヨリ內決シ居ラサルカ如クニ記スレドモ、此モ他ノ先輩故老ノ談スル所トハ大ニ違ヘリ●

大西郷カ征韓論ニ於ケル趣意ハ曾テ橋本景嶽、島津齊彬、藤田東湖ノ諸氏ト相講シタル所謂國內統一人心振作ノ策ニシテ、其起源スル所ヤ遠ク其經綸ヤ大ニシテ固ヨリ一朝一夕ノ事ニハアラズ○サレバ大西郷平生ニ於テハ謙恭辭讓常ニ事ニ任スルヲ避ケシニ係ハラズ、獨リ此ノ事ニ關シテハ自ラ進ムヲ熱心ナル主張者ト爲リ且ツ身ヲ挺ンデテ自ラ之レニ當ラムコトヲ期シタレバ、其說ノ一ク ビ容レラルヽト同時ニ彼ガ全權使節タルノ議モ自ラ定レリ○中頃副島氏カ外務卿主管ノ事務ナリトノ故ヲ以テ、其任ヲ爭ヒシハ已ニ內決セシモノニ就ヒテ之ヲ爭ヒシナリ、故ニ大西郷カ副島氏ト之ヲ爭フニ當リ、御委任ノ御內勅ヲ受ケタル旨ヲ語リ、副島氏モ之ヲ承認シ强ヒテ爭ハサリシトノ說アリ、事素ヨリ機秘ニ屬シ、眞假全ク明白ナラストイヘドモ、吾人ノ聽ク所ハ復タ以テ當時ノ事ヲ察スルニ足ルモノナキニアラズ、吾人之ヲ故老ニ聽ク、大西郷曾テ天皇陛下ニ陪侍シテ城內紅葉ノ御茶屋ニ遊ビ四方ノ眺望ヲ爲シ種々ノ御話ヲ申上ケシ時ニ、適々朝鮮ノ事ハ如何ニナリシヤトノ御尋アリ○彼ハ其處分ノ未タ成ラサルヲ奉答シ、且ツ具上スル所アリシカハ、適宜ノ處置ヲ望マセラルヽノ御沙汰ヲ賜ヒ又タ事ヲ彼ニ御委任アラセラルヽノ御內旨アリ、彼ハ朝鮮處分ノ事平生ノ宿論ナルニ、今ハ御若年ノ天子斯ク御念頭ニ掛ケラルヽ感慮ヲ體シ奉リ、殊ニ己レニ御委任アラセラルヽノ難有ニ感シ、愈々一身ヲ以テ之ニ當ルノ覺悟ヲ强フセシカ如シ○副島氏ニ向ツテ語リシ御內旨ノ事トハ之ヲ指シテ言フ也○

又タ辯明書中桐野カ板垣氏ニ向ツテ大西郷ノ朝鮮ニ行クヲ抑留シ、他人ヲシテ之ニ代ハラシメソコトヲ慫慂シタリトノ一話ハ吾人ハ言フニ及バズ、數多ノ薩人ノ驚キ怪ムル所也○若シ之ヲシテ他人ノ口ニ出ラシメバ、直チニ排シテ虛言ト爲スカモ知リ難クレドモ、直接ニ關係アル板垣氏ニシテ之ヲ明言セラルヽ以上ハ吾人ニ於テモ尙ホ一應ノ審査ヲ爲サヽル可ラズ○蓋シ桐野ガ事ヲ謀ルニ大膽ニシテ功名ヲ念フニ急ナル、且ツ彼レハ平生應待辭令ニ巧ナルノ譽レアリ、外交ノ談ハ彼ガ尤モ好ム處、萬國公法ハ彼ガ口癖ノ如クニ語リシ處ナレバ、彼或ハ自ラ全權使節タルノ希望ヲ懷抱シ、爲メニ大西郷ノ出使ヲ抑留セント欲シテ板垣氏ニ依頼シタルニハアラザル歟、彼ガ板垣氏ニ依頼シタルノ趣意ハ大西郷ノ抑留ヲ依頼セシト言ハンヨリ寧ロ自己ヲシテ使節タラシメンコトヲ希望スルノ眞意ニハアラザリシ歟○吾人ハ桐野ガ平生ノ議論ヨリスルモ、又タ其性質ヨリスルモ、彼ガ大西郷ノ死生ヲ憂フト云フカ如キツマラヌ理由ヲ以テ之カ抑留ヲ依頼シタリトハ如何ニシテモ認ムルヿ能ハズ●

又タ征韓論ノ起リシ當時ノ實際ニ徹スルモ、彼ガ遣韓副使タルノ內諾ヲ得タルガ如キ、岩倉右大臣歸朝ノ日其邸ニ招カレテ意見ヲ問ハレシガ如キ、後チ大久保甲東翁ノ爲ニ論難セラレシガ如キ、彼ガ征韓論行ハレザルニ決シタルノ即日、他ノ人々ニ先チ、大西郷ト共ニ冠ヲ掛ケタルガ如キ、著明ノ事實ハ此レ豈ニ彼ガ征韓論ニ於ケル關係ノ如何ニ深カリシカヲ知ルニ足ルニアラズ耶、然ルニ辯明書ノ記スル所、終始桐野ガ征韓論ニ關係極テ淺カリシテ說キ、終ニ彼ノ一ノ視察委員ニ過ヤザリシ歟ノ如キハ、抑モ復タ何ノ謂ハレゾ○吾人ハ能ク當時ノ事情ニ通ズル

之ニ對スル板垣ノ再辯明アリ、左ノ如シ。

新聞ノ記スル所ニ曰ク「明治六年十月十四日ニ於テ如何ナル擧動アリト云フコトハ毫末モ明記スル所アラズ、從ツテ桐野利秋談ニ記セシ如ク、果シテ沈默シテ居ラレシカ、又ハ相應ノ議論ヲ試ミラレシカハ尙ホ模糊タルヲ免レズ、辯明書ニハ唯漠然トシテ余ハ當時之ヲ論ジテ曰ク云々ト謂ヒシハ、朝鮮ヨリ初メテ警報ノ我國ニ達シ、余ガ初メテ朝鮮處分論ヲ唱ヘタル七月頃ノ事ナリ、然ルニ此文ノ意味タルヤ征韓論發端ノ日ト終局ノ日トヲ混同シ、又タ十月十四日ノ會議ヲ以テ征韓論終局ノ日ト爲シ、而シテ余ハ此日ニ於テ是非ノ論ヲ吐カザルモノヽ如ク言ヒ做セリ、是レ大ニ其事實ヲ誤レリ、十月十四日十五ノ兩日ニ於ケル內閣會議ニハ三條岩倉ノ兩公出席セラレ、兩公演說ノ大意ハ「我國ヨリ朝鮮ニ使節ヲ派出シ征伐ノ擧ニ出デントスルニハ先ヅ露國ト內約ヲ結ヒ、朝鮮ニ援兵ヲ出サヽルノ事ヲ加ヘタレバ、先ヅ此ノ事ヲ處分スベシ事ハ我國人民ト露國人民トノ間ニ生ジタル事件ニシテ、元ト我政府ト彼政府トノ間ニ生ジタル事件ニ無之ニ付キ、外務ノ談判定約上ニテ處置ニ及ブベク曲直一定セバ、露國ニテ其犯罪人ヲ處置スベキ儀ハ既ニ交際ノ國ナレバ、疑ヲ容レザル所ナリ、且又タ內約定ハ無益ニ屬センカ、其故ハ、之ヲ結ブモ彼我利益ノ交換スベキ者ナシ、又タ朝鮮ノ露國ニ關係アルヲ聞カズ、因テ初メ御內決通リ使節派出ニ一定然ルベシ云々ト、此事ナレバ余ハ西鄕氏ニ先テ其論ヲ立ラクル程ナレバ之ヲ默スルヲ得ス、痛ク之ヲ論セシナリ、余ハ此事ニ就テ今尙ホ記臆ニ存スル者アリ、卽チ曾テ黑田氏ト爭論シタル事アリ、今尙ホ記臆ニ存スル者アリ、卽チ曾テ黑田氏ト爭論シタル事アリ、黑田氏ハ當時北海道開拓長官タルヲ以テ北方ニ意アリ、露國處分ヲ先ニスヘキノ論ヲ持シ、征韓論ニ反對セリ、故ニ余ハ曾テ西鄕氏ト相會シタルノ時ニ於テ、謂テ曰ク「黑田氏ハ自ラ北方ニ野心アルヲ以テ、征韓論ニ反對ス、故ニ奸ナリ」ト、黑田氏ハ此言ヲ西鄕氏ヨリ傳ヘ聞テ大ニ含ム所アリ、一日正

院ニ於テ黑田氏ハ余ヲ別席ニ呼ヒ詰テ曰ク「足下ハ拙者ヲ評シテ奸物ト言ハレタリトハ西鄕氏ヨリ傳ヘ聞ク所ロナリ、足下果シテ此ノ言ヲ爲セシヤ」ト、余ハ答テ曰ク「然リ、余ハ君ヲ以テ有爲ノ士ナリト爲ス、難ニ當テ功ヲ立ントスルノ志アリ、我北門ハ露國ノ衝ニ當リ、其難局タルヲ知テ自ラ之ニ當リ時機ヲ待テ功名ヲ成サント欲ス、今ヤ朝鮮ノ事不意ニ起リ、其功ヲ他人ニ收メラレンコヲ忌ミ、露國處分論ヲ以テ征韓論ヲ挫カント欲ス、是レ余カ足下ヲ評シテ奸ナリト明言セシ所以ナリ、抑モ露國ノ事件ハ我國人ト彼國人トノ間ニ於ケル國際問題トナラス、露國ハ我國ノ締盟國タルヲ以テ宜シク之カ處分ヲ要求スベシ、露國ニ於テ其犯罪人ヲ處分シ、以テ隣交ヲ全フセハ可ナリ、朝鮮ノ事ハ之ニ異ナリ、彼ハ維新以來屢ヾ我ヨリ使節ヲ遣ハシ國書ヲ贈ルモ、之ヲ却ケテ受ケス、暴慢無禮ヲ極メ、公然揭示シテ我ト絕交ノ意ヲ表ス、是レ露國事件ノ如キ人ト人トノ關係ニ非ラス、國ト國トノ關係ナリ、其事國際ニ關スルヤ重大ナリ、然ルニ露國處分論ヲ以テ征韓論ニ反對ス、是レ其辭ヲ設ケテ以テ其事ヲ妨ケント欲スル者ナリ、余ハ是ヲ以テ足下ヲ奸ナリト謂ヒシナリ」ト、黑田氏ノ曰ク此ノ如キニ至テハ其ノ意ヲ得スト雖モ、奸ト謂フニ至テハ其ノ意ヲ得スト、余ハ曰ク「余ハ斯ク思タレハ斯ク言ヒシナリ」ト、終ニ釋然トシテ相互ニ大笑シタル事アリ、是レ黑田氏モ亦タ能ク記臆スル所ナラン、余ハ先キニ此事ニ關シテ持論アリ、故ニ十四日會議ニ於テ此事ノ議論アリシナラハ默セント欲スルモ默スル能ハサル所ナリ、故ニ十四日ノ會議ニ於テ余カ沈默セリト謂フカ如キ記事ハ其實ヲ誤リタル者ナルコト明瞭ナリトス。

所謂征韓論ニ就テノ事實ハ前記ノ如クナルヲ以テ見レハ、新聞ニ於テ余ヲ沈默セリト記セシハ十月十四日ノ會議ニ非シテ十八日ニ在ラスシテ十四日ニ在ルナリ、此日數ノ如キハ、今ヨリ二十餘年前ノ事ナレハ、余モ明カニ記臆ニ存セス、之ヲ副島、後藤氏等

ニ問フモ亦タ然リ、然レトモ余ハ今尚明カニ記臆ス、彼ノ三條公カ俄然病ヲ發セラレタルノ日ハ征韓論ニ就テ終局ノ議事アリタルト同日ナル事ヲ、而シテ三條公カ病ヲ發セラレタルノ日ハ十月十八日ナリトハ、彼ノ江藤氏カ島本仲道氏ニ直話ノ要領ヲ筆記シタル醵稿ニ據テ之ヲ確ムルヲ得タリ、又タ新聞紙上ニ記スル如ク、大隈重信氏云々ノ事アリ、此ノ事ハ彼ノ終局ノ議事アリシ時ニ相違ナシ、然ルニ此ヲ以テ十四日ノ出來事ノ如ク記セリ、是レ事ノ前後ヲ混合シタル者ナリ、余ハ之ニ就テ千思萬考スルモ余カ沈默セシト云フ事ハ思ヒ當ラズ、唯タ十八日ニ於ヲ西鄉大久保ノ兩氏カ激論ニ及ヒタル時ノ事ハ余モ能ク之ヲ記臆セリ、兩氏ハ同藩同功ノ士ニシテ、平生ノ交リ親シ、却テ斯ノ如キ間柄ニ在ラ、一タヒ交情ヲ破ラハ、其爭ハ他人ノ間ニ於ケルヨリモ更ラニ劇シキハ人情ノ常ナリ、此際兩氏ノ議論ハ感情ニ馳セテ、動モスレハ道理ノ外ニ出テ、一座呆然トシテ喙ヲ容ルヽニ由ナキノ光景タリ、且ツ當時尚各藩ノ隔アリ、同藩ノ士カ相爭フノ間ニ仲言ヲ爲スカ如キハ之ヲ憚ルノ情アリ、是等ノ事情ノアルヲ以テ余一人ノミナラズ、一時ハ誰モ喙ヲ容ル者ナカリシガ、終ニ其中間ニ立テ相共ニ双方ヲ宥メシ事アリ、余ヲ沈默セリト云フハ若シモ此時ノ誤聞ニ非ラザルカト思ヒ、余ハ近日副島氏ヲ訪ヒ、又タ後藤氏ヲ訪ヒ、當時ノ實況ヲ尋ヌタルニ、兩氏ハ余ニ謂フ「君カ默セシト云フコトヲ知ラズ、多分其時ヲ指シタル者ナルカ、此時ハ其間ニ立テ喙ヲ容ルヽノ餘地ナキ實況ナリシ、此議事タルヤ感情ニ馳セテ論理ヲ亂リ、甚タ意ヲ盡サヾルニ終リシ程ノ事ナリ云々」ト、是レ余カ記臆スル所ト正シク符合セリ、當時西鄉大久保兩氏ノ間ニ立テ之ヲ宥メタルヤ、大久保氏ニ向テハ曰ク「唯タ漠然ト內治ノ擧ルヲ待ツト謂ハズ、宜シク其改革ノ程度ト期限トヲ豫定スベシ」ト、是時大久保氏ハ期限ヲ立ツベシト謂ヒタルカト覺フ、又タ副島氏ニ向テハ曰ク「暫ラク之ヲ待テ宜シカラン」ト、西鄉氏ニ向テハ曰ク之ヲ待ツ能ハズト、議論決セズ、西鄉氏ハ頻リニ三條公ニ向テ決議ヲ求ム、此時三條公ハ遂ニ他ノ參議ニ向テ孰レニ同意スルカノ事ヲ問ヒ然ル後チ言ハル、樣「今日ハ右大臣欠席ナルヲ以テ決議ヲ明日ニ延スヘシ」ト、此時西鄉氏ハ辭表ヲ机上ニ叩キ付ケテ退朝セリ、是レ余カ記臆スル所ナリ。又タ副島氏ハ右大臣ハ出席シ居タルナラント謂フモ、斯ノ如キ時ハ議決ヲ延スノ理ナシ、後藤氏ノ記臆ハ慥カニ其時西鄉ハ懷中ヨリ辭表ヲ取リ出シ之ヲ机上ニ叩キ付ケタリ、又タ右大臣ハ欠席セラレシト云フ、此議事タルヤ未タ其情ヲ盡サヾル所アリ、若シ能ク更テニ其情ヲ盡シテ之ヲ熟議セハ圓滑ニ纏ルヲ得ヘカリシナラント副島氏等ノ今尚ホ說ク所ナリ、此時ノ實情ヲ洞察スレハ大久保氏ハ自動的ノ議論ヲ持スルヲ以テ、自ラ變通ノ略アリ、故ニ必ラスシモ相和スルノ道ナキニ非ラズ、然レトモ岩倉公ハ被動的ノ議論ヲ持シ、他ノ干涉ヲ受クルヲ以テ毫モ相讓スルノ變通ナカリシカト思フ、是レ此ノ大破裂ヲ生シタル所以ナラン。

其翌日余ハ副島、後藤、江藤ト共ニ參朝セシニ、太政大臣ハ病氣ニ罹リ、人事ヲ辨セストノ事ニテ、他ノ反對論者ハ皆ナ參朝セズ、是ニ於テ相議シテ曰ク斯ノ如ク右大臣ヲ始メ辭職スルナラバ、上奏シテ之ヲ處分シ、我々同志ニ於テ使節事件ヲ決議スベシナド種々ノ評議ニ其日ヲ過セシト覺フ、是レ此ノ大破裂ヲ生シタル所以ナラン。

副島氏ハ曰ク、江藤氏ハ欠席シ居タルナラント、然レドモ江藤氏カ島本仲道氏ヘ直話ノ筆記ニ據レハ、江藤氏ハ參朝シ居タルナリ、又タ後藤氏ノ記臆ニ據レハ、何カ布告スヘキ事アリテ、江藤氏ト後藤氏トノ兩名ニテ當日之ヲ布告セシ事アリト云フナリ（桐野利秋談ニ於テハ十四日ニ江藤氏カ辭表ヲ出セシト記ス、是レ恐ラクハ誤ナラン）岩倉右大臣カ太政大臣ノ代理ヲ命セラレタリトノ事ヲ聞クヤ、余等同志ノ各參議ハ右大臣ノ邸ニ到リ、復タ大議論ニ及ヒタリ、此時西鄉氏ハ欠席ノ如ク記臆スル者アリト雖モ、江藤氏ノ直話筆記ニ據レハ、西鄉、副島、後藤、江藤、板垣ノ姓名アリ、余モ亦タ此時西鄉氏等ニモ通知シテ相會シ、以テ右大臣ノ邸ニ到リシ者ナリト覺ユルナリ、新聞ノ記事ハ全ク事

實ヲ認圖スル者多シ、即チ「余カ桐野氏ト相伴フテ西鄉氏ノ家ニ往キ、西鄉又大ニ退助ヲ面折ス、退助陳謝益ミ務メ云々」ト謂フカ如キ是レナリ、余ハ岩倉大使歸朝以來久シク西鄉氏ノ宅ヲ訪ヒシ事アヲズ、同氏カ歸國スルノ際ニ於テ一度訪問セシノミ、斯ノ如キノ記事ハ實ニ虛妄ノ甚キ者ナリ。

又西鄉氏カ朝鮮ノ使節タル事ニ就イテ、御内命ヲ蒙リ云云ノ事實ニ至テハ、當時西鄉氏カ余ニ寄セタル書翰ニ據リ明カナリ、八月十四日頃迄ハ使節ノ事未タ決セス十八日ノ頃ニ至リ、初メテ決シタルヲ知ルベシ、即チ左ノ寫書ニ據テ明白ナリ。

昨日建言イタシ置候朝鮮使節之儀何卒此上之處偏ニ御盡力被成下度奉祈候又々罷出候而暴論ヲ吐不申候而ハ不相濟ト御思召モ御座候ヘハ卒度御知セ被成下度早速罷出候樣可仕候就而ハ小弟被差出候儀先生之處ニ而御猶豫被成下候而ハ又々遷延可仕ニ付何卒振切テ御差遣被下候處御口出シ被成下度是非此處ヲ以テ戰ニ持込不申候而ハ迚モ出來候丈ケニ無御座ニ付此温順之論ヲ以ハメ込候ヘハ必可戰機會ヲ引起シ可申ニ付只此一擧ニ先立死ナセ候而ハ不便抔ト若哉姑息之心ヲ御起シ被下候而ハ何モ相叶不申候間只前後之差別アル而已ニ御座候間是迄之御厚情ヲ以御盡力被成下候得バ死後迄之御厚意難有事ニ御座候間偏ニ奉願候最早八分通ハ參掛居候付今此處ニ御座候故何卒奉希候此度乍略儀以書中御願旁奉得御意候頓首

八月十四日

板垣樣

西鄉拜

又タ三條公ヨリ西鄉氏ヲ召サレ、使節御內勅ノ旨ヲ達セラレタルニ付キ、左ノ書翰ヲ余カ許ニ寄セ來レリ。

昨日ハ參上仕候處御他出ニテ御禮モ不申上實ニ先生之御蔭ヲ以快然タル心持始テ生シ申候病氣モ頓ニ平愈條公之御殿ヨリ先生之御宅迄飛テ參候仕合足モ輕ク覺申候モフハ橫棒之憂モ有之間敷生涯之愉快此事ニ御座候用事モ相濟候故又々青山ヘ潛居仕候此旨乍略儀以書中御禮而已如此ニ御座候頓首

八月十九日

板垣樣

西鄉拜

右ノ書翰ハ氏ノ自筆ニシテ、今尙ホ余カ手許ニ保存セリ、其ノ他當時ノ事實ヲ證スルニ足ルベキ書翰ハ數通アリ、若シ桐野氏カ深ク此議ニ與リ、桐野利秋談中ニ於テ自ラ言フ如ク、西鄉氏ト同ジク其事ヲ計畫シ「拙者共兩人云々」トイフカ如キ關係ヲ有セシナレハ、西鄉氏ト余ト交際ノ間ニ於テ、或ハ談話ニ、或ハ書翰ニ桐野氏云々トノ言アルベキニ曾テ之ヲ見聞セス、就中西鄉氏カ三條公ニ呈シタル書翰ノ自筆寫書ハ余ニ贈リアリ、其長文ナルハ一丈餘ニ及ヘドモ一言ノ桐野氏ニ及フ者ナシ、副島後藤兩氏ニ就キ當時桐野氏ノ事ヲ尋スルニ、副島氏ハ曰ク「彼ハ岩倉公ノ邸ニ出入シ居リシヲ記憶セリ、故ニ彼ハ腰推シヲ爲シ居タル事ナラン」ト、余モ亦タ斯ク思ヘリ、桐野氏ハ西鄉氏ヨリ譴責ヲ受クテヨリ後ハ熱心ニ同意ヲ表シ居タル事ト信ズルナリ。

當時副島氏カ支那ニ使シタルハ、先キノ假條約ヲ改メテ本條約ヲ結ヒ、隣交ヲ修メ通商ヲ盛ンニシ又タ支那カ朝鮮ニ對スルノ關係如何ンヲ確メ、又タ臺灣ノ事件起ルニ付キ、支那ハ臺灣ヲ自國ノ版圖トシテ其責ニ任シ之ヲ處分スルヤ否ヲ尋ネ、以テ我國外交ノ方針ヲ定メントスルニ在リシナリ、而シテ余等カ副島氏ト相謀テ朝鮮ニ着手シタルハ既ニ明治五年ノ頃ニ在リ、又琉球ニ對シテノ政策ハ我藩屬タルノ名ヲ爭ハンヨリハ先ツ其ノ實ヲ收ムルニ在リ、又タ彼カ國情ニ於テモ支那ハ父タリ日本ハ母タリトハ彼ノ國民ノ套語ト爲リ居リシナリ、然ルニ大久保氏ノ說終ニ行ハレ、急ニ琉球ヲ藩屬ト爲シタリ、又我國ノ外交政略ハ、露國ト東洋ニ重キヲ持スベシト爲セリ、故ニ明治六年露國王子ノ來遊ニ際シ厚ク之ヲ遇シ、露國ノ望ヲ繫キタリ、是ヲ以テ彼ノ征韓論ニ付キ其議相合

セス、余等同志ノ袖ヲ聯テ朝ヲ退クヤ、露國公使ハ大ニ失望シタルノ事アリ、余等カ征韓論ニ先チ請フテ委員ヲ朝鮮牛莊ニ派遣シ視察セシメタルカ如キハ即チ外交政策ノ玆ニ存スル者アルヲ以テナリ、之カ委員ヲリシ薩州人別府新介、土州人北村長兵衛兩氏ノ如キハ征韓論ノ起リタル際ニ於ヲ視察ノ功勘カラス、別府氏カ西鄉氏ノ謀議ヲ助クタル事アルハ余能ク之ヲ知レリ、然レトモ桐野氏カ西鄉氏ト相俱ニ謀議シテ外交政策ノ機密ニ亘リ、征韓論ハ兩氏ノ首唱ニ係ルカ如キ事ヲ知ラザルナリ云々。

板垣ノ此再辯明ニ就キテ、某亦再度ノ論駁アリ、左ノ如シ。

板垣氏ハ吾人カ向キニ前回ノ辯明書ノ記スル所ハ太タ長キモ論爭ノ燒點タル明治六年十月十四日ニ於ヲ如何ナル擧動アリシト云フコトハ毫末モ明記スル所アラザルヲ遺憾トシ、述フル所アリシニ關シ、先ツ吾人ノ言ヲ排シテ曰ク「此文ノ意味タル征韓論發端ノ日ト終局ノ日ト混同シ、又タ十四日ノ會議ヲ以テ終局ノ日ト爲シ、余カ此日ヲ以テ是非ノ論ヲ吐カサリシモノヽ如ク言ヒ做セリ」ト、否々氏ノ言コソ非也。吾人ハ平生自ラ征韓論ノ事ヲ調査シテ聊サカ得ル所ナキニアラズト稱ス。サレバ桐野利秋談ナキモ、十月十四日カ征韓論終局ノ日ニアラサルヲ知ル、況ンヤ桐野利秋談此段ノ事ヲ記スル極メテ詳カナルヲヤ吾人何ソ敢テ之ヲ混同セム哉。但シ十月十四日ハ征韓論ノ評定中ノ尤モ重要ナル日ニシテ種々ノ議論太タ熾ンナリシコトヲ認メ居ルノミナラズ、桐野利秋談ノ記スル所、又タ實ニ氏ノ沈默シテ可否ヲ言ハザリシヲ以テ此日ノ事ト爲セシカ故ニ、敢テ斯ノ如ク言ヒシノミ、氏ハ桐野利秋談ノ所謂十四日ヲ以テ十八日ノ誤リナルベシ、大隈氏ニ關スル話ノ如キハ實際此日ニアリシニ相違ナシト言ヒヲ、此日ハ他ノ參議諸氏ト共ニ大久保大西鄉ノ激論ノ間ニアリテ沈默セシ事實ヲ語リ、十四日ニ於テハ決シテ沈默セシコトナシ、痛ク之ヲ論ジタリト辯明セラル。然ルニ桐野利秋談ハ氏ノ沈默セシヲ以テ十四日ト爲スノ外、尚ホ明カニ十八日ノ事ヲ記スル所ニヨレバ、十八日ハ岩倉右

府以下非征韓黨ノ諸氏ハ皆病ト稱シテ參朝セズ、獨リ征韓論主張ノ諸氏ノミ出デ、三條公ニ使節派遣ノ決議奏請ノ事ヲ迫リ、結局三條公明日ヲ以テリ、大久保氏ハ固ヨリ參朝セザリシヲ以テ、ソノ大西鄉トノ激論ヲ爲セシハ此日ノ事ニハアラザルニ似タリ。サレバ、ソノ果シテ十四日ナリシカ、十八日ナリシカ、此レモ又タ一ノ疑問ナリト謂ハザル可ラズ。然レドモ吾人ハ桐野利秋談ノ記スル所ニヨリ又タ板垣氏ガ公ケニシタル大西鄉ノ書牘ヲ看テ、彌ゝ板垣氏ノ言フガ如ク十八日ニアラズシテ、十四日若クハ其佗ノ日ナラムコトヲ思フ。即十九日附ノ大西鄉ノ書牘ヲ案ズルニ、前日（十八日）三條公ノ御殿ニ於テ使節派遣御發表ノ御沙汰ヲ蒙リ、欣喜シテ措クコト能ハズ、歸途板垣氏ヲ訪問シタルノ意味也。然ラバ氏ガ言フ所ノ大久保大西鄉ノ間ニ激論アリ、大西鄉ガ辭表ヲ机上ニ叩キ付ケテ退朝セリトノ事實ト、大西鄉ノ書牘ノ趣トハ全ク矛盾シ居ルニアラズ耶。吾人ハ相衝突セル二樣ノ事實ノ斯ノ如ク同日ニ起ルコト無キヲ確信スル也。無理ニコヂ付クレバ、大西鄉此日憤然トシテ退出スルノ後チ、更ニ三條公ノ御殿ニ召サレ斯ク喜アベキノ御沙汰ヲ蒙リシモノト爲シ得ザルニハアラザレドモ、マサカニ斯ル馬鹿氣タル事モアラザルベシ。此點ヨリスレバ、吾人ハ板垣氏ノ言ヨリモ桐野利秋談ノ記スル所、大ニ事理ニ適スルモノアルヲ覺ユ。若シ夫レ桐野利秋談ノ記スルガ如ク、十八日ニハ非征韓黨ノ諸氏皆病ト稱シテ參朝セズ、征韓論主張ノ諸氏ノミ出デヽ三條公ニ決議奏請ノコトヲ迫リ、結局三條公ヨリ「明日ニ至ラバ右府以下朝セザルモ我一人之ヲ行ハム」トノ言ヲ得テ朝ヲ退キ、更ニ三條公ノ御殿ニ赴キテ前刻ノ御沙汰ヲ確シカメ、歸途板垣氏ヲ訪問セシモノト爲シ、三條公ハ此日此ノ決心ヲ定メラ斯ク御沙汰アリシモ、更ニ他ノ事情ノ爲メニ此決心ヲ實行セラルヽコト叶ハザルノ塲合ニ臨ミ、愛慮爲サム所ヲ知ラズ、竟ニ急ニ病ヲ發セラレシモノトセバ、事實全ク符合スルヲ得ベシ。此レ吾人ハ氏ガ大西鄉ト大久保トノ間ニ立チテ沈默セシト云フハ十八日ニアラズシテ寧ロ十三日カ十四日若クバ其他ノ日ナラムコトヲ思フ所以ニ外ナ

ラズ、彼ノ公ケニセラレタル十月十四日附ノ大西郷ノ書牘ノ如キ、唯一通ノ儘ニシテ他ニ然ルベキ證據ナクベ、之ヲ氏ガ沈默可否ヲ言ハザリシノ結果ニ出デシモノト爲シ、桐野ニ於テハ不滿憤悶ト爲リシモ、氏ニ於テハ斯ノ如キ悃篤丁寧ノ依頼狀ト爲リシト判斷スルモ、又タ一種ノ解釋ニシテ強チ不通ノ論トハ謂フ可ラズ。

板垣氏ハ大西郷カ十八日ヲ以テ辭表ヲ机上ニ叩キ付ケテ退朝セリト云フ。此レ恐クハ廿三日午後岩倉右大臣ヨリ朝鮮使節ノ事御裁可ナキ旨ノ御沙汰ヲ領シタル時ノ事ナルベシ。十八日ニ於テ斯ル事ノアルベキ筈ナキコトハ氏ガ沈默セシト云フハ十四日ナルカ十八日ナルカヲ論究セシ時ノ言ニテ畧ボ明白ナレバ再ビ爰ニ之ヲ述ヘズ。氏ハ又タ「江藤氏ガ十四日ニ辭表ヲ出セリト云フハ誤ナラン」ト言ハレ、ソノ經由トシテハ後藤氏談、及ビ島本仲道氏ノ記錄ニヨリ江藤氏ガ後日內閣ニ出仕セシコトアリシ事ヲ以テス。然レドモ辭表提出ト辭職裁可トハ同一ニアラズ。已ニ一タビ辭表ヲ出スノ後チ、他ノ解說慰諭ニヨリテ再ビ出仕スルガ如キハ世間ニ其例少カラザル所ナレバ、江藤氏ガ後日ニ及ビ內閣ニ出仕セシコトアリトノ故ヲ以テ、直チニ十四日ニ辭表ヲ出セリトハ誤リナリトスルノ道理アル可ラズ。現ニ氏ノ言ニヨレバ氏ハ嚴正謹直ヲ以テ聞ヘタル大西郷ガ十八日ニ（吾人ハ廿三日ニ赴キテ議論ヲ試ミシコトヲ認メ居ルニアラズ哉、他ニ理由アレバ兎モ角モ、單ニ後日ニ出仕セシアリトノ故ヲ以テ江藤氏ガ十四日ニ辭表ヲ出セシトノ記事ハ誤ナルベシトノ說ニハ贊同スルコト能ハズ。吾人ハ寧ロ桐野利秋談ノ記スルガ如ク、江藤氏ハ十四日ニ辭表ヲ出シ、又タ副島氏ノ記憶スルガ如ク後日ニモ出仕セザリシコトノ或ハ事實ナランコトヲ思フ。江藤氏ガ性質ノ峻急ニシテ癇癪持ノ風アリシ點ヨリスレバ、氏ガ十四日ノ會議ニ於テ廟論稍ゝ姑息ニ傾クヲ看テ憤悶ニ堪ヘズ、他ノ參議殊ニ大西郷ニ先テ決然辭表ヲ出セシコノ甚似合ハシキヲ以テ也。

別府ガ桐野ノ從兄弟ニシテ誼幾ンド弟タルニ等シク、幼少ノ時ヨリ成人任官ノ後ニ及ブマデ、常ニ桐野ノ提携示導ヲ蒙リ、明治十年枕ヲ同フシテ城山ニ斃レシハ世人ノ能ク知ル處ナレバ、必ズシモ精ハシク言ハズ。彼ガ形勢視察ノ命ヲ奉シテ朝鮮ニ赴ク時、長崎ノ客舍ヨリ人ニ（多分今ノ土屋少將ナルベシ）托シテ桐野ニ寄セ平生ノ訓示ニ從ヒ、十分ニ視察ノ功ヲ遂ゲテ歸ラムコトヲ告グル所ノ手書、即チ桐野ガ以前ヨリ如何ニ多ク朝鮮問題ニ留意シ、又タ此問題ニ關シ常ニ別府ニ敎ユル所アリシカヲ知ルベキモノハ、別府ガ歸朝ノ際携ヘ來レル虎ノ皮ト共ニ現ニ桐野ノ家ニアリト云フ。而シテ別府ガ復命ノ途次、先ツ歸リテ當時鹿兒島ニアリシ桐野ヲ訪フヤ、未ダ席ニ就クニ遑アラズ、外ヨリ「朝鮮ハ討ラルゝゝ二三中隊アレバ譯ハナイ」ト言ヒツヽ上リ來レリトハ薩人中ノ征韓論熱心家ガ一話柄トシテ今尙ホ語リ傳フル處也。斯ノ如キハ實ニ桐野ト別府トノ關係ヲ知ルベキノミナラズ、直ニ以テ桐野ガ征韓問題ニ熱心留意セシノ一朝一夕ニアラズ。板垣氏カ彼ヲ以テ大西郷ノ讐責ヲ受ケテヨリ初メテ征韓論ニ同意ヲ表スルニ至リシト云フカ如キハ全ク事實ニ違ヘルヲ察スルニ足ラム歟云々。

右ニ對シテ板垣ノ第三回ノ辯明アリ、即チ左ノ如シ。

反駁ノ長文、筆者ハ自ラ其ノ姓名ヲ匿クシテ責任ヲ有セス、且ツ事實ヲ論スルノ上ニ於テ、一モ證據ヲ提出セス、唯タ據ル所ハ桐野氏ノ自筆ニモ非ラサル傳聞ノ筆記ニ過キス、然レトモ一度此事ノ世ニ公ケニ爲リタル以上ハ天下公衆ニ向テ更ラニ一言セサルヲ得ズ、之ヲ要スルニ征韓論ノ顚末ハ之ヲ分テ三段ト爲スナリ。

（第一）　直職ノ人ヲ撰ンテ朝鮮ノ使節ト爲スヘシトノ問題ニシテ、使節ヲ派遣スルノ議ニ決シタル事。

（第二）　何人ヲ以テ朝鮮ノ使節ト爲スヘキ乎ノ問題ニシテ八月十七日西郷氏ヲ派遣スルノ議ニ決シタル事。

（第三）　明治六年九月十三日岩倉大使歸朝ノ後ハ西郷氏其ノ人ヲ朝鮮使節ト爲スヤ否ヤノ問題ニ非ラス、唯タ即時ニ使節ヲ朝鮮ニ派遣スルヤ否ヤノ問題ニテアリシ事。

抑モ副島公使カ清國ヨリ歸朝シタルハ七月二十六日ナリ、副島公使ノ未タ歸朝セサルニ先テ西郷氏ヲ使節ト爲スニ決定シ居タリトノ記事ハ誤リナルヲ以テ、余ハ之レヲ正サンカ爲メニ當時西郷氏ヨリ余ニ寄セタル書翰二通ヲ引證シタリ、是レ以テ當時西郷氏カ使節タルノ議ニ未タ決定シ居ラサルヲ證明スルニ足レリ、即チ八月十七日ニ至リ西郷氏ヲ派遣スルノ議ニ決シタルナリ。朝鮮ニ使節タルノ事ハ西郷副島ノ兩氏ノ間ニ爭ト爲リ居タリ、其證據トシテ引用スベキ西郷氏ノ書翰アリ、其長文ニ屬スルヲ以テ茲ニ唯タ其一節ヲ摘錄スベシ、即チ明治六年七月二十九日附ノ書翰文中ニ曰ク、

「副島君ノ如キ立派ノ使節ハ出來不申候得共死ヌル位ノ事ハ相調可申歟ト奉存候云々」

右ノ文言ニ據ルモ此時西郷氏カ使節タル事ニ未タ決定シ居ラサルノ證據ト爲スニ十分テリトス、因テ一言ヲ寄セ、更ラニ其事實ヲ明確スル者ナリ。

辯明論駁是ニ至リテ止メリ、其爭點ニ關シテハ實狀未タ明瞭ナラズト雖モ、却テ其他ノ事跡ノ看ルベキモノアリ、是レ茲ニ之ヲ收錄セル所以ナリ。

此變革ヲ以テ舊內閣員ノ退職シタル者五人ノ外、退職セザリシ者ノ內、說ヲ改メタル者、或ハ說ナキ者アリシト云フ。太政大臣ハ既ニ朝鮮處分ノ議ヲ可トシタルヲ以テ、心大ニ憂フル所アリ、退テ疾ヲ其別業ニ養フ、車駕親臨シテ疾ヲ力メテ職ヲ執ルベキノ勅諭アリ、後數日、大臣參朝シテ、心事安カラザルノ情ヲ陳シテ、其職ヲ罷メント請フ、優詔シテ之ヲ聽サズ。大臣一タビ嘉遯ノ志アリシト雖モ、其人ト爲リ溫良ニシテ聖恩ノ渥キ、辭スベカラザルモノアリテカ、再ビ朝ニ出デタリ。

維新ノ初メ、軍人ノ政務ニ疎キモノニシテ樞要ノ地位ヲ占メタル者十ノ八九ナリシモ、其後年ヲ逐フテ軍人ヲ政局ノ外ニ置キ、今回ノ變革ヲ以テ內閣中一名ノ軍人ヲ餘サズ、文勳ノ士之ニ代リタリ、殊ニ世ノ所謂藩閥人士ニアラザルノミナラズ、勝安芳ノ如キ新政府ノ敵位ニ立チタル舊幕府ノ人ニシテ、內閣員中ニ入ル者アリシハ維新以來此時ヲ以テ始トス。

征韓ノ論タル、在朝有力者ノ主張セシ所ナレバ、之ヲ贊セシ者少ナカラズ、西郷以下憤然職ヲ罷メテ鄉里ニ歸ルニ及ンデ亦之ニ倣ヒ、薩、土、出身ノ武官多ク官ヲ棄テ、去リ、近衛兵士ノ薩、土ヨリ出デタル者頗ル動搖セリ。是ニ於テ特ニ敕諭ヲ賜ヒテ曰ク『一新ノ業日浴カラズシテ、未タ其半ニ至ラズ、今ヤ一層努力スルニ非ズンバ成功期スベカラズ、況ヤ北地ノ事情、其餘國事多難、內外容易ナラザル形勢ニ際シ、朕深ク之ヲ憂フ、汝等宜ク朕ガ意ヲ躰認シ、一層勉勵其職ヲ盡サンコトヲ望ム』ト。然レドモ士氣激昂ニシテ制セラレズ、鹿兒島男兒ハ皆ナ其師事スル所ノ西鄉先生ニ隨ヒテ鄉里ニ散歸セリ。抑モ兵ハ國ノ兵ニシテ、西鄉等ノ護衛兵ニアラザルハ言ヲ待タザルナリ、然ルニ西鄉一タビ去ルヤ、軍人中命ヲ奉セズシテ解散セシモノアリ、人ヲシテ中古宿衛豪橫、朝廷ヲ蔑如シタルノ狀ヲ追想セシメタリ。

此時ニ當リテ天下ノ士人無事ニ苦ム者少ナカラズ、土州人ノ如キハ最モ征韓ノ行ハレザルヲ憾ミ、岩倉右大臣ヲ殺シテ廟議ヲ動サントス欲シ、數名相謀リ、途（赤坂喰違）ニ要擊シテ之ヲ刀傷セリ。征韓論ノ破裂以來、顯官ノ更迭アリ、兵隊ノ解散アリ、物情騷然タリシト雖モ、當時ニ在リテハ、在野ノ人政局

ノ實情ヲ知リシ者ナシ、知ラザリシガ故ニ之ガ爲ニ喜愛セル者ナク、只官人兵士ノ散去ヲ見テ驚愕シタルノミ、之ガ爲ニ喜愛シタル者ハ僅ニ政務ノ官ニ居リシ者ト一二ノ舊强藩ノ人士ニ止レリ。

西郷等ガ所謂征韓論ヲ唱ヘタル原因ニ就キテハ、著者曾ヲ親シク伯勝安芳ニ聞ケルアリ、曰ク、征韓論ハ西郷ノ眞意ニアラス、初メ西郷等内閣ヲ去ルノ意アリテ、未ダ其時ヲ得ズ、大使ノ歸朝ヲ待テ去ルノ密約ヲ大久保ト爲シタレ𪜈、俄ニ其約ノ實行ヲ見難キノ狀勢アリ、乃チ故ラニ行ハレ難キノ征韓論ヲ提出シテ退職スルヲ得タルモノニシテ現ニ之ヲ證スベキノ書類アリト。著者尙ホ未ダ此說ヲ信ズルヿ能ハズ、然レ𪜈善ク西郷ヲ知ルノ人ノ說ナレハ、姑ク茲ニ記シテ疑ヲ存ス。

余ガ明治六年ノ征韓論ニ就キテ觀察スル所ハ左ノ如シ。蓋シ當時ノ内閣タル、殊ニ異色ノ各舊藩權勢者ヲ强テ集合シタルモノナレバ、假令ヒ征韓論當時ニ起ラザルモ、久シカラズシテ内閣ノ破裂ヲ見タランヿ疑フベカラズ。征韓論ノ破裂之ヲ皮相セバ對韓問題ニ關シテ、各〻說ヲ異ニシタルニ因ルガ如シト雖モ、其實ハ閣臣ノ軋轢ヨリ換言セバ内ニ蟠リシ强藩ノ餘勢ノ衝突ガ此問題ニヨリテ外發シタルモノナリ、此衝突此軋轢コソ即チ内閣破裂ノ原因ニシテ征韓論ハ偶マ之ガ導火タリシニ過ギザルノミ。

其原因ハ何レニアルニセヨ、又假令ヒ西郷ハ未ダ東洋ノ大計ヲ知ラザリシニセヨ、早ク此時ヲ以テ朝鮮ノ處分ヲ了スルヿ琉球ニ於クルガ如クナルニ至ラズ、累ヲ後年ニ遺シタルハ實ニ百年ノ遺憾ト謂

フベキナリ。西南ノ戰役其半以下ヲ彼ノ地ニ移サバ、以ヲ我ガ目的ヲ達スルニ餘アリタランニ、當年ノ文弱論ノ爲ニ破ラレシハ實ニ我國ノ大不幸ト謂ハザルベカラズ、而シテ文弱論ノ行ハレタルモノハ、外遊ノ俗物政事者徒ニ歐米外形ノ文明ニ吃驚眩眩シ、朝鮮問題ヲ單ニ朝鮮問題視シ、其以外更ニ重要ナル東洋ノ大計ナルモノアルヲ遺(ワス)レタルガ故ニアラズヤ。

◎第二章● 日本軍艦砲撃ニ遭フ═辨理大臣派遣═修好條約═日本公使ト李鴻章ノ應接●

韓廷ノ我ニ對スル一意拒絶ノ主義ヲ執リシト雖モ、明治七年、國王親ヲ政ヲ視、王妃閔氏ノ族大ニ國柄ヲ用ユルニ及ビテ、政略亦一變シタルモノヽ如ク、此年十月、東萊府使朴齊寬(トンデナイ)屬員ヲ遣シ、日本駐在官ニ面セシメテ修好ノ意ヲ致シ、此ヨリ互ニ往來シ、兩國情意稍〻融和シタルモノヽ如シ○明年ニ至リ大院君再ビ事ヲ與リ聞ケリ、是ニ於テ韓廷ノ方針又動キ、日本トノ條約成ラントシテ未ダ成ラズ、依違歲月ヲ送レリ○此時ニ當リ韓人日本軍艦ヲ砲撃シタルノ報突如トシテ到レリ●

明治八年九月廿日、雲揚艦漢江(ハンカン)口ニ碇泊シ、艦員端艇ニ乘リテ江華(カンホア)近海ヲ測量セントセシニ、永宗(イエンツオン)島(仁川(インチエン)港口ニアリ)ノ守兵突然之ニ向ヒテ發砲シタリ、然レドモ艦兵之ニ應ゼズシテ一タビ退キ、翌廿一日、更ニ進ミテ、第一第二ノ砲臺ヲ攻メ砲戰スルコト數合、廿二日拂曉、又進ミ、遂ニ上陸シテ永宗城(端艇ニ發砲セシ地ヨリ數里ノ下ニ在リ)ヲ陷レ、大砲三十八門小銃十口ヲ得タリ○艦兵死者僅ニ一人、韓兵死者三十人、捕虜トナリシ者十人、其他逃走セシ者數百人ナリ●

警報一タビ到ルヤ、朝野騷然其處分ヲ論ズ○主戰論者ハ云ク、韓人ノ無狀復タ赦スベカラズ、之ヲシモ忍ブベクンバ、何ヲカ忍ブベカラザラン、速ニ師ヲ發シテ汚辱セラレタル國旗ヲ鴨綠江ニ洗濯セザ

戰ひ未だ

ルベカラズト。非戰論者ハ云ク、韓人無狀ヲ極ムト雖モ、目下外征ノ師ヲ起スノ時機ニアラズ、姑ク之ヲ不問ニ措キ、國力充實ノ日ヲ待チテ、徐々ニ事ヲ謀ルモ亦遲カラズト。時ニ內閣ノ軋轢方ニ熾ニシテ和戰ノ議ヲ決スルニ遑アラズ、左大臣島津久光、參議板垣退助ノ二人退職ノ後、始テ問罪使ノ任ニ當ル者ハ誰ナラン、參議木戸孝允ハ此時自ラ奏請スル所アリシヲ以テ、必ズヤ此人ナラント、然ルニ此時偶マ病ニ罹リテ其任ニ當ル能ハズ、命下ルニ及ンデ、豈ニ圖ランヤ、參議黑田清隆ナリキ、世人皆ナ驚ク、既ニシテ又井上馨ヲ野ニ擧ゲテ之ガ副タラシム、蓋シ國家ノ大事ニ任ズル者ハ必ズ薩長二藩人ニ限ルノ例ニ依ルモノナリ。

明治八年十二月十三日、陸軍中將兼參議開拓長官黑田清隆ヲ全權辨理大臣トシテ朝鮮ヘ差遣セラルヽノ公命アリ、廿七日ニ至リテ、井上馨ヲ議官ニ任ジテ特命副全權辨理大臣ヲ命セラル、是レ實ニ維新後朝鮮ニ使節トシテ大臣ヲ發スルノ始ナリ。

辨理大臣ハ十二月三十日隨行諸官ヲ以テ假皇宮ニ參シ、小御所ニ於テ陛辭ス、酒饌並ニ物ヲ賜フ（大臣ニ錦三卷、紅白縮緬四匹、副大臣ニ錦二卷、紅白縮緬二匹、陸軍少將ニ純子一匹、白羽二重二匹、奏任官十七名ニ白羽二重二匹ヅヽ、判任官八名ニ絹一匹ヅヽ）、同日賢所參拜式ノ如ク、神酒幷ニ幣物ヲ賜フ（大臣ニ錦一匹、少將ニ紅白絹一匹、奏任官ニ白羽二重一匹ヅヽ、判任官幷ニ御用掛二名ニ晒一端ヅヽ）。

九年一月六日辨理大臣ハ隨員ヲ率ヰテ發途シ（副大臣ハ先發シ、神戸ニ於テ大臣ト會ス）近衞兵及ビ鎭

〔軍艦被撃。辨理大臣派遣〕

臺兵數千人之ニ隨伴ス、護衛艦ハ日進、孟春ノ二艘ニシテ、運送船ハ玄武、高雄、嬌龍、函舘ノ四艘ナリ。

差遣並ニ隨伴ノ人員、文官ハ外務大丞宮本小一、外務權大丞森山茂、開拓少判官安田定則、開拓幹事小牧昌業、開拓七等出仕鈴木大亮、正院御用掛末松謙澄、及ビ外務御雇朝鮮人金麟昇等十餘人○武官ハ陸軍少將種田政明、中佐樺山資紀、準陸軍少佐七等出仕永山武四郎（以上三名薩人）、陸軍大尉岡本柳之助、陸軍少尉磯林眞三等十餘人ナリ。

辨理大臣ハ朝鮮ニ到ル、二月十日隨員ヲ率井（各大禮服）、海軍兵ニ護衛セラレテ江華府（カンホア）ニ赴キ、副帥營ノ公舘ニ着シタリ。

時ニ東萊（トンダイ）ノ官吏公舘ニ來リテ辨理大臣ノ安着ヲ賀ス、大臣ハ沙都通判衙門ニ至リ、第一門ニ入リ、第二門外ニ海兵半隊ヲ留メ置キ、半隊ヲ率井テ正階ノ下ニ至リ、兵ヲ一列ニ立タシメ置キテ、直チニ舘內ニ進メリ○此時朝鮮ノ大臣判中樞府事申櫶、副大臣都總府副總管尹滋承出迎シテ名刺ヲ交換シ、一應ノ挨拶終リ、椅子ニ倚リテ茶ヲ飲ミ、辨理大臣ハ直チニ公舘ニ歸ル、續イテ朝鮮ノ兩大臣（粉紅團領ト云フ衣冠ヲ着ケタリ、白袍ニシテ、胸前ニ赤帶ヲ橫タヘ、本邦ノ舊衣冠ニ似タリ、冠ハ雙纓四翼ニテ、俗ニ唐冠ト云フモノナリ）一隊ノ兵士ニ警護セラレ、列ヲ爲シ、樂ヲ奏シテ公舘ニ來リ、副帥營ノ外門ニテ奏樂ヲ止メ、第一門ヲ過ギシ時、日本兵ハ捧銃ノ禮ヲ爲シ、喇叭ヲ吹奏ス○第二門ニテ轎子ヲ下リ、左右ノ人ニ助ケラレテ階ヲ登リ、正廳ニ至リ、兩大臣ニ面ス、是レ前ノ答禮ニ來リタルナリ、互ニ丁寧ノ挨拶アリ、茶菓、煙草等ヲ饗ス、暫クシテ辭シ去リタリ。

翌十一日午後一時、西門內ノ錬武堂ニテ談判ヲ開キ、四時ニ終レリ。

此夕朝鮮ノ大臣ヨリ饗應アリテ、古樂ヲ奏シタリ（饗應ノ品ハ茶、クワスリ、生栗、乾柿、色餠、藥菓、梨

子、煤鷄卵（ユデ）、鷄南蠻ノ蕎麥等十餘種ニテ、蕎麥ハ眞鍮鍋ノマヽ出シ、其他ハ孰レモ徑六七寸ノ皿ニ山積シテ出セリ○蕎麥ノ外ハ後ニテ皆ナ主官ヨリ辨理大臣ノ公舘ニ送附セリ）。

翌十二日、午後一時ヨリ五時過マデ、談事廳ニ於テ又談判アリ（十一日モ十二日モ、隨員二三名ノ外ニハ一兵モ隨ヘザリキ）、此日彼ノ懇請ニヨリ、十日間談判ヲ猶豫スルコトニ決シタリ○爾後十日ヲ過ギ、廿日ニ至リテモ、彼ノ云フ所ハ遂ニ辨理大臣ノ意ニ協ハズ、因テ此夜又使ヲ以テ彼ノ大臣ニ會同ヲ求メ、七時半、俄ニ談事廳ニ於テ談判アリテ、十二時ニ歸舘シ、翌廿一日ニハ行李ヲ頂山島ニ還送シ、廿二日朝ニ至リ、辨理大臣ハ將ニ公舘ヲ發セントセシニ、此時彼ノ申尹二官自ラ公舘ニ來リテ、辨理大臣ニ數日ノ滯留ヲ乞ヘリ、大臣聽カズシテ只隨員數人ヲ留メ置キ、遂ニ十一時ヲ以テ公舘ヲ發シ、頂山島ニ碇泊シタル船ニ歸リ、猶ホ四日間ノ猶豫ヲ與フルニヨリ、宜シク熟慮スル所アルベシトノ意ヲ通セリ。

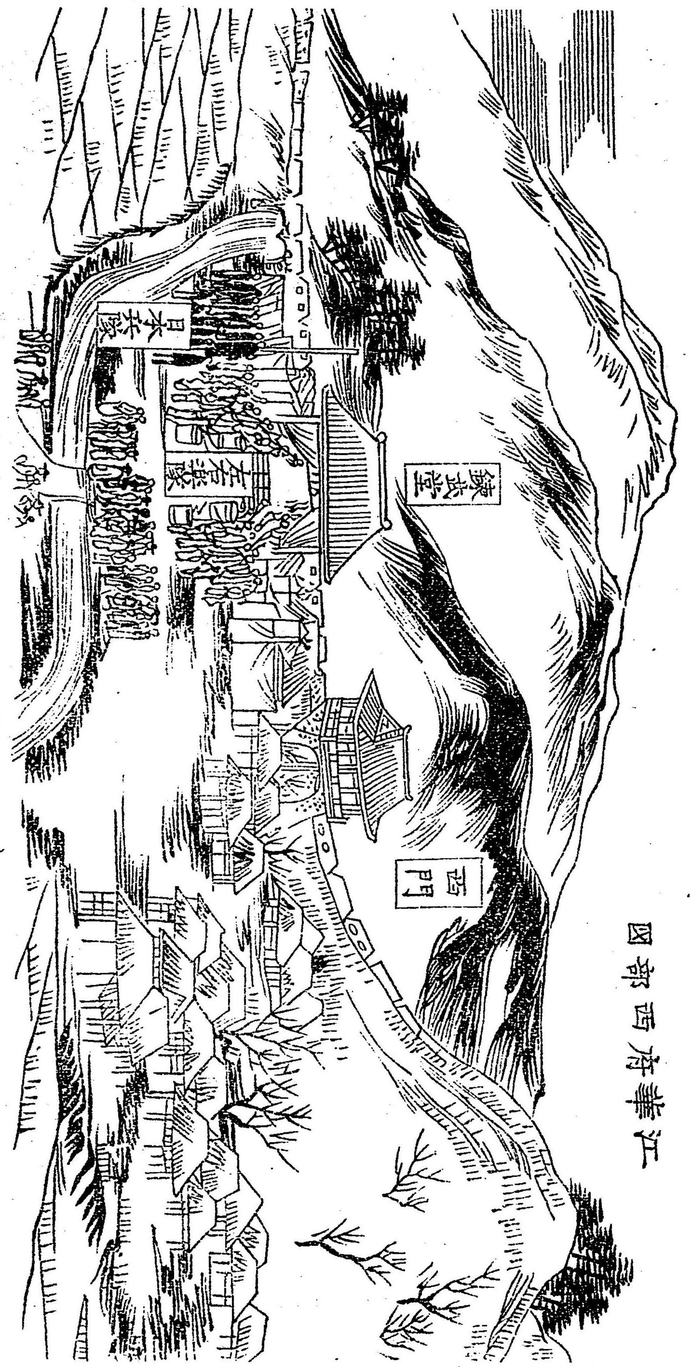
初メ辨理大臣ノ江華ニ至ルヤ、朝鮮ノ諸大臣以下高官悉ク議政府（內閣）ニ會シテ議ヲ開クリ、時ニ全國ノ人悉ク內外ノ形勢ヲ知ラズ、又日本ヲ憎惡スルヿ特ニ甚シ、皆ナ日本ト修好通商スベカラズト云ヘリ○大院君（國王ノ實父、其小傳第四章ニ載ス）全權申櫶及ヒ副全權尹滋承等ニ囑シテ和ヲ破ラシメンヿヲ期シ、又書ヲ會議所（議政府）ニ致シテ曰ク、決シテ倭ト通ズベカラズ、倭若シ兵ヲ以テ侵擊セバ吾家僮ヲ率井テ擊チ郤クベキナリト○領議政（我カ舊官制ノ太政大臣）李最應、左議政（左大臣）金炳國、右議政（右大臣）朴珪壽ハ中樞府大臣（樞密顧問）洪淳穆、金炳學、李裕元以下百官ト日々ニ會議シ、多ク大

院君ノ議ニ從ハントト欲セリ、唯リ朴珪壽及ビ清語譯官吳慶錫能ク時務ヲ知ルヲ以ヲ、力爭シテ大院君ノ議ニ從フベカラズト云ヘリ○議七日ニ及ビテ決セズ、朴等事ノ破レンコトヲ恐レ、李最應及ビ中宮ノ遠族參判《次官》閔奎鎬ヲ誘說シテ、國王ト王妃ニ申言シ、利害ヲ陳シテ日本ト和好ヲ修メザルベカラザルヲ切論セシニ、王其申言ヲ然リトシテ之ヲ允可セリ《朝鮮ノ政躰ハ君主獨裁ニシテ、大小ノ政務悉ク親裁ニ出ヅ》、翌日李領議政王意ヲ以テ、其議ヲ決シ、玆ニ會議ヲ止メ、遂ニ日本ト和ヲ講スルニ決シタリ○此時日韓修好ノ成リシハ＝蓋シ朴、吳二人ノ力ナリ（爾來大院君ハ之ヲ目スルニ賣國者ヲ以テセシガ、二人共ニ翌年病死セリ）●（此一節ハ朝鮮人某ノ記ニ據ル）

是ニ於テ韓廷ハ公館ニ留メ置キタル辨理大臣ノ隨員ト議シテ我ガ大臣ニ請フ所アリ、始メテ和議ノ端ヲ開キ、廿六日、辨理大臣ハ再ビ副帥營ノ公館ニ赴キ、翌廿七日午前九時半、鍊武堂ニ於テ談判局ヲ結ビテ條約ニ調印シタリ、世ニ之ヲ江華條約ト稱ス（附錄第一號ニ載ス）●

辨理大臣ハ初メ雲揚艦砲擊ノ罪ヲ問ヒシニ、韓廷ハ辭ヲ左右ニ依違シ、砲臺ノ守兵ハ旭旗ノ日本國章タルヲ知ラザリシナリ、同艦ノ旭旗ハ其時ニ異黃色ノ反射アリ、守兵ヲシテ日本船タルヲ辨ズルヲ能ハザラシメタリ、又薪水ヲ需用スル爲ナラバ、日本船ハ釜山ニ來ルベキ筈ナリ、江華ハ經過ノ海路ニ非ザルナリナド、分疏シタレドモ、一々辨理大臣ニ辯駁セラレ、韓廷竟ニ謝スルニ至レリト云フ○一說ニ韓廷ヨリ謝罪狀ヲ取リタリト云ヘドモ未タ詳ナラズ●

此日兩大臣以下隨行ノ奏任官皆ナ大禮服ニテ列席シ、護衛ノ儀仗兵モ亦禮服ニテ隨ヘリ○鍊武堂



圖第四序華江

［第二章］　條華江

ノ前ニハ朝鮮樂隊左右ニ列シテ樂ヲ奏シ、且ツ饗應品ヲ呈スルヿ去十一日ノ如シ、大臣唯ソノ禮式ヲ受ケテ直ニ鍊武堂ヲ去リ、十一時半鎭海門ヨリ端艇ニ乘リテ頂山島碇泊ノ船ニ歸リ、翌廿八日解纜シテ歸途ニ就キタリ●

江華ニ於テ締結シタル修好條規第一款ニ於テ、明ニ朝鮮ヲ獨立國ト認メタルハ支那其他ノ國ニ隸屬セザルヿヲ明ニセンガ爲ナリ、是レ論者中往時朝鮮ハ我ガ國ニ朝貢シタリ、今日ニシテ之ト同等ノ禮ヲ以テ相接センコトス、寧ロ國威ヲ損スルナキカト云ヒテ非難スルノ條款ナリ（凡ソ和漢歷史家ノ風トシテ虛文ヲ貴ビ、隣邦ノ禮聘ハ概シテ朝貢ト稱ス、現ニ隋、唐以後ノ史書ニ於テ、我ガ國ノ禮聘ヲ以テ『倭入貢』ト書シタルニテモ知ルベシ）●　其第四款ニ於テ從前交際通商上ノ襲習ヲ除クヿヲ示シタルハ、彼ヲシテ我ガ公平ヲ知ラシムルガ爲ナルベシ○舊幕府ノ時慶尙道ノ釜山浦ニ倭館アリ、對馬藩宗氏ニ於テ兩國ノ交際通商事務ヲ管理シタルガ、我ノ彼ニ對スル頗ル峻嚴ヲ極メ、公館建築ノ費用彼ヲシテ常ニ之ヲ支辨セシメ、地租房錢一切之ヲ償フコトナク、又朝鮮國ガ從前歲遣船ト互市ノ爲ニ費ス所勘カラズ、殆ド一道ノ歲入ヲ以テ之ニ充ツルコトナリシト云ヘリ、因テ此等ノ弊ヲ除カントテ此條款ヲ置キタルナラン●　其第五款ニ於テ、二十个月ノ後ヲ期シ二港ヲ開クベシトアルニヨリ、明治十三年五月ヲ以テ咸鏡道ノ元山津ヲ開キ、十六年一月ヲ以テ京畿道ノ仁川港ヲ開キタリ○此ノ如ク甚シク豫定ノ期限ニ後レタルハ（元山津ハ五十二个月ノ後、仁川港ハ八十四个月ノ後）全ク朝鮮其國ノ事情ニ依ルモノニシテ、猶ホ慶

應年間我國ニ於テ兵庫開港ヲ延期シタルガ如キ事情ノ如シ●　其第七款ニ於テ、特ニ日本人ノ朝鮮海ヲ測量シ得ルヿヲ明記シタルハ彼ノ江華ノ變ノ如キ、朝鮮人ノ暴擧ヲ防グ爲ナルベシ●　其第十款ニ於テ、國法除外（治外法權）ノ約ヲ定メ、朝鮮在留日本人ノ朝鮮人ニ交涉スル犯罪ハ日本官吏ノ裁判ニ從ハシムルヿトセリ、而シテ日本在留ノ朝鮮人ヲ處スルニハ何ノ國ノ法律ヲ以テスベキカ、此條約中ニハ明文ヲ見ズト雖モ固ヨリ日本ノ法律ヲ以テ處分スベキハ明治十六年一月司法卿ヨリ各裁判所ヘノ內達ニ『本邦在留ノ朝鮮人犯罪アルトキハ我法律ヲ以テ處分スベキハ當然ナレドモ、其重罪ニ該ルベキ者ハ本省ヘ經伺ノ上處斷スベシ』トアルニテモ明白ナリ、是レ一ハ當時未ダ朝鮮人ノ日本ニ在留スル者アラザリシガ故ニ條約中ニ之ヲ明示セザリシモノナリ○我國既ニ淸國ニ對シテハ各自裁判ノ約ヲ成シタルニ（日淸修好條規第八條、第九條ヲ見ルベシ）、獨リ朝鮮ニ對シテハ、彼ノ法律我ニ行フベカラズシテ、我ノ法律彼ニ及ブノ例ヲ爲リタルハ、日本ガ歐米各國ニ向テ國法除外ノ廢止ヲ求ムルノ旨趣ニ反シ、頗ル公平ヲ欠クモノアリト或ハ外人ノ論評ヲ免カレズト雖モ、外人ハ二國ノ法律其進度ヲ異ニスルノ情ヲ詳察セザルガ故ニ、一概ニ此說ヲ爲スモノナリ、日本ノ法律以テ朝鮮人ヲ管スルニ足ル、朝鮮ノ法律未ダ以テ日本人ヲ管スルニ足ラズト云フモ、誰カ敢テ然ラズトスルモノアランヤ、帝國ガ朝鮮ニ對シテ此例ヲ施スハ蓋シ止ムヲ得ザルモノアレバナリ●　其第十一款ニ於テ、六个月內ニ通商章程ヲ定ムベシトアルニヨリ、其年八月ヲ以テ我ガ理事官京城ニ至リ、彼ノ國委員ト會シ、修好條規附錄及ビ貿易規則ヲ

〔修好條約〕

議シテ細目ヲ定メタリ。　附錄ノ要ヲ擧クレバ『朝鮮在留ノ日本人民管理官ハ其國沿海地方ニ於テ、日本ノ諸船困難ニ遭ヒ、緊要ナリト聞クトキハ、地方官ニ告ゲ、該地ニ到ル道路ヲ經過スルヲ得、又釜山港ニ於テ日本人民行歩ヲ得ベキ道路ノ里程ハ、波止場ヨリ起算シテ、東西南北各直徑朝鮮里法十里ト定メ、東萊府中ハ、里程外ト雖モ、特ニ往來スルヲ得』トアリ、是レ日本官吏ハ塲合ニ依リ內地ヲ旅行スルヲ得レドモ、人民ハ開港塲ノ外行歩スルヲ得ザルノ猶ホ日本ガ歐米各國人ニ對スルガ如シ、而シテ開港塲ノ行歩里程ヲ各方ヘ直徑十里（朝鮮ノ十里ハ日本ノ約ノ一里ニ當ル）ト記シタルハ、日本ト歐米各國トノ條約ニ比スレバ稍詳密ナリトス（歐米各國トノ條約ニハ各方ヘ凡十里《日本里法》ト記シ、直徑ナリヤ行程ナリヤヲ明ニセザルヨリ、屢バ外交談判ニ渉リシガ、開港以後十數年ヲ經テ、始テ直徑ト決シタルナリ）。　又『釜山草梁項日本公館ニハ從前同國政府ヨリ守門設門ヲ設ケシガ、今後之ヲ廢撤シ、一ニ新定ノ程限ニ依リ、標ヲ界上ニ出ツベシ、他ノ二港モ亦此例ヲ照ス』トアルハ條約本書第四款ノ意ヲ擴充シタルモノナリ。　又『朝鮮國ハ未タ海外諸國ト通信セズ、日本國ハ年來諸國ト締盟友誼アルノ故ヲ以テ、今後朝鮮國ノ沿海ヘ諸國ノ船舶風波ノ爲メ困難シ、漂着スルアラバ、朝鮮國人民理ニ於テ之ヲ愛恤セザル無シ、該漂民本國ニ護送セラレンヲ望マバ、朝鮮國政府ヨリ各港口駐留ノ日本國管理官ニ遞付シ、本國ニ送還セシム、該官員之ヲ領諾セザル無シ』トアルハ、當時朝鮮未ダ條約ヲ各國ト結バザリシガ故ニシテ、各國ト交通スルニ至リテ此條自ラ無用ニ屬セリ。　又此修好條規附錄ト貿易規則トハ

時ニ隨フテ協議ノ上改正スルヲ得ルモノトセリ（後年條約ノ變更等ニ關スル事ハ第十六章ニ載ス）。

辨理大臣歸朝ノ後、朝鮮信使來聘ス（事ハ次章ニ詳ナリ）、信使ノ來還、日本政府滊船ヲ以テ之ヲ送迎シ、滯留ノ費用總テ我國ノ支辨スル所タリ、蓋シ萬延元年米國政府ガ幕府ノ使節ヲ接待シタルノ例ニ倣フナリ。　辨理大臣派遣以來修好ノ事成ルニ至ルマデ、朝鮮事件ニ關スル諸費ハ實ニ四十九萬圓トス、其額亦少シトセザルナリ。

當時事ヲ域外ニ起シテ內政ヲ改革セント企テタルモノ山本某等アリ、朝憲ヲ紊亂セントシタリト云フノ罪ヲ以テ刑ニ處セラル、其宣告文ニ曰ク。

京都府下山城國愛宕郡鹿谷村　山本克　其方儀朝鮮江華灣砲擊事件ニ付、先鋒ヲ出願シ、大擧メ朝廷ニ迫リ、當路ノ大臣ヲ誅戮シ、政躰改革ヲ謀ルベク、島村安度、中山中左衛門、中沼清藏ト協議シタル段、朝憲ヲ紊亂セント企ツル者ニ依リ、懲役七年可申付ノ處《畧》滯獄百五十七日ヲ過ルヲ以テ、懲役六年二百八日申付ル者也。　明治十年五月十二日大審院

同謀者亦各〻刑ニ處セラル、山本ハ前年（明治七年）征臺ノ議ニ與リシ大臣參議ヲ斬ルベシトノ建言ヲ左院ニ出シタルヨリ、過激ヲ以テ知ラレシ者ナリ。

初メ朝鮮處分ノ議起ルヤ、清廷ノ異議ヲ生センコトヲ慮リ、明治九年一月、特命全權公使森有禮其國ニ至リテ協議セントシタルニ、清廷ハ朝鮮ヲ以テ清國ノ隷屬邦ナリト主張シ、國政其自主ニ任スト雖

〔日本公使ト李鴻章〕

モ、禮部ニ隷シ、朝貢スル丁古來ノ例ナリト言ヒ、公使ト協議スル丁ヲ欲セザリキ○清廷ガ先年臺灣ノ事アリシ以來、日本ハ外地侵略ヲ旨トスルモノナラント常ニ猜疑スルハ直隷總督李鴻章（リハンヂャン）（漢人ナリ、有名ナル故曾國藩門下ノ士）ガ公使ニ言ヘル語ヲ以テ知ルベシ●

森● 貴我條約中ニ一方ヨリ他ノ封土ヲ侵掠スルヲ禁スルノ一款アリト雖モ、其封土ノ限界ヲ確定セズ、曾テ臺灣事件ヲ生シ、今又朝鮮事件ヲ起シ、ハ畢竟該款內ニ此限界ヲ明記セザルノ致ス所ナリ○和親條約ノ一款ヨリシテ斯ノ如ク紛紜ヲ釀成スルハ、獨リ敝邦ノ爲ノミナラス、殊ニ貴邦ノ爲ニ憂フル所ナリ●

李● 苟モ貴邦ニ於テ無事ヲ守ラバ、何ゾ紛紜ヲ生ズベケンヤ、貴邦ヨリ砲艦ヲ出シテ朝鮮海岸ヲ測量セズンバ、彼レ如何ゾ之ニ發砲スルノ理アランヤ○之ニ由リテ考フレバ、貴邦ヨリ苦情ヲ訴フルノ事由モナク、又朝鮮事件ヲ伐ツノ口實モアルコトナシ○畢竟彼ヨリ砲艦ニ發砲セシ一擧ハ其實貴邦ノ自ラ招ク所ナリ、況ヤ該砲艦海岸附近ノ所即チ公法上所禁ノ三英里以內ノ所ニ進入シ、之ニ加フルニ城地ヲ陷レ、人ヲ殺シ、財ヲ掠ムル等ノ事ヲナセリ、然ルニ今又使節ヲ遣シテ理非ヲ糺サントス、是レ何等ノ事ゾヤ●

森● 閣下ハ朝鮮人ガ我ガ砲艦ニ發砲セシ擧動ヲ以テ罪ナシトスルノミナラズ、現ニ我國ヨリ派遣セル使節ヲ以テ惡意ヲ抱ク者ト見做スニ似タリ○抑モ我國ト朝鮮トハ二百餘年ノ間友誼ノ情ヲ通ジ、輓近更ニ兩政府ノ間ニ取極ヲ爲シ、以後ハ互ニ公信ヲ通ジ、愈〻兩國ノ交誼ヲ親密ニセンコトヲ約セリ○後幾バクモナクシテ彼レ約ニ背キ、妄ニ我國ノ名譽ヲ汚シ、次テ我砲艦ニ向ヒテ發砲セリ、是ニ於テ使ヲ遣シテ是等暴行ノ故ヲ問ハシム、其之ヲ問フノ理アルコトヲ辯ヲ費サズシテ知ルベキナリ○素ヨリ立刻ニ問罪ノ師ヲ出シテ、彼ヲ膺懲スルハ、我ニ於テ容易ノ事トス、然リト雖モ我國ハ此擧ヲ爲スヲ

欲セズ、及ブ限リハ懇信和好ノ意ヲ旨トシ、勉テ彼ガ頑心ヲ改良シ、以テ我ガ榮譽ヲ全ウスルニ如カズト思考シ、乃チ修好ノ使ヲ派遣シタルナリ● 閣下ハ我國ノ軍艦公法上所禁ノ近海ニ進入セリト云フ、請フ之ヲ思ヘ、夫レ公法ハ之ヲ遵守スルノ國ニ用ユベク、朝鮮ノ如キ公法ノ何タルヲ知ラズ、却テ之ヲ厭惡スルノ國ニ用ユベカラズ、彼レ仁愛ノ道ヲ守ラズ、他國ノ民ヲ入レズ偶〻外來ノ船アルトキハ、妄ニ之ニ發砲シ、剩ヘ沿海ノ測量ヲ許サズ、之ガ爲ニ諸國ノ船舶沈沒ノ災ニ罹ル、故ニ隣國ノ一タル我國ノ船人ニ對シテ斯ル不仁ノ事ヲ爲サシムルヲ得ザルナリ●

李● 朝鮮ニ於テハ貴國ト交際ヲ開クノ意ナキニシモ非ルベシト雖モ、彼レ深ク其影響ヲ憂慮スルナリ○若シ他ノ各國貴邦ノ例ヲ追ヒ、彼ノ狡黠ナル商業ヲ營マベ、朝鮮ハ忽チニ衰亡セン、是レ彼ノ恐ルヽ所ナリ●

森● 此事憂フルニ足ラザルナリ、苟モ朝鮮ニ於テ其海岸ニ漂着ノ外國人ヲ懇待スル以上ハ、外國通商ノ爲ニ國ヲ開クヲ要セズ、唯外國人ヲシテ航海無難ノ爲ニ、朝鮮海測量ノ自由ヲ得シメベ則チ可ナラン ノミ●

李● 其事成シ得ベキヤ●

森● 固ヨリナリ、請フ我國ノ例ニ就キテ之ヲ解得セヨ○曾テ我國ニ歐洲ノ若干國ヲ容レテ貿易ヲ營ミシコトアリ、此事今ヲ距ル凡三百年前ニ在リ、然ルニ彼レ內國ノ事務ニ干與セシヲ以テ、荷蘭國ヲ除クノ外ハ悉ク之ヲ逐斥シテ、再ビ日本ニ來ルヲ禁セリ○爾來闔人ハ頁好友愛ノ情ヲ我ニ示セシコト猶ホ舊來貴國ノ我國ニ於クルガ如シ○故ニ貴國及ビ荷蘭ハ數百年ノ間我國ト交通シ、其間自餘ノ諸國ハ一切我國ニ來ルヲ拒ミタリ○漸ク二十年前ニ至リ、外交ヲ開クヲ是ナリトシ、遂ニ各國ト交ヲ結ビタリ● 余ハ貴政府ノ協力同心ヲ得ンコトヲ切望シテ此國ニ來リシガ、今ニ於テ貴政府ノ意ヲ察スルニ、甚ダ我所期ニ違ヘルモノアリ○貴國大臣等云ク、朝鮮ハ清國ノ隷屬ナリト、然ルニ貴國大臣等ハ朝鮮

ノ爲ニ事務ヲ理スルヲ欲セズ、我國ヨリ朝鮮ヘ使節ヲ遣ハセシ眞意ハ貴國大臣等ノ既ニ了知スル所ナリト雖モ、之ヲ翼贊スルノ意ナキハ余ガ失望ノ至リニ堪ヘザル所ナリ。

李。　我政府ノ目スル所ニ據レバ、貴政府ハ事ヲ行フニ當リテ甚ダ急劇ニ過グル所アリ、況ヤ朝鮮ハ未ダ貴國ノ望ヲ滿足スルノ景況ニ至ラザルヲヤ、然リ而シテ貴國ハ臺灣事件ノ例ニ倣ヒ、動モスレバ其隣邦ヲ攪亂シ、機ニ乘ジテ之ヲ奪領セント欲スルモノノ如シ。

森。　我國ヲ貴國ニ比セバ、或ハ實ニ躁急快捷ノ風アルベシ、歐人モ亦此兩國人ノ性情ニ大差異アルヲ見テ、概ネ皆ナ之ヲ怪メリ、歐人ノ見ル所ニ據レバ、我日本人ハ極テ敏捷ノ質テ具ヘ、清國人ハ極テ耐忍ノ性ヲ備フトノ。是故ニ清國人タル閣下ノ眼ニハ我國ノ朝鮮事件ヲ處スルノ法頗ル短慮ノ如クニ見ユルモ亦宜ナリ、然レドモ貴說中朝鮮ハ未ダ我望ヲ滿タシムルノ景況ニ至ラズト云フニ至リテハ、蓋シ閣下ハ我ガ期望如何ヲ辨知セザルニ似タリ。我ヨリ彼ニ要ムル所ノモノハ朝鮮ヨリ我ガ國威ニ占有セシ臺灣ノ一部ヲ棄ルノ理アラントヤ、又目下朝鮮事件ノ如キモ、何ゾ此ノ如クニ心ヲ苦シムベクンヤ云々。

李ノ云フ所以テ清廷ガ朝鮮ニ對スルノ主義當初ヨリ如何ニ曖昧ナリシカヲ見ルベキナリ。

當時ノ循環日報(八年十月香港刊行)『日本思伐高麗』ト題スル一篇ヲ掲ゲタリ、亦清人ノ意見ヲ察スルニ足ルヲ以テ、其要節ヲ摘錄ス。

日本ノ民情ハ勇ニシテ鬪ヲ喜ビ、躁ニシテ立ツヲ、機器ヲ尙ビ、山礦ヲ開キ、一切西國ノ優ナル者ハ擧行セザルコト無シ、西人之ヲ見テ嘖々ソノ有志ヲ稱セザルコト無シ、而シテ日本モ亦自ラ強以テ一試スベシト爲ルナリ、其意中ニ凌轢セント欲ス

ル所ノ者ハ中國ナリ、報復セント欲スル所ノ者ハ高麗ナリ。夫レ高麗ハ日本ニ近ク、常ニ貢獻ヲ通ズ、故ニ日本之ヲ藩屬トス、其實ハ平秀吉征服ノ後ヨリ久シク未ダ通好言歡セズ、之ヲ其國史ニ考フレバ知ルベキナリ。

帝國辨理大臣ガ、二十餘年ノ昔、日本近海ニ闖入シタル北米合衆國ノ水師提督「ペリー」ノ故智ヲ襲ヤ、朝鮮ニ迫リテ一言ノ下ニ鎖國ノ舊弊ヲ破リ、開國ノ進路ニ進ムノ先導者トナリシハ、東洋ノ大計ノ爲ニ慶スベキコトナリ。東洋諸國中、近年ニ至ルマデ、能ク鎖國ノ舊風ヲ守リ得タル者、即チ世界ノ進度ニ最モ後レタル者ハ獨リ朝鮮ノ一國アルノミ。曩爾タル小邦豈ニ遂ニ世界ノ大勢ニ抗スルヲ得ンヤ。假令セ我ガ國之ヲ開カザルモ、歐米各國斷ジテ之ヲ不問ニ置カザルヤ知ルベキナリ。我レ屢〻通好ヲ彼ニ求メテ未ダ容レラレズ、他國若シ此難國ニ先鞭ヲ着ケ、彼ガ先導者トナリタランニハ、我ハ退キテ人後ニ瞠若タラザルヲ得ザリシナリ、果シテ然ルコアリタランニハ、國榮ト國利トヲ毀損スルコトナシトセンヤ。變ニ乘ジテ城下ノ盟ヲ成ス、彼ニ於テ或ハ不平ナキヲ得ザルベシト雖モ、我ガ東洋ノ大計ノ爲ニ已ムヲ得ザルノ事タルヤ言ヲ待タザルナリ。

我ガ國朝鮮ト一葦水ノ隣邦ニシテ且ツ舊好アリ、他國ニ先チテ條約ヲ締結シタルハ固ヨリ當然ナリ、只余ハ當時ノ論者ガ冷評ヲ下シ、辨理大臣ノ船未ダ横濱ニ歸着セザルニ歐米各國ノ旗章ハ既ニ朝鮮諸港ニ翩翻タラントス云ヒタル語ノ幾ド適中セルヲ以テ頗ル遺憾トスルナリ。我國既ニ先導國タリ、豈ニ

其ノ光榮ト任務ヲ全ウセザルベケンヤ。

◎第二章。維新後韓使ノ來聘―韓人ノ暴行―駐韓公使―日露兩國ノ事ニツキテ韓王ト宰相トノ對話幷ニ李鴻章ノ書―對韓政略ノ端緒。

江華ノ和約成リテヨリ、韓廷信使ヲ日本ニ派スルニ決シ、禮曹參議（式部次官）金綺秀其任ヲ命セラレ、明治九年五月廿九日東京ニ入リ、謁見シテ國書ヲ呈ス、是レ維新以後朝鮮人來朝ノ始ニシテ、朝鮮使節ノ來リテ幕府ニ聘禮ヲ修メタルハ文化八年ヲ以テ終トス、爾來六十餘年、是ニ至リテ信使復タ來京セリ。

此日朝鮮信使ノ一行凡ソ五十人汽車ヨリ下リテ列ヲ正シ、音樂ヲ奏シテ進ミ、近衛ノ騎兵一分隊（士官ヒ凡ソ十八人許）正服ニテ先驅シ、次ニ我官吏一人ヅヽ人車ニ乘リ、二行ニナリテ進メリ。次ニ白木綿ノ衣服ノ上ヲ白ノ薄キ上衣ヲ着シ、黒ノ笠ヲ冠リタル（仕丁躰）ノ下官（二人）、白服ニ赤ノ上衣ヲ着シ、手ニ眞紅ノ網モテ包ミタル螺ノ貝吹手（二人）、長キ眞鍮ノ喇叭吹（二人）、小サキ喇叭ノ吹手（二人）、右如法鉢（コウヘチ）、左銅鑼（アラ）（二人）、右胡弓、左片手吹キノ笛（二人）、篳篥（一行）、右大鞨鼓、左陣大鼓、何レモ紐ニテ首ヨリ胸ニ掛ケタリ（二人）。朝鮮樂隊ハ其樂器ニ應ヲテ衣冠ノ色モ異リ、青、赤、赭色、褐色、等種々アリ。鞨鼓手、大鼓手ノ冠ハ絹布ニテ製シタル直徑七八分許ノ黄、白、赤ノ玉ヲ珠數繋ギニシテ、冠頂ヨリ左右ノ耳邊マデ下ゲタリ。此一隊ハ進行ニ從ヒテ奏樂ス（其音餡ノ喇叭ニ似タリ）。藍色ノ木綿ニ赤ニテ『令』ノ字ヲ縫ヒタル旗二本、赭色ノ六尺棒二本、右山字槍、左矛、何レモ薄黄色ノ毛ヲ

又ノ下ニ下ゲテアリ(二人)。ソレヨリ少シ距テ、二人ノ少年(下ゲ髪)左右ニ分レ、一人ハ方一寸許ノ黒ノ皮箱ヲ首ヨリ前ニ掛ケ、一人ハ同樣ノ皮箱ヲ左ノ肩ヨリ右ノ脇ニ斜ニ負ヒ、其箱ニハ箔ヲ以テ『關帖』ト『印信』トノ文字ヲ記セリ。

右ノ二童ヲ左右ニ從ヘテ、正使禮曹參議正三品金綺秀ハ輿ニ座シ、其後ヨリ淡青ノ綠飾アル白傘ヲサシ掛サセ、其身ニハ黑冠ニ縹色(ハナダイロ)ノ袍ヲ着シ、輿ノ後ニハ虎ノ皮ノ下敷、赤氈ノ上敷ヲ掛ケテ座シ、年齡ハ五十左右ト見エ、面色ハ稍黑ク、髯ハ斑白ニテ身躰肥滿シ風采端然タリ。輿ハ我邦ノ川渡シニ用ヰタル蓮臺ト云フモノニ似タリ、黑塗ノ四寸角ノ木ヲ五六本ヅヽ縱橫ニ組ミ、其中央ニ靠リ掛リアル座ヲ造リ附ケ、上ニ被蓋ヲ設クルコトナシ。朝鮮ノ人夫凡ソ十六七人各〻角木ノ端ニ肩ヲ入レテ舁キ歩行ケリ、其狀宛モ蓮臺ノ上ニ足ノ無キ椅子ヲ置キテ舁クガ如シ。輿ニ乘リシハ正使一人ニシテ其餘ハ皆人車(車夫ノ法被ニ篆書ノ『外』ノ字ヲ附セル外務省ノ車)ナリ、一車ニ一人、其數凡ソ十五、ソノ左右ニハ何レモ歩行ノ下吏ヲ從ヘ、我官吏數人之ニ殿シ、豫テ定メタル神田錦町ノ旅館ニ入リタリ。

官人ノ衣服ハ各〻差異アリテ一ナラズ、何レモ冠ノ紐ハ珠玉、琥珀ヲ繫ギタルガ如クニ見エテ華麗ナリ。又奇トスベキハ正使ヲ初メ乘車ノ上官ニ限リ、何レモ皆眼鏡ヲ掛ケ、歩行ノ輩ハ一人モ之ヲ用ヰズ、蓋シ朝鮮ノ風ナルヘシ。使節ノ入京ハ維新後朝鮮人ノ初來ニ係ルヲ以テ觀ル者通路ニ滿テリ(此日著者モ亦新橋ニ於テ親ク之ヲ目擊シタリ)。

六月一日、朝鮮信使朝見ノ式アリ。當日ノ九時過ニ出門シタレバ、爲ニ各署巡査ノ警衛都合モ大ニ手違トナリシト云フ、是レ朝鮮ノ國風ニテ此ノ如キ大儀式ノ時ハ寅ノ刻又ハ卯ノ刻ニハ必ズ出門スルノ例ニテ、外務官員ノ說諭ニ服セズシテ、早朝ニ出門セシトノ事ナリ。　信使金綺秀ハ白衣唐冠ニテ輿ニ座シ、隨官四十餘人ヲ從ヘ、外務ノ官員二

名人力車ニテ先導ス(信使ノ後ニ從ヒタル上官等ノ人力車ノ中臨時ニ雇ヒタルモノアリ、旅館ヨリ宮內省マデ、往返待トモ合セテ一輛ノ賃金五十錢宛)、此日ハ樂ヲ奏セズシテ順路ヲ進行シ、午前十時二十分頃赤坂假皇居ノ門ニ至レリ。　宮內省門內ノ左右ニハ近衛兵列立シテ、信使通行ノ際捧銃ノ式ヲ行ヒ、信使ハ御車寄ニ於テ下乘シ昇殿ス、式部官員之ヲ迎ヘテ控所ニ誘導シ、信使ハ此處ニ於テ衣冠ヲ更メ、白衣、石帶、唐冠ノ正服ヲ着ケタリ。

暫クシテ天皇陛下謁見室ニ出御アラセラレ、宮內卿、侍從長、御後ニ侍シ、侍從ハ左右ノ御入リ側ニ列ス。信使ニ謁ヲ賜フ、外務卿信使ヲ引キテ御前ニ進マシム、信使ハ先ヅ御座敷口ニテ平伏叩首ノ禮ヲ行ヒ、次ニ御座敷側ニテ平伏シ、又御前ニ進ミ、外務卿ト式部頭ノ中央ニ於テ平伏セリ、此時外務卿信使ノ名ヲ奏上ス、立御ニテ御默答アラセラル、信使ハ再ビ前ノ御座敷口ニテ平伏シ、前後五回ノ叩首ヲ行ヒテ罷リ出デヅ。拜謁ハ信使一人ノミニ止リ、譯官ハ御座敷口ニ留リタリ。次ニ控所ニ於テ信使ニ茶菓ヲ賜ハリ、畢リテ十一時卅分頃退出セリ。

信使ヨリ呈シタル朝鮮國ノ贈進物ハ虎皮一張、豹皮一張、及ビ白綿紬、白苧布、色摺扇、白綿布、眞梳、筆、眞墨、雪漢紙、黃燭等ナリト。

信使ハ拜謁ヲ畢リテ、歸路上官一同ヘ吹上禁苑ノ拜觀ヲ許サレ、御庭內ニ於テ午餐ヲ賜ハリテ歸館シタリ。　信使參內ノ時ハ例ノ如ク傘ヲ差シ掛ケ、又一人ノ下吏ハ大扇ヲ持チテ、絕エ間ナク扇ギタルハ頗ル奇異ニ見エタリト云フ。

信使滯留中、政府ハ各處、各製造所ヲ巡覽セシメタリ、然ルニ朝鮮人ハ大ニ西洋人ニ會スルヲ嫌ヒシ故、何レモ之ヲ避ケシメタリ、以テ當年ノ朝鮮人ノ氣風ヲ察スベシ。

和約既ニ成ルノ後ト雖モ、日韓兩民ノ交際尙ホ未ダ圓滑ニ至ラズ、十一年十月、韓廷突然苛稅ヲ輸出

入品ニ課シ、貿易爲ニ遮斷セラレタルヨリ、在留商民沸騰シ、釜山駐在管理官山之城某韓官ニ談判シ、尋テ花房公使其地ニ至リ、更ニ韓官ニ談判シテ、遂ニ之ヲ廢セシメタリ。　翌年四月、鳳翔艦々長以下東萊（トンクナイ）ヲ徘徊セシニ、韓民多數集リテ瓦礫ヲ投シタルヨリ、水兵發銃シテ之ヲ逐ヒタリ。　此ノ如ク、邦人屢〻官民ノ虐待ヲ受ケシハ、彼ノ好マザルニ強テ交ヲ開キタルガ故ニシテ、未開國ニ在リテハ亦避クベカラザルノ事勢ナリトス。

日韓條約成ルノ翌年＝明治十年九月＝外務大丞花房義質（岡山人）始テ該國駐劄ノ代理公使ニ兼任セラル、十三年始テ京城ニ公使館ヲ設ケ、義質辨理公使ニ陞任シテ赴任セリ、蓋シ曩ニ公事ヲ以テ屢〻該國ニ往來シタルヲ以テ此職ニ任セラレタルナリ。

朝鮮京城ハ四方十韓里（十韓里ハ我三十八丁四分ニ當ル）、城壁之ヲ圍繞シ、城内ハ東西南北ノ四村ニ分ツ、北岳ノ下ニ王宮アリ。初メ日本公使館ハ南山ノ下ニアリシカ、十七年ニ至リテ之ヲ北村ナル校洞（洞ハ猶ホ我カ町ト云フガ如シ）ニ移シタリ。

朝鮮ニ公使ヲ置キタル以來數人ノ更任アリタレド、皆ナ第二流以下ノ人物ヲ辨理公使或ハ代理公使トシテ之ガ任ヲ塞ケルノミ、未ダ曾テ第一流ノ俊傑ヲ以テ此最モ重要ノ地位ニ置キタルヲナシ、我國ノ韓ニ於ケル勢力ノ振ハザリシハ亦宜ナラズヤ。

朝鮮ノ政體タル、國王ニ無上ノ權アリテ、大小ノ政務悉ク親裁ニ出デ、内官時ニ勢力ヲ有ス、故ニ大臣ハ自ラ無責任ノ地位ニ在リ、其狀殆ド本邦往時ノ幕府政治ニ類スルモノアリ。　明治十三年朝鮮信使再ビ日本ニ至リテ歸ルヤ、國王李熙（リヒイ）（時ニ年廿九）領議政（總理大臣）ト日本ノ事態ニ就キテ問答アリ、左ノ如シ（眞文筆記抄譯）。

王。　修信使無事ニ往來ス、幸ナリ。萬里ノ蒼海極テ危險ナリト雖モ、一般ニ往來ハ中原ニ比セバ容易ナリ。修信使ノ言ヲ聞クニ、則チ日本人極テ駁曲ヲ爲セリト云ヘリ。

領。　臣亦之ヲ聞クリ、丙子年金錤秀ガ入リシ時實情ヲ知ラズ、今回ハ則チ待遇頗ル異ナリ、眞ニ好意ヲ修セリ。

王。　日本人問答中俄羅斯（ロシヤ）國ノ事ニツキ慮ルベキヿ無キヤ。

領。　俄羅斯國近ゴロ頗ル强盛、中原亦之ヲ制スルヿ能ハズ、誠ニ慮トナスベシ。

王。　前年宮本小一燕巢ノ時、膝ヲ促シ、語俄羅斯國ニ及ブ、此是レ眞情ナリ、而シテ我國果シテ之ヲ疑フ、今修信使行中清人所送ノ冊子ヲ以テ之ヲ觀レバ、則チ其實情ニ驗アリ《清人所送ノ冊子トハ蓋シ東京清公使參贊官黃遵憲ノ『朝鮮策略』ヲ指スナリ》。

王。　俄羅斯ハ則チ果シテ極メテ情ヲ盡セリ。

領。　今般修信使ノ供具中驛官從人ノ優待ハ丙子年ニ異ナリ、則チ此レ實情ヲ見ルベシ。

王。　我國人空然信ゼズシテ浮言多シ。

領。　聖敎至當ナリ、修信使齎ス所ノ冊子ハ清使ノ傳フル所ニシテ厚意日本ヨリ甚シ。　日本猶ホ且ツ駁曲ナリ、況ヤ清人ヲヤ、必ズ聞クベキアルガ故ニ、我國ヲシテ之ニ備ヘシム、然ルニ我國人心本來疑多シ爲ニ卷ヲ掩フテ究メズ。

王● 其冊子ヲ見ル、則チ果シテ何如ナリヤ●

領● 臣果シテ之ヲ見ル、夫レ俄國ハ深北ニ僻在シ、性寒ニ耐ヘス、毎ニ南ニ向ハントス、而ノ他國ノ事ハ與利ニ過ギザルノミ、俄人ノ欲スル所ハ土地人民ニ在リ、然ルニ我國白嶺ノ北ハ即チ俄境ナリ、滄海ノ遠キト雖モ、一帆風猶ホ往來スベシ、況ヤ豆滿江ノ境呼吸相通ズベシ、氷ヲ成バ則チ徒渉ト雖モ可ナリ○方今俄人兵艦ヲ聚ムル十六隻ニシテ、毎艦三千人ヲ容ルベシ、若シ塞後ニハ則チ其勢必ズ南向セントス、其意固ヨリ以テ測ルベカラズ、則チ豈ニ殆イ哉炎々乎タルモノニアラズヤ●

王● 日本人ノ言ヲ見レバ則チ是ニ似タリ、渠ノ畏ルベキハ俄ニ在リ、朝鮮之ニ備ヘンコトヲ要ム、其實朝鮮國ノ爲ニ非ズシテ渠ガ國ノ爲コスルニアラズヤ●

領● 楚ノ爲ナリ、趙ノ爲ニ非ズ、而シテ朝鮮若シ備ヘズンバ則チ渠ノ國必ズ危キガ故ナリ、然リト雖モ我國ニヲハ豈ニ俄人ノ意ハ日本ニ在ルトシテ、視テ尋常ノ若クスベケンヤ、且ツ壬辰ノ事ヲ以テ之ヲ言ヘバ、道ヲ假ルト稱シテ突然ニ出デ來ル、實ハ道ヲ假ルニ非ザルナリ、安ソ俄人ハ道ヲ假ルノ意無キヲ知ランヤ、今人言ヲ聽カズ、急アレバ必ズ防キ難シ、見今城郭、器械、軍卒、兵粮古ニ及バズシテ百ニ一モ終難無事ノ恃ミナシ、目前ノ備寧ソ少緩スベケンヤ●

王● 防備ノ策如何●

領● 防備ノ策我國ニテモ豈ニ講磨スル所無カランヤ、而シテ清人冊子中ノ論說備ニ盡セリ、他國ニ在テハ則チ深ク見ル所有リテ然ル也、其中信ズベキ者ハ之ヲ信ジ、以テ採用スベシ、然ルニ我國人必ズ之ヲ信ゼズバ將ニ休紙（ホゾ）タルベシ○六月米利堅ノ東萊（トンネ）ニ來ル、此レ本ト讎國ニ非ズ、彼若シ書幣ヲ莱府ニ呈セバ、則チ莱府ヨリ之ヲ受クルニ未ダ不可トセズ、禮曹ニ呈セバ、禮曹ヨリ之ヲ受ルモ亦可ナリ、而ルヲ之ヲ洋國ト謂ヒ、拒ンデ受ケズ、仍テ新聞紙ニ傳播セラレテ、終ニ羞耻トナリ、侮ラルヽヲ爲ス、若シ讎國ト言ハヾ、日本其レ世讎ノ國ナリ、米利堅何ノ聲聞ノ及ブ所有リテ、以テ讎國ト

謂ハンヤ、其柔遠ノ義ニ在テモ亦タ釁ヲ生ゼンコトヲ恐ル、ナリ●

王● 米利堅焉ソ讎國ト謂フベケンヤ●

領● 聖教誠ニ然リ、我國ノ風習本來此ノ如シ、天下ノ爲ニ嘲笑セラル、西洋國ヲ以テ之ヲ言ハヾ、本ト恩怨ナシ、而シテ初メ我國險人輩ノ起ルアルニ由リ、率井テ以テ江華（カンホア）、平壤（ピエンヤング）ノ釁隙ヲ致ス、此是レ我國ノ自反スベキ處ナリ○前年洋人ノ送還ハ中原ノ咨文ニ因リテ好檄ニ周處セリ、大抵洋人ノ境ニ入ル、輒チ邪學ヲ以テ藉口ノ說トナセドモ、今洋人ノ入テ中原ニ住スルヲ見ルニ、未ダ中原人ノ皆邪學ト爲ルヲ見ザルナリ、其邪學タラバ當ニ之ヲ斥クベキノミ、然レドモ隙ヲ生ズルニ至ルハ不可ナリ○今日我國ノ人只好仕ヲ貪リ、皆ナ自便ノ策ヲ占ム、臣獨リ何ノ策アラン●

王● 原任（前任）大臣俱ニ其冊ヲ見テ何ノ言アリヤ●

領● 我國ノ事本ト廟堂アリ、何ソ廟堂ヲ別ニシテ云フコトアランヤ、而ルニ十人同座スト雖モ、一言ノ可否スル無シ、ソレ人父母ノ爲ニシ、妻子ヲ保ンズルハ、同ク是レ欲スル所ナリ、而シテ講究スルナクシテ、退イテ高談ヲ爲ス、コレ名義ニ非ズ、義理ニモ非ザルナリ○若シ一朝俄人江ヲ渡リテ來ラバ、則チ想フニ必ズ內修外攘トイハン、然ルニ修攘ハ一朝一夕ノ爲スベキニ非ザルナリ○顧フニ今ヤ人氣、國規、器械、財用一モ古ニ如カズ、柔遠ノ義ヲ急務トナシ、以テ宗社ヲ安ンズルノ策ヲナスニ若カザルナリ、此ニ彼ニ聖衷牢確ニシテ後ニ以テ憂ナカルベシ、聖衷決セザレバ疑信ノ間ニオイテ則チ名ヲ釣ルノ人朋起シ、俄ヲ待ズシテ必ズ中ヨリ亂レン●

王● 俄人將ニ山東ニ往カントスト云フ、果シテ然ルヤ●

領● 彼ノ氣勢ヲ以テスレバ、何レノ處ニカ往カサランヤ●

王● 天何ヲ此類ヲ生ジテ天下ニ橫行セシムルヤ、痛憤スベキナリ●

領● 氣數ノ然ルナリ●

王● 道光ノ時ニハ此類是ノ如クナラザルニ似タリ●

領● 道光ノ時ト雖モ、氣數ノ關スル所ニ至リテハ奈何トモスベキ無シ● 器械ノ申飾何等ノ巧品モ修精ヲ加ヘザレバ一モ用ユベキナシ、且ツ火藥烏銃ハ下吏等毎ニ間ニ乘ジテ擾ミ出ス、誠ニ痛ムヘシ●

王● 然バ則チ國財モ虛費ニ過ギズ●

領● 聞ク花房義質遠カラズシテ來ラント云フ、其動靜ヲ見、マタ其議ヲ聞カバ、庶クハ措處ノ方アランカ、今日ノ進奏ノ後、外論騷擾ニ傾ク、悶然ニ堪ヘズ●

此問答以テ朝鮮ノ日本ト露西亞トニ對スル意想ヲ見ルベシ○又此頃(明治十四年)、淸國直隸總督李鴻章(リハンヂャン)ガ韓人ニ贈リタル書アリ、李ガ私書ナリト云ヘドモ、實ニ韓廷ニ達シタルモノナリト云フ、其書中ニ曰ク○

日本ハ近年西洋ノ法ヲ倘ビテ、營造百端自ラ富强ノ術ヲ得タリト謂ヘドモ、其實ハ國庫ノ空虛ヲ致シテ、國債累々タルノ狀況ナレバ、四方ニ事ヲ起シテ雄圖ヲ拓キ以テ其費シタル所ヲ償ハント欲スルノ情ナキヲ得ズ○其疆宇相望ムノ地、北ハ貴國ニシテ、南ハ卽チ中國ノ臺灣、是レ日本人ノ最モ意ヲ注ゲル所ナリ云々○彼ノ日本ハ其詐力ヲ恃ミテ、鯨呑蠶食、其琉球ヲ廢滅シタルノ一事以テ端倪ヲ露シタリ、貴國固ヨリ以テ之ニ備ルニ無カルベカラズ云々●

淸人ガ韓廷ヲ誘惑シ、以テ日本人ヲ嫌忌セシメントスルノ策ハ常ニ日本人ハ朝鮮國ノ土地ヲ奪ハント欲スル者ナリトノ辭柄ニ出ヅ、而シテ淸人モ亦實ニ斯ク信ズルカ如シ○淸人ノ信ズル所全ク事實ニ反セリ、韓人ノ惑ハサルヽハ其愚憫笑ニ堪ヘタリ、近來我政事ノ局ニ當ル者一人トシテ豈ニ他國侵略

ノ如キ偉策雄圖ヲ畫スルニ有ランヤ、乃チ余ガ曾テ我國政士ノ國內ノ近小事ニノミ齷齪タルヲ慨歎シテ政事者ノ小眼國外ヲ見ルノ餘地ナシト唱導シタル所以ニシテ(『世界ニ於ケル日本人』及ビ『我國ノ前途』)、亦近ゴロ朝鮮出兵ヲ見テ殊ニ意外ノ觀ヲ爲シタル所以ナリ●

朝鮮既ニ日本ト交ヲ開キシト雖モ、廷官皆ナ日本公使等ト往來スルヲ忌ミ、彼我ノ間疎隔シテ國情相通ゼズ○時ニ金玉均(キムオクキン)ト云フ者アリ、未ダ地位ヲ得ズト雖モ、爲ニ其國ヲ誤ランコトヲ恐レ、同志朴泳孝(パクイエンホウ)、徐光範、等ト議シテ、僧李東仁ヲ日本ニ遣シ、尊ヲ又李憲過、卓挺植ノ二人ヲ遣シテ、書ヲ右大臣岩倉具視、參議井上馨ニ贈レリ○李東仁等使命ヲ全ウシ歸リシト雖モ、當時閔族ノ權勢熾ナリシヲ以テ之ニ屬從シ、復タ金、朴、ノ下ニ就カズ、而シテ閔台鎬其子泳翊、及ビ洪英植(洪淳穆ノ子)ハ李東仁ヲ國王ニ見エシメテ、日本ノ國情ヲ上陳セシメシカバ、是ヨリ國王稍ヤ意ヲ內外ニ注キ、尊ヲ廷臣十人ヲ日本ニ派遣セリ、其歸ルニ及ビテ、具ニ日本ノ國情ヲ聞キ、國王及ビ閔泳翊等漸ク開進ノ主義ニ遷レリ、然レドモ國王ハ優柔不斷ニシテ、善ク有爲ノ人ヲ用ユルヿ能ハズ、政權一ニ閔族ニ奪領セラレ、金玉均ハ職務上ノ罪ヲ以テ邊塞ニ左遷セラレ、又李東仁ハ後ニ暗殺セラレタリト云フ●

明治十四年、金玉均赦サレテ京城ニ歸レリ○此時ニ當リ朝鮮ノ國政大ニ紊亂シ、百姓頗ル官吏ノ暴虐ニ困ム、政廷ノ內開進守舊ノ二派ニ岐レ、閔族ヲ憎ム者ハ開進派ニ屬シ、閔族ト利害ヲ共ニスル者ハ

守舊派ニ屬シテ互ニ軋轢ス、金又朴、徐、等ト謀リテ、大ニ政府ノ內部ヲ改革セントシタレ𪜈、年齒少ク、地位卑キヲ以テ、用ヰラレズ、三人乃チ密ニ日本ニ赴カント欲シ、之ヲ閔泳翊ニ謀リシニ、閔ハ僅ニ金徐二人ノ行ヲ可トシ、朴ヲ留メテ往カシメズ是ニ於テ二人先ヅ發シテ日本ニ至レリ、時ニ十五年一月ナリ、是レ實ニ日韓ノ關係ヲ深密ナラシメタル端緒ニシテ、亦日本ノ對韓政略ナルモノヲ孕姙セシメタル端緒ナリトス●

朝鮮國大院君李夏應

◎第四章● 十五年ノ事變(一)＝大院君ノ性行＝攘夷ノ碑＝事變ノ起因＝大院君清國ニ拘置セラル●

明治十五年七月、京城ニ事變アリ、所謂大院君ノ亂ナリ(又之ヲ壬午ノ亂ト云フ)、初メ王父大院君李夏應國政ヲ執リシニ、國王李熙(リヒユイ)閔致祿ノ女ヲ納レテ妃ト爲スニ及ンデ、政權漸ク外戚ニ移レリ、王族之ヲ憎ミテ戚族ヲ陷レントス、是ニ於テ兩黨互ニ軋轢ヲ生ズ、日本ト條約ヲ結ビテ交際貿易ヲ開クニ至リ、國內ノ舊守黨大ニ之ヲ不可トシテ囂々タリ、大院君乃チ名ヲ攘夷ニ假リテ黨與ヲ聚メ、俄ニ事ヲ起シテ閔族ノ人ヲ殺シ、或ハ之ヲ逐ヒ、其黨又勢ニ乘ヲテ日本公使館ヲ襲撃セリ。

近時朝鮮ニ政權ヲ有セル者ハ大院君ト閔族ナリ(以下大院君清國ニ拘送セラルヽノ條ニ至ル迄ノ事實ハ朝鮮人某記スル所ノ大院君略傳ニ據レル所多シ)、大院君名ハ李夏應、全羅道全州ノ人、王族南延君球ノ第四子ナリ、文政三年庚辰ヲ以テ生ル、容貌魁偉、顏色黎黑、眉鬚清秀、人ト爲リ豪敢ニメ苛酷ナリ、年二十、爵ヲ授ケラレテ興宣君トナル、閔致久ノ女ヲ娶リテ妻トス、長子名ハ載冕(明治廿七年改革ノ時宮內大臣タリ)、次子名ハ熙、即チ今王ナリ。凡ソ國法王族封君タルモノ、平常ノ官員及ビ庶人ノ家ニ往來スルヲ得ズ、然ルニ君法ヲ守ルコト能ハズシテ隨意ニ往來シ、遊戲ヲ以テ事トナシ、辱ヲ受クルト雖モ恥ト爲サズ、甚シク慣ルト雖モ色ヲ變セズ。又人ト妓家ニ出入シ、其放蕩尋常ノ破落戶ト異ナルコトナシ、時人之ヲ狂放トシテ之ト友タラズ、而モ恬トシテ省ズ。時ニ左議政(我舊官制ノ左大臣)金左根等政權ヲ執ル、其妾本ト妓タリ、性慧敏、每ニ國事ヲ決シ、權勢朝野ヲ傾ク、時人其賤妓ニシ

テ國政ニ參預スルヲ惡メリ○君一日金ヲ訪ヒシニ、金其妾ニ媚ビント欲シ、乃チ君ヲ勸メテ妾ニ拜セシメントス、君即チ應諾シテ之ニ拜シ、呼ビテ嫂ト云フ、妾大ニ悅ブ●　君常ニ其子ヲシテ王統ヲ承繼セシメンコヲ懷ヒ、宮女宦官ト結托シ、文久三年癸亥、先王歿スルニ當リ、密計ヲ以テ遂ニ其第二子熙ヲシテ入リテ大統ヲ承クシムルコヲ得タリ、時ニ年僅ニ十二、君封ゼラレテ興宣大院君トナル、然ルニ國憲王父ノ國政ニ干預スルヲ許サヾルノ故ヲ以テ、未ダ志ヲ專ニスルヲ得ズ、此時王大妃(前々王ノ妃)政ヲ聽ク、則チ妃ヲシテ先ヅ己ヲ信セシメ、軍國ノ事務大院君ニ稟決スルノ制ヲ下サシムルコヲ得タリ、是ヨリ政權專ラ君ニ歸セリ●

君全國ノ民財ヲ收メテ大ニ土木ヲ興ス、民心騷擾、物價騰貴ス、君黨ヲ樹テ、權ヲ固ウセント欲シ、人ヲ用ユル唯己ノ意ニ從ヒ、苟モ違フ者アラバ、立ドコロニ之ヲ殺ス、人皆ナ屏息シ、敢テ仰ギ視ル者ナシ●

大院君ノ事ヲ行フハ純然タル專制主義ナレドモ、朝野有力ノ人物ニシテ、其爪牙股肱タル者甚ダ多ク、計略陰密ノ間ニ成リ、其一タビ發スルヤ迅雷耳ヲ掩フニ遑アラズ、從々人ノ耳目ヲ驚カスモノアリ○其機密ヲ重ンズルノ一事ヲ擧グレバ、君ガ執權ノ日、家ニ在リテ左右ニ使役スル給事ニハ常ニ二三ノ啞子ヲ撰ミテ之ヲ用ヒタリト云フ、給事ニ啞ナリシヲ知ルベシ●　攝政ノ職ニ任ジテヨリ、政府ノ萬機ヲ一手ニ執リテ、意ノ如クナラザルハナシ、從ヘバ赦シ、從ハザレバ殺スノ一主義ヲ以テ全國ヲ威伏シタレドモ、貴族以下ノ跋扈ヲ制シテ王室ノ尊榮ヲ耀カス等ノ美擧モ亦少ナカラズ、就中外國ノ人ヲ忌ミ、外國ノ事物ヲ惡ミテ、其跡ヲ國中ニ絕タントスルノ一事ハ苟モ怠リタルコトナシ●

君昔ジ貧ニ居ルノ時、一日妓家ニ至リ、武士李鶴永トヲ爭ヒテ毆辱セラレタルコトアリ、君憤ヲ懷キ、常ニ之ヲ雪ガント欲ス、鶴永後ニ登リテ亞將トナル、君政權ヲ執ルニ及ビテ、頗ル悚懼セリ、然レドモ素ヨリ君ノ性質ヲ知レリ、故ニ直ニ君ノ邸ニ至リテ見エンコヲ請ヒ、絕エテ惶懼ノ色ヲ露ハサズ○君問フテ曰ク、今亦我ヲ毆タント欲スルカ○鶴永笑フヲ對ヘテ曰

ク、此モ一時、彼モ一時ナリ、今若シ彼ノ時タラントシテ大ニ笑ヒ、此ヨリ李ヲ愛重シ、陞シテ大將ト爲セリ○他ノ君ニ怨アル者亦此ニ倣ヒ、罪ヲ免レタル者多シ、其豪俠恢濶ノ度蓋シ此ノ如キナリ●

時ニ承政院承旨(我ガ侍從長ノ如シ)南鍾三、君ニ說クニ英、米、佛、獨ト好ヲ結ビテ以テ露ノ侵略ヲ防グノ要ヲ以テス、當時君及全國ノ人只東洋諸國アルヲ知リテ、西洋各國ノ事ヲ知ラズ、故ニ君其言ノ妄ヲ笑ヒ、且ツ曰ク、我ガ國ノ憂フベキ所ノ者ハ唯日本ノミ、若シ清ト力ヲ合サバ、亦憂フルニ足ラザルナリト●　幾バクモナク、君佛國宣敎師等五人南鍾三等ノ家ニ潛居シタルヲ捕ヘシメ、南等ヲ防グノ要ヲ以テス、當時君及全國ノ人只東洋諸國アルヲ知リテ、西洋各國ノ事ヲ知ラズ、故ニ君其言ノ妄ヲ笑ヒ、且ツ曰ク、我ガ國ノ憂フベキ所ノ者ハ唯日本ノミ、若シ清ト力ヲ合サバ、亦憂フルニ足ラザルナリト●　幾バクモナク、君佛國宣敎師等五人南鍾三等ノ家ニ潛居シタルヲ捕ヘシメ、南等ヲ索メ、慶應元年乙丑ヨリ明治六年癸酉ニ至ル迄、天主敎徒ヲ殺シ、又令ヲ八道ニ下シテ大ニ天主敎徒ヲ索メ、慶應元年乙丑ヨリ明治六年癸酉ニ至ル迄、天主敎徒ヲ殺シ、又令ヲ八道ニ下シテ大ニ天主敎徒ヲ索メ、慶應元年乙丑ヨリ明治六年癸酉ニ至ルマデ九年ノ間、殺戮スル者二十萬人ニ及ベリ(此數多キニ過グルガ如シト雖モ、今妄ニ改メズ)○朝鮮國ニテ天主敎ノ信徒ハ實際其數甚ダ多カラズトト雖モ、其罪ノ疑ハシキ者ヲ殺シ、又其親族ヲモ殲シタルガ故ニ、之ガ爲ニ命ヲ落シタル者夥シク、每日刑場ニ於テ斷首セラル、者百名ニ下リシコトナカリシト云フ○君多ク人ヲ殺スヲ以テ、刺客ノ來ルヲ恐レ、常ニ力士五六人ヲ左右ニ隨ハシメテ之ニ備ヘタリ●　天主敎ノ餘黨君ヲ怨ミ、其父南延君ノ墓ヲ發堀ス(一說ニ墓中ニ金銀寶貨アリト佛人ヲ欺誘シテ之ヲ發堀セシメタリト云フ)、君是ヨリ天主敎徒ヲ殺スコト益多ク、西洋ト通交ヲ欲セザルノ念愈ゝ固シ●　慶應二年丙寅、佛國軍艦來リテ江華(カンホア)ヲ攻擊シタリ○時ニ日本ハ王政維新ノ事アリ、西洋風ノ新日本國ヲ現出シ、屢ゝ人ヲ派シテ此國ト交涉スルヲ攻擊シタリ○時ニ日本ハ王政維新ノ事アリ、西洋風ノ新ズ、新日本ノ士民ハ西洋天主敎國ノ風ニ心醉シテ洋鬼國ヲ生ゼタルモノナレバ、之ヲ洋夷ト見做シテ攘ハザルベカラズトテ專ラ攘斥ノ政略ヲ施シタリ●當時京城及ビ各州郡ノ通衢ヲ撰ミテ石碑ヲ建テ、

洋夷侵犯非戰　則和主和賣國

戒我萬年子孫　丙寅作辛未立

ノ文ヲ銘刻シ、以ヲ永ク洋人ト相和セザルノ意ヲ示セリ、其ノ碑ノ數、千ヲ以テ計フ、明治四年辛未、漸ク國中ニ周ヲクシテ大ニ攘夷ノ氣風ヲ振起セリ、又國中ノ墨工ニ命ヲテ墨ヲ制スルニ必ズ右『洋夷侵犯非戰則和主和賣國』ノ十二字ヲ印セシメ、若シ此印字ナキ墨ヲ賣ル者ハ罪ニ處スルノ法ヲ設ケタルガ如キハ攘夷ノ注意周密ナリト云フベシ○君ガ政權返還ノ後モ其主義嘗テ動カズ、或ハ進歩者流ノ顯官等ガ開國ノ利ヲ語ルコアラバ、君ハ必ズ辭色ヲ正シ、苟モ朝鮮國中ニ居テ開國改進ノ利ヲ云フ者アラバ、先ヅ國中洋夷侵犯ノ石碑ヲ倒シテ然ル後ニ之ヲ語レト、唯一言ノ下ニ之ヲ擯斥シテ、再ビ其人ヲ見ザリシト云フ○又國中ノ銅鐵ヲ收メテ大砲ヲ鑄造シ、砲臺ヲ沿海各所ニ築ケリ、而シテ財用窮乏スレバ、軍費ヲ富民ニ募リ、又租稅ヲ增課ス、物價騰貴、人心恟々、怨聲路ニ滿チ、唯政府ノ速ニ亡ビンコヲ望ムニ至レリ。

明治六年癸酉、王年廿二、王妃大臣ト謀リテ親政ヲ勵メシヨリ、王ノ意漸ク決ス、王妃乃チ宮女張氏(大院君甞テ潛ニ之ト通ズ、君貴キニ及ビテ、侍妾タランコヲ請ヒタレドモ、君却ケテ許サズ、是ヨリ張氏怨ヲ含ミ、君ヲ除カント欲ス、後國王張氏ニ幸シテ王子ヲ生マシム)及ビ王妃ノ族、閔奎鎬、閔泳穆等ト謀リ、大院君ヲ黜ケテ兵曹判書(陸軍大臣)閔升鎬(閔致祿ノ養子ニシテ王妃ト義姉弟タリ)ヲ擧ゲ、代リテ勢道(執權者ヲ云フ)タラシメタリ、大院君之ヲ憤リ、翌年八下シテ一圓テ升鎬ニ贈ラシム、升鎬之ヲ開キシニ、圓中ノ爆裂襲轟然トシテ發火シ、升鎬及ビ其母子俱ニ斃ル、嗣ナシ、因テ奎鎬ノ兄台鎬ノ子泳翊ヲ以テ養子トス●　大院君又國王ニ慫慂シテ位ヲ簒ハシメンコヲ謀リ、事幾ド成ラントス、黨中不平ノ者アリ、明治十一年九月ニ於テ變ヲ議政府(内閣)ニ告ゲ、王乃チ載先及ビ其黨ヲ義禁府(大審院)ニ下シ、載先ニ毒ヲ賜ヒ、其餘ヲ斬ニ處セリ●

時ニ外戚閔族愈ヨ國政ヲ專ニシ、國人其貪虐ヲ憎ミ、大院君ノ再ビ國政ヲ執ランコヲ希フ、大院

君亦時ヲ待チテ其野心ヲ逞ウセントスルノ意アリ、是ニ於テカ所謂大院君ノ亂起レリ。　明治十五年、京城兵營併合ノ事アリ、兵卒稍ヤ不平ヲ懷ク、當時輔國(樞密顧問)金輔鉉、判書(衙門ノ長官)閔謙鎬等陸軍ノ財政ヲ掌リ、皆ナ貪汚ニシテ、兵卒ノ食料ヲ給セザルコ數月、且ツ之ヲ給スルニ當リテ下吏更ニ其量額ヲ減ジタリ、兵卒因テ大ニ怒リ、其吏ヲ毆殺セントセシニ、吏逃レテ閔ノ家ニ至リ、言ヲ搆ヘテ兵卒ノ罪ヲ訴ヘシカバ、閔令ヲ出シテ兵卒ノ首タル者ヲ捕縛シテ將ニ殺サントセシヨリ、諸兵益ス怒リ、其冤ヲ訴ヘントシ閔ノ門ニ至リ、適ゝ糧食ヲ掌ルノ吏ニ逢ヘリ、則チ追フテ室内ニ入リ、屋宇ヲ破リタレドモ、遂ニ其吏ヲ捉フルコ能ハズ(閔時ニ宮中ニ赴キテ家ニ在ラザリキ)、衆相議シテ曰ク、吾等已ニ大罪ヲ犯シタレバ、必ズ死ヲ免レズ、徒ニ閔族ノ手ニ死センヨリハ、先ヅ諸閔ヲ殺シテ死センニ若カズト、大院君ノ邸ニ至リテ其事ヲ告ゲタリ、君陰ニ之ヲ悅ビ、陽ニ之ヲ鎮メテ返ヘセリ○衆武衛舍ニ會シテ兵器ヲ備ヘ、宮中ニ入リテ先ヅ閔妃ヲ弑シ、以テ諸閔ニ及ボサンコヲ謀レリ、大院君之ヲ知リ、心腹ノ人ヲ遣リテ之ヲ激動セシメ、之ト相應ゼンコヲ約セリ●　此夜(七月廿三日)京城騷然タリ、武衛大將李景夏王命ヲ奉ヲテ武衛營ニ往キ、之ヲ安撫シタレドモ、衆聽カズシテ其行首執事(傳令使)ヲ大將ノ側ニ殺セリ、其平日不正ノ事アリシヲ以テナリ●　夜半、敦義門外ノ民衆城内ニ變アルヲ聞キ、機ニ乘ヲテ動キ、聚リシ者數千人、日本公使館ヲ圍ミテ館員ヲ焚殺セントシタリ(次章)●　翌朝、兵衆先ヅ領議政李最應ノ邸ヲ襲フテ之ヲ殺シ、王宮ヲ犯シテ閔謙鎬及ビ金輔鉉ヲ殺セリ、又王妃ヲ殺サントシ欲シ、王ニ逼リテ妃ノ所在ヲ問ヒタレドモ、王ハ知ラズト答ヘタリ、王ハ園兵ノ中ニアリテ甚ダ危カリシニ、此時大院君其長子載冕ト共ニ宮中ニ入リ、指揮シテ兵衆ヲ退ケ、其際妃既ニ其服ヲ變ヲテ尹泰駿ノ家ニ逃レ、僅ニ難ヲ免レタリ●

時ニ兵衆皆ナ大院君ニ服シ、命ニ從フテ武衛營ニ歸ル、其路次大院君ノ暗告ニヨリテ參判(次官)閔昌植ヲ殺セリ、又貪汚官吏ノ家數十ヲ毀チ、幷セテ其人ヲ殺サントシタレドモ、多ク逃避シテ盡ク殺

スヿヲ得ザリキ●

大院君國王ニ請フテ、制ヲ全國ニ下シテ曰ク、凡ソ軍國大小ノ事大院位ニ稟決セヨト、是ヨリ大院君復タ國權ヲ握リ、閔妃既ニ亂軍ノ中ニ死セリト稱シ、國中ニ布告シテ喪ヲ發シ哀ヲ擧ゲシメ、而シテ徐々ニ王妃ノ所在ヲ探索シテ之ヲ殺サント欲セリ○君政權ヲ執ルヿ十餘日ノ間、多ク變革ノ事アリ、曾ヲ憎惡セル所ノ者ヲ殺スヿ三百餘人ノ多キニ及ベリ●

大院君既ニ閔族ヲ戮シ、之ニ代リテ政權ヲ執ルノ初、一篇ノ檄文ヲ發シテ日本排斥ノ意ヲ示セリ、其文ニ曰ク。

八道秘傳廻文章

竊伏念、人之有ニ華夷一、猶下天之有ニ陰陽一、地之有中疆柔上焉、是以三代以前、大化下尙運於陽疆之中上、狄夷知レ尊レ夏、不ニ敢抗一焉、自レ秦以下、運化反レ常、陰柔用レ事、夷入ニ諸夏一、間或自專、此非ニ一朝一夕之故一、由下辨レ之不レ早、防レ之不レ嚴故上也、惟然、陽無ニ可レ盡之理一、疆無ニ終レ弱之義一、運回ニ大東一、獨保ニ文明一、夫何近年以來、洋倭猖獗、敢逞ニ其私一、望レ海測レ水、請要非ニ只一再一、豈可ニ尋常細憂一乎、以ニ已然事一言之、宣廟朝時、倭人敢啓ニ通和一、或據ニ言中原一而借レ道、時有ニ李栗谷一、趙重峯一、屢疏ニ備虜之策一、而姑息而不レ行矣、噫彼龍蛇之年、竟遭ニ逞兇燒燼之變一、言念及レ此、骨驚心寒、不ニ共戴一之讐也、臣民久懷ニ此痛悼一矣、倭人本以ニ奸細之輩一、且兼ニ洋夷之狡猾一、切不レ可ニ準信一、切不レ可ニ和親一、若欲ニ通商貨載一、其船留ニ破海口一、開市交易而已、何必割レ地居下接於他國要衝之地上、計者抑何意哉、不レ無ニ是察レ機求レ釁、抱ニ藏蛇豚蒋食之慮一也、若不ニ迫逐一、姑以許レ和、而示ニ恩威一、別加ニ備虜一、而緊ニ險口一、不レ得レ窺ニ我之虛實一、我則渾入ニ其中一、學ニ得機械精鍊一、且察ニ情狀之如何一、豈非ニ先レ人奪レ人之謀乎一、宣朝大王、非レ不レ勤ニ禦戎之節一、而未レ免ニ壬辰之變一、仁朝大王亦非レ不レ勤、而丙丁之辱未レ瀉此非ニ一時運數所使一、亦非ニ今日之所レ戒者一乎、

辛巳年　月　日

此時參議(下級次官)金允植及ビ校理(我ガ宮內書記官)魚允中清國ニ在リテ變ヲ聞キ、兵ヲ發シテ亂ヲ平ゲンコヲ直隷總督李鴻章ニ請ヒシカバ、李則チ振威將軍吳長慶、司馬袁世凱、水軍提督丁汝昌等ヲシテ朝鮮ニ赴カシム、吳等南陽灣ヨリ上陸シ、京城ニ入リテ南大門ノ外ニ陣シ、大院君ヲ其營ニ誘フテ之ヲ捕ヘ、馬建忠之ヲ擁シテ汽船ニ乘セテ天津ニ送リ、保定府ニ留置シタリ(花房公使再ビ朝鮮ニ至リテ濟物浦條約ヲ結ビタルノ數日前ニアリ‖第六章)○清官大院君ヲ擁シテ清國ニ拘送ノ際、一篇ノ告諭文ヲ京城ノ各所ニ揭示セリ、其文左ノ如シ(清曆七月十三日ハ陽曆八月廿六日)○

欽命二品頂戴辦理朝鮮事宜侯遞道馬　　記名簡放提督軍門辦理朝鮮事宜西林巴圖魯丁

欽加布政使術隨辦朝鮮事宜河南侯稱道魏」

爲ニ曉諭事一、照得朝鮮爲ニ中國藩服之邦一、素秉ニ禮義一、比年以來、權臣窃レ柄、政出ニ私門一、毒積禍深、遂有ニ今年六月之變一、夫弑レ妃辱レ王、殘レ民虐レ吏、一時並發、千古之至變也、凡亂之興、必有ニ主者一、或由於ニ豪宗積威之漸一、或根レ於ニ奸邪異志之萌一、原本各殊、輕重斯判、頃者變レ告上聞道路流傳、皆言、爾國太公寃知ニ其事一、皇帝用レ是赫然震怒、念爾國太公、既知ニ其事一、必能得ニ其主名一、命特遣レ師、臨ニ爾國境一、先以ニ國太公一入朝、親問ニ事狀一、一俟ニ罪人之得一、更申ニ天討之威一、殲レ渠釋レ從、明奕典訓、廷旨殷切、敢弗ニ祗慄一、今統領北洋水師丁軍門、暫與ニ國太公一、航レ海詣レ闕、處ニ人骨肉之間一、全レ恩明レ義、我大皇帝自權衡、必不ニ於下爾太公上有ニ所ニ深責一、但舉動倉卒、恐爾上下臣民、未レ諭ニ斯意一、妄生ニ疑懼一、以ニ元代執一高麗

「大院君清國ニ拘置セラル」

忠宣忠惠ニ爲レ例、大貧レ乎ニ聖意高深ニ、此外或從前亂黨、因以長迫、更造ニ異謀ニ、目前大兵水陸齊進、已有ニ二十營ニ、此後繼發者、海上相屬、爾自度、待ニ王師ニ可ニ以顯拒ニ、兵力可ニ以相抗ニ、嚴陣相待、儘可ニ一戰ニ否ニ、則深鑒ニ禍福ニ、早自効發、幸勿ニ執迷帖悪ニ、自速ニ誅夷ニ、而震恐貢善、嗚呼天朝、視ニ爾朝鮮臣主ニ、誼猶ニ一家ニ、本軍門奉レ命而來、則躰ニ皇帝之至仁ニ、爲ニ軍力之律令ニ、雷霆日月、備聞ニ斯言ニ、告諭諄々、尙共信諒、切々特諭、

右通諭知

光緒八年七月十三日

此ノ告諭文ニ於テハ、此ノ變亂タル大院君之ガ原因ヲ爲シタルノ故ヲ以テ、大院君ヲ入朝セシメテ親シク事狀ヲ問フノ名義ヲ以テシタレ𪜈、是ハ唯名義ノミニ止リ、其實情ハ大院君ノ權力ヲ奪フテ之ヲ支那黨タル閔族ノ手ニ與ヘ、以テ恣ニ其國勢ヲ左右セント欲シタルナリ。或ハ云フ、淸廷ハ朝鮮ニ乘ズルノ機會ヲ待チ、亂前ヨリシテ閔族ト結托スル所アリ、又一面ニハ、淸人凡ソ百人許或ハ商人トナリ、或ハ韓人ニ變裝シテ京城ニ入リ、大院君黨トモ往來シタル者アリト、淸人必ズシモ、世人ノ云フ如ク、遲緩ナラザルナリ。

大院君ノ亂以來、廷臣黨派ノ軋轢轉タ陰險トナリ、隨フテ大ニ淸廷ノ干涉ヲ增シ、是ヨリシテ日韓淸ノ關係愈ヨ繁劇トナレリ。

日本公使館襲撃ノ一年前日本領事館ニ於テ一奇事アリ、十四年五月ノ事ナリキ、一韓人領事館ニ來リ、通辯某ニ向ヒテ曰ク、余姓ハ金、名ハ白淳（キムペクシュン）、京城西門ノ人ナリ、本日來レルモノハ一大事アリテ、日本人ノ贓意アル者アラバ之ヲ告グンガ爲ナリトノ通辯之ヲ怪ミ、走リテ領事ニ告グ、領事モ亦之ヲ奇トシ、出デ、會セリ。其人曰ク、余已ニ言フ如ク、誠意ノ二字アル人ナラデハ告グベカラズ、請フ左右ヲ退ケヨト、因テ左右ヲ退ク、通辯ヲ用ヒズ筆書ヲ以テ對話セリ。金ト稱スル者曰ク、余ハ師命ヲ奉ジ、千里ヲ遠トセズ、來リテ告ル所アラントス。領事曰ク、君ノ來ヲ告グル所アルハ實ニ感謝スル所ナリ、請フ其告ント欲スル所ヲ聞カン。金曰ク、其告グントスル事ハ他ナシ、當地居留人民將ニ殃禍ニ罹ラントスルナリ。領事曰ク、君ノ師ヲ誰ト爲ス。金曰ク、余ガ師ハ日本ノ人ナリ、今ヲ距ル二十七年前、朝鮮ニ來リ、忠淸道鷄籠山下（キェイリョンサン）ノ岩崖ニ住シ、常ニ草根木實ヲ食シテ命ヲ保ツ、今年齡六十九、月岩堂ト號ス、未ダ本姓ヲ知ル能ハズ。領事曰ク、師ノ敎ヲ何トスル、儒カ、佛カ、耶蘇カ。金曰ク、玄旨ナリ（玄旨トハ仙道ト云フ事ナラント云フ、今其筆語ノ如ク書ス）。曰殃禍ナルモノハ何ノ時ニ來ルヤ、又之ヲ防グノ道ハ、只兵ヲ練リ、專ラ備ヲ爲スニ在リ。金曰ク、今年中ニ在リ、而シテ之ヲ防ト雖モ知リ難シ、然レ𪜈師ハ余ノ發途ニ臨ミ、偈ヲ示シテ敎ヘテ云フ、之ヲ日本人ニ示サバ則チ其所以ヲ知ラント、其偈ニ曰ク、

晨星夜落　百里開眼　鼠狗共發　山頭一屋

此言ヲ聞キ、此偈ヲ見ルニ、殆ド解スル能ハズ、是レ狂人ナラント、領事乃チ程ヨク禮シテ之ヲ返シタリ。

或人（在朝鮮）之ヲ解シテ曰ク、晨星夜落ハ孔明五丈原ノ故事ニテ大臣死スルナカ、果シテ然ラバ守舊大臣死シテ、百里眼開キト云フテ漸々ト開進黨ト互ニ爭フヲ云フカ、山頭一屋ノ一句ハ實ニ解シ難シト雖モ、只平安タリトノ意味ナランカト。又或人（亦在朝鮮）曰ク、然レドモ是ニテハ日本人民ニ禍アリト云フベカラザルニ似タリ、而シテ此人果シテ何者ゾヤ、而シテ其師モ亦何者ゾ、未ダ知ルベカラズ、其師ハ日本人ト云ヒシハ、然カ

云ハズンバ其說果シテ行ハレザルナラント想ヒテナセル者カ、將タ二百年前ヨリ兩國交通スレバ、朝鮮內地ニ入ル者アリシモ亦タ未ダ知ルベカラズ、且ツ徃時對州人福某朝鮮ニ入リ、妻ヲ娶リテ子ヲ生ミシ者アリト、然レバ此事亦無シト云フベカラズ、今、日本人ト朝鮮人トハ之ヲ姑ク置キテ、之ヲ考フルニ、其言空漠ニシテ取ルニ足ラズ、唯狂人ト認ムルヨリ外ナカルベシト●

此ノ如キ咄々怪事、深ク究ムルニ足ラズ、唯未開國ノ一笑話トシテ玆ニ記スルノミ●

◎第五章● 十五年ノ事變(一二)═日本公使館ノ襲撃═朝鮮ニ對スル廟議●

京城日本公使館ノ襲撃ハ十五年七月廿三日ニ起レリ、此日午後、朝鮮官人某公使館在任陸軍歩兵大尉水野勝毅(此事變ノ記事主トシテ此人ノ手錄ニ據ル)ヲ訪ヒ、懷中ヨリ三四葉ノ罫紙ヲ出シテ曰ク、此レ大院君ガ慶尙道(キエンシヤンダウ)、江原道(カンゲンダウ)ノ激黨ト密ニ契約スル所ナリ、僕近日窃ニ偸ミ來ル、決シテ他人ニ示スベカラズ、唯大兄公使ト密ニ之ヲ閲セヨト、其書大意ハ倭洋ヲ拂フヲ以テ大主意トナシ、其策凡ソ五策アリ。曰ク、彼巨艦アリト雖モ、我ガ沿海水淺ク、陸地ニ接近スル能ハズ、我水軍能ク之ニ當ルニ足レリ。曰ク我ガ兵器ハ鳥銃ヲ以テ第一トス、宜ク硝ヲ烹、鉛ヲ堀リ、專ラ彈藥ヲ儲蓄スベシ、何ノ地硝多ク、何ノ地鉛多シトノ語アリ。曰ク、壯勇ヲ招募スルハ今日ノ急務ナリ、今貴族及ビ高官ノ僮僕皆身躰强健、嚴然タル干城ノ兵ナリ、一朝之ヲ募ラバ立ドコロニ數千ノ精銳ヲ得ベシト、其他ノ策アリ、而シテ末項ニ曰ク、若シ此ノ契約ニ背ク者アラバ、天神共ニ之ヲ罰ス云々、其文簡ニシテ其意盡セリ、其策亦大ニ取ルベキ所アリ、決シテ尋常頑固黨ノ手ニ成ル者ニ非ズ、某此事ヲ談ズルニ至リテハ通辯ヲ用ヰズシテ筆談ヲ以テス、蓋シ深ク漏洩ヲ恐ルヽガ爲ナリ、筆談ノ際互ニ意ノ通セザリシ所尠カラズ。某曰ク、今日ハ辭シ去ラン、明後日必ラズ地圖ヲ携ヘ來ラン、四十兩ノ金唯大兄之ヲ周旋スルヲ煩スト、大尉之ヲ諾シ、先ヅ

〔公使館襲撃〕

廿兩ヲ與フ、其去ルノ後、大尉ハ右書類ヲ謄寫シテ之ヲ參謀本部ニ送達セント謄寫ヲ軍曹某ニ命ズ○時ニ巡査館内ヲ奔走シ、事アルニ似タリ○暫クアリテ公使花房義質ノ使者來リ、大尉ニ來會ヲ請フ、至レバ公使左ノ書簡ヲ示セリ○

匆擾不得提長而亂類輩作黨與兵隊今爲相鬪似有犯干日本諸公之慮諒煩先自防備而若有直犯肆惡之境雖放銃使劒謀避患難如何

公使曰ク、今差備官來リテ余輩ノ後山ニ避ケンコトヲ乞ヘリ、余ハ之ニ答ヘテ亂賊若シ我公使館ヲ犯サバ、政府宜ク兵ヲ派シテ衛護セラルベシト云ヘリ、又下都監駐在生徒三人公館ニ來ラントシテ途中南大門ノ邊ニ於テ暴徒ノ爲ニ毆打セラレタリト其率ユル所ノ小童走リ來リテ之ヲ報ゼリ、因テ護迎ノ爲ニ巡査三名ヲ派出セリ云々ト○大尉之ヲ聞キ、一タビ其室ニ歸リテ服裝ヲ整ヘ、軍刀ヲ提ゲ、短銃ヲ携ヘテ公堂ニ至ル、時正ニ午後六時ナリ、公使書記官ト共ニ會食ス、公使曰ク、亂賊王宮及ビ二閔ノ家ヲ圍メリト、城内ノ景況果シテ如何、大尉即チ人ヲ派シテ城内ヲ視察セシム、暫クシテ歸リ報ヲテ曰ク、京畿觀營ノ近傍塵氛滿空、城内ノ如キハ未ダ其景況ヲ詳ニスル能ハズト● 既ニシテ館ノ前後朝鮮人來集益ス加ハリ其幾千人ナルヲ知ラズ、門前忽チ一喊聲ヲ發ス、山上山下齊シク之ニ應ジ、石ヲ飛スコト霰ノ如シ、大尉ハ警部、巡査、生徒、使丁等ヲシテ前後ノ門ヲ守ラシム、此時山上ノ暴徒大呼石ヲ公堂ニ拋ツ、大尉短銃ヲ放チテ之ヲ逐フ、五發ニシテ器械損壞、用ユベカラズ○此時暴徒火ヲ周圍ノ民家及ビ近藤書記官

ノ室ニ放ツ、館吏館内ヲ巡行シ、放火者ヲ狙撃シ、數人ヲ斃ス、時ニ雇朝鮮人皆ナ逃レ去リテ一人ヲ止メズ、館吏百方力ヲ盡シ、飯ヲ焚キ、水ト梅干トヲ携ヘテ公堂ニ至ル、大尉劍ヲ抜キ、起チテ舞フ、歌フテ曰ク、我有ニ寶刀三尺強、血痕難レ認幾星霜、京城今夜一宵夢、紫電光中斃ニ犬羊一●

既ニシテ火勢益ス熾ナリ、館員以爲ラク亂民多數ナリト雖モ、恐ルヽニ足ラズ、公堂背後茅屋ノ倉庫アリ、延燒極テ易シ、此倉庫ヲ倒サバ、公堂ノ延燒ヲ防グニ足ラント、衆ヲ勵シテ之ヲ倒ス、半ニシテ火已ニ之ニ及ブ、館内水ナク、消火ノ術ナシ、加フルニ矢石雨ノ如ク下リ、銃丸亦時々飛ビ來ル○警部某頻ニ突出シテ門前ノ敵ヲ掃ハントス○大尉曰ク、突出勇威ヲ示スモ亦一奇ナリ、然リト雖モ、只館中ノ人限アリ、若シ突擊賊ヲ掃フモ、所謂騎虎ノ勢止ムベカラズ、必ズ深入スルニ至ラン、如カズ固ク守リテ城内ノ援兵ヲ待タンニハ、若シ賊來リ迫ラバ、之ヲ驅逐シテ、輙ク館内ニ退クヲ上策トス、前門決シテ閉ヅベカラズ、之ヲ閉ヅルハ徒ニ弱ヲ示スノミト、即チ巡査ニ命シ、門扉ヲ盾トシテ之ヲ監視セシム、敵忽チ吹角喊聲相應シ、將ニ門ヲ奪フテ闖入セントスルモノヽ如シ○此時急ニ前門ヲ閉ヅ○大尉大ニ呼リテ曰ク、德川公濱松城ノ事ヲ知ラザルカ、速ニ之ヲ開ケト、聲ニ應ジテ之ヲ開ク═蓋シ警部某頭ニ突擊ノ策ヲ試ント欲シ、門ヲ閉ヂテ故ラニ弱ヲ示サンガ爲ニ、之ヲ公使ニ請フテ其許可ヲ得タリト云フ═是ニ至リテ、火勢益ス盛ニシテ、殆ド公堂ニ及ベントス、大尉其守リ難キヲ察シ、勳章ヲ取テ胸ニ附シ、樞要書類ヲ收入セル革嚢ヲ取リテ之ヲ火ニ投ジ、暫時休息セン爲ニ公堂ニ横臥

ス○此時公使館雇水島義來リテ曰ク、大兄僕ト共ニ嘗テ戊辰ノ賊タリ、今夜將ニ衆ニ異ナルノ働ヲナスベシ、僕先鋒トナリテ通路ヲ開カン、後山ニ突出シ、間道ヨリ楊華津ニ出ルヿ難キニ非ズ、大尉曰ク、快男兒、子ハ是レ館中ノ樊噲ナリ、僕荷モ武班ニ列ス、死固ヨリ其ノ分ナリト、亦海軍中軍醫佐川晃(庄內人)ヲ顧テ曰ク、足下モ亦是レ戊辰ノ賊、會桑庄ノ名ヲ汚ス勿レ○佐川曰ク、固ヨリナリ●

暫クアリテ衆皆ナ公堂ニ會ス、衆論紛々タリ、大尉ハ公使ノ決ニ任セント、乃チ公使ニ謂ヒテ曰ク、事迫レリ、從容死ニ就クカ、一方ニ突出ノ天運ヲ試ムルカノ二途アルノミ、願クハ公使早ク之ヲ決セヨ○公使曰ク、諸說未ダ盡サヾル所アリ、須ク正門ヨリ出デ、先ヅ大路ヲ經テ、京議道(觀察使又監司ト云フ、一道ノ長官ナリ)ノ營ニ至リテ守護ヲ乞フベシ、若シ觀察使ニシテ守護スル能ハズンバ、王官ニ赴キテ國王ト安危ヲ共ニスベシ、徒ニ辱ヲ山野ニ暴ス勿レト○衆之ニ服ス、即チ整列番號ヲ定メントス、衆中書生、使丁、多キニ居リ、嘗テ劍ヲ使ヒ、銃ヲ執ル者僅ニ十餘名ニ過ギズ、番號ヲ附スルニ、三タビニ及ンデ始テ之ヲ定ムルヿヲ得タリ○館吏三人請フテ先鋒タリ、後殿亦定ル○大尉衆ニ謂ヒテ曰ク、諸君必ズ苟モ免レント欲スル勿レ、若シ各個ニ逃奔スルトキハ我衆遺類ナケン、公使ノ在ル所ハ必ズ旭章ノ國旗アリ、諸君惟國旗ヲ見ヨト、是ニ於テ衆立ナガラ飯ヲ喫シ、麥酒數瓶ヲ碎キテ之ヲ飯ミ、火ヲ公堂ニ放ツ、佐川晃石炭油ヲ取リテ之ニ注ギ、籬ヲ取テ之ヲ投ズ、火燄屛風ニ移ル、是ニ於テ衆死ヲ決シ、吶喊シテ門ヲ出ヅ、敵四散奔逸ス、門前ヨリ大路ニ至ルノ間路甚ダ狹シ、敵豫メ柵ヲ結ビテ我進擊ニ備ヘシモ、

決死ノ鋭鋒當ルベカラズ、敵狽狽逃走ノ際自ラ其柵ニ蹶倒シ、且ツ路狹ク人多シ、猝ニ退クヿ能ハズ、我ガ衆進ンデ之ヲ斫ルヿ凡ソ二十餘名、終ニ一條ノ血路ヲ開キテ大路ニ出ヅ、敵畏縮シテ敢テ近カズ、只遠キニ在テ瓦礫ヲ拋ツノミ○是ニ於テ更ニ整列點呼スルニ、獨リ佐川晃左腿ニ小傷ヲ受クシノミ○千原、水島、ノ二人大尉ヲ呼ビテ曰ク、奴輩怯懦一人ノ追擊スル者ナシ、後殿及ニ血ラズ、極テ遺憾トナス、願クハ代リテ先鋒トナラン○大尉曰ク、先鋒ハ尋常ノ人モ亦之ヲ能クス、後殿ハ古ヨリ大剛ノ者ニ非ズハ之ヲ能クスル者ナシ、前途尙ホ遙ナリ、二君之ヲ勉メヨト、二人即チ服ス○大尉大隊前進ノ號令ヲ下シ、衆徐歩シテ觀察使ノ營ニ至ル、小門開クリ、入リテ大門內ニ及ベバ、四五輩門樓上ニ在リテ瓦礫ヲ拋ツアリ、館吏短銃ヲ放チテ之ヲ逐ヒ、又一人ヲ斫ル、餘皆ナ逃匿ス、尙ホ進ミテ三門ヲ過ギ、宣化堂(觀察使ノ正廳)ニ至ル、寂トシテ人ナシ、因テ再ビ大路ニ上リ、南大門ニ至リテ門ニ迫リ、扉ヲ敲キテ門者ヲ呼ベドモ、答ヘズ、鐵扉嚴重、外ヨリ開クニ由ナシ●　公使曰ク、我分是ニ至リテ盡キタリ、寧ロ此地ニ在リテ再ビ襲擊ヲ受クンヨリ、宜ク楊華津(ヤンソホアツイン)ニ至リテ後圖ヲ議スベシト○是ヨリ路ヲ轉ジテ楊華津ニ至ル、時ニ降雨アリ、衣帽皆ナ濕フ、道路暗黑、屢ゞ岐路ニ迷フ、回顧スレバ遙ニ火光天ヲ衝クヲ見ル、是レ我ガ公使館ノ炎燒スルナリ○巡査小林某始終公使ノ傍ヲ離レズ、其手ヲ取リ、又手巾ヲ己ノ革帶ニ結ビ、老人石幡某(館吏)ニ之ヲ取ラシメテ之ヲ扶助ス●　二十四日未明、楊華津ニ至ル○衆皆ナ云ク、速ニ漢江(ハンカシング)ヲ渡ラズンバ、或ハ敵ノ尾擊ヲ受クント○公使ハ暫ク該鎭ニ止マリテ京城ノ消息ヲ聞カント欲シ、一書ヲ

裁シテ鎮將ニ托ス、故ヲ以テ殆ド一時間ヲ費セリ、終ニ仁川（インチエン）ニ赴クニ決シ、渡口ニ臨ミ、棹子ヲ促セ𪜈、來ルモノナシ、因テ舟ヲ奪ヒテ自ラ渡ル、前夜ヨリ降雨淋漓、是ニ至リテ雷鳴リ、暴雨車軸ヲ流スガ如シ、遇マ一民家アリ、即チ入リテ小憩シ、燒酎ヲ飲ミテ渴ヲ慰ス、一人公使ノ爲ニ輿ヲ雇フ、公使ハ某ノ足病アルヲ以テ之ニ乘ラシム○午前十時頃富平ノ成谷里ニ至リ、一民家ニ入リテ小憩シ、麥ヲ炊ギテ飢ヲ醫シ、再ビ雨ヲ衝キテ程ニ上ル、衆疲勞甚シ、午後三時前後シテ仁川ニ至ル、府兵途ニ之ヲ迎ヘ接待懇懃ヲ極メ、政廳ヲ以テ公使等ノ休憩所ニ充ラ、別ニ門外ノ一官舍ヲ以テ護衛巡査等ノ休憩所ニ充ツ、因テ公使以下濕衣ヲ脫シテ休憩セリ●

水野大尉等謂ヘラク、仁川ハ安駐ノ處ニ非ズト、其意見ヲ公使ニ陳ス、然レ𪜈府使接待極テ厚ク、京城ノ突出甚ダ易カリシヲ以テ亦少シク意ヲ安ズル所アリ、且ツ疲勞殊ニ甚シキヲ以テ、濕衣ヲ脫シテ之ヲ火ニ乾カシ、一杯ノ燒酎ト二箇ノ鷄卵、聊カ渴飢ヲ忘レテ橫臥シ、覺エズ睡ニ就ク○凡ソ三十分間、忽チ銃聲後墻ニ轟キ、瓦礫窓ヲ破リテ枕頭ニ飛ビ來ル、衆驚キ覺メ、短銃ヲ取リテ之ト戰フ、而シテ門外大ニ騷然、巡査三名各〻創ヲ被リテ全身血ニ染ミ、刀ヲ杖ツキ來リテ齊ク呼ヒテ曰ク、敵我ガ不意ヲ窺ヒ、門前ノ休憩所ヲ襲擊シ、矢石雨注、刀槍亂剌、巡査等數名之ニ死スト、衆乃チ衣袴ヲ整ヘ、足袋ヲ穿チ、劍ヲ提ケテ、公使ノ室ニ至ル𪜈皆ナ曰ク、徒ニ賊ノ狙擊ヲ受クンヨリ、寧ロ門外ニ突出シ、奮戰死ヲ致スノ快キニ如カズ○公使曰ク、可ナリ○乃チ公使ヲ中ニ擁シ、吶喊門ヲ出ヅ、府兵三四十人槍ヲ橫ヘ刀ヲ舞

ハシテ之ヲ逆ヘ擊ツ、衆短銃ヲ放チ刀ヲ揮ヒテ踊躍奮進ス、敵四散逃奔ス、衆右折メ一大路ニ出ヅ、即チ濟物浦ノ本道ナリ、遂ニ一條ノ血路ヲ開キテ濟物浦ノ途ニ上ル、敵花房公使々々々々ト連呼シテ瓦礫ヲ投ヲ、眉尖刀ヲ舞ハシテ追ヒ來ル、殿スル者戰甚ダ力ム、敵遂巡ス●　初メ衆皆ナ慮ル、濟物浦ニ至ルノ間、山ニ沿ヒ、溪ニ跨リ、道路迂曲ス、若シ敵ニ伏兵ノ設アラバ、一人トシテ存スルヲ得ズト○忽チ見ル、前頭外務省吏久水三郎、高雄謙三、馬ヲ飛バシテ來ル（久水等濟物浦ニ在リテ仁川ヨリ京城ノ飛報ニ接シタルヲ以テ來レルナリ）、是ニ於テ追兵其援アルヲ見テ、遂ニ迫ラズ、亦路傍埋伏ノ兵ナキヲ詳ニシ、衆少シク意ヲ安ンジ、馬ヲ一人ニ與ヘ、先ヅ濟物浦ニ至リテ船ヲ準備セシム○又一馬ヲ公使ニ進ムル者アリ、公使ハ外務七等屬淺山某ヲ顧ミテ曰ク、子傷クリテ公使ヲ護セヨト、同シク馬背ニ跨リテ行ク○此時後山ヨリ銃聲アリ、中ラズ○又三人濟物浦ヨリ來會シ、直ニ公使ニ隨ヒテ濟物浦ニ走リ、同浦ノ警吏ヲ擁シテ小舟ニ駕シ、月尾島（濟物浦ヲ去ル𪜈八丁餘）ニ渡リ、大船ノ航海ニ堪フル者ヲ擇ハントセリ●

負傷者等十八名後レテ至ル、途中之ヲ扶助シ、韓人ヲ強雇シテ之ヲ負ハシムル等百方力ヲ盡シ、皆ナ恙ナク濟物浦ニ達スルヲ得タリ○然ルニ公使既ニ船ニ駕シ去リシト聞キテ衆願ル物議アリ、時已ニ薄暮、何レノ方位ニ向フテ知ラズ、又一艘ヲ雇ハント欲ス、村人命ニ應ズル者ナシ、砂上ヲ奔走シテ一船ヲ認メ、衆ヲ招キテ之ヲ奪ヒ、死力ヲ出シテ之ヲ波上ニ押シ出シ、月尾島ニ渡ラントス、潮流矢ノ如ク楫

艣備ハラズ、船旋轉シテ進マズ○水野大尉曰ク、昔シ露西亞ノ「カプテン・ゴローニン」箱舘ノ獄ヲ脫シ、小艇ヲ奪フテ堪察加ニ走ラントセリ、其氣力思フベシ《事ハ『世界ニ於ケル日本人』ニ詳ナリ》、今月尾島目前ニ在リ、衆力ヲ合セテ波濤ヲ掻ク、何ゾ渡ル能ハザルノ理アランヤト、七人力ヲ極メテ掻クト雖モ、衆皆ナ疲勞シ、船意ノ如ク進マズ、獨リ鈴木某氣力頗ル壯ナリ、衆ヲ罵リテ波ヲ掻ク、三人帆ヲ脫シテ船底ノ浸潮ヲ汲ミ棄ツ、時恰モ滿潮ニ會スルヲ以テ僅ニ月尾島ニ達スルヲ得テ、即チ上陸セリ●

此日京城公使舘ヲ突出セシ總員廿八名●

辨理公使	花房義質	書記官	近藤眞鋤
陸軍歩兵大尉	水野勝毅	海軍中軍醫	佐川晃(京城ニ於テ負傷)
外務四等屬	石幡貞	同二等警部	岡兵一
七等屬	淺山顯三	陸軍歩兵軍曹	千原秀三郎
外務省御用掛	大庭永成	同上	曾我輔(仁川ニ於テ負傷)
一等巡査	小林志津三郎	同上	歳戸昌克(仁川ニ於テ戰死)
同	五十嵐惠吉(仁川ニ於テ負傷)	同上	宮周太郎(仁川ニ於テ戰死)
三等巡査	横山貞夫(仁川ニ於テ負傷)	公使舘雇	水島義(仁川ニ於テ戰死)
同上	川上立一郎	海軍看病夫長	鈴木利作
公使舘雇	鈴木金太郎	同上	中村卯作
同上	飯塚玉吉	私費語學生	近藤道堅(仁川ニ於テ戰死)
同上	楓玄哲	同上	樋口將一郎
公使從者	今西美成	書記官從者	宇野助右衛門
木野大尉從者	奥山錫		

濟物浦居留地取調ノ爲出張人員五名●

陸軍歩兵中尉	松岡利治	外務省御用掛	杉村濬
同上	久水三郎	陸軍語學生	武田甚太郎
公使舘雇	高雄謙三		

總計三十六名● 內戰死四名● 殘現在廿七名●

外ニ在下都監人員●

陸軍工兵中尉	堀本禮造(京城ニ於テ被殺)	陸軍語學生	岡內格
同上	池田平之進	私費語學生	黑澤盛信

陸軍語學生護迎ノ爲出張巡査 三名●

是ヨリ先、公使已ニ大船ヲ雇ヒ、後者ノ爲ニ迎船ヲ濟物浦ニ出シ、一行廿七名一船ニ會スルヲ得タリ、此夜十二時、月尾島ヲ出帆シ、凡ソ二哩ニシテ錨ヲ下ス、其船ハ日本形五十石內外ノ船ニシテ、楫夫五名之ニ乘リ、事急ナルヲ以テ僅ニ白米四斗水三石許ヲ積載セルノミ○嚮ニ仁川府ニ在ルヤ、外國汽船ノ南陽灣(ナムヤンヂ)ニ碇泊スルヲ聞ケリ、因テ先ヅ該船ノ所在ヲ探リ、若シ之ヲ探リ得ズハ、豊島(ホウントウ)ニ寄リテ充分ニ食料薪水ヲ積載シ、芝栄(支那)(チーフー)ノ航路ニ漂フテ外國船ノ通行ヲ待ツニ決ス○廿五日、退潮ニ乘ジテ帆ヲ揚ゲシニ、風逆ニシテ船意ノ如ク進マズ、濟物浦ヲ去ルヿ七哩許ニシテ錨ヲ下セリ○時ニ大尉水野發議シテ曰ク、外國船ノ所在ヲ探リ得ルハ其何レノ日ニ在ルヲ測リ知ルベカラズ、然ルニ今米僅ニ一俵ニ過ギズ、請フ食ヲ二度ニ減ヅ、粥トナシ、豫メ數日ヲ保ツノ計ヲ爲サン○公使曰ク善シ、足下請フ專ラ其

事ニ任ゼヨ。大尉則チ食事配分ノ責ニ任シ、一碗ノ粥ヲ以テ二人ノ食ニ充ツ、衆中或ハ不平ヲ鳴ス者アリタレドモ、公使モ亦自ラ衆ト其粥ヲ共ニシタルヲ以テ強テ之ヲ忍ベリ。　廿六日、曉ニ乘ジテ又船ヲ出ス、適マ韓船ノ沖ヨリ歸リ來ルニ會ヒ、之ニ問フニ汽船ノ所在ヲ以テス、曰ク昨日之ヲ汾溜島（プルチー）ニ見タリト、衆頗ル力ヲ得タリ。此日海霧甚ダ深クシテ咫尺ヲ辨ゼズ、其霽ルヽニ及ンデ、遙ニ三檣ノ船ヲ前洋ニ望ム、衆拍手雀躍、喜色滿面ニ溢レ、京城ヨリ讓リ來ル所ノ國旗ヲ竿頭ニ揭ゲテ目標トナス。午後三時、船近ヅクニ及ンデ、彼レ我ノ國旗ヲ見、小汽船ヲ出シテ我ガ行ヲ迎フ、至レハ乃チ英國測量船『フライイング・フヰッシユ』（飛魚）號ニシテ、其碇泊セシ汾溜島（プルチー）ハ濟物浦ヲ去ル十五海里ニ在リ、此日艦長船ヲ他ニ移サント欲シタレドモ、海霧ノ爲ニ果サズ、故ニ我船ト此處ニ會スルヿヲ得タリト、實ニ一行ノ天幸ト云フベシ、且ツ艦長以下ハ大尉等ノ知ル所ノ人ニメ大ニ便ヲ得タリ。是ニ於テ公使ハ朝鮮國王ニ呈スルノ書（難ヲ避ケテ此ニ至ルノ事理ヲ略述シ、近日再渡ノ趣ヲ告グ）及ビ同文司觀察使ニ寄スルノ一書（死者ヲ特別ニ埋葬シ及ビ生死未詳ノ者ヲ救護スル等ノ事ヲ述ブ）幷ニ中尉堀本（未タ其生死ヲ詳ニセザリシ故ナリ）ニ宛テタル一書ヲ裁シ、韓人ニ托メ之ヲ觀察使ニ轉送センヿヲ求メタリ。　嚮ニ公使ノ仁川ニ到ルヤ、曾ク該府ニ止リテ京城ノ消息ヲ聞キ、彼ノ政府ト尙ホ往復談判スル所アラント欲シタレドモ、該府ノ敵抗シタルヨリ、再ビ此奇變ニ逢フニ至リシナリ。是ニ至リテ曾ヲ謂ヘラク今回ノ暴擧ハ一部亂民ノミノ所爲ニ出ヅルニ非ズ、必ズヤ政黨ノ激發ニ起因スル者ニシテ、其根基スル所甚ダ深シ、

韓廷ノ安危モ亦知ルベカラザル者アラン、勢既ニ茲ニ及ベリ、モハヤ十分ノ護衛ヲ得ズハ、身ヲ置キ事ヲ處スルノ地ナシト、是ニ於テ公使ハ終ニ歸計ニ決セリ。

初メ公使ノ英船ニ達スルヤ、艦長以下其垢面弊衣、突如トシテ至リシヲ以テ深ク怪ミタルモノヽ、如シ、公使先ヅ京城事變ノ大略ヲ述ベシニ、艦長曰ク、是レ尋常ノ事ニ非ズ、諸君日本ニ歸ラント欲スルナラン、然ラバ長崎、釜山、唯命是レ應ゼン、談話ハ後刻ニ讓リ、先ッ抜錨ノ號令ヲ傳ヘ、其準備ヲ爲サシムベシト、時正ニ五時、二三ノ端舟測量ノ爲ニ本艦ヲ離ルヽヿ三四浬ノ島嶼ニ派遣シアリ、因テ信號ノ火ヲ揚ゲテ之ヲ招キケレバ、夜八時、其最遠距離ニ在リシ端舟ニ至ルマデ皆ナ歸リ來リ、十時ヲ以テ抜錨シ、長崎ニ向フテ進行ス、其擧動ノ迅速ナル、頗ル避難者ヲ驚カシタリ。

艦長以下ノ此一行ヲ待スルヿ極テ懇篤ニシテ、負傷者ハ艦醫直ニ治療ヲ施シ、介抱到ラザル所ナシ、公使及ビ書記官ハ艦長室以下ヲ以テ休憩飲食ノ所トナス、艦中ノ士官大尉水野ノ胸間勳章ヲ附スルヲ以テ特ニ之ヲ優待シ、大尉「ベイカ」ナル者衣袴繻絆及ビ靴ニ至ルマデ之ヲ供シ、其弊衣ヲ脫シテ換エシム、大尉水野之ニ酬ユルニ明治十年西南ノ役得ル所ノ軍刀ヲ以テス、刀身尙ホ腥臭アリ、蓋シ是レ朝鮮人ノ鮮血ナリ。

〔公使館ノ襲撃〕

英國軍艦ハ七月廿九日夜十二時長崎ニ入港シタリ、花房公使上陸シテ直ニ京城ノ事變ヲ外務卿井上馨ニ電報セリ、其外務卿ノ手ニ達セシハ三十日午後三時十分頃ナリキ、外務卿ハ此警報ヲ得テ驚愕一

方ナラズ、急使ヲ馳セテ太政大臣三條實美ニ報シ、車ヲ驅リテ海軍卿川村純義ヲ訪ヒ、警報ノ次第ヲ語リ、且ツ曰ク、事既ニ斯ノ如シ、廟議如何ニ據リテハ迅速保護軍艦五六艘ヲ彼地ヘ送リテ、暴徒ヲ鎭壓シ、我居民ヲ保護セザル可ラズ、其準備整フベキヤ。海軍卿曰ク、其ハ容易ナラヌ大事件ナリ、軍艦ハ本年御巡幸ニ供スル數艘ノ準備アリ、然レドモ咄嗟ノ間ニハ到底發遣シ難カルベシ、現ニ釜山浦ニ磐城艦ノ繫ゲルアリ、今一二艘ヲ差向ケナバ可ナラント。談話中太政大臣ヨリノ急使來レリ、兩人乃チ車ヲ駢ベテ其邸ニ至リシニ、岩倉右大臣ヲ始メ、内閣顧問黒田清隆、參議山縣有朋、寺島宗則、大木喬任、山田顯義、松方正義皆ナ會セリ、太政大臣ハ右ノ電報ヲ諸員ニ示シ、且ツ其處分方畧ヲ問フ。黒田ハ第一ニ席ヲ進メテ曰ク、咄嗟爾タル鷄林、何ソ我國旗ヲ蔑如スルノ無狀ナルヤ、速ニ膺懲ノ擧ニ及ビ、使臣ヲ派出スベシ、余ハ先年大使トナリテ派出セシヲ以テ、彼國ノ事情ヲ知レリ、朝鮮ノ處分、清隆請フ身ヲ以テ之ニ當ラント。席ヲ打チテ論ジ、其他薩摩人ハ多ク開戰論ヲ主張セリ。岩倉、井上及ビ山田ハ之ヲ駁シテ輕擧事ヲ起スノ不可ナルヲ述ベ、先ヅ軍艦四五艘ヲ彼地ヘ派遣シ、又一重臣ヲ遣シテ徐ロニ談判ヲ開クベシト論シ、議論區々ニ岐レ、深更ニ及ビ、議未ダ決セズシテ退今日決シテ開戰ナドヲ企ツルノ時ニアラズト、散セリ。

翌三十一日早朝ヨリ太政大臣以下内閣ニ會シ、事ヲ敭聞ニ達ス、陛下大ニ宸憂アラセラレ、内閣ニ出御アラセラレテ親シク閣臣ノ評議ヲ聽キタマヘリ。此日ノ閣議ニ於テ、黒田ハ尚モ前日ノ說ヲ固執シテ、飽マデモ開戰論ヲ主張シ、若シ此事ニシテ行ハレズンバ、願クハ清隆ヲ以テ辨理大臣ニ任ゼ

225463

ラレヨ、然ルトキハ直ニ韓地ニ赴キ、韓人ノ肝膽ヲ寒カラシメ、其ヲシテ懾服セシメンコト清隆ガ方寸ノ中ニアリト憚ル色モナク論ジタリ。井上又之ヲ駁シテ曰ク、余ハ先年征韓論ノ起リシ時モ非戰論ヲ主張セシガ、熟ラ方今朝鮮政府ノ内狀ヲ觀察スレバ、恰モ我ガ幕府末世ノ景況ニ異ナラズ、國王ヲ始メ政官ノ開進主義ヲ執ルニモ拘ハラズ、守舊頑固ノ輩ガ勢力ヲ逞ウシ、動モスレバ施政ノ方向ヲ妨害セントス、今般ノ暴擧ノ如キモ畢竟無謀ノ暴徒輩ガ國ノ開進ヲ妨グン爲ニ企テシモノナルベシ、未ダ其事情ヲモ察セズシテ輕々干戈ヲ動スハ寧ロ輕擧粗暴ト云フベキナリ、故ニ今日ノ計ヲ爲ス、先ヅ四五艘ノ軍艦ヲ派遣シ、徐ロニ談判ヲ開クベシ、然ルトキハ自ラ恟々タル人心ヲ鎭メ、韓國政府ヘモ威武ヲ示スベキナリ、結局談判ノ上彼若シ我ノ要求ヲ肯ゼズンバ、國權ノ伸縮ニ關スルヲ以テ、止ヲ得ズ、干戈ヲ動スモ、未ダ遲シトセズ、某不肖ト雖モ任ニ外務ニアリ、請フ今回ノ事件ヲ委任セラレンコトヲ、然ルトキハ速ニ適宜ノ處分ヲ施スベシ、諸公ノ意見如何ト。山田其他一二ノ參議ハ外務卿ノ說ヲ贊成ス、太政大臣則チ各員ノ議ヲ奏上シテ親裁ヲ請ヒ奉リシニ、陛下ニハ朕過刻ヨリ各員ノ諸說ヲ聞クニ、外務卿ノ言朕ガ意ニ適ヘリ、今回ノ事一ニ外務卿ニ委任スト勅シタマヘリ、是ニ於テ、廟議一決シ、外務卿ハ朝鮮處分ニ關スル一切ノ事ヲ委任セラレ、直ニ退キテ東京駐劄ノ各國公使ヲ延遼館ニ招請シテ朝鮮事件ノ電報ヲ示シ、且ツ我國ノ朝鮮ヲ處分スルニツキテ各國公使ハ朝鮮國ヲ獨立國ト認ルヤ否ヤノ意見ヲ問ヒシニ、各國公使ハ皆ナ其獨立國タルヲ認ムト答ヘシカバ、外務卿ハ大ニ喜ビタリ、而シテ又思ヘラク廟議輙モスレバ變

更セントスルノ傾アリ、到底其身東京ニアリテハ又々如何ナル掣肘ニ逢ハンモ測リ難シ、如カズ此上ハ速ニ馬關ニ赴キ、花房公使ニ會シ、協議ヲ遂ゲテ處分スル所アランニハト、因テ出兵ノ事ハ海軍卿ニ協議シ置キ、超エテ二日、八月二日出發ノ玄海丸ニ乘リテ馬關ニ赴キタリ(此一節ハ井上ガ神戸ニ於テ或人ニ語リシ所ナリト云フモノニ據ル)●

朝鮮變亂ノ報本邦ニ達スルヤ、朝野騷然、各派新聞或ハ其內亂ニ干渉スベシト云ヒ、或ハ干渉スベカラズト云ヘリ、各地方献金及ビ從軍ヲ願ヒ出デシ者少シトセズ●

此時大坂鎭臺各營ノ歸省兵ハ急速歸營スベキノ命ヲ受ケシガ、一人ノ遲滯スル者ナク着到セリ、同鎭臺ニテハ專ラ出兵ノ準備ヲ爲シ、朝鮮行ノ人夫五百人ヲ募集セシニ、募ニ應ジテ集リシ者二千五百人ニ上レリ(雇賃一日七十五錢ナリシト)、此者等ハ先年西南事件ニ雇ハレテ非常ノ賃錢ヲ得シ者ナリ、中ニモ路傍ニ客待セシ人力車夫ナドハ唯後レンコトヲ恐レテ狼狽シ、車ヲ捨テ、馳セ集ルノ勢ナリシト云フ●

◎第六章● 十五年ノ事變(二)═公使花房ノ再渡═濟物浦條約●

公使花房ハ再ビ朝鮮ニ赴クベキノ命ヲ奉シ、船艦三艘、陸兵八百人ヲ率ヰテ出發シ、八月十二日仁川(インチエン)港ニ着ス、入京ニ先タチ、公使命ヲ奉シテ再ビ貴京ニ進ミ、將ニ問フ所アラントス、護衛トシテ兵員ヲ率ユルノ旨ヲ朝鮮政府ニ通牒セシニ、翌十三日、朝鮮政府之ニ答ヘテ、兵ヲ率ユルハ或ハ一部ノ疑慮アルニ因テ然ルカ、今國太公《大院君ヲ云フ》指揮ヲナシ、曩然無事ナリト云ヘリ○此日公使兵二中隊ヲ率ヰテ濟物浦ヨリ上陸シ、仁川府ニ至ル、府使任榮鎬來リ迎ヘ、公堂ヲ拂フテ旅次ニ充ツ○此夜十二時、兵曹判書趙寧夏來リテ曰ク、當日ノ變軍民皆ナ叛キ、外ニ鎭制スベキ兵力ナシ、僅々領官等ヲシテ貴館ニ報知セシメタルモ實ニ僕ノ注意ニ出シノミ、賊大闕ニ迫ルニ及ンデ、身ヲ以テ主上ヲ掩ヒ、危難ヲ避ルノ數回ナリシ、今大院君政權ヲ專ニシ、聖意一モ通徹スル能ハズ、公使若シ入京セント欲セバ、少クモ一大隊ヲ引率セラルベシ、兵少キトキハ却テ侮ヲ生ゼン、今夜僕京ニ返リ、主上ニ謁シテ密ニ公使ノ入來及ビ清官馬建忠ノ來リタルノヲ奏シ、明後日再ヒ此地ニ來ルヘキヲ以テ、願クハ姑ク此府ニ留リ、以テ再報ヲ待タレンコトヲ○公使曰ク、徒ニ此府ニ留ルヲ得ストモ、明日ハ兵員ヲ休息セシメ、明後日ハ一隊ヲ楊花(ヤンホア)鎭(ヂン)ニ先着セシムベシ、若シ此際再ビ貴下ニ面スルヲ得バ、報ヲ聞キテ後ニ發途スベキノミト○翌十四日韓民恐怖セザランガ爲ニ、一ノ告諭文ヲ沿道各處ニ揭示ス、其文左ノ如シ●

〔公使花房ノ再渡〕

我兵來レ此、非レ有ニ他意一、日前我公使之在ニ京城一、亂民作レ黨焚レ舘弄レ兵、故我政府特派レ兵護ニ衛公使一、固非ニ以事ニ干戈一、則耕者不レ舍レ鉏、織者不レ止レ杼、各安ニ其業一、萬勿レ有ニ惶懼動搖一●

明治十五年八月

大日本公使舘書記官

十五日伴接官尹成鎭、差備官玄昔運等來リ、京城舘宇多クハ頽敗セルヲ以テ、旅舘ニ充ツベキナシトラ、相當ノ場所ヲ設クルマデ、姑ク入京ヲ止メンコトヲ求メタレ𪜈、聽カズ○尹成鎭曰ク、大院君云ク、貴國先年愼德公薨去ノ時開港ヲ延期セリト、果ノ此事アリヤ否ヤ○答ヘテ曰ク、知ラズ● 時ニ趙寧夏、金宏集亦來ル○趙曰ク、事既ニ奏聞ヲ經タリト雖モ、大院路ニ當リ、聖衷暢ブルニ由ナシ、大院今公使ノ隨兵入京ヲ喜バズ、必ズ之ヲ城外ニ置カント欲スベシ、公使宜シク斷然入京アルベク、而シテ其公幹ノ如キハ願クハ僕歸京ノ後ニ提出セラレンコトヲ、兩三日ヲ經バ、僕京ニ歸リ、內ヨリ贊成セバ、必ズ好果ヲ結ブニ至ラン、希クハ僕ノ言ヲ信ジテ採用セラレンコトヲ○公使曰ク、貴下姑ク濟物浦ニ滯留センニハ、公幹徒ニ貴下ノ歸京ヲ待ツベカラズ、貴下若シ意アラバ、速ニ歸リテ盡力セラルベシ● 玄昔運又來リ、政府ノ關文ヲ示シテ公使ノ姑ク此地ニ留ランコトヲ請ヒタレ𪜈、聽カズ● 翌十六日朝五時、公使發シテ楊花(ヤンホア)津(ファン)ニ到ル、玄昔運又來リテ曰ク、楊花鎭邊伏波亭《大院君ノ別莊ナリト云フ》アリ、京ヲ距ルコト僅ニ一里、請フ兩三日該所ニ止リ、京城客舍ノ整頓スルヲ待タレンコトヲ○公使曰ク、本官旨ヲ奉ジテ再來ス、唯當ニ進ンデ闕下ニ赴キ、謁ヲ請ヒテ速ニ公幹ヲ理スベキノミト、江ヲ渡リテ鎭ニ至レリ●

此時兵曹判書ノ隨官告グテ云ク、漢江(ハンカン)ニハ豫ラ我ガ政府ヨリ一隊ノ守兵ヲ置キタレバ、或ハ貴國ノ兵ノ半渡ヲ待テ擊タンモ圖リ難シト、日本將校ハ又彼ガ虛喝ノ慣手段ナリト察シタレ𪜈、若シ實事ナラバ、直ニ擊チ敗ラン、ノミト、俄ニ兵ノ一半ヲ分チテ急行セシメタレ𪜈、果シテ何事モナク、韓人多クノ出テ來リテ舟ヲ艤ヒ、事ナク我兵ヲ渡シタリト云フ●

時ニ京畿觀察使(觀察使ハ一道ノ長官ナリ)洪祐昌來リ迎ヘテ曰ク、京內人心未ダ穩ナラズ、且ツ旅舘ノ設未ダ整ハズ、幸ニ伏波亭ハ堂宇頗ル廣爽、願クハ暫ク此ニ住留セラレンコトヲ○公使之ヲ辭シ、直ニ入京ヲ令ス○洪祐昌曰ク、然ラバ、僕先ヅ歸リテ其用意ヲナスベシ、而シテ事倉卒ニ出デ、屋舍ヲ擇ブニ暇アラズ、今夜設ケル所漏溢厭フベキアルモ願クハ之ヲ咎ムルコト勿レ、但明日ニ至ラバ、更ニ善處ヲ卜定スルノ計モアルベシ○公使曰ク、諾○即チ書記官近藤ニ衛兵一小隊ヲ分附シ、洪祐昌ヲ伴ヒテ先發セシム、書記官城內南山下泥峴(テンコーカイ)ナル禁衛大將李鍾承ノ家ニ至ル(去月廿四日暴徒亂入シテ家財ヲ破毀ス、李鍾承田舍ニ逃ル、現ニ柱壁間斧刀ノ痕ヲ存セリ)、深夜、公使モ亦着ス、其家稍ヤ廣シト雖モ、二中隊ノ兵ヲ容ルヽニ足ラズ、因テ翌日前約ヲ履ミテ更ニ他ニ移ランコトヲ促スト雖モ、洪祐昌病ト稱シテ來ラズ、伴接官等皆ナ言ヲ左右ニ托シテ互ニ逃レントス、數回督責、終ニ掌樂院ヲ開キテ之ニ充テント云フ、則チ姑ク李宅ヲ本館トナシ、近傍ノ人家七軒ヲ增借シ、掌樂院ヲ併セテ護衛兵駐宿ノ處トナセリ●

公使ノ京城ニ達シタルヤハ、清兵既ニ四門ヲ警衛シ居タリ、我ガ兵ハ之ニ比スレバ大ニ少ナク、且ツ時日ノ後レタル爲ニ大ニ先制ノ位地ヲ失ヘリ、曩ニ韓官ノ屢バ我ニ對シテ入京ヲ緩ウセンコトヲ求メシハ

大ニ情由ノ有シヿ以テ察スルニ足レリ。　此日李祖淵來リテ其身講修從事官ヲ命ゼラレタルヿヲ告ゲ、但シ正官ハ金宏集ニ命ゼラレタリト雖モ、今趙寧夏ト共ニ清艦(威遠號)ヲ訪ヒテ未ダ歸ラズト云フ、書記官ヲシテ之ニ會セシメテ曰ク、今番事件至大至重、尋常公幹ノ比ニ非ズ、唯當ニ執政大臣ト議スベシ、講修官ノ如キハ其任ニ當ラズ、共ニ談ズルニ足ラザルナリ。

十七日、公使直ニ謁見センヿヲ求メシニ、伴接官來リテ答ヘテ曰ク、今明兩日ハ宮中祭式アリテ引見ニ便ナラズ、更ニ幾日ヲ待タレンヿヲ請フ。公使曰ク、今日殿下速ニ引見ヲ賜ハルニ非ズンバ、交際上ノ安危未ダ定マル所ヲ知ラズ、本公使旨ヲ奉ジ、來リテ大事ヲ理セントス、豈ニ一日モ徒消スベケンヤ、然レドモ今明兩日ハ姑ク貴意ニ隨ヒテ之ヲ待ツベシ、明後十九日ニ至テハ必ズ引見アランヿヲ望ム、若シ期ニ至リテ其命ナクバ、本公使躬ラ闕下ニ迫リテ之ヲ請ハンノミ、抑モ本公使コヽニ來ル、貴朝廷未ダ何ノ準備モアラズ、果シテ本公使ヲ欵接セラルヽノ意ナルヤ如何ト、歸リテ之ヲ報ゼシム。　十八日朝、書記官伴接所ニ至リテ謁見ノ期、明日ヲ空ウスベカラザルヲ談ジ、尹成鎭ニ迫リテ、政府ノ決ヲ取ラシム、李祖淵モ亦坐ニ在リ、曰ク、國太公ノ所ニ到リテ其由ヲ稟セント。　午後、廷臣趙秉鎬(先年遣日本信使タリ)來リテ慰問ノ王命ヲ傳ヘ、且ツ曰ク、我王明日引見セラレント欲セラルヽモ、不豫アリテ能ハズ、因テ明後廿日正午牌ヲ以テ引見アルベシト、又一日ヲ緩ウス。　此日朝、高島少將、仁禮少將(共ニ薩人)、及ビ海陸兵員(將士兵卒總計千百五十餘人ナリト云フ)到着ス。　十九日、李祖淵又來

リテ曰ク、國太公闕內ニ住セリ、一回公使ニ見エント欲スルノ意アリ、公使モ亦此意アラバ、僕宜ク之ヲ處スベシ。公使曰ク、國太公若シ見ントセバ、敢テ辭セズ。此夕李祖淵書ヲ寄セテ曰ク、明日謁見後、國太公一見ヲ願フ、僕之ガ引導ヲ爲スベシ。

二十日午時、伴接官迎ヘテ前導ス、我兵二中隊前後ニ分レテ護衛ス、公使ハ書記官ヲ伴ヒテ進ミ、敦化門ニテ下輿ス。

公使ト書記官ハ韓廷ヨリ出ダセシ腰輿ニ乘リ、衛兵左右ニ從フ、此行裝ヲ見ントテ京中ノ韓人ノ集リシ者幾千ナルヲ知ラズ、此時韓人ハ王妃ノ喪ニ服セルガ故ニ、上下一般白衣ヲ着シ、大道ノ兩側ニ羅列ス、街衢ニハ青衣黑笠ノ韓兵各〻二尺許モアルベキ竹扇ヲ持チ、見物人ヲ打チ廻リテ其雜沓ヲ制シタリ。

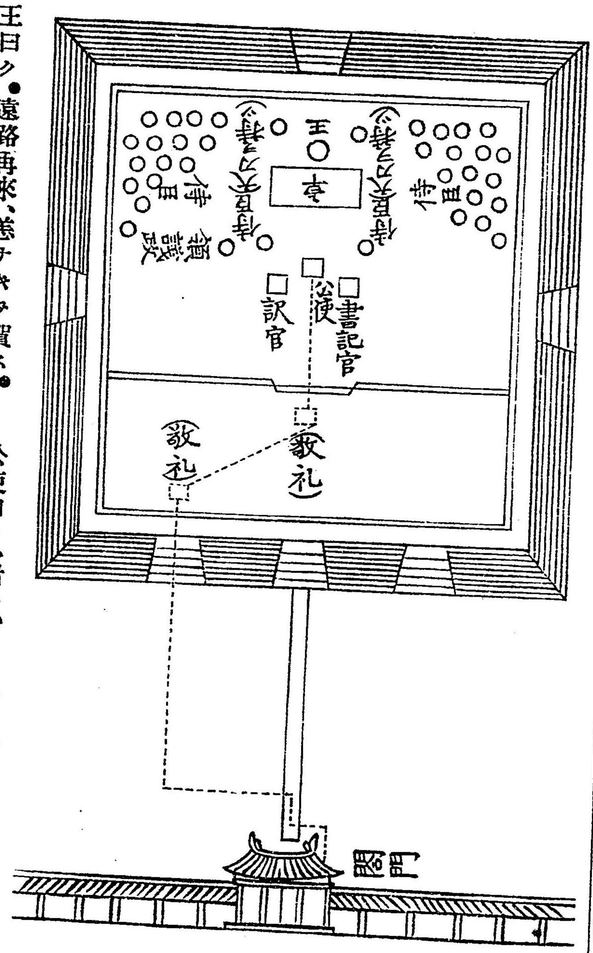
爰ニ伴接官及ビ差備官等出迎ス、肅章門ヲ過ギテ朝熙堂ニ至リ、左階ヨリ上リ、三揖シテ王坐ノ前ニ進ム、領議政、及ビ六曹判書(各省長官)、侍從、等左右ニ列立ス。

公使ヲ護衛シ來リタル兵士巡査等ハ始メ敦化門外ニテ撤(オト)シタルガ、後ニ門ヲ入リテ小川ノ傍ニ設ケタル幄舍ニ入リタリ。公使ハ朝熙堂ニ至ルノ閤門ヲ入リテ堂ニ入リ、書記官ト共ニ先ヅ外堂ニ入リテ敬禮シ、進ンデ內堂ノ入口ニテ又敬禮シ、再ビ進ンデ公使ハ中央ニ、書記官ハ右側ニ、譯官ハ左側ニ立ツ。王ハ公使ヲ離ルヽヿ二間許ノ處ニ坐ス、前ニ大卓アリ、卓ノ左右ニ一人ツヽ侍シ、各〻眞鍮ノ金具ヲ附セル朱塗ノ大刀ヲ執ル。領議政洪淳穆其傍ニ在リ、其餘ノ侍臣ハ皆ナ王ノ左右ノ脊後ニ列ス。

謁見式ノ狀左ノ如シ。

王曰ク●遠路再來、恙ナキヲ賀ス●

リ、使館ヲ焚キ、公使ヲ逐ヒ、恥辱ヲ我國ニ與フルヿ尤モ甚シ、理當ニ師ヲ興シ、以テ問フ所アルベクシテ、又恐ル和局一タビ破レテ、復タ補フベカラザルヲ、故ニ義質旨ヲ奉ジテ再ビ來リ、今方ニ貴朝廷ニ議スルアラントス、義質甚ダ恨ム、來リテ貴國ノ大喪ニ逢フモ、未ダ之ヲ奉弔スルノ期ニ及バザルヲ●　王曰



〔朝熙堂謁見式〕

公使曰ク、謝々●　去月廿三日ノ變、實ニ古今未曾有ノ事タ

ク、堀本中尉年來我兵事ニ盡力セシモ、不幸今回ノ凶變ニ罹レリ、深ク以テ憾トス●　公使曰ク、今我國受クル所ノ恥辱ヲ洗雪シ、且ツ善後ノ方法ニツキテ貴朝廷ニ求ムル所アリ、希クハ專對ノ大臣ヲ定メラレンコヲ●　王曰ク、領議政及ビ禮曹判書ヲシテ專對セシムベシ●　公使曰ク、既ニ之ヲ命セラレタリヤ●　曰ク、未シ●　曰ク、然ラバ、此冊子ヲ以テ之ヲ殿下ニ奉呈ス、義質ノ旨ヲ奉ジテ貴國ニ求ムル所即チ是ナリ、希クハ一覽ヲ經テ、專對大臣ニ、下命アランコトヲ懷中ヨリ要求个條書ヲ出シテ呈ス。王取リテ一覽ス（此時領議政ヲ顧ミテ、受ケテ然ルベキヤヲ諮ヒ、領議政ノ答ヲ得テ收受シタリ）。公使曰ク、兩國交際既ニ絕エントスルノ今日ニ當リテ、唯此要請ノ件アルハ、以テ舊好ヲ維持シ、和局ヲ保タントスルニ外ナラズ、之ニ對スル貴朝廷ノ決答ハ即チ交誼斷續ノ分ル、所ナリ、今ヨリ三日間ヲ期トス、庶クハ此期ヲ誤ラズシテ決答ヲ賜ランコヲ●　王曰ク、專對大臣（即チ領議政）ヨリシテ適應ノ回答ヲナサシムベシ●

右ニテ公使退出ヲ告ゲ、三揖シテ階ヲ下リ、閤門ヲ出レバ、李祖淵來リ迎フ、一門アリ延賢門ト云フ、門ヲ入レバ一堂アリ、大院君ノ居トス、堂三室ニ分ツ、奥一室ニ寢床ヲ設ク、中一室ニ茵ヲ敷キ、机ヲ置ク、表一室ハ從員之ニ居ル。公使階ヲ上リテ表室ニ入ル、大院君出デ、迎ヘ、公使ノ手ヲ執リテ中室ニ入リ、所設ノ茵上ニ坐セシメ、公使ニ謂ヒテ曰ク、今番ノ凶變、勢焰貴館ニ及ビ、愧悚ニ堪ヘズ●　公使曰ク、今番ノ事變、我國ノ凌辱ヲ受クルヿヨリ甚シキハナシ、一般ノ公憤殆ド制スベカラズ、然リト雖

モ、我政府猶ホ和局ヲ保チ、舊好ヲ維持セント欲シ、再ビ義質ヲ派遣シ、雪辱善後ノ方ヲ定メントスルナリ。又曰ク、閣下鎖國ノ說ア ル、之ヲ如何。　大院君曰ク、往年碑ヲ立テ、外交ヲ戒ム、當時洋人ノ所爲無道甚シキヲ以テナリ、今ヤ時勢前ト異ナリ。

公使曰ク、碑アリ猶ホ存ス、貴國今日ノ主義ニ障ナキヲ保タズ、宜シク之ヲ毀滅スベシ。　大院君曰ク、國ノ交ヲナス宜シク心ヲ以テ心ト交ルベシ、形ヲ以テナスベカラズ、碑ノ有無之ニ關セズ。　其他一二ノ應答アリ、公使暇ヲ告グ、大院君起チテ禮送ス。

公使ハ肅章門外內ナル兵曹ニ至リテ領議政洪淳穆ニ會シ、決答ノ期ヲ二十三日午牌ト定メ、且ツ曰ク、此期ヲ過ギテ回答ナクハ、朝鮮政府之ヲ拒絕シテ和協スルノ意ナキ者ト見做スベシ。領議政曰ク、都テ敎ノ如クスベシ。　公使歸舘ノ後、更ニ書翰ヲ以テ、派使謝過ノ儀ハ、素ヨリ要求ヲ俟タズシテ、朝鮮國ニ於テ爲スベキノ義務ナルモ、尋常信使ヲ派スルノ心得ニテハ不都合ナルヲ以テ、特派ニ大員ニ修國書ヲ以謝ニ日本國ノ一項ヲ注告ストノ趣ヲ領議政ニ照會セリ。　翌廿一日、朝鮮政府ハ三日ノ期ヲ延緩セント欲スルノ色アリ、因テ更ニ書ヲ以テ其期ヲ遷延ス可ラザルヲ照會ス、其際差備官玄昔運、高永喜來リテ書記官ニ會シ、三日ノ期ヲ緩メンコヲ求ム、書記官駁シテ之ヲ斥ク。　此夜領議政ヨリ派大員ノ注告ニ對スル回答來ル、其意本國事變ニ逢フ、寧ロ貴邦ヨリ使節ヲ受クルモ、我ヨリ之ヲ派スルノ理ナシ、先頃書契ヲ差出セシハ貴國人ノ損傷スル所アルヲ以テナリト、其意旨文辭トモニ頗ル妄慢ニ渉レリ。

二十二日、又領議政ヨリ書ヲ以テ今朝始メテ山陵看審討標ノ命ヲ受クタリ、往返數日ヲ費スベシ、歸來ノ上ニアラスンバ、談判ニ着手シ難シト云ヘリ、其文左ノ如シ。

照覆者、昨既奉晤、而今朝始承山陵看審討標之命、曉方發程、可費數個天矣、事係愼重、不敢暮刻是緩、而隣國大喪、貴下亦有致念諒之焉、肅此敬覆、

壬午七月初八日

領議政　洪淳穆

辨理公使閣下

是ニ於テ公使思ヘラク、夫レ朝鮮國王既ニ三日ノ期ヲ諾シ、專對ヲ領議政ニ命ジタルニ、今又命スルニ山陵ノ事ヲ以テシ、出デヽ他ニ往カシメ、兩國公幹ヲ理スルノ地ナカラシメ、期限ヲ徒空ニ歸セシムルニ至ル、其所爲專恣ニシテ、交際事務ヲ輕蔑スルノ甚シキ、皆ナ今番ノ事件ヲ藐視スルニ出ル者ニ非ズシテ何ゾヤ、既ニ事ヲ藐視スル以上ハ、終ニ舊好ヲ維持スルノ念ナキヿ知ルベシト。　乃チ高島、仁禮、兩

少將ト議シ、斷然京城ヲ去リテ仁川ニ歸ラントシ、申啓書ヲ作リテ其非ヲ鳴ラシ、以ヲ歸去ノ由ヲ報シ、別ニ領議政ニ寄スルノ書ト併セテ之ヲ領議政ニ送リ、書記官ニ命シ、館ニ留ルコト一兩日、以テ後事ヲ理セシムルコトセリ。

時ニ急報アリ、曩ニ本國ニ退還セシ淸國水師提督丁汝昌ハ鐵艦威遠號等四隻ヲ率ヰ、又濟物浦ニ碇泊セシ甲鐵二隻、其他汽船二隻(合計八隻)ヲ隨ヘ、コレニ六營ノ精兵(千百餘人乃至三千人ニシテ李鴻章部下ノ兵ナリト)ヲ載セテ今日南陽灣(ナムヤンダ)ニ着セリト。又道臺馬建忠ハ陸兵百人海兵五十人ヲ率ヰテ、廿三日ニ、公使ト引キ違ヒテ京城ニ入リタリ。馬ガ入京ノ時ハ上官ノ輿ニ乘リ、韓將之ガ前驅トナリテ警蹕シ、王宮ニ入レリト云フ。此報アリテヨリ我軍ハ韓廷ガ依違ノ返答ニ時日ヲ延ベシタルハ、全ク此兵ノ來着ヲ待チタル爲ナラン、思ヘバ惡ムベキ事ナリ、イザ支那兵ト共ニ擊チテ退クベシト人々憤激シ、中ニモ高島少將、堀江大佐、比志島少佐、瀨戸口大尉ハ退兵其機會ヲ失ヒタルヲ深ク遺憾トセリ。

翌廿三日朝六時、公使京ヲ發ス、兩少將モ亦去リテ濟物浦ニ向フ、公使ハ梧里洞(オウリトンダ)(又五里洞(トンダ)ニ云フ、洞トハ人家ノ稠密セル處ノ名ニシテ、日本ノ町ト云フニ同シ)ニ至リテ領議政ノ回答ヲ得タリ、然レドモ其辭意自ラ責ヲ取ルノ意ナク、爲ニ行途ヲ逡巡スベキニ非ザルヲ以テ、直ニ進ミ、夜十時仁川(インチエン)ニ至ル、此日屬從皆徒歩シ、上下甚ダ困憊シタルニ因リ、此ニ駐宿ス。

公使ノ一行ガ京城出發ノ際、人夫ハ聞ニ合ハズ、馬モ牛モナク(韓地ニテハ皆ナ牛ニ乘ル)、皆ナ徒歩シ、公使ノミハ韓廷ヨリ特ニ差出シタル腰輿ヲ用井タリ。京城ヲ引揚ルニツキテハ、夥多ノ人馬ヲ要スルコトナレバ、其場ニ差掛リテ不都合ノ無キ爲ニトテ、豫テ公使館ヨリ韓廷ニ照會シタルニ、言ヲ左右ニ托シテ之ヲ辭セリ。會計監督某ハ此報ヲ聞キテ、糧米百俵餘其外日用ノ陣具ヲ此儘棄テ措キテ、韓人共ニ取ラスルヨリモ、燒キ棄テントノ意見ナリシニ、少將高島ノ曰ク、日本兵ハ支那兵ニ逐ヒ立ラレテ、遠ク慮ヒ、兵糧其他ノ物品ヲ取片附クル暇モナクテ、燒キ棄テタリナド、後ニ云ハレンハ遺憾ナリ、陸兵一中隊ヲ輜重兵トシ荷物ヲ負ハセ、尙ホ人夫ノ不足ナラバ、錢ノ勢ニテ韓人ドモヲ集メヨトテ、其議ニ決シタリ。蓋シ韓人ハ錢ト云ヘバ水火ノ中ヲモ避クズシテ働クガ故ナリ。因テ平日京城ヨリ楊花鎭(ヤンホアヂン)マデ人夫ノ雇賃韓錢五十文(是モ相當ノ相場ニアラズ、韓人ノ相對ニテハ三十文位ガ常相場ナリト云フ)ナルヲ三倍シテ百五十文ツヽ與フルコトナリ、協同商會ノ某ニ此事ヲ托シタリ。某即チ南大門通リナル人夫ノ集會所ニ走リ往キテ、楊花鎭マデ百五十文ノ賃錢ヲ拂フベシ、錢ガ欲シクバ、早ク日本ノ陣所(イルポン)ニ來レト觸レ示セシニ、果シテ韓人多ク集リ來リタリ。サレドモ我ガ荷物ハ、糧米其他トモ、夥シキ數ナレバ、人夫尙モ引キ足ラザルヲ以テ、再ビ增シテ二百文ヲ遣ハスベシト告ゲクレバ、又々數百人群リ來リテ、後ニハ人夫ノ有リ餘ル程ニナリ、公館兵營トモ一物一品モ殘サズシテ引キ拂ヒタリ。楊花鎭ヨリ漢江(ハンカン)ヲ下リ、濟物浦マデノ運送船(三十石積程ノモノ)一艘ヲ雇ハントセシニ、船賃七十貫文(平生ハ六七貫文)ナリト云ヘリ、之ヲ三十掛(カケ)(當時ハ三十四五掛)ニシテモ、我ガ二百十圓トナレリ、如何ニ濟物浦マデハ二タ潮カヽリテ、船路ニ危險多シト云フモ、小船一艘ガ二百圓以上トハ非常ノ直段カナト、人々モ驚キタリ。總テ韓人ガ卑劣狡猾ノ手段ヲ運ラシテ日本人ヲ苦シメ、艱難ニ乘ジテ金錢ヲ貪レルハ此ノ類ナリ。

又一方ニハ書記官近藤ガ京城ヲ去ルニ當リテ、通路ニ出デ、罵リ、或ハ石ヲ投ズル者アリ、是レ日本人ガ支那兵ヲ怖レテ退去スル者ト想ヒ、俄ニ日本人ヲ侮ルノ意ヲ增シタルモノナリ。

翌廿四日、公使ハ仁川ヨリ更ニ書ヲ領議政ニ寄セテ再ビ、韓廷ガ今般ノ事躰ヲ輕視セシヲ責メ、其ノ京城ヲ去ルノ理由ヲ述ベ、之ヲ仁川府使任榮鎬ニ托シテ京城ニ送遞セシメタリ、此時府使ノ款接前ニ異ナラザリキ。　午後、府使ヨリ清官馬建忠ノ公使ニ面晤センガ爲ニ京城ヨリ馳セテ此地ニ來ルベキ由ヲ報ズ、因テ暫ク之ヲ待ツ、此夕馬建忠來リテ公使ト面談ス、馬ノ口氣頗ル居中停調ヲ爲サント欲スルノ意アリ、公使ハ之ヲ謝却シ、且ツ韓廷ノ亡狀ナルヨリ終ニ京城ヲ去ルニ至ルノ由ヲ略說セリ。○馬ハ尙ホ姑ク我行ヲ緩クセンコトヲ勸メ、且ツ其韓廷ノ內政ニ干涉スルト雖モ、友誼ヲ以テスルニ止リ、屬國ヲ以テ遇スルヲ爲サズ等ノ言ヲ爲シ、閑話數時ニシテ去ル。　翌廿五日、公使獨リ先ツ濟物浦ニ至リ、前ニ京城ヨリ着セル書記官幷ニ兩少將、高島、仁禮ト會ス、公使ハ又花島（ホアトウ）ニ往キテ馬建忠ヲ答訪ス、馬ハ直ニ京ニ歸リタリ、（此時淸官ガ大院君ヲ其國ニ拘引シ去リタルコトハ第四章ニ見ユ）。

公使ハ遂ニ歸朝ノ途ニ就キ、船中ニ入ル。○廿六日早曉、仁川府使ヨリ領議政ノ返書ヲ轉達ス、其意仍ホ自ラ其非ヲ護スト雖モ、亦頗ル協議ヲ希フノ意アルニ因リ、復書ヲ裁シ、爲ニ二日間船ヲ停メテ其來リ就クヲ容ルヽノ意ヲ示シ、亦之ヲ府使ニ付シテ轉遞セシムル、公使ノ停船ヲ喜ビ、即チ王旨ヲ以テ大員ヲ派スベキノ由ヲ報ズ。○午後三時、府使任榮鎬公使ノ乘レル比叡艦ニ來リ、國王ヨリ李裕元、金宏集ノ二人ニ命ジテ全權正副大臣ト爲シ、仁川ニ至リテ條款ヲ妥議セシムル旨ノ諭文ヲ傳フ。○夜十一時兩使來ル、辯論午前三時ニ及ビテ未ダ決セズ、兩使暫ク退キテ細議

ヲ盡シタル上更ニ來ラントヲ約シテ去ル。　廿九日午時、金宏集約ノ如ク來リ、李裕元ハ病ニ因テ來會シ難キ趣ヲ告グ、依テ金ト談判數刻ニ渉リタレドモ、其正使ナラザルガ爲ニ、專斷スルヲ得ザルヲ以テ、議又決セズ、公使則チ自ラ花島（ホアトウ）ニ往キテ李ニ會スルヲ約シ、午後四時、書記官譯官等ヲ伴ヒテ花島ニ至リ、李金兩使ト前議ヲ究論シ、終ニ談判妥結ヲ得テ歸ル。　三十日午時、李金兩使ト濟物浦ニ會シ、案件ノ約書（附錄第二號第三號）ニ蓋印シテ之ヲ互換シ、兩國ノ紛議茲ニ其局ヲ結ブニ至レリ（公使再渡以後ノ事ハ主トシテ談判手續書ニ據リ、幷ニ同行者某ノ筆記ヲ參取ス）。

此時公使ハ韓廷ニ對シ、夫ノ石碑ニ刻スル所ノ『洋夷侵犯非戰則和主和賣國戒我萬年子孫』ノ語ハ僅々數言ニ過ギズト雖モ、之ヲ國中ニ建テヽヨリ茲ニ十年（第四章）、其國民ニ向ヒテ攘斥ノ精神ヲ鼓舞激勵スルノ効力ハ決シテ鮮少ニアラザルモノアリ、外國トノ交誼ヲ倍ス親密ナラシメンニハ此碑ヲ除カザルベカラズト勸告シタルニ、韓廷竟ニ其勸告ニ應ジテ此碑ヲ毀チ、外國人ト親誼ヲ厚クスベシトノ告諭ヲ國中ニ發シタリ。

公使ハ談判ヲ終リテ直ニ朝鮮ヲ發シ、九月廿八日橫濱港ニ着ス、官民ノ歡迎甚ダ盛ナリ。○新橋ニ至リテ宮中ヨリ馬車ヲ賜ヒ、近衛騎兵半小隊路次ヲ警衛ス、公使花房義質ハ宮城ニ至リテ拜謁シ、韓廷ト談判ノ顚末ヲ奏上ス、叡感ナノメナラズ、左ノ敕語ヲ賜ヒヌ。

汝義質朝鮮京城ノ變ニ遭遇シ頗ル艱難ヲ極メ再ビ訓令ヲ帶ビ彼地ニ渡航反復辯論事和平ニ歸ス此レ

汝義ヲ執テ撓マザルノ致ス所朕深ク之ヲ嘉尚ス
義質ハ謹ミテ答詞ヲ奉リテ退ク○此日功ヲ以テ勳二等ニ進メラレ、年金五百圓ヲ賜ハルノ命アリ、又厳旨ヲ以テ鮮魚一臺酒一樽ヲ賜ハリタリ●

此事件ニ關シテ日本政府ノ費シタル金額ハ總計凡ソ百四十九萬圓ニシテ、其最モ多キモノハ兵器、彈藥等ノ購買、軍艦ノ航海、糧食及ビ被服、汽船雇入ニ關スル費用、其他内外派遣旅費及ビ電信料ナリ●

亂治マルノ後(此年九月)朝鮮政府ハ約ヲ履ミテ亂徒ノ處刑ヲ行ヒ、前武衛大將李昰夏、御衛大將申正熙ヲ減死島配ニ處シ、石塊ヲ以テ陸軍中尉堀本禮造ヲ打殺シタリト云フ者一人其他日本人ヲ殺害シタル者二人ヲ梟首ニ處シ、又作亂ノ巨魁ヲ獲ンガ爲ニ百金ヲ懸ケ搜索シ、遂ニ八名ヲ得タリ、孰レモ軍人ニシテ、亂ヲ唱ヘ、逆ヲ逞クセシ首魁ナリトテ、十月彰義門内軍器寺ノ前ニ於テ、『凌遲處死』ノ刑ニ行ヘリ(凌遲トハ手足ヲ切リ首ヲ刎ルノ嚴刑ヲ云フ)、其死骸ヲ三日間曝シ、一人毎ニ左ノ如ク記シタル木札ヲ下ケ置キタリ●

謀反不道(罪人姓名)、當日軍器寺前路、凌遲處死事、

是ニ於テ亂徒ノ處分ヲ了リ、追捕ノ令解ケテ、逃竄ノ軍民稍ク歸來セリト云フ●

亂起ルノ前月、忠清道ノ儒生白樂寬ト云フ者國王ニ上疏セントシテ捕ヘラル、其文頗ル奇怪ニシテ、該國儒生ノ思想ヲ概見スルニ足レリ、因テ今長文中ヨリ數節ヲ摘錄スルコト左ノ如シ(往々字句ノ解シ難キ所アレドモ、總テ原文ノ儘ナリ、文ヲ略スル處ニ○圈ヲ加フ)○

夫倭自壬辰敗販之後、抱冤積忿、十年磨一劍、十年修一藝、商船賈船、無所不至、援結諸洋、誘誘中國、窺我有釁、若干有年矣、觀我朶頤、而莫得其志者、我國本以忠孝爲甲兵、仁義爲城郭、非智力之所可犯也。獨衣洋衣服洋服、枝倭技學倭學者、眩惑心目、顚倒胃暉、取夷狄之法、而加之先王之敎之上、據義質之官而加之群臣之列之右、臣乃今知殿下之本心、不在此而在彼、不斥邪而斥正。往在高麗以隋煬之强唐高之盛、俱不免艮欠而歸、至于本朝、日本屢入寇、而鞫敗走、及至宣祖中年、又有大入寇之徵、李班趙憲俱陳備之策、而朝廷不用、後及至壬辰、秀吉以百萬之衆、蔽海而來、燒我宮室、辱我陵寢、嗚呼痛哉、尙忍言哉。車駕西遷、將欲內附、幸賴皇明之拯救、而亦有臣李惶禍、李德馨、李舜臣、郭再祐等、皆中興輔佐之最著也、淪介月仙以遐鄉賤妓、猶有向國之誠、能斬虜賊之首、摧其前鋒、維政靈圭以山中僧徒、亦知報國之心、以一當百、越海討倭、歲貢女皮三百、欲以滅種、後以三百人、代番菜館。今者義質之智謀勇略、不及隋煬、唐高、秀吉、胡汗遠矣、而朝廷之主和者、皆壬辰功臣之後、丙子斥和之孫、獨不念厥祖之被堅執銳、冒刃踏棘以佐中興之事、乃陷於賂遺、以無稽之言不詢之謀、間人骨肉、亂人國家。今聞魚允中使于中國、請以五年一貢、此果加一層別親之事乎、三百年服事之例、一朝倍之、中國得無搆釁之理乎、舊有仇讎之嫌、而今有亘古之相依、蓋義質欲舉兵入寇者久矣、畏中國復如大明之來救。云々●

論旨寔ニ抱腹絶倒スベシ、然レドモ之ヲ我國嘉永年間ノ攘夷論ニ迄比セバ思ヒ半ニ過ギンノミ●

朝鮮ノ事件、決ヲ兵力ニ取ルニ及ハズシテ、此結果ヲ得ルニ至リシハ、邦人多ク之ヲ稱賛セルノミナラズ、外人モ亦其處分ノ當ヲ得タルヲ稱賛セル者アリ、「ガゼット」新聞ノ如キモ、日本政府ノ處置ノ迅速ニシテ、公使花房ノ談判ノ適當ナリシヨリ、平和ノ局ヲ結ビタルヲ劇賞シタリ●

十五年八月申報(上海刊行)ニ論高麗亂事ノ一篇ヲ載ス、朝鮮問題ニ關スル支那人ノ意向ヲ見ルニ足ルモノアリ、即チ左ニ其要略ヲ抄錄ス●

日本ノ高麗ニ於ケル、其心ヲ處キ、慮ヲ積ム、朝夕ニアラズ。日人即チ勉強シテ高麗ノ其藩服ニ附セシコヲ欲ス譬ヘバ春秋ノ鄭ノ如シ。晉ニ從フ分ノ應ニ爾ルベキ所トス、楚ニ從フ、力爭フ能ハザルタメナリ。故ニ日本能ク高麗ヲシテ屈服セシムトイヘドモ、必ズ高人ヲ禁ジテ中國ニ事ル勿ラシムルヿ能ハズ。日本能ク高麗ニ通商ス、又高人ニ強テ他國ト通商セシメザルノ理ナシ。而モ日人ノ高ニ在ルモノ則チ已ニ隱々諸國ノ制ヲ受ク。但高麗近日ノ情形君亡ビ國破ルヽニ同シ、亂人猖獗、尙ホ罪ヲ聲ヲシ討ヲ致スノ人ニ乏シ、而シテ日本兵船已ニ精兵ヲ滿載シテ前往ス。彼日人能ク間ニ乘ジ深ク入ラザラン乎、如シ其亂ヲ討スルヲ以テ名トシ、盛兵岸ニ登リテ亂黨ヲ搜捕シ、其國ヲ定メテ其君ヲ置カバ、已ニ於テハ則チ雖ヲ復シテ恥ヲ雪キ、高ニ於テハ恩ヲ市リ以テ威ヲ取ル、此後日人大ニ高麗ニ造スアリ、通商ノ事宜ク將ニタヾ日人ノ命是レ聽キ、而シテ諸國ミナ其後ヘニ居ルベシ、固ヨリ高人ノ利ニ非ズシテ、亦中國ノ禍ニ非ズ云々●

又籌高策ノ一篇アリ、其要畧左ノ如シ●

日人疆ヲ開キ土ヲ拓クノ志之ヲ蓄ルヿ已ニ久シ、即チ往年ノ臺灣ニ於ケル、及ビ琉球ヲ夷滅スルニ事ノ如キ已ニ概見スベシ、臺灣ノ役、日ヲ琉球難民ノ爲ニ復仇スルニ藉キ、琉球ヲ夷滅スルヿハ則チ又謂フ、向ニ日本分支ニ係ル、故ニ當ニ併入ニ歸スベキノミト、其實ハ則チ皆ナ其土地ヲ利スルノミ、台灣和議ノ後、琉球卒ニ郡縣ヲ成ス、琉球僻壤彈丸ノ地ヲ以テ尙ホ之ヲ占有セント欲ス、而ルヲ況ヤ高麗ヲヤ。然レヒモ中國ノ必ズ爭フ所トナリ、而ノ泰西各國既ニ新ニ高麗ト約ヲ立ツ、又豈ニ肯テ其殄滅ヲ坐視センヤ、日人瑕ニ乘ジ隙ヲ踏ミ、志ヲ高麗ニ肆ニセント欲スルモ、恐クハ尙ホ顧慮スル所アラン、夫ノ高麗亂黨ノ若キ、既ニ毒ヲ日使ニ逞クス又豈ニ肯テ心ヲ日人ニ降サンヤ。日人又威ヲ公債ヲ懷キ、

大ニ上下一德ノ風アリ、勇ヲ皷シテ前ム、士氣百倍ス、中國ニシテ自ラ以テ高人ノ命ヲ制スルヲ審ニセバ則チ先ヅ行テ日兵ヲ止住シテ後徐ロニ調停等ノ事ヲ爲スベシ。日人高麗ノ罪ヲ問フヲ謂テ無禮ト爲スヲ得ズ。則チ此ノ時ニ當リ惟日本ト力ヲ合セ以テ高亂ヲ靖ズルノ一法アリ、日人ト相爭ハズシテ、偏ニ日人ト相合シ、其勢ニ因テ之ヲ利導ス。兩國心ヲ合セ共ニ高亂ヲ平グル掌ヲ反ヘスガ如キノミ云々●

當時淸官ガ諺文(朝鮮字)ニ翻譯シテ國內ニ配布シタル『易言』中ノ海防篇ニモ日本ヲ誹謗シテ『蕞爾タル日本、虎視耽々、既ニ琉球ヲ夷ゲ、更ニ高麗ヲ窺フ云々』トアリ。以テ淸人一般ノ日本ニ對スル意思ヲ察スベシ●

明治十五年京城ノ變、我ガ公使館ヲ燒カレ、我ガ國旗ヲ擊タレ、我ノ凌辱ヲ被リシヿ焉ヨリ甚シキハナシ、然ルニ此機ニ乘ジテ大ニ爲スヿアラズシテ姑息ノ處置ニ終リシハ、實ニ惜ムベキヿナリ●

◎第七章。　朴泳孝等日本ニ使ス＝償金始末＝日本政府ノ對韓政略

ノ變轉（金氏日錄）＝清廷ノ對韓政略。

十五年十月、韓廷條約ニ從ヒテ謝罪使ヲ日本ニ派遣ス、十九日正使朴泳孝（時ニ二十二歲）、副使金晩植、從事官徐光範ノ三名參內シ、新御殿ニ於テ拜謁シ、國書幷ニ沁產ノ紋席、麗史提綱一部（大本三十三冊）、高麗瓷器、銀盤床一具ヲ奉呈ス、謝罪狀モ此時奉呈シタリト云フ。此日、同行閔泳翊（ミンイエンイク）（宣惠堂上《大藏大臣》閔台鎬ノ子ニシテ王妃ノ侄ナリ）、金玉均（キムオクキン）、及ビ李福煥ノ三名ニモ內謁見ヲ賜ハリタリ。

朴泳孝（パクイエンホウ）初メ特命全權大使ヲ命セラレシガ、登程ノ前、公使花房ノ勸告ニヨリテ大使ヲ大臣ト改稱セリ、蓋シ大使ハ公使ノ上ニ位スルガ故ニ之ヲ最高委員トモ云フベキ全權大臣（或ハ之ヲ二等使ニ列ス）ノ地位ニ改メ以テ清國（朝鮮ヲ屬邦視スル）公使ト同席スルニ當リテ議論ヲ避ケシムルガ爲ナリシナラン（一說ニ國書捧呈ノ後、一等使ノ位ヲ辭シテ二等使ノ列ニ就キタリト云フハ誤傳ナルベシ）。

朴東京ニ入ルノ後、各國公使ト接見シ、各公使ヲシテ朝鮮國亦此人アルヲ知ラシメタリ。初メ各國朝鮮ト條約締結ノ事アルニ當リ、朝鮮國ヲ認メテ純然タル獨立國トナスカ、將タ清國ノ屬國トナスカト云フノ疑問起レリ。英米公使之ヲ朴ニ質サントスルヤ、朴疾クニ此議アルヲ聞知シ、乃チ金晩植及ビ當時最モ勢力アリタル閔泳翊（ミンイエンイク）ヲ招キテ斷然獨立國ナリト答フベク、如何ナル場合ニ於テモ之ト齟齬スルガ如キ

言ヲナスベカラザルヿヲ說クリ、然レドモ閔ハ却テ清ヲ恐レテ清ノ屬國ナリト答フベシト勸メ、金モ亦閔ノ權勢ヲ恐レテ之ニ附和ス、是ニ於テ一行波瀾ヲ生ジテ相和セザリシト雖モ、朴ハ斷乎トシテ動クヿナク、獨立國ナリト答ヘシヨリ、英公使「パークス」米公使「ビンアム」ヲシテ此疑ヲ解キテ始テ獨立國タルヿヲ承認セシメタリ、各公使因テ之ヲ本國政府ニ通知シ、遂ニ條約ノ批准ヲ得ルニ至レリ。此一事タル局ヲ樽俎ノ間ニ結ビシヲ以テ、朝鮮人スラ之ヲ知ラザルモノ多シ（朴泳孝ノ履歷ハ第十四章ニ載ス）。

條約ニヨリテ韓廷ヨリ日本ニ致スベキ償金五十萬圓ハ五个年賦ヲ以テ完送スベキノ約タリシニ、朴泳孝ノ日本ニ來シヒ更メテ十个年ヲ以テ完償ノ期トセラレンヿヲ乞ヘリ、日本政府ハ其請願ヲ容レテ、每年五月十一月ノ兩度ニ二萬五千圓ヅヽ、元利收受スベキヿニ定メ、此年十月廿九日ヲ以テ其旨ヲ決答セシト云フ（此年九月十八日ノ字林滬報《上海刊行》ニ『高廷ハ中朝ニ向ヒ東洋銀餅五十萬元ヲ商借シテ日本ニ償フ』トノ風說ヲ記セリ）。　爾來朝鮮ハ大ニ其國ノ財政ノ困難ヲ究ムルニ關ラズ、十五年ニ五萬圓、十六年ニ五萬圓、計十萬圓ヲ拂ヒ込ミ、十七年末ニ於テモ、五萬圓ヲ拂込ムベキ豫定ナリシニ、十七年十一月ニ至リ、日本公使（竹添進一郎）ハ旨ヲ承ケテ此償金未收ニ係ル額ヲ朝鮮ニ還附シタリ。其韓廷ヘノ照會書中ニ『本大臣歸任陛辭ノ時陛深ク大朝鮮國ノ大君主宇內ノ大勢ヲ洞察シ、制度ヲ更革シ、政敎ヲ作新シ、宵肝勵精以テ開明ノ治ヲ圖ルヲ喜ビ、茲ニ塡補金五十萬圓內四十萬圓、ヲ將テ朝鮮國ニ還送ス、望ムラクハ此ヲ以テ凡開明ノ用ニ資

スルニ裨補センコトヲ、汝往キテ之ヲ傳ヘヨト、我カ皇帝ノ聖諭ヲ奉シ、本大臣前ニ大君主ニ謁見シテ之ヲ面奏セリ云云』ノ文アリ、韓廷之ニ對シ書ヲ以テ謝意ヲ表セリ。日本政府ノ厚意ハ此ニ止マラズ、是ヨリ先數月、小汽船ヲ韓廷ニ贈與シ、海軍機關士ヲシテ楊花津（ヤングホアヅイン）ニ於テ其運用法ヲ韓人ニ敎ヘシムル等、朝鮮ニ對シテ頗ル勉ムル所アリシナリ。

朴泳孝ノ日本ニ使スルヤ、金玉均、閔泳翊、及ビ洪英植（ホンイエンヂク）（領議政洪淳穆ノ子）、徐光範等前後ニ日本ニ至レリ、此朴、金、洪、徐ノ四人（後ノ所謂日本黨）ハ從來閔族ノ施政ヲ好マズ、且ツ常ニ閔族ト相通ズル淸廷ノ干涉ヲ憤リ、其東京ニ來リシ後、廣ク朝野ノ政士ト交リテ稍ヤ世界ノ大勢ヲ悟リ、國事ヲ以テ自ラ任ゼント欲スルノ志アリ、是ヨリ專ラ朝鮮獨立ノ說ヲ唱ヲ、外務大臣井上某金朴ト會見シテ密ニ相結托シ、爲ニ頗ル謀ル所アリ、民間ニ在リテハ、後藤象二郎、福澤諭吉等之カ爲ニ周旋スル所アリ、竟ニ金、十七萬圓ヲ橫濱正金銀行ヨリ貸付スルコトナリ、又新聞ヲ發刊シ銃兵ヲ訓練スルノ目的ヲ以テ邦人數名ヲ雇用セシムルノ計畫ニテ、既ニ國王ノ招聘書ヲ草セントシタル者アリシカ如ク、其實行ヲ見ズシテ止ミ、朴ノ歸國セシヤ、前二人ノ門下生牛場某、井上某、及ビ松尾某等ヲ同伴セリ。一行ノ京城ニ至リシハ十六年一月ニアリ。同時竹添進一郎（熊本ノ儒士）駐韓辨理公使ニ任ゼラレ、旨ヲ含ミテ任ニ赴クリ、是レ實ニ帝國政府ノ對韓策（巧拙ヲ問ハズ、策ハ則チ策ナリ）一變ノ端緒ヲ開クルモノナリ。

朝鮮ノ借入金ニツキテハ、後ニ第一議會ニ於テ、衆議院議員中ヨリ政府ニ質問セシ者アリ、曰ク。

明治十五年十二月、橫濱正金銀行頭取小泉信吉ハ金十七萬圓ヲ朝鮮修信使朴泳孝ニ貸シ、外務卿井上馨、視察員金玉均共ニ見證人タリ、當時朝鮮政府ハ釜山、元山、仁川ノ稅關收入ヲ抵當トスルコトヲ約束セシニ、其後朝鮮政府ハ更ニ銀二十萬兩ヲ支那招商局ヨリ借リ、亦タ三所稅關ノ收入ヲ抵當トシ、今現ニ支那政府ノ三所稅關ヲ監督スルヲ見ルニ至レリ。

（要點）支那政府ノ稅關ヲ監督スルハ之ヲ抵當トナシタルノ故ニ由ル歟、正金銀行ニ先取ノ權利アルニモ拘ハラズ、日本政府ノ之ヲ爭ハザルハ此ノ如キ國民ノ權利ニ關係アル事柄マテ政府ノ保護セラレザルベキ歟。

外務大臣（靑木）ハ之ニ答辯書ヲ與ヘテ曰ク。

朝鮮政府ガ正金銀行ヨリ金員ヲ借入レシ時ノ證人ハ井上馨伯ニアラズ、該金員ハ年々正金銀行ニ返却シ居レリ、仁川、釜山、元山三稅關收入ヲ右金員ノ抵當トナセシニアラズ。

右三稅關ハ支那政府ニ於テ監督スルニアラズ、稅關吏員ノ中ニモ職ヲ支那政府ニ奉ゼシ者アリト雖モ、現時ハ純然タル朝鮮政府ノ官吏ナリ。

以テ此借入金ト政府トノ關係如何ヲ察スベシ（第十六章參看）。

明治十八年朝鮮政府ノ負債現額ハ殆ド五十萬圓ニ達シ、內廿一萬兩ハ支那招商局ヨリ、十七萬圓ハ日本正金銀行ヨリ借入シ、二萬五千圓ハ日本人ヨリ船舶機械買入ノ未償額、其他ハ支那及ビ英米人ニ對スル定期船保護金幷ニ十七年事變ノ損害償補金等ニ屬セリ。

朴金等歸國以來、韓廷ニ於クル朴金等所謂日本黨ノ勢力ハ極テ振ハズ、朴ハ閔族ノ爲ニ廣州留守ノ官ニ遷サレテ京城ヲ去リ、金ハ再ビ日本ニ赴キ、洪、徐、ノ諸人亦爲ス所ナク、雇用セラレタル邦人ハ時

日ヲ空過スルニ堪ヘズシテ、在留僅ニ四ケ月ノ後、一人ノ外、悉ク歸朝シ、日本人ノ手ニ成リタルハ僅ニ漢城旬報ノ發刊ノミ（初號ノ發刊ハ十六年十一月ニアリ）●

金玉均草スル所ノ『甲申日錄』一篇アリ、十七年ノ事變前ノ情況ヨリ事變ノ實狀ヲ記スルニ頗ル詳ニシテ、大ニ參照スヘキモノアルヲ以テ、本文ト重複スル所アルモ、敢テ漫ニ之ヲ刪除セズシテ、逐次揷錄ス、但一人一個ノ私事ニ止マルモノハ煩ヲ厭ヒテ僅ニ之ヲ削リタル所アリ、原書眞文、今邦文ニ譯シタルモノヲ錄ス（日錄中ノ原註ハ單括弧、追加解註ハ重括弧ヲ以テ區別ス）●

（金氏日錄一）開國四百九十年辛巳（明治十四年）十二月、我ガ大君主ノ命ヲ奉ジ、出テ、日本ニ遊ブ。翌年壬午六月、歸國ノ途次船赤馬關ニ泊シ、始テ本國ノ變事（即チ大院君ノ變ナリ）ヲ聞キ、日本公使花房義質ト同船シテ仁川ニ到ル。亂稍平ギ、公使ヲ日本ニ派遣スルニ當リ、予ニ充ツルニ是ノ任ヲ以テセント欲ス、予固ク辭ス、因テ錦陵尉朴泳孝ヲ擧ゲ、主上予ガ暫ク日本ニ遊ビ稍情況ヲ知ルヲ以テ、朴君ト共ニ往キ、其顧問タルコトヲ命ズ、予復タ辭スルコト能ハズ、八月再ビ日本ノ東京ニ到ル、時ニ日本政府方サニ朝鮮ニ注目シ、視テ獨立國ト爲シ、公使ヲ待ツコト頗ル慇懃ナリ、予其實心實事ヲ察シ、仍テ朴君ト議シ、遂ニ意ヲ傾ケテ日本ニ依賴ス。而テ我國新ニ變亂ヲ經タルヲ以テ經用殆ド竭ク、故ニ公使ノ來ルモ亦優カニ盤纏ヲ齎スコト能ハズ、切ニ日本外務卿井上馨ニ請ヒ、僅ニ十二萬弗ノ金ヲ橫濱ノ正金銀行ニ借リ、以テ恤金ヲ償却シ、兼テ諸費ニ資セリ、但其時公使國債委任狀ヲ携帶セズ、頗ル困難ヲ覺ヘタリ（日本政府ノ特誼ニ依リテ貸借ノ事僅ニ整フ）。朴君事ヲ竣ヘテ復命ス、予ハ則チ姑ク日本ニ留リ、更ニ日本ノ事情及ビ天下ノ形勢ヲ探ルベシトノ命ヲ承ケ、爲ニ留マルコト數月●

此時ニ當リ、日本政府酒烟草ノ稅ヲ加ヘ、以テ銳意陸海軍ヲ擴張ス、予一日外務卿ヲ訪フ、語次井上言フ、今我國軍備ヲ擴張スルハ獨リ我國ノ本ヲ固ムルノミニ非ズ、實國獨立ノ一事ノ爲ニモ亦タ注意スル所アリト。概テ日本政府ノ趣向此ノ如シ、予又日廷當路ノ諸人ト時ニ東洋ノ事勢ヨリ以テ我國財政ノ困難振作スルニ由ナキヲ論及ス、諸君均シク曰ク、若シ朝鮮政府ニシテ國債ヲ與スヲ謀ルノ委任狀アラバ、事以テ成ルベシト、予遂ニ意ヲ決シテ歸國ス（癸未五月）●

時ニ趙寧夏清國ヨリ德人穆麟德（モルレンドルフ）ナル者ヲ雇ヒ來ル、外洋人ノ雇用之ヲ始トス、閔泳穆、閔泳翊ノ輩之ニ追附シ、是ニ藉リテ己ヲ利スルノ計ヲ謀ル。予穆ト同シク外衙門ニ出仕ス、時ニ其言論行事ヲ見ルニ、頗ル疑惑ニ堪ヘザルモノアリ。此時ニ當リ當五當十ノ錢貨叅鑄ノ論アリ、清將吳長慶其端ヲ肇メ、閔台鎬、尹泰駿ノ輩其事ヲ主張シ、君主ヲ欺誣シ其計幾ド行ハレントス、予諸閔及ビ尹泰駿ト上ノ前ニ面爭スルコト屢次、書ヲ以テ建白スルコト幾十度、大臣ヨリ以下宰輔（即チ諸閔）ノ間ニ至ル、苦口角爭幾ト唇舌ヲ敝ル。閔泳翊竟ニ奏シテ曰ク、穆麟德ハ即チ外國人ニシテ、必ズ政治學問ニ優ナラン、宜シク貨幣ノ事ヲ以テ質問スベシト、上命シテ金玉均ト合議ノ以テ奏セシム、閔泳翊乃チ予ト穆ヲ閔家ニ招キ、遂ニ貨幣ノ事ヲ論ズ、其說甚ダ長シ。穆曰ク金銀貨幣均シク鑄造スベシ、今經用尤モ急ナリ、即チ當五當十乃至當百宜シク叅鑄シテ以テ目前ノ急ヲ救フベシ、少シモ弊ナシト。予乃チ之レヲ駁シテ曰ク、君既ニ歐洲人タリ、財政上ニ於テ應サニ見聞スル所アルベシ、而ラ今其論ヲ聞クニ、實ニ訝惑極レリ、如シ貨政ヲ造次ニスルハ、即チ國ノ鴆毒タルヲ知ラザルナラバ、是レ無學無識ナリ、如シ其弊アルヲ知ルモ、徒ニ苟モ人言ニ循フヲ以テ重シトセバ、是レ心術不正ナリト。辯爭半日ニシテ而テ歸ル、予即チ上ノ前ニ詣リ、具ニ實狀ヲ以テ聞ス、上遂ニ予ガ奏ヲ允可シ、三百萬圓ノ國債委任狀ヲ以テ、予ニ授與ス、眷托特ニ重シ（時ニ米國公使「フート」來朝ス、遊學日本生徒尹致昊通詞トシテ到ル。尹致昊日本東京ヲ發スルニ臨ミ、外務大輔吉田清成ヲ見ル。吉田曰ク、君予ガ言ヲ領シテ金玉均ニ傳ヘヨ、若シ國債委任狀ヲ得來ラバ大事成ルベシ、是レ忽ニスベカラズト。予遂ニ此意ヲ以テ上ニ告ク、上甚ダ之ヲ喜ブ）●

然ルニ諸閔輩穆等ト符同シ、百方之ヲ沮礙シテ至ラザル所ナシ、唯ダ上ノ

心既ニ堅ク定マル、彼輩以テ間ヲ伺フニ由ナシ、予再ビ日本ニ渡ルノ計ヲ決ス、時ニ竹添進一郎日本公使ヲ以テ京城ニ駐劄シ、予ト交リ正ニ厚シ、穆ノ外衙門ニ出仕セシヨリ、穆時ニ竹添ト過從ス、是レヨリ日ニ竹添ノ予ヲ疎ンジ、予ヲ疑フヲ見ル。予發スルニ臨ミ、竹添ヲ見テ、穆ノ信ズベカラザルヲ言フ、竹添大ニ慍ルノ意アリ、深ク以テ然ラズト爲ス。予遂ニ陛ヲ辭シ、復タ東京ニ到リ（予發スル後、諸閔遂ニ上ノ心ヲ誣譖シ、乃チ當五錢ヲ鑄テ布行ス、其弊日ニ滋ク、民幾ド保ツ能ハズト云フ）初ニ外務卿井上馨ヲ見ル、其言辭氣色頓ニ前日ニ異ナリ、予ヲ疑忌スルヿ並ビ至ル、予明ニ竹添ガ穆閔ニ誣譖セラレ、已ニ報告スル所アルヲ知ル（聞ク、竹添謂フ、金玉均ガ持スル所ノ委任狀ハ即チ僞物ニシテ、信ヲ取ルベカラズト）、然ルニ日本政府ノ情況ヲ概論セバ、獨リ竹添ガ反間ヲ作セシ爲ノミナラズ、數月ノ間ニ日本政府政署ノ趣向頓ニ變ジ、朝鮮ニ向フテ姑ク手ヲ斂メテ、動カザルノ方針ヲ執レルナリ、予既ニ其實況ヲ知ル、因テ呶々辯ヲ爲サズ、而テ向日ノ意ヲ傾ケテ手ヲ日本ニ藉ルノ策予歸リテ君主ニ告ゲ、政府ニ告ゲタルモノ、悉ク誣罔ノ科ニ歸スルニ非ルハナシ、然レドモ勢復タ奈何ンセン難シ、即チ實狀ヲ擧ゲテ之ヲ米國公使「ビンガム」ニ議シ、其周旋ヲ得テ、横濱在留ノ米國商人「モフス」ナル者ヲ以テ米國乃至英國ニ派シ之ヲ謀ル、然ルニ諸國未ダ朝鮮ノ如何ナル國ナルヤヲ知ラザルガ爲ニ事意ノ如クナル能ハズ（聞ク日廷之ヲ沮礙シ、且ツ穆輩京城ニ在リテ英商輩ト多方之ヲ沮礙セシト云フ、然レドモ是レ深ク信ズルヿ能ハズ）、「モフス」中途ニシテ歸リ來ル、已ムヿヲ得ズ、遂ニ日本第一國立銀行濫澤榮一ニ向ヒテ十萬或ハ二十萬圓之ガ貸與ヲ爲サンコトヲ謀ル、然レドモ亦タ外務卿ノ許サヾルガ爲ニ成ラズト云フ（聞ク日廷ハ金玉均、朴泳孝輩ヲ以テ輕躁浮薄ニシテ、事ヲ議スルニ足ラズト爲スト）、予即チ國ニ歸ル（甲申三月）。時ニ竹添亦暫ク歸國シ、島村久公使ノ事ヲ代理シ、種々懇意ヲ予ニ致ス、予既ニ日本政府ノ情況ヲ知ル、故ニ初ヨリ與ニ深ク關係ヲナサズ。

時ニ閔泳翊出デヽ、米國ニ使シ、轉シテ歐洲ニ遊ビテ歸ル、意頗ル恣横、屢〻建白スル者アリ、其中

予ノ贊成スル者アリ、又辯駁スル者アリ、閔遂ニ予ニ反對スルノ意アリ、予深ク其鋒ヲ避ク、之ト爭ハズ、而テ時局ヲ概論スルニ、閔台鎬、閔泳穆、閔泳翊、閔應植ノ四人ハ即チ閔姓ノ權力ァル者ニシテ、時々權ヲ爭ヒ、其勢相容レザル者アリ、李祖淵、韓圭稷、尹泰駿輩ノ如キハ勢ニ乘ジ、時ニ隨ヒ、權力多キ者ニ諂附シ、以テ自ラ計ヲ得タリトス。時ニ當五錢ノ獎下ニ生ジ、民日ニ困ミ、國勢月ニ縮マリ、殆ド支フベカラズ、上甚ダ之ヲ憂ヒ、時ニ予ニ謀ル所アリ、諸閔輩及ビ當初其事ヲ主唱セシ者自ラ其失策ヲ愧ヂ、屢〻其獎ヲ救フノ方ヲ思ヒ、策ヲ穆ニ問フ（予ガ歸國ノ後、勢ヒ穆ト外衙門ニ兩立スルヿ能ハズ、時ニ議ノ合ハザルモノアラバ爭辯シテ已マズ、稅關ノ一事穆ノ失著極テ大ナルヲ以テ、予時ニ之ヲ論辯面駁ス、穆亦愧ヂテ而テ之ヲ惡ム、竟ニ協辨ノ職ヲ辭退スルニ至ル、是ヨリ後予ヲ含ムヿ仇讐ノ如シ）、穆即チ一計ヲ生ジ、諸閔ノ間ニ仲裁ス。其言ニ曰ク、今朝鮮ノ爲ニ害ヲ除クハ當五ノ錢ニ非ズ、宜ク急ニ先ヅ金玉均ヲ除キ去ルベシ、百事君主ヲ誣譖シ、害ヲ諸君ニ爲スモノハ即チ一ノ金玉均ノミ、諸君何ノ故ニ害ヲナスノ本ノ除クコトヲ思ハズシテ、徒ニ其末ヲ治メント欲スルカ、且ツ諸君同門同種ヲ以テ時ニ相鬩ギ相爭フハ國ノ福ニ非ラザルナリ、請フ諸君互ニ相符合シテ、以テ國ノ尤モ弊ヲ爲ス者ヲ除クハ豈計ノ得タル者ニ非ズヤト。是ニ於テ諸閔遂ニ謀ヲ合セ、閔泳翊即チ清黨ノ魁ト爲リテ外ヨリ吾黨ヲ攻メ斥クルノ計ヲ作シ、内ニシテ閔台鎬、閔泳穆吾黨ヲ誣ヒ陷ルヽノ計日一日ヨリ甚シク、是ヨリ奄兩黨相容レザルノ勢ヲ爲ス。予一日上ニ白シテ曰ク、今内勢ヲ察スルニ、政令一モ成ル所ナク、只分黨ノ漸アリ、不慮ノ變到ルヿナキヲ保セズ、臣請フ暫ク田舍ニ退キ、以テ其禍ヲ弛ベ、而ヲ善後ノ策ヲ圖ラン。上深ク之ヲ然リトスト雖モ、舍テ去ルニ忍ビズ（彼黨ガ瑣少ノ事ヲ以テ多ク陰謀ヲ設クルハ盡ク記スベカラズ）、予暫ク出テ東郊ノ別舍ニ住シ、情況ヲ察ス、時ニ日本條約通商章程均霑ノ一事ニ付テ頗ル紛議アリ、三タビ召サレテ而テ還ル。

此時日本公使館ノ形勢ヲ察スルニ頗ル吾黨ニ注意スルノ色アリ、然レドモ予窃ニ之ヲ疑フ、時ニ竹

添ノ故ナクシテ予ニ絕チタルヲ以テ、之ヲ島村久ニ譏貶ス、島村頗ル愧ヂ憾ムノ意アリ、而テ閔泳翊歐米ヲ遊歷セシヨリ以來淸國ニ附クノ志益ミ固ク、日本人ヲ憎ムノ色外ニ形ハル(是レ大ニ然ル所以アリ、閔泳翊初メ米國ニ向フ時、路日本ニ由リ、米人造端(チャウヅワン)ナル者ニ約シテ通詞ニ補セントス、日本政府ノ爲ニ沮マレテ罷ム、閔深ク之ヲ含ムが爲ナリ)、島村モ亦聞知スル所アリ、言時ニ此事ニ及ブ、予毎日ニ淸辨ヲ招キテ會食ス、凡ソ吾黨ニ屬スルノ人ハ初ヨリ相關セズ○予一日日本酒會ヲ設ク島村ヲ招請シ、磯林中隊長、高木及ビ他ノ日本人十許名亦同ク邀フ、淸黨ノ閔泳翊輩モ亦數ヲ盡クシテ之ヲ招ク、彼レ辭スルコト能ハズ、皆約ノ如ク來ル、酒闌ニシテ日本人均シク抗然抵敵ノ氣色アリ、或ハ醉劇ノ事端ノ生ゼンコトヲ恐ル、予遂ニ閔金諸人ヲ唆シテ放還ス、二點鐘ニ至リ會罷ム○是ヨリ吾黨ト日本公使館トノ交契大ニ前日ニ異ナリ○一日予獨リ往キテ島村ヲ日館ニ訪ヒ、晤談時ヲ移ス、島村時ニ國家大勢ノ言ヲ以テ之ヲ挑ム、予乃チ朝鮮ノ國勢一日モ支ヘ保ツベカラザルヲ痛論シ、又日本政府政畧ノ變幻兒戲ニ類スルヲ恨ム、島村深ク以テ然ラズトシテ曰ク、閣下ノ前年ノ事ハ蓋シ竹添ト情ヲ盡通セザルが故ナリ、且ツ我が政府ノ閣下ヲ疎對セシハ竹添ノ報告アルが爲ノ故ナリ、竹添ノ閣下ヲ疑訝セシモ亦其時ノ事勢ニ因リテ然ルナリ、我が政府ノ朝鮮ニ對スル政畧何ソ曾テ少シモ變ゼンヤ、況ヤ今東洋ノ大勢淸佛ノ關係甚ダ急ニシテ、豈々累卵ノ如シ、君が輩如シ能ク國ノ爲ニ改革セバ我が政府ニ在テモ亦以テ不可ト爲サズト、其言辭活潑觀ルベシ、然レドモ予猶ホ其島村一人ノ意カ、或ハ又日廷爲ニスル所アリテ敎唆ニ出ルカヲ疑ヒ、未ダ其眞僞ヲ知ル能ハズ、然レドモ漸次交際シ、種々ノ說話中其深奧ヲ窺フニ足ル者アリ○一日竹添公使將ニ再ビ至リテ京城ニ駐劄セントスルノ說ヲ聞キ、予實ニ之ヲ憂フ、方今一邊ノ黨淸國ノ勢ヲ藉リ、隱然禍ヲ作スノ漸アリ、之ニ重ヌルニ竹添再ビ至リテ穆ト符合セバ、其害ヲ爲ス將ニ如何ニ至ラントスルヲ知ラズト、即チ往キテ島村ヲ見、實心ヲ以テ之ヲ

言フ、島村以テ然ラストト爲シテ曰ク、竹添ノ曩ニ諸君ヲ疑念セシハ即チ私事ナリ、今日諸君ノ謀ル所ハ國事ノ爲ナリ、豈私事ヲ以テ國事ヲ廢スルノ理アランヤ、決シテ憂フベキノ端ナシト○予此語ヲ聞キ、其然ル所以ヲ知リ、獨リ胸中ニ安然タル者アリシナリ●

當時(明治十五年乃至十七年)ノ韓廷ノ組織ヲ概述シテ實權ノ在ル所ヲ示サンニ、從來韓廷ニ於テハ、領議政、左議政、右議政各一員(正一品相當)ヲ以テ議政府(內閣=內務府設置後樞密院ノ如キ者トナレリ)ヲ組織シ、吏曹、戶曹、禮曹、兵曹、刑曹、工曹ノ六衙門ニ於テ一切ノ行政事務ヲ處理シタリ(三議政ハ正一品相當ニシテ、其下ニ左右贊成《從二品》、參議《正三品》、各一員アリ○以上各衙門トモ、日本ノ奏任官及ビ判任官ニ當ルベキ吏員數等アリ)、然ルニ十七年ノ亂後、官衙ノ廢置ヲ行ヒ、淸廷ノ總理衙門ニ倣フテ新ニ統理衙門ヲ設ケ、之ヲ分チテ內外兩衙門トス、(十七年ノ事變後、內務府外務府ト改稱セリ)長官(數員)ヲ督辨(即チ各省大臣ニ當ル)ト云ヒ、次ニ協辨ト參議アリ、內衙門ニハ獨逸人穆麟德(モレンドルフ)、外衙門ニハ淸人馬建常、各〻顧問トナリ(其後馬建常歸國シ、穆麟德外衙門ニ移レリ)、內治外交ノ重要ナルモノハ共ニ命ヲ淸國直隷總督北洋通商大臣李鴻章(リホンチャン)ニ聽キテ之ヲ處置スルコトナレリ、故ヲ以テ舊來ノ六曹ハ其名ヲ存スト雖モ、殆ド其實ヲ失ヘリ、是レ先王ノ遺制ヲ改メザルノ習慣ヨリ、舊來ノ虛名ヲ存シテ、傍ラ新制ヲ施シタルが故ナリ○內衙門督辨ハ領議政洪淳穆、左議政金炳國(右議政ハ一時欠ク)之ヲ兼ヌ、外衙門督辨ハ兵曹判書趙寧夏之ヲ兼ヌ、而シテ宣惠堂上(財務大臣トモ云フベキ職ニシテ『勢道』即チ權家ノ常

ニ任ズル所ナリ）閔台鎬ハ内衙門協辦、閔泳翊ハ外衙門協辦タリ、又朴泳孝ハ歸國ノ際漢城判尹（即チ京城ノ知事）ニシテ、金玉均、徐光範ノ二人ハ外衙門參議タリ。爾後屢〻高官ノ更迭アリタレ𪜈、實際ノ權力ハ常ニ閔台鎬、閔泳翊父子ニ在リシナリ。

此時ニ當リ、清將吳長慶、吳兆有及ビ袁世凱ハ兵三千ヲ率井テ下都監ヲ本營トシテ京城ノ內外ニ屯留シ、大ニ威力ヲ示セリ（袁ハ李鴻章部下ノ將校中最モ其信任ヲ受クル者ニシテ、威望頗ル高シ、時ニ齡僅ニ二十三歲ナリ）、之ニ反シテ、日本兵ハ漸次ニ減少シ、僅ニ一中隊（百三十餘人）南山麓ニ在リテ公使館ヲ護衛スルノミ。而シテ清廷ハ單ニ威力ヲ示スノミナラズ、併セテ恩澤ヲ施シテ朝鮮ヲ服セントスルノ意アリ、銀二十萬兩ヲ招商局ノ名義ニテ韓廷ニ貸付シ、又銃砲書籍等ヲ屢〻贈與シ、又學藝ノ敎師ヲ送レルガ如キ、以テ之ヲ窺フニ足レリ。然レ𪜈清國ノ干涉其度ヲ過ギ、加フルニ兵士徃々良民ヲ虐シ、婦女ヲ辱ムル等ノ事アリシヨリ、陽ニハ朝野靡然トシテ清國ニ屈服スルガ如クナリシモ、陰ニハ清國ヲ嫌忌スルノ情アリシナリ、隨テ京城內ノ人民ハ漸ク日本ニ意ヲ傾クルノ勢アリ、城內日本商人ハ其數僅少ニシテ、市山ノ麓ニ雜居スルノミナリト雖モ、清人ハ然ラズ、城內各處ニ開店スル者殆ド二千人、皆ナ韓人ノ商利ヲ奪フヨリシテ其憎惡スル所トナレリ。是ニ於テ清國ハ其政治ニ對スル干涉ノ幾分ヲ解キテ稍〻朝鮮國ニ自由ヲ與ヘタリ、然レ𪜈兵權ハ依然トシテ其手ニ握リ、韓京四營ノ兵（先年陸軍中尉堀本ガ訓練シタル兵アリ、又清式及ビ韓式ノ兵アリ）ニ對シテ監督スルノ狀アリ、但吳長慶等歸國ノ際幾分ノ兵數ヲ減シタルモ尙ホ多數ノ兵員駐屯セリ。十七年ノ日本對韓政畧ハ實ニ此清兵ノ妨害ヲ受クテ敗レタルナリ。

◎第八章● 十七年ノ事變(一)═對韓政略ノ試行═所謂日本黨ノ三日內閣●

帝國政府ノ朝鮮ニ對シテ力ヲ盡スコト多年ナルニ關ラズ、其政策常ニ行ハレズ、其勢力ノ未ダ伸ビザルモノハ、實ニ淸ノ猜忌心ヨリシテ之ガ妨碍ヲ爲スニ由ラザルハナシ、苟モ帝國ノ政事家タル者豈ニ慷焉タルヲ得ンヤ○會マ明治十七年ニ至リ、淸佛兩國安南ノ境界ニ關シテ議協ハズ、遂ニ戰端ヲ開キ、佛艦福州ヲ攻擊シタリ○此時ニ當リテヤ、滔々タル浮薄者流皆ナ佛ノ勝チテ淸ノ敗レンコトヲ輕言シ、某新報ノ如キハ歐洲各國ノ淸韓二國ヲ分領セル未來豫想圖(實ハ空想圖)ヲ載シタリ○當局ノ政事者某々(其誰タルカハ自ラ下ニ明ナリ)亦頗ル心ヲ動カシ、此機═淸ノ朝鮮ヲ顧ルノ暇ナキノ機═ニ乘ジテ韓土ニ我ガ勢力ヲ伸ベサントスルノ意アリテ窃ニ計畫シ、朝鮮ニ於ケル所謂日本黨ヲ抱擁シテ將ニ爲ス所アラントセリ●

當時韓廷ノ政員三派ニ分ル、所謂支那黨(又事大黨)日本黨(又開進黨)、露國黨即チ是ナリ○支那黨ハ趙寧夏、金允植及ビ閔ノ一族以下最モ多ク、廷官過半之ニ屬ス、日本黨ハ即チ金玉均、朴泳孝、洪英植、徐光範ノ輩ニシテ、露國黨ハ韓圭稷(一時公使竹添等ニ日本黨ト想ハレタル人)、李祖淵、趙定熙ノ徒ナリ○此ノ如ク黨派アリト雖モ、是ハ表面ノ區別ニシテ、實ハ政事上ノ黨派ニアラズシテ、私情上ノ黨派ナレバ、時ニ從ヒ事ニ依リテ、去就常ナク、所屬曖昧ナル者アルハ(金宏集、金允植ノ如キ)韓廷一般ノ風ナレバ、此等ノ黨名ヲ以テ判然區別シ難キノ事情アリト知ルベシ●

淸佛ノ戰爭起ルニ及ビテ、韓廷稍ヶ震動シ、支那黨ハ淸ト存亡ヲ共ニセントシ欲シ、露國黨ハ露國ノ保護ニ依ラント欲ス、而シテ日本黨ハ望ヲ日本ニ屬シ、此際日本ト結托シテ淸ノ干涉ヲ免レントスルノ意アリテ、日本露國兩黨ノ說ヲ閱族等ノ專橫ヲ除カント═欲ス○國王亦陰ニ淸ノ干涉ヲ免レントスルノ意アリテ、日本露國兩黨ノ說ヲ喜ブノ色アリシト云フ、王好ミテ海外ノ事情ヲ聽ク、時ニ日本及ビ淸、露、諸國ニ遊ビタル者或ハ外國公使館ニ出入スル者王側ニ近侍シテ(之ヲ別入侍ト稱ス)各〻勸說スル所アリシガ如シ●

十七年九月、金玉均日本ヨリ歸國シ、金若干ヲ齎セリ、翌月辨理公使竹添進一郎再ビ任ニ赴ケリ(去年十二月一タビ歸朝)、公使再來ノ後、人ニ向ヒテ朝鮮ノ獨立ヲ說キ、其ヲシテ永久中立國タラシムベキコトヲ論シタルガ如キ、又從來疎外シタリト想ハル、金、朴、洪、徐、ノ輩ト俄ニ親交セルガ如キ(韓圭稷、李祖淵等モ最初公使館ニ出入シタレドモ後ニ物論ノ爲ニ往來ヲ止ム)、氣勢言論自ラ前日ニ異ナルモノアリ、又未收ニ係ル償金四十萬圓ヲ韓廷ニ還付シタルガ如キ(前章ニ詳ナリ)日本ノ政略ノ一變シタルコトヲ顯然タリ、是ニ於テ公使ノ再來以後未ダ一ケ月ナラザルニ、韓廷自ラ進ミテ曩ニ拒絕セシ條約改正ヲ容諾シテ、京城開店ヲ日本人ニ許スコトセリ、而ノ當時淸佛ノ戰爭日ニ急ヲ告ゲ、朝鮮ノ朝野洶々タルノ際、國王時事新報ニ載セタル各國ガ朝鮮國ヲ分領セル豫想圖(國王ハ新聞ヲ閱覽ス)、幷ニ錦繪ニ

〔寫ノ畫ルヤシ怖驚ニ大テシ見ー王國鮮朝〕

枚刷ノぱんちニ、清人ガ阿片ヲ喫シテ横臥セルヲ各國人或ハ其手足ニ繩ヲ掛ケテ引キ、或ハ其脚ニ灸スルノ圖ヲ見テ（日本ヨリ歸國セシモノ之ヲ覽ニ供シタルナリ）非常ニ驚愕シタルヿ亦改約容諾ノ一因タリシトノ說アリ。

時ニ京城內北村ナル校洞（キョウトング）ニ新築セル帝國公使館成リ（其以前ハ南村泥峴（テンコーカイ）ニアリ）、十一月三日、內外ノ賓客ヲ招キテ天長節ノ祝宴ヲ張レリ、時ニ或ル人清國領事ヲ目シテ無骨ノ海參ナリト云ヘリ、清國領事之ヲ聞キテ憮然タリ、後日之ヲ追想シテ其他日ノ事變ト關係アリシヲ悟リタル者アリト云フ。

此時公使竹添ヨリ公書ヲ外務次官吉田清成ニ送リテ曰ク、余ハ井上外務卿ノ內訓ヲ承ケ、金玉均、朴泳孝ノ諸氏ト謀リテ、大ニ朝鮮國ノ內政ヲ釐革スル所アラントス云々ト、乃チ詳ニ其方法順序ヲ報ズ、次官固ヨリ此內訓アルヲ知ラズ、此公書ヲ閱スルヤ浩歎之ヲ久ウセリ、然レ𪜈外務卿井上ハ當時馬關ニ出張シテ東京ニ在ラズ、因テ其由來ヲ知ルニ苦ミ、直ニ參議伊藤博文ヲ訪ヒ、大ニ其不利ヲ論ジ、且ツ朝鮮ノ內治ニ干涉セントスルハ蓋シ卿ト外務卿ト謀リタルナラント責ム、伊藤ハ毫モ其事ニ與ラザルヲ辯疏シ（此事ニ與ラザリシト云フハ疑ハシ、蓋シ事情アリテ半途ニシテ廢シタルナリ）、次官ヨリ速ニ電信ヲ發シテ之ガ中止ヲ命ゼシム、次官其秘密ノ漏洩センコヲ虞レ、自ラ電信文案ヲ草シ、公使竹添ニ告グルニ斯ル大事ヲ輕々ニ擧グルヿナキヲ以テシタレドモ、其電報公使ノ手ニ達スルト殆ド同時ニ京城ノ事變起リタリ。

〔對韓政畧ノ試行〕

（金氏日錄二）新曆十月（舊曆甲申九月）三十日、竹添公使仁川ヨリ京城ニ入ル、外務督辦金弘集及ビ協辦金允植書ヲ以テ同シク竹添ヲ訪ハンコトヲ要ス、然ルニ此ノ日予ノ新築運動場ニ於テ擲球ノ戲ヲ設ク、仍テ晩餐ヲ供ス、米國公使「フード」夫妻、英國領事「アストン」夫妻ヲ招キ、閔黨ノ魁ノ如キ亦皆來リ會ス、故ニ督辦ト共ニ竹添ヲ訪フノ事ヲ辭ス（聞ク金弘集、金允植ガ竹添ヲ訪ヒシ時、竹添方今天下ノ大勢、清佛ノ關係ヲ以テ之ヲ痛言シ、因テ金弘集ニ對シテ曰ク、吾レ聞ク、貴國外衙門內亦タ清國ノ奴隸トナル者數人アリ、吾之ト同ク周旋スルコトヲ恥ヅト、又金允植ニ對シテ曰ク、君素ヨリ漢學ヲ能クシ、又清ニ附ク ノ意アリト、果シテ然ラバ、何ゾ入リテ清國ニ仕ヘザル乎ト、其他多少ノ說話ヲ恐ルト、憂歎シテ散ス。

十一月二日午前、上竹添公使ヲ接見ス、竹添村田銃ヲ獻ズ、外務卿ノ獻ズル所ノ者ト併セテ十六挺ナリ、予外務協辦ヲ以テ進參シテ禮ヲ行フ。禮罷ンデ竹添督辦ニ對シテ曰ク、今密對ノ時ニ當リテ他人ノ側ニ侍スルコトヲ容サズト、上其奏ヲ聞キ、乃チ予ヲシテ侍立セシム、予嫌忌ヲ避クルガ爲ニ之ヲ辭スルモ今吾輩黨分レ、勢競フノ時ニ當リ、竹添時勢ヲ知ラズ、輕シク此ノ乖激ノ擧アリ、或ハ禍ヲ速カンコトヲ恐ルトノ意ヲ以テ更ニ其蘊奧ヲ察セントス。又轉ジテ洪友英植ヲ訪フ、徐友光範座ニ在リ、即チ備サニ竹添ニ逢ヒタルノ一事ヲ告グ、洪君掌ヲ拊シ、大笑シテ曰ク、吾輩今日切迫ノ勢ヲ以テ一身性命ヲ捨テ一改革ヲ圖ルノ志ヲ期ス、幸ニ天ノ憐ム所ト爲ラバ時運ノ湊合スルニ恰モ水ノ驟ニカ下ルガ如シ、然ラバ則チ向日ノ日人ヲ要買スルノ計（吾輩一擧ノ志向既ニ決シ、日本ノ勇士數十名ヲ得ンガ爲ニ、前日、人ヲ日本ニ送ルノ擧アリ、故ニ之ヲ言フ）假令成ラザルモ、亦深ク喜憂ヲ爲スニ足ラズト。予亦タ笑テ歸ル（此日某來リ言フ、今日竹添島村予ト同座ス、公使曰ク、此度我ガ政府支那ヲ攻擊スルノ計已ニ決ス、其他多少ノ論アリト雖モ、予盡ク言ブベカラズト云々、予猶ホ其說ニ疑ヲ存スル者アリ）。

十一月一日錦陵尉往キテ竹添ヲ見ル、多ク言フ所アリ、竹添揚言シテ曰ク、清國將ニ亡ビントス、貴國ノ改革ノ爲ニ、有志ノ士此機ヲ失フベカラズト。聞ク此日午後、尹泰駿往キテ竹添ヲ見ル、竹添尹ヲ恐喝スルコト殆ト甚シ（是ニ因テ尹泰駿歸リテ即チ疏ヲ上リ外務協辦ノ職ヲ辭ス）。又聞ク督辦モ亦タ往キテ竹添ヲ訪フ、竹添曰ク、今般謁見ノ後予秘密ニ貴國大君主ニ奏對スベキ所ノ者アリ、請フ密室ヲ賜フヲ召對セヨト、是ヲ以テ一邊頗ル紛々タリ。夜朴、徐、洪、三君來リ會シ小酌ス、杯酒ノ間、議擧動大ニ變ジ、反テ吾輩ヲ贊成スルノ勢アリ、前日ノ疑忌ニ比セバ、其變化果シテ如何ゾヤ、然リト雖モ

ヲ固辭シ、李祖淵ヲ以テ代リテ接對ノ事ヲ行ハシム、公使誠正閣ヲ以テ憩息ノ所ト爲ス、諸閔及ビ諸大臣皆ナ座ニ在リ○予日本語ヲ以テ密ニ島村ニ囑シテ曰ク、今公使ノ擧動ヲ見ルニ頗ル過激ノ慮アリ、將ニ大ニ爲スコト有ラントスルノ時ニ際シ、此ノ如ク輕擧シテ人ヲシテ疑ヲ致サシムベケンヤ、請フ予ガ爲ニ公使ニ忠告スルニ今日君主ニ密對ノ時愼ミテ扞挌ノ語ヲ以テ奏スルコト勿レトノ意ヲ以テセヨ○島村唯々ス○予又タ日本政府ノ近況ヲ以テ細々叩キ問フ○島村曰ク、是レ疑慮ヲ須ヰズ、竹添ノ本性柔弱ナルハ君ノ深ク知ル所ナリ、如シ廷議ノ決定スル所ナクンバ、豈己ノ見ヲ以テ此ノ如キノ事アランヤ○予曰ク、予固ヨリ明ニ貴政府政署ノ頗ニ變セシコトヲ知ル、然レドモ今公使ノ擧動太ダ激勵ニ過グルヲ見テ、予甚ダ之ヲ憂フ○島村曰ク、是レ亦憂フルヲ須ヰズ、速ニ著手ヲ圖リテ可ナリト○竹添密對ノ時前年ノ賞金四十萬弗ヲ以テ還納シテ曰ク、是レ我ガ皇上特ニ貴國養兵ノ費ニ供シ、以テ獨立ノ資ト爲ス、決シテ之レヲ他費ニ用ユルコトヲ願ハズト、繼テ方今天下ノ大勢ヲ論シ、又淸佛ノ戰淸國將ニ顚仆セントスルノ勢ヲ言ヒ、又曰ク、大院君ノ拘セラル、理ニ於テ當ラズ、又曰ク、朝鮮ノ內政改整セザルベカラズ、而テ歐米ノ公法ニ從ヒ速ニ獨立ヲ圖ルハ實ニ日本政府ノ望ム所ナリト時ヲ移シテ退ク●

十一月三日即チ日皇ノ天長節ナリ、祝宴ヲ校洞ノ新建公使館ニ設ク、邀ヘラルヽモノ只予ト朴、洪、徐ノ三君及ビ韓圭稷(日本人目シテ日友ト爲ス)、金弘集(督辨ノ故ヲ以テ)ノミ、其他外國公使領事幷ニ來リ會ス(此日予始テ交ヲ村上中隊長ニ結ブ)、酒半ニシテ亙ニ祝辭アリ、亦演說ノ如キモノアリ、甚シキハ陳樹棠(淸國領事)ヲ以テ目シテ無骨ノ海參ト爲シ朝鮮語ヲ以テ譯傳スルニ至ル、陳氏解セズ、之ヲ穆麟德ニ問フ、穆モ亦タ解セズ、「アストン」ニ問フ、「アストン」知ラザルヲ以テ答フ○又竹添予ニ向ヒテ曰ク、予往年偶〻傍人ノ讒ヲ聽キ、果シテ君ヲ以テ信ズベカラズト爲シ、君ノ短所ハ予外務卿井上、大藏卿松方、及他ノ諸參議ニ言フ、君ノ昨年我國ニ到リテ限リ無キ困苦ヲ受クタルコト予

盡ク之ヲ知ル、而テ予今悔ユルモ及ブコトナシ、但想フニ君亦國ノ爲ニ以テ懷ニ介セザルベシト、予乃チ草々之ニ答ヘテ止ム●

十一月四日午後二時、竹添外衙門ニ來リ、貿易章程均霑ノ一事ヲ以テ談判ス、談判了リテ又天下ノ大勢及ビ方今淸國困難ノ狀、即チ財政ノ窘迫、兵卒ノ規則ナキコト政府ノ政略ナキコト等ヲ以テ痛論一遍シテ歸ル○是レヨリ日淸兵ヲ交フルノ說盛ニ世ニ行ハレ、人心頗ル紛々、又一邊ノ擧動漸ク測リ叵キニ臻ル○其夕島村久ヲ朴君ノ宅ニ招キ、予洪、徐兩君ト同席ス、予乃チ明ニ改革ヲ行ハントスルコトヲ言フ、島村敢テ驚キ怪マズ、事ヲ行フノ法如何ヲ問フ、予三策ヲ以テ之ヲ言フ、其一策ハ即チ宴ヲ郵政局ニ開キ、其席ニ即キテ事ヲ行フナリ、繼テ韓圭稷ノ信ズベカラザルノ意ヲ以テ重テ之ヲ言フ○時ニ予上ノ召命ニ因テ歸ル(其所謂三策ナルモノハ、概要此ノ改革ヲ行フニ暗夜ヲ以テスルニ非ザレバ不可ナリ、而テ其一ハ則チ刺客ヲ裝フコト淸人ノ如クシ、以テ一擧ニ閔泳穆、韓圭稷、李祖淵ノ三人ヲ刺殺シ、其罪ヲ閔台鎬父子ニ歸スルノ計ナリ、是レ巧曲ニ過グ、又其一ハ京畿ノ監司沈相薰ヲ賺シ、宴ヲ白鹿洞ノ亭子ニ設クシメ、其席ニ即キテ而テ事ヲ行フナリ、白鹿洞ハ即チ洪英植別莊ノ在ル所ニシテ、山河靜寂、事ヲ行フニ便ナリ、是ハ沈氏ノ故アリテ職ヲ遷セシニ因リテ止ム)●

十一月五日午後四時「アストン」及ビ米國公使ヲ訪ヒ、均シク昨日ノ事ヲ以テ辨論ス(予「アストン」ニ對シ問テ曰ク、前夜日本公使館宴集ノ時ノ擧動、公以テ如何ト爲スカ○「アストン」笑フテ曰ク、無骨ノ海參之ヲ食ハントス欲スルカ○予又笑フテ曰ク、竹添ノ爲ス所ヲ見ルニ、尤モ前日ニ異ナリ、之ヲ以テ之ヲ觀ルニ、日本政府將ニ淸國ト釁ヲ搆ヘント欲スルカ○「アストン」曰ク、然ラズ、今ヤ日本海陸ノ兵、淸國ヨリ精ナルニ似タリト雖モ、財政甚タ困ム、其淸國ト事ニ從フ、日本ニ於テ益ナシ、予ヲ以テ之ヲ觀ルニ、竹添强ヲ朝鮮人ニ街ハンヨリ欲スル者ナリト○予又米國公使ニ面シ、內情ノ艱、時勢ノ困ヲ論ズ、米國公使予ガ言フ所ヲ以テ可トナサヾルコトナシ、而テ曰ク、只前夜ノ動靜、公予ト同ク見ル所

ニシテ、竹添新ニ來ル以來、其懦弱ノ態頓ニ變ズ、是レ喜フベキナリ、今貴國ノ爲ニ清日ノ兵ヲ掇歸スルノ急務タルハ誠ニ曩ニ公ノ言フ所ノ如シ、予亦タ多少周旋スル所アリ、姑ク安心シテ徐ロニ其時勢ヲ觀ンヿヲ望ムト)●

十一月六日、日本招魂祭ニ當ル、日本兵士及ビ官商皆南山ノ下ニ會シ、角力擊劍ノ游戲ヲ行フ、聞ク中隊長村上率ユル所ノ兵分チテ兩隊ト爲シ、標シテ赤白兩旗ト爲シ、赤ヲ日本ト爲シ、白ヲ支那ト爲ス、赤勝ツノ時ハ竹添大ニ悅ビ、以テ吉兆ト爲ス、因テ日人皆日本近日ノ政略ヲ察知スト云フ●

十一月七日、予日館ヲ訪フ、是レ圍碁ノ爲ナリ、京中ノ高手二人ヲ擇ンデ之ヲ伴フ、館中ノ屬員內垣比試ス、實ハ口實タリ、此日竹添ト談話時ヲ移ス、予ノ論ズル所竹添犂然タラザルヿナシ、大計ノ決スル實ニ此日此會ニ在リ●

十一月八日夜、李寅鐘等ノ諸君ヲ招キ、予ノ密室ニ會飮ス、李寅鐘前後ニ一邊ノ爲ス所ト謀ル所トヲ探偵ス、聞ク清將袁世凱數日前ヨリ密々令ヲ軍中ニ下シ、中夜帶ヲ解キ履ヲ脫セズ、兵士ヲ團束スルヿ一ニ戰時ノ如シ、閔泳翊右營使ヲ以テ常ニ東別宮ニ住ス、亦袁ノ爲ス所ノ如シ、韓圭稷、李祖淵切ニ戒嚴ノ擧アリト云フ●　十一月九日、徐君載弼ヲシテ往イテ村上ヲ見テ清陣及ヒ閔泳翊ノ爲ス所ヲ傳ヘシメ、又洪朴兩君ヲシテ往イテ竹添ヲ見テ、此事ヲ傳ヘシム●

《此頃屢次同志ノ往來會飮ヲ記スレ𪜈、特殊ノ事ナキモノハ之ヲ省略ス●》

十一月十二日朝八時、忽チ急召ノ命アリ、即チ闕ニ赴ク、則チ上徹夜、未ダ寢ニ入リテ睡ラズ、余入對ス。上曰ク、昨夜ノ事卿之ヲ知ルヤ否。予奏シテ曰ク、未ダ何等ノ事アリシヤ否ヲ知ラズ。上曰ク、昨夜五更以後、南山ノ下、下都監ノ近處忽チ砲聲ノ作ルヲ聞ク、一ニ戰時ノ狀ノ如シ、驚愕已ムヲ知ラズ、人ヲシテ之レヲ探ラシムレバ、則チ日本兵士夜間不時ニ操鍊ヲ行フト云フ、是等意外ノ事ナシト雖モ、今兩國ノ兵丁來リ駐レバ、常ニ意外ノ事端アランヿヲ慮ル、且況ヤ竹添ノ此ニ來ル後、予ニ對シ、

テ奏スルモノ、及ビ諸人ニ接スル酬對擧動、隱然清日兵ヲ交ルノ勢アリ、之ニ因テ上下ノ人心方ニ恟々タルヲ覺フ、日本人何故ニ初ヨリ報告ナクソ猝ニ操鍊ヲ行フカ、此事密ニ竹添ニ問フテ而テ復命セヨト。予初テ此事ヲ聞ク、即チ命ヲ承ケテ出ヅ●　十一月十三日、外衙門ニ出仕ス、聞ク再昨夜操鍊ノ一事ヲ以テ外衙門ヨリ竹添ニ詰問セシニ、竹添笑フテ答ヘテ曰ク、當今天下ノ各國兵ヲ以テ名トナス者、皆運動ヲ以テ操鍊ノ法ト爲ス、如シ大射的、大操鍊等ノ事アラバ、理當サニ貴衙門ニ照會スベシ、然レドモ夜鍊ニ至テハ誠ニ不時之ヲ行フノ事ニシテ、兵丁ノ勤慢ヲ觀ンガ爲ナリ、是ハ公使モ亦之ヲ知ラズ、只兵ニ將タル者ノ意ヲ以テ之ヲ行フ、支那朝鮮人ノ驚恐誠ニ意外ナリトテ頗ル得意ノ色アリシト云フ。此日、米國公使、英國領事、德國領事ト均シク談辯ノ事件アリテ次第ニ來訪ス、八點鐘始テ罷メ歸ル。歸路洪友ヲ見ル、洪友憂ヒテ曰ク、前夜日兵操鍊ノ一事大ニ騷擾ヲ致ス、竹添ノ新ニ至ルヤ許多奮激ノ擧アリ、愚夫愚婦ニ至ルマデ之ヲ知ラザルヿナシ清兵ノ戒嚴尤モ極マル、又一邊ノ疑忌轉タ層激ス、將タ何樣ノ禍機何ノ處ニ發スルヲ知ラズ、此時之ヲ如何セン。予笑フテ答テ曰ク、是レ亦意外ノ事ナリ、予輩今日切迫ノ狀ヲ以テ累卵ノ地ニ立チ、左右ヲ顧ミズ、一ニ變革ヲ圖ル、即チ勢ニ因リテ策ヲ決スルモノ、竹添ノ來ルニ至リテ許多ノ激切アルハ悶スベキノ事ナリト雖モ、亦安ンゾ反テ福ト爲ルニ非ザルヲ知ランヤ、一言以テ之ヲ蔽ヘバ、速ニ圖リテ遲ルヽヿナキヲ上策トス。洪君曰ク、予モ亦タ君ト同意ナリ、然レドモ竹添ノ爲ス所ハ即チ日本政府政畧ノ發スル所ニ係ルカ、或ハ又竹添一人ノ一時爲ス所カ。予故ラニ色ヲ作シテ之ヲ責メテ曰ク、君モ亦愚ナリ、凡ソ出テヽ外國ニ公使タル者、何ゾ本國政府ノ訓令ヲ承ケズシテ自ラ其志ヲ行フ者アランヤ、且ツ況ヤ竹添性素ト怯懦、此一書生安ンゾ政府ノ命ヲ承ケズシテ此千萬意外ノ擧アランヤ、君多疑スルヿヲ休メヨ。因テ多件ノ決劃スル者アリ、洪君本來同志ノ人、此夜ニ至リテ其志益〻決シ、確トシテ撓ムヿナシ、天明ケテ家ニ歸ル●

十一月十四日、米國公使其夫人ト來リ訪フ、予公使ト暫ク密語センヿヲ請フ、夫人先ヅ歸ル、予又國中事勢ノ多日ヲ支ヘ保ツ可カラザルヲ痛言ス(凡ソ前日往來ノ際是等ノ說話一再ニ止ラズ、而テ此日論ズル所ハ即チ予ガ蘊蓄スル所ヲ提出シテ其意ヲ試ミント欲セシナリ)、因テ陰ニ近日一改革ヲ圖ルノ意ヲ示ス、公使驚カズ怪マズ(公使已ニ察知スル處アリ、予亦之ヲ聞クモノアリ)、徐ロニ答ヘテ曰ク、公輩ガ國ノ爲ニ一死ヲ期スルノ志予固ヨリ深ク信ジテ欽敬スル所ナリ、然レ𪜈但余ガ貴國ニ至リシ以來、我ガ政府ノ密囑ヲ承ケシモノ、及ビ余一人心中ニ懷ク所果シテ其一ヲ展ブルヿ能ハズ、余宜シク早ク歸ルベシ、而テ猶遲々スルモノハ實ニ貴國ノ獨立ノ爲ニシテ、公等ニ望ム所アルナリ、唯清兵ヲ掇還スルノ一事公等ノ前後懃懇、余亦深ク思フモノアリテ存ス、向日竹添ノ再來以前已ニ島村久ニ商量スル所アリ、之ヲシテ日本外務卿ニ轉議セシム、是レ獨リ予一人ノ見ル所ニ非ズ、亦見ル所ナキニ非ズ、公等幸ニ國ノ爲、身ノ爲、且ツ予ノ忠告ノ爲、姑ク靜ニ之ヲ待テ。予乃チ笑フテ曰ク、予ガ今ノ言ハ亦今日ノ事ヲ謂フニ非ザルナリ、唯公ノ我ガ國ノ爲ニ力ヲ出スノ意幸ニ緩晩ナルヿ勿レ。公使亦笑談シテ別ル●

十一月十五日往イテ竹添ヲ見テ前夜鍊兵ノ一事ヲ問フ。竹添曰ク、大君主過チテ驚ヲ受クルヿ有ルニ至ラズヤ。予實事ヲ以テ答フ。竹添曰ク、君好辭ヲ以テ奏對セヨ。予因テ竹添ノ來ル後英米公使トノ酬對及ビ今日京城恟々ノ物情ヲ以テ畧〻說キテ歸ル。此夜入リテ奏シテ曰ク、今日往イテ竹添ニ問フ、竹添答テ言フ、今ヤ清佛兵ヲ交ルノ時ニ當リテ、譬ヘバ猶ホ隣家ニ賊火ノ警アルガ如シ、我ニ在リテ守備ノ擧少シモ忽ニス可ラズ、夜操等ノヿノ如キ、素ヨリ之ヲ不時ニ行フモノニシテ、我ガ國中ニ在リテ兵事ノ整理頓ニ平常ニ異ナリ、出テヽ外國ニ住スル兵ノ如キモ亦他時ト別アリ、向夜ノ事實ハ予ノ知ラザル所ニ係ル、後ニ之ヲ聞クニ則チ清陣袁世凱及ビ貴國左營等皆夜ニ臨デ戒嚴兵帶ヲ解カズ、殆ト戰時ノ如キモノアリト、是レ固ヨリ村上大尉軍機ヲ以テ密ニ探リ知ル所ナリ、兵ハ則チ不虞ニ備フルナリ、今ヤ兩國ノ兵一處ニ住ス、敵視ノ擧ナシト雖モ、既ニ一邊戒嚴ノ事アリ、我ニ在リテ豈ニ獨リ泯然塊坐センヤ、事狀此ノ如シト雖モ、大君主ノ驚ヲ受クルヲ致ス、誠ニ悚歎ニ勝ヘズト。上因テ嗟嘆シ、清營及ビ前左右營ノ事無キニ戒嚴シテ日人ノ疑忌ヲ致セシテ以テ頗ル不滿ノ意アリ、予復タ當今ノ大勢ヲ以テ重複一遍シテ之レヲ奏ス、上深ク以テ然リトシ、將ニ言フ所アラント欲ス、然レドモ側聽者アルガ爲ニ情ヲ盡クスヿ能ハズシテ退ク●

十一月十六日、朴君ト往イテ劉大致ノ病ヲ問フ、大致病ヲ强メヲ起坐シ、問フテ曰、日本公使再來ノ後、擧世喧然、物情恰モ海盪雲沸ノ若キアリト、君輩ノ爲ニ甚ダ之ヲ危ブム、今ノ計早ク之ヲ圖ルニ如クハナシ、然レ𪜈日本政府ノ政畧君輩果シテ深ク之ヲ知ルカ。予答テ曰ク日廷ノ議存シテ而テ勿論可ニ似タリ、假令ヒ日廷予輩ヲ援助スルノ意ナキモ、我國ノ事勢今ヤ幾ド背水饉ナキニ至ル、其切迫ノ狀固ヨリ日廷ノ擧動ヲ待タズ、適〻竹添ノ新ニ來ルニ當リ其氣色ヲ察スルニ、反テ過激ニシテ禍ヲ予輩ニ速クヲ致シ易キノ歎アリ、是レ亦時ナリ、運ハ之ヲ天ニ付ス、一死ノ志ヲ以テ予輩已ニ決スル處アリ、望ムラクハ先生安心攝養センコトヲ。大致曰ク、但予ガ慮ル所ノモノハ、日兵僅ニ百名ナリ、其節制清兵ヨリ强ナルニ似タリト雖モ、其人數大ニ相同ジカラズ、是レ甚ダ憂フル所ナリト。予朴君ト均ク笑ヒ答ヘテ其情ヲ慰メ、三時散歸ス●

十一月十七日、召命ヲ承ケテ入リテ侍ス、五皷家ニ歸ル。忽チ李寅鐘、李昌奎ト慌忙トシテ來ルヲ見ル、即チ密室ニ招キ、之ヲ問フ。曰ク閔泳翊(閔泳翊近ロ喉病ト稱シテ久シク參內セズ、亦人ト接セザルコト已ニ日アリ)今夜四皷忽チ袁世凱ヲ訪ヒ、密談時ヲ移ス、袁世凱即チ令ヲ陣中ニ下シ、團束更ニ密ナリト云フ。仍テ高永錫ヲシテ其何時歸リ來リシヤヲ探ラシム、返リ報シテ曰ク、三時四十分、閔泳翊、袁世凱ト同ジク右營ニ歸ル、袁ハ乃チ轉ジテ吳兆有ノ陣ヲ訪ヒ、天曙クテ下都監ニ歸リシト云フ●

十一月十八日早朝、書ヲ以テ梁五衛將鴻在（此人ハ即チ閔泳翊ニ信セラレテ其爪牙ノ如キモノ、然レドモ亦世ニ大志アリ、時ニ閔泳翊ノ密事ヲ以テ予ニ告グルモノ）ヲ招キテ前夜閔ガ袁世凱ヲ訪フノ由ヲ訪フ、梁亦已ニ之ヲ知リ、而シテ甚ダ訝レリ、閔ノ袁陣ニ往キシ後何事アリシヤ、梁亦タ推知スルコヲ得ズ、聞ク袁ノ右營ニ至ルヤ筆談アリ、其談草ハ閔已ニ收メテ深ク篋底ニ藏スト、因テ徐ロニ探リテ看ンコヲ圖リ、若シ見ル所聞ク所アラバ、來リ報ゼンコトヲ囑ス。此夜某君（此人宮官中ノ傑出者ナリ、其名ヲ書セズ）來リ訪フ、因テ略ボ大內ノ消息ヲ聞ク。

十一月十九日、閣監朴六榮來リ言フ、穆麟德貿シ來ル所ノ大砲二坐延慶堂ニ置クモノ、昨夜三更、閔泳翊修補スベキノ所アリトテ、密々之ヲ吳兆有ノ陣ニ輸送セリト。　二十日夜、申重模、李寅鐘來リ言フ、八時頃吳兆有ノ陣ヨリ二坐ノ車子ヲ下都監ニ送ルト。

十一月二十一日下午二點鐘、「アストン」《英國總領事》來訪、魯淸相關一事ニツキテ「パークス」公使《在淸》ヨリ密報アリシトテ多ク言フ所アリ、公等關係果シテ如何。余ハ初メ密切ノ關係ナキヲ以テ答フ、井上因テ此好機ニ乘シテ事ヲ謀ラントヲ我ニ勸ム。余答ヘテ曰ク、吾亦其意ナキニアラズ、然レドモ未ダ貴國政府ノ意ヲ明知セズ、但竹添ノ爲ス所ヲ見テ、吾輕々シク動クベカラズ、君能ク我ガ爲ニ福澤先生ヨリ細ニ探リテ、近日政府ノ狀樣ヲ報ゼンコヲ望ム。井上言フ、吾已ニ書ヲ三田《福澤ヲ云フ》ニ送レリ、此後船便回報アルベシ、公輩爲ス所ノ事吾察知スルモノアリ、公等我ニ諱ムハ、恨ムベシ、恨ムベシ。

十一月二十三日、尹泰駿來リ訪フ、予其外務協辦ヲ辭スルノ由ヲ責メテ曰ク、輕々シク職務ヲ辭ス、竹添ノ毀謗アルガ爲カ。尹曰ク、此事予ノ斷ズル所ニ非ズ、亦過境ニ屬ス、今論ズルヲ須井ズ、聞ク竹添新ニ君ニ契好アリ、其間頗ル密ナリト、凡日本政府ニ係ルノ近況、君果シテ詳ニ之ヲ聞クリヤ、乞フ之ヲ秘スルヲナカレ。予答ヘテ曰ク、予穆麟德ト好カラザルハ竹添ニ離間セラレタルニ因ル、予

ノ昨年日本ニ往クヤ、許多ノ困阨ヲ受ク、是レ君ノ洞知スル所ニシテ、竹添ト予トノ交契從テ知ルベキナリ、今回竹添ノ來ルヤ多般乖當ノ擧アリ、予深ク之ヲ笑フ、如シ日本ニシテ將ニ支那ト兵ヲ搆ヘントセバ、豈機ニ先チテ發動スルヿ小兒ノ戲ノ如クシテ可ナランヤ、予之ヲ以テ日廷ノ必ス兵端ヲ淸國ニ啓クノ意ナキヲ知ルナリ、且ツ予ヲ以テ之ヲ察スルニ竹添ノ我國ニ至リシヨリ以來、其爲ス所虛弱ニ非ルハナシ、殊ニ出使タルベキ屈强者ノ本色ニ乏シ、是レ外人ノ嗤笑スル所ニシテ、日國ノ內亦タ議論ナキニ非ズ、故ニ今賠金ヲ償還スルノ事ニ因テ、竹添故ラニ硬壯ノ勢ヲ無識無學ノ朝鮮人ニ作サント欲スルナリ、君ノ職ヲ辭スル、亦落チテ其籠絡ノ術中ニ在リ、予ガ甚ダ之ヲ恨ム所以ナリ、且ツ均霑ノ一事、島村遲緩シテ未ダ決了スル能ズ、今竹添ノ來ル、此事ヲ決センガ爲ニ外面虛喝ノ勢ヲ作スモ亦タ知ルベカラザルナリ、但予ニ對シテ一モ言フ所ナシ、君予ヲ疑フヿ勿レ。尹靜ニ予ガ言ヲ聽キ、犁然ノ色アルニ似テ歸ル。

十一月二十四日「アストン」ヲ訪フ、語次淸佛關涉ノ事、日淸將來ノ事アリ。予因テ曰ク、朝鮮ノ內政日ニ危急ニ瀕ス、今淸佛折衝ノ際ニ乘ジ、內政ノ一改革ヲ圖ラント欲ス、公以テ如何ト爲スヤ。アストン」曰ク、公等國ノ爲ニ決定セルノ志予亦察知スル所アリテ、已ニ「パークス」公使ニ報告セルモノアリ、而シテ公使來年春、斷ジテ一回東來シ、兼テ諸公ト商量スル所アルベシ、是レ予ガ深ク知ル所ナリ、望ムラクハ公等姑ク時機ヲ待ツ如何。予答ヘテ曰ク、若シ之ヲ竣ツヿヲ得ザルノ危急アラバ予輩將タ之ヲ如何セン。アストン」曰ク、是レ予ノ能ク對スル所ニ非ルナリ、然レドモ予ヲ以テ之ヲ察スルニ、一隣國アリテ貴國ノ爲ニ一變更ヲ圖ルモ亦タ知ルベカラズ。予笑フテ答ヘテ曰ク、公日本ヲ以テ此擧アルト謂ヘルカ。アストン」亦タ笑フテ曰ク、是レ固ヨリ臆言ナリ、然レドモ予ヲ以テ之ヲ觀ルニ、貴國ノ內近日必ス一變事アラン。公等須ラク自ラ愼ムベシ。予答ヘテ曰ク、是レ亦予ノ慮ル所ナリ、予輩朝鮮人タリ、死スト雖モ固ヨリ恨ナシ、若シ變事アリテ各國人ニ累ヲ及ボスガ如キハ是レ實ニ憂フル所ナ

リ。「アストン」曰ク、若シ變アルノ時ニ當ラバ、公等何ヲ以テ身ヲ處セントスルカ。予答ヘテ曰ク、若シ事アラバ理當ニ國王ト生死ヲ同ジクセンノミ。「アストン」曰ク、予ハ則チ何ヲ以テ身ヲ處セン。予曰ク、公モ亦予ガ如ク身ヲ處スベキニ似タリ、夫出テ、外國ニ使スル者、其國難アリ、外國使臣其國君ト安危ヲ同スルハ則チ亦公法ナリ。「アストン」曰ク、公ノ言誠ニ然リ、然レドモ其國君若シ危難支フベカラザルノ勢アラバ、將タ之ヲ奈何セン。予笑フテ曰ク、是則過憂ナルモノ、事若シ此ニ至ル、是レ人ノ豫メ料ル所ニ非ズ、然レドモ今我大君主亦各國公使領事ノ爲ニ常ニ懸念スル者アリ、保護シテ不危ノ地ニ立タシムベシ、予又曰ク、事機ノ變ノ如キハ人ノ測リ難キ所、而テ早晩若シ意外ノ事ヲ開クアラバ、塲ニ當ルノ安危ハ予君ト同ク濟フベシ、末後ノ結局ニ至リテハ予深ク君ニ望ム所アリ、實ニ「パークス」公使ト共ニ後ヲ善クスル所以ノ策ヲ圖レリ。「アストン」曰ク、公ノ言深重予亦之ヲ聽ク。深重ト。因テ別ヲ告ゲ、轉ジテ米國公使ヲ訪ヒ、又激論一塲アリ。米公使最後懇ニ曰ク、公輩若シ時日保チ難キノ狀アラバ、特ニ暫ク國內ノ山川ニ游ビ又或ハ出デ、上海長崎ノ間ニ如キ、數月ノ後歸リ來リテ之ヲ謀ルモ亦不可ナシ、此ハ此レ予ガ心曲ヲ吐出スル者、公之ヲ諒セヨト。予又此時ニ當リテ外ニ出ヅベカラサル ノ意ヲ以テ答フ。公使曰ク、予久ク平壤(平安道)等ノ地ヲ游歷セント欲シテ未ダ暇ヲ得ズ、今寒節ニ當ルト雖モ、公等ノ爲ニ寒暑ニ拘ラズ暫ク往キテ歷觀セン、因テ我軍艦長崎ニ在ル者ニシテ日本郵便船ニ先タチテ仁川ニ來泊セシメ、其來ルヲ待チテ予ト同ク暫ク平壤ニ往カバ如何。其意懇懃深ク感スベシ、夕餐ヲ同ウシ、夜深クテ歸ル。

十一月廿五日、午後二時、予獨リ竹添ヲ訪ヒ、頃來ノ事狀ヲ以テ備ニ之ヲ言ヒ、又英米公使ト言フ所ヲ以テ畧ボ之ヲ告グ。竹添拍手稱嘆ノ曰ク、公果シテ酬對ニ敏ナリト。予因テ明ニ諸閔及數三奸臣ヲ除キ去ルノ計ヲ言フ。竹添其說ヲ贊セザルナシ。予曰ク、今ヤ吾輩擧グル所ノ事ハ即其端ヲ啓クナリ、末後ノ結局ハ唯貴國政府ノ趣向ヲ是レ觀ン、予既ニ少モ君ニ隱スナシ、君モ亦少モ秘諱スルナカレ。竹添笑フテ曰ク、公何ゾ疑多キヤ、予無似ト雖モ、既ニ公使ノ職ヲ以テ外國ニ住ス、其職甚ダ重シ、凡ソ外交千里萬里ノ間、各國政府勢朝夕連絡スルヿ能ハズ、是レ公使ノ職ヲ置キテ、其政府ニ代リテ交際ノ務ヲ爲サシムル所以ナリ、君豈ニ知ラザランヤ。予答ヘテ曰ク、是レ固ヨリ予ノ知ル所ナリ、然レドモ予ハ只予ノ經歷スル所ヲ以テ更ニ一陳セン、予ノ初メ朴公使ト同ク貴國ニ往クニ當リ、貴國政府ノ助護ニ賴リ、使事ヲ了竣シテ歸ル、是ヨリ予輩貴國ニ依賴シ、以テ我國ノ獨立ヲ圖ルノ深意君亦之ヲ知ル、而テ此時ニ當リテ貴國政府海陸ノ軍ヲ擴張ス、是レ獨自ラ固ウスルノミニ非ズ、兼テ朝鮮ヲ獨立セシメ、以テ東洋ノ大勢ヲ保タントスルヿ即其大意ニシテ、予ガ目擊耳聞スル所ナリ、予ガ暫ク國ニ歸リ、委任狀ヲ携ヘテ再ビ貴國ニ至ルニ及ンデ、事竟ニ成ラズ、此時ニ當リテ兩國ノ人民皆ヲ竹添公使ガ穆麟德ノ反間ヲ聽キ、金玉均ノ爲ス所ヲ惡ミ、百方阻礙セザル所ナシトス、然レドモ則チ心ニ獨リ其然ラザルヲ知ルナリ、予ガ人ト爲リノ如何、謀ル所ノ如何ハ則チ貴國政府必ス君ニ聽クモノアラン、然レドモ其政略ハ則チ三四个月ノ間ニ一變シ、其意專ラ朝鮮ニ向ヒテ手ヲ着クルヨリシテ淸國ノ疑忌ヲ招カザルニ在ルノミ、故ニ予ノ謀ル所亦從テ阻牾セラルヽヲ見ルベキナリ、貴國政府政略ノ變ズルヿ掌ヲ反スガ如シ、假令ヒ公使ノ來ル時指令スル所アルモ、又數月ヲ過ルノ後、何ノ機アリテ變センモ亦知ルベカラズ、是レ予ガ經歷スル所ヲ以テ君ニ言フ、今我ガ國ノ事勢暫クモ緩ニスベカラズ、公使此ニ來ルノ前、吾黨ノ士已ニ矢ヒ決スル所アリ、日本ノ援助スルト否トハ本ト望ム所ニ非ズ、公使再渡ノ期予輩之ヲ聞キ反テ甚ダ之ヲ憂ヒタリ、今日君ト此謀アルハ、反テ誠ニ世事ノ變化ニ屬スルナリ、予ガ志已ニ決ス、更ニ言ヲ須ヒズ。竹添曰ク、予ガ心亦公ノ如ク決ス、誓フテ相疑フヿ勿レ。因テ細目ヲ講ズ、或ハ贊成セル者アリ、或ハ從ハザリシモノアリ、第一駕ヲ江華ニ遷スノ一事ヲ以テ對論時ヲ移ス。竹添肯セズ、其言ニ曰ク、大君主一人駕ヲ江華ニ遷スハ固ヨリ難カラズ、然レドモ、妃嬪諸宮ノ如キ勢同行スベカラズ、若シ淸人ノ手ニ落チバ、後事甚ダ難シト。予因テ辯論スル所アリ、而テ曲

テ竹添ノ論ニ循ヒ、移遷ノ事ハ之ヲ措キテ論セズ○竹添又曰ク、今臨御ノ大門最モ守衛ヲ嚴ニスベシ○予曰ク、是レ則チ大ニ然ラズ、遷動ニ至ルニ非ンバ、則ヂ日兵ノ來護スルヿ實ニ名義ナシ、暫ク近處ニ移遷ノ擧ヲ爲スヲ可トスト○是レ姑ク決セズ、以テ更ニ商量ヲ竣チテ定ムルヿトス○予又曰ク、事發スルノ後、最モ關係アル者ハ金策ナリ、是レ將タ如何セバ則チ可ナランカ、予前年此事ヲ以テ之ヲ米人ニ謀リテ而テ成ラズ、今ニシテ之ヲ思フニ、凡借金ノ一事英人ト之ヲ謀ルヲ最モ可トス○竹添笑フテ曰ク、貴國大金ノ以テ急ヲ救フベキナシト雖モ、三百萬圓ノ金、我國ニ在リテハ綽トシテ處理ノ道アリ、殊ニ慮ルヿ勿レ○予笑フテ曰ク、此事公能ク保證スルヤ否○竹添又笑フテ曰ク、君尙ホ予ガ言ヲ疑フカ○予又曰ク、數百萬圓ノ金、亦今直ニ用ユベキニ非ズ、十數萬圓ノ金ヲ備ヘ、以テ不虞ノ用ニ供セント欲ス、是ハ如何○竹添淺山ニ向テ曰ク、仁川、釜山、元山及京中日本商人ノ金額ヲ收合セバ幾何ニ上ルベキカ○淺山對ヘテ曰ク、十餘萬圓ハ慮ナカルベシ○竹添予ニ向ヒテ曰ク、是レ豫メ商人ニ言フテ機ヲ泄ラスベカラザルナリ○予笑フテ曰ク、今日金ァリト雖モ、用ユル所ナシ、入用ノ時ニ當リテ公其レ力ヲ致セ○竹添曰ク、是等ノ事君慮ルヿ勿レ、惟事ヲ擧ルノ方法ニ於テ十分心ヲ用ユベシ○予因テ內政ヲ改革シ、及ヒ奸類ヲ除クノ策ハ惟我之ニ任セン、事發スルノ後兵ヲ發シテ保護シ、暴發ヲ防グハ公使之ヲ擔當セヨト議決シテ之ヲ誓フ、更ニ餘蘊ナシ○竹添曰ク、公ノ言快暢、此ニ於テ予亦安心セリ、然レニ變起ルニ至リテ、國王予ヲ招キ來護セシムルノ時、其策如何○予笑フテ曰ク、國王手ヅカラ書スル所アラバ則チ可ナリヤ○竹添笑フテ曰ク、一字ヲ書スルモ亦可ナリ○予曰ク、勅使ハ則ヂ一等大臣朴泳孝可ナランカ○竹添又曰ク假令ヒ支那兵ヲシテ一千ナラシムルモ、我一中隊ノ兵ヲ率井テ先ヅ北岳ニ據ラバ、則ヂ二週間ヲ支フベシ、若シ南山ニ據ラバ、則二日ノ守備斷ジテ憂ナカルベシト○予則ヂ別ヲ告ゲラ曰ク、是ヨリ予更ニ貴館ヲ訪ハザルベシ、惟事ヲ擧ルノ日時ヲ擇定シ、謀ヲ行フノ順序ヲ斷決シラ、或ハ朴洪兩君ノ中一人ヲシテ來リテ公使ニ言ハシムベキナリ、今日相別

ル、亦何處ニ生死スルヲ知ラズ、假ニ訣別ヲ爲シテ可ナリ○竹添手ヲ拍チテ笑フ、送リテ重門ノ外ニ至ル●

十一月廿六日、朴君及ヒ徐君ト約シテ、東門外塔洞曹尼ノ室ニ往キ、李寅鍾等ヲ會シ略ボ近日事ヲ擧グルノ意ヲ示シ、多ク細目ヲ講ズ、李殷石ヲシテ急ニ富平ニ之キテ申福模ヲ招キ來ラシム（申君閔泳翊ノ爲ニ海防總管ノ職ヲ以テ、出テ、富平府ニ住シ、養兵敎師タリ）●

十一月廿七日午后、徐君載弼村上大尉ト來會劇談ス●

十一月廿八日早朝、洪君急書ヲ送リテ云フ、前夜竹添ヲ見タリ、竹添言フ、今日往キテ德國（ドイツ）領事ヲ見シニ、領事言フ、近ゴロ朝鮮ノ內勢ヲ察スルニ、朝廷ノ上、黨派互ニ分ル、必ズ一場ノ變動アラン、若シ此ノ時ニ當ラバ、我輩身ヲ處スルノ道ヲ商量セザルベカラズト、此語ヲ聞ケバ、密機ヲ洩走スルノ慮ナクンバアラス、須ラク金君ト更ニ議スベシ云々ト○余ハ飯後洪君ヲ訪ヒテ詳ニ之ヲ叩クニ、德領事ノ言穩ノ喙スル所ニ出ツルニ似タリ、此或ハ閔邊ノ謀リ爲ス所ノモノ、穩之ヲ聞キテ秘ニ德領事ニ傳ヘタルモ亦知ルベカラズ、即チ洪君ヲシテ竹添ヲ見テ、備ニ吾ガ想像スル所ヲ道ハシム、因テ同志人ト約シ、再明日吾ノ東洞別室ニ來會シテ事ヲ擧グルノ時期ヲ決定セントス●

十一月二十九日、召ヲ承ケテ入對ス、適、傍ニ聽ク人ナキヲ得タリ、余ハ襟ヲ斂メテ起拜シテ奏シテ曰ク、今天下大勢ノ日ニ葛藤ヲ致シ、內國ノ情況日ニ危困ニ臻ル、固ニ殿下ノ燭知スル所ナレバ今必ズシモ贅セズ、臣窃ニ更メラ備細ニ陳達セント欲スルモノアリ、聽サルヽヤ否ヤ○上曰ク、奈何スベキヤ○予因テ清佛兵ヲ交ルノ事、日清不和ノ事、露國ノ東略日ニ切迫ニ至ルノ事、及ヒ十餘年來西洋諸國ノ東洋ニ對スル政略順ニ變ジタレバ、復タ舊規ヲ拘守シテ安穩自ラ守ルベカラザルノ勢ヨリ、以テ國中ノ政治、當五錢ノ酷弊民支ヘ保ツヿ能ハズ、誤テ穆麟德ヲ雇ヒ、事失著多ク、奸臣聰明ヲ壅蔽シ、清ニ藉リテ權ヲ弄スル等ノ事（千言萬語盡ク記スベカラズ）ニ至ルマデ洞然一論ス○坤殿忽チ內寢室

ヨリ出テヽ曰ク、吾靜ニ卿ガ言ヲ聞クニ久シ、事勢切迫シテ此ニ至ル、計將タ何ニ出デントスルカト。上意亦懇々之ヲ詢フ。予乃チ奏シテ曰ク、竹添ノ初メ臣ト議合ハズシテ多ク阻止セラレタルハ上ノ已ニ鑑燭スル所ナリ、而テ今竹添ノ再ビ來ルヤ、反テ臣ト欵懇ノ意ヲ視ル、臣察スルニ是必ズ日本ノ政略頓ニ前日ニ異ナルニ因ルナリ、以フニ日清ノ擧蓋シ遠キニ非ルベシ、此時ニ當リ朝鮮當ニ日清戰爭ノ地トナルベシ、將タ何ノ策ヲ以テ自ラ謀ランカ。上ハ坤殿ト深ク以テ然リト爲ス、由テ憂ヒテ曰ク、日清兩國ヲシテ戰ヲ交ヘシメバ、最後勝敗ノ數預メ期スベカラズト雖モ、今、日本佛國ト合セバ勝算決シテ日本ニ在ン。上曰ク、然ラバ我國ノ獨立ヲ圖ルノ策亦是ニ在ラズヤ。予對ヘテ曰ク、誠ニ聖敎ノ如シ、然レドモ殿下肺腑ノ臣ノ如キ、悉ク淸ヲ仰キ、淸ノ爲ニ狗羊ノ役ヲ爲ニ非ルハナシ、日本假令ヒ獨立セシメントスルモ得ベカラザルニ似タリ、臣此言ヲ發スル、固ヨリ生死維レ關ス、然レドモ國家今日危亡朝夕ニ迫ル、臣一身ノ懼ナシ、暴白此ニ至ル。坤殿曰ク、卿ノ此言我ヲ疑フニ似タリ、然レドモ事國ノ存亡ニ係ル、吾一婦人ヲ以テ豈ニ大計ヲ誤ルベケンヤ、卿殊ニ隱スコト勿レ（是レ實カ、虛カ、未ダ知ルベカラズ）。上曰ク、卿カ心ノ在ル所予實ニ之ヲ知ル、凡ソ國ノ大計ニ關シ、危急ノ時ニ當リテハ一ニ卿ガ籌謀ニ任セン、卿更ニ疑フコト勿レ（是レ則チ實心實語）。予對ヘテ曰ク、臣敢テ當ラズト雖モ、今日今夜、聖敎丁寧、耳ニ在リ、安ソ敢テ負カンヤ、願クハ殿下親書ノ密勅ヲ得テ常ニ之ヲ身ニ帶ビン。上樂ンデ之ヲ書シ、實押ヲ劃シ、兼テ大璽ヲ押ス、予拜シ祇ミテ之ヲ受ク、坤殿酒饌ヲ以テ饋ヲ賜フ、天曙クテ退ク。

十一月卅日、諸君約ノ如ク東洞ニ來會ス、乃チ火ヲ別宮（別宮ハ世子婚禮ノ時之ヲ此宮ニ行フ特ニ重大ノ處、又徐君光範ノ家ト僅ニ墻ヲ隔ツ、宮ノ后門ハ即徐家ノ庭前ニシテ、手ヲ下スニ便ナリ、故ニ此ニ決ス）ニ放チ、火災ノ塲ニ就キテ事ヲ行フノ策ヲ決ス（國例火災アレバ、凡兵ニ將タル者必ズ急ニ赴キ火ヲ救フガ故ナリ）、期日ハ則三四日ヲ出デザルヲ以テ定ト。晩ニ洪君及徐君均ク召命アリ、

故ニ散會ス。

十二月一日午下七點鐘、「アストン」會食ノ約アリ、朴徐兩君及ビ予招カル、六時半、將ニ會ニ赴カントス、洪君書ヲ送リテ曰ク、俄ニ日館ヨリ人アリ來リテ言フ、竹添今夜更ニ予曹ニ逢ハント欲ス。予答ヘテ曰ク、予今「アストン」ノ約ニ赴ク、君須ラク先ヅ日館ニ往テ之ヲ竢ツベシ、則チ當ニ九時前後ニ於テ、三人同ク往クベシト。因テ會ニ赴キ、九時半罷キ歸リ、鐘路ニ至ル、月明ニシテ銀ヲ鋪スガ如シ、乃チ盡ク僕從ヲ放チ歸シ、只三人同行直ニ校洞ノ日館ニ來ル（日館從前派守ノ兵丁アリテ人ノ闖入ヲ許サズ、先ヅ名刺ヲ公使ニ送リ、而ル後入ルヲ許ス、竹添ノ來リシヨリ後、吾黨ノ人ハ名刺ナクシテ即チ通行ス）、見ル洪君已ニ坐ニ在リ、坐主ハ島村ニシテ只淺山之ガ通詞ヲ爲スノミ、竹添ヲ見ズ、茶罷ミテ島村ノ曰ク、竹添公使初メ諸君ニ面會セント欲ス、而テ其心中已ニ矢ヒ決ス、心已ニ決シタレバ又面會シテ言辭ヲ費スハ反テ無益ニ屬ス、今夜此失禮ニ權リテ以テ其心ノ堅キヿ金石ノ如キヲ表シ、予テシテ代リテ禮迎セシムト。予遂ニ火ヲ別宮ニ放ツノ策ヲ以テ之ヲ言フ、島村亦甚ダ之ヲ喜ブ。曰ク日限定メテ何ノ時ニ在ルカ。予曰ク姑ク先ヅ今月廿日（舊曆十月廿日ハ新曆十二月七日）ヲ以テ定メトス（予輩決定ノ日ヲ以テ先ヅ洩スヲ欲セズ、故ニ權ニ之ニ答フルヿ此ノ如シ）。島村曰ク何ソ其晩キヤ。予笑テ曰ク、廿日以前ハ月明ニシテ、八人ノ二字（八人ハ即チ火ノ字）ヲ缺ク、故ニ黑夜ヲ得テ而ル後其光彩ヲ發センガ爲ナリ。島村亦笑フ。予又曰ク日限ハ貴國郵船千年丸ノ仁川津ニ抵リ泊スルノ前ニ事ヲ發スルヲ以テ要トス。島村曰ク、何ヲ以之ヲ言フ。予曰ク、貴國政府朝議ノ變化予測ルヿ能ハズ、萬一些ノ變化アリテ、竹添公使今日已決ノ志又變動アランコトヲ恐ル、是レ郵船（千年丸ハ毎月廿日仁川ニ至ル）到着ノ前ヲ期シテ手ヲ下サントスル所以ナリ。島村亦大笑ス。四人均ク細目未ダ竹添ニ言フニ及バズサリシモノヲ細述シ、島村ヲシテ之ヲ竹添ニ傳ヘシム（江華ニ移遷ノ一事既ニ竹添ノ力止スルニ因テ行ハレズ然レドモ今兵ヲ率テ大闕ヲ守護スルノ策恐ク

ハ端ヲ得難カラン、事發スルノ後暫ク駕ヲ景祐宮ニ遷スノ意ヲ以テ、細ニ之ヲ言フ○島村曰ク當ニ公使ニ告クベシ)● 翌日二點鐘、散歸、歸路轉ジテ泥洞朴君ノ家ニ往ク、曾テ約アリ諸壯士ヲ此ニ會ス、李寅鐘、李圭貞、黃龍澤、李圭完、申重模、林殷明、金鳳均、李殷鐘、尹景純皆來集ス、因テ來十七日(舊曆十月十七日新曆十二月四日)午後八九點鐘ヲ以テ火ヲ別宮ニ放ツノ一事專ラ李寅鐘ニ任ジテ指揮セシメ、李圭完、林殷明(戶山士官學校卒業人)尹景純、崔殷童四人ヲシテ布袋數十個(布袋ハ已ニ邊樹ニ托シテ製シ來ル)ニ細砑ノ椵柮ヲ納レ、期ニ先チ、徐君ノ家ノ南庭ヨリ別宮ノ北門ニ輸シ、昏ニ乘ジテ墻ニ赴入シ、積デ別宮ノ正殿內ニ置キ、又烈火石油ヲ小瓶ニ入レ、三十個ヲ限リ墻頭ヨリ連次擲入、之ヲ袋中木ヲ盛ル者ニ添ヘ、自起磺(蓋シ燐寸ノ類カ)ヲ以テ發火セシム、東西ノ行廊ニハ種々ノ烈藥ヲ安置シ(愼デ先ヅ火藥ヲ發スル勿ラシム)、火勢蔓延ノ勢ニ因リテ觸發以テ聲威ヲ助ケシム、八時半九時頃ヲ限リ火大ニ發スルヲ以テ號ト爲ス●

一發火後各營使當ニ急ニ來リテ火ヲ救フベシ、而シテ或ハ病アリテ來ラザル者アランコトヲ恐ル、又更ニ大闕ニ入リ來ラザル者アランコトヲ慮ル、之ニ重ヌルニ尤モ憂フベキハ、竹添ノ來リシヨリ後、一邊ノ疑忌大ニ起ル、故ニ若シ疑ヒテ來ラザルコトアラバ則チ事成ルベカラズ、因テ宴ヲ郵政局ニ設ケ、洪君ヲシテ先ヅ四營使ノ故障ノ有無ヲ探リ、以テ會宴ノ日ヲ定メシム、要スルニ明日ヨリ始テ三日ノ限ヲ出デザラシム、若シ發火後ハ則チ已ニ郵政局ニ來會スル者勢盡ク火ニ赴カザルベカラズ、故ニ其火災場ニ於テ事ヲ行ヒ、一人毎ニ二人ヲ排發シテ手ヲ下サシメ、各短劍一柄短銃一挺ヲ携ヘシム、倘ホ膽怯失アランコトヲ恐ル、故ニ別ニ日本人四人ヲ定メ、伍毎ニ一人ヲ配ス、日人ハ都テ我ガ服ヲ裝セシム●

閔泳翊ニ尹景純、李殷鐘○尹泰駿ニ朴三龍、黃龍澤○李祖淵ニ崔殷童、申重模○韓圭稷ニ李圭完、林殷明ヲ以テ當ラシム●

一李寅鐘、李熙頲年長ノ故ヲ以テ號令ノ任ヲ掌ラシム、之ヲ放チ號ヲ爲シ、之ヲシテ一時ニ下手遲速アルコトナカラシム●

一往來探偵通信ハ柳赫魯、高永錫之ニ任ズ●

一金虎門外(昌德宮ノ四門即金虎門、凡諸大臣ノ出入盡ク此門ニ由ル)申福模同志ノ壯士ヲ招集シ(前ヨリ豫メ酒饌ヲ備ヘテ之ヲ饗ス)、別宮火起ルヲ見テ即チ金虎門外ニ赴キテ把守シ、閔台鎬、閔泳穆、趙寧夏三人闕ニ詣ルヲ待テ當場下手セシム(凡火災或ハ騷動事アラバ各近侍及ヒ承傔官闕ニ入リテ問安スルヲ例トス)●

一前營小隊長尹景完ハ即チ尹景純ノ弟也、尹景純多年吾黨ニ親近ス、只尹景完ハ年少ノ故ヲ以テ初メ交際ナシ、近ゴロ始テ其兄ニ從ヒテ義ニ赴ク、此夜兵丁宮內ノ閤門(國王寢室ノ前門)內ニ當リテ把守シ(各營中小隊長一人兵卒五十名ヲ率井テ每夜閤門內外ヲ輪圍巡守スルヲ例トス、尹景完ヲシテ晝日ヨリ病ト稱シテ赴カズ、此夜ニ於テ、始テ自ラ請フテ當直セシム)前營ノ兵卒五十名ヲ率井外間火起ルヲ待チ、兵丁ヲ圍束シ、若シ網ヲ洩レテ闕中ニ至ルヲ見バ、乃チ勢ニ順ヒテ處置センコトヲ約ス●

一宮女某氏(今年四十二、身休健大男子ノ如ク、且膂力アリ、男子五六人ニ敵スベシ、素ヨリ顧大嫂ヲ以テ目セラル、坤殿ノ寵ヲ承ケ、時ニ近侍スルコトヲ得、十年以前ヨリ吾黨ニ趨付シ、時ニ密事ヲ通報スル者)ヲシテ爆烈藥(二年前予日本ニ遊ビシ時、車挺植ヲシテ西人ニ托シ購ヒ來レル者)少許ヲ竹管ニ納レ、外間火起ルヲ以テ號トシ、通明殿(國ニ喪禮ノ時用ユル處ニシテ常ニ守人ナシ)ニ點放セ

ンコヲ約ス●

一金鳳均、李錫尹亦火藥ヲ以テ、期ニ先チテ、暗ニ宮内仁政殿ノ行廊數處ニ藏貯シ、吾黨ガ變ニ乘ジテ一擧ニ斃ニ入ル時隨フテ入リ、即チ點放ノ事ヲ行ハシム●

一日本人四人後殿ト爲リ、若シ火災場ニ於テ手ヲ失スル者アラバ、日人黑影裡ニ埋伏シ、勢ニ乘ジテ手ヲ下ス●

一別宮火起ルノ後日本館ヨリ兵士卅人ヲ金虎門及景祐宮間(即チ觀峴)ニ發シ、往來以テ意外ノ變ニ應セシムコトヲ約ス●

一事發シ雜沓ノ際自ラ相賊フノ虞アリ、且ツ日人ト互ニ齟齬ノ端アルヲ以テ、暗號ヲ諸名士ニ授ク、即チ天ノ一字ヲ以テ號トシ、日語『ヨロシ』ヲ以テ約トス●

天曙クテ各〻散ジ歸ル●

十二月二日早朝、申福模富平ヨリ來ル(李寅鍾ヲシテ事ヲ領セシム、今度事ヲ行フノ諸人鴨鷗亭ノ近處朴君ノ別莊ニ往キテ鳥獵ス、是レ日本人四名ト各面ヲ識ルガ爲ナリ、日暮皆散ジテ歸ル、云フ約束皆齊整スト)夜約シテ同志ノ諸人ト社洞徐君載昌ノ家ニ會飮ス、歸路予ガ家ニ到リ、益〻節次ヲ講磨ス、申福模亦タ勇然樂ンデ從フ、天明ク而シテ歸ル(此夜洪君大ニ醉フ、徐君ノ家ヨリ歸路馬ヨリ墜チテ少シク左臂ヲ傷ク、予ガ家ニ至リ乃チ紙ヲ索メ、一誓書ヲ書シテ曰ク、我レ地ニ落ル時地我ガ血ニ沾フ、我レ死スルノ時天我ガ心ヲ鑑ム、惟我ガ同心我ガ誓心ニ同ジ、若シ此心ニ背カバ、天必ズ誅殛セント、書スルノ後予ニ示ス、予之ヲ見テ甚ダ樂マズ、朴君亦タ甚ダ其辭ヲ驚怪ス)○聞ク竹添人ヲシテ遍ク景祐宮ノ形勢ヲ看セシメ、且ツ泥峴屯兵ノ所ヨリ暗々彈丸ヲ校洞ノ公使館ニ移シ來ルト云フ(兵卒ヲ裝フコト職工ノ如クシテ而シテ運輸スト云フ)●

十二月三日、朴君ヲシテ日館ニ往キ、竹添ニ逢ヒテ備サニ頃日來抄定スル所ノ案ヲ言ハシム、竹

添善シト稱セザルコトナシ、但言フ、駕ヲ景祐宮ニ移遷スルノ計成ラズンバ則チ奈何セン○朴君答テ曰ク、是レ皆予輩擔當ス、公其レ慮ルコト勿レ○竹添又曰ク、大君主予ヲ招クノ勅書是レ第一ノ關重ニ係ル、須ラク金君ト深ク商リ、深ク之ヲ愼メ○朴君唯々トシテ歸ル、洪君已ニ各營使故障ナキノ日ヲ選ビ、來ル四日午後六點鐘ヲ以テ擇定シ、速ヲ各國公使領事及ビ會ニ赴クノ諸人ニ發ス○夜、予邊君樹ヲシテ官某君(少年者)テ予ガ家ニ請ジテ商確スル所アリ、君主常ニ夜ニ入リテ諸近臣ニ接見シテ庶務ヲ總裁シ、日出後寢ニ就キ、黃昏起床ス、則チ諸近臣夜ニ乘ジテ內ニ入ラザルコトナキ所以ニシテ、是レ予ガ明日事ヲ行フニ妨ゲアリ、因テ明日早夜寢ニ就クノ策ヲ圖ランコト欲ス(時ニ或ハ事ニ因テ曙ニ達シテ仍ホ寢ニ就カザルノ事アリ)○某君曰ク、是レ固ヨリ方畧アリ當ニ政院ニ積ミ置ク所ノ文案(素ヨリ淹滯未了ノ案政院ニアリ)ヲ以テ院吏(政院ノ役人)ヲシテ明朝ヲ待テ持シ納レシメバ則チ可ナリ、尙ホ時ニ因テ方便アルベシ、且ツ他ニ策ナキニ非ズト○而テ別ル○夜深クテ予日本饌ヲ設ク、日本人四名ヲ密室ニ邀ヘ、畫定ノ策ヲ以テ細ニ言ハシメテ曰ク、井上某ノ傳フル所ヲ聞クニ、井上近ゴロ閔泳翊ヲ見ル、語次、閔云フ、我國是レヨリ三十日ノ內必ズ變事アラン、君等外國人必ズ自ラ愼メト○竹添之ヲ聞キテ予輩ノ謀或ハ漏レタルヲ恐レ、再ビ時期ヲ展ベテ彼ノ疑ヲ釋カンコトヲ要スルナリ)●

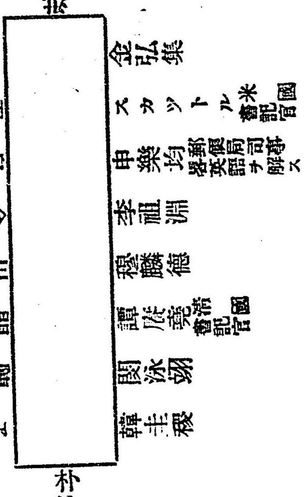
十二月四日、金玉均、朴泳孝等所謂日本黨ノ者相謀リテ遂ニ事ヲ擧グ、世ニ之ヲ金朴ノ亂又甲申ノ事變ト稱ス○時ニ韓廷日本ヨリ非職驛遞官ヲ聘シテ新ニ驛傳ノ法ヲ起サント欲シ、郵政局ヲ京城內ニ創置シ、洪英植ヲ以テ局長ニ充ツ○此日郵政局開業ノ宴會ヲ設ク、米國公使フート」、書記官スカットル」、英國總領事「アストン」、淸國總辨陳樹棠、幇辨譚賡堯、朝鮮貴紳閔泳翊、金宏集、韓圭稷、李祖淵、朴泳孝、金

玉均、徐光範、尹致昊、及ビ朝鮮屋獨逸人穆麟德（モレンドルフ）等來會ス、招請ヲ受ケテ來會セザリシハ、日本辨理公使竹添進一郎ト獨逸國總領事「ジエムプッシユ」ナリ、公使ハ病ト稱シテ宴ニ會セズ、獨リ書記官島村久ノミ赴キタリ○午後六時、賓客皆ナ食堂ニ會シ、食卓ニ就キテ祝宴ヲ開タリシニ、午後九時、晩餐方ニ終ルノ際ニ至リテ俄ニ騷然タリ、主客皆ナ驚キ起チテ屋外ニ出デタルニ、出火アリテ局ノ後ニ當レル距離甚ダ近キ家ナリシガ、見ル間ニ火勢轟ヘテ乍チ鎭火スベキ景況ナリシカバ、賓客中尋常ノ失火ト思ヒテ、屋内ニ入リテ坐ニ復シタル者モアリタリキ●　初メ日本黨ハ郵政局ノ近傍及ビ王宮ノ前門ト景祐宮ノ內ニ各〻一隊ノ黨徒ヲ埋伏セシメ置キ、宴酣ナリシ頃、郵政局ノ隣家ニ潛ミタル者爆裂彈ヲ用ユルコト二回ニ及ビタレドモ、誤リテ發火セズ、則チ火ヲ放チテ其家ヲ燒キタルナリ○賓客一同驚キ散ズルノ際、閔泳翊（ミンイエンイク）先ヅ門ヲ出ヅルヤ否ヤ、忽チ溝中ヨリ刺客現レ出テ、斫リツケタリ、閔ハ身ニ數創ヲ被リ、僅ニ逃レテ局內ニ馳セ入リクレバ、賓客皆ナ愕然トシテ身搆ヘヲ爲シタリ○最初日本黨ノ計畫ニテハ先ヅ支那黨ノ主ナル者ヲ郵政局外ニ於テ殺戮シ、然ル後ニ王宮ヲ押領スルノ目的ナリシモ、閔族ノ一人ニ事ヲ誤リタルガ爲ニ計畫稍〻齟齬シタリ●

（金氏日錄三）十二月四日（舊曆十月十七日）即チ郵政局ノ宴會此夜ニ在リ、吾黨ノ士各〻密約ヲ受ケ、均シク戒心愼重ヲ極ム○朴君又竹添ヲ訪ヒ、誓ツテ相違フコト勿レトノ意ヲ以テ之レヲ質ス○竹添笑フテ曰ク命ヲ領スト○午後四時、予典洞ノ郵政局ニ往キテ設宴ノ準備如何ヲ觀ル、洪君早クヨリ已ニ此處ニ在リ、聞ク各國公使中竹添病ヲ以テ來ラズ、德領事亦病ヲ以テ來ラズ、其餘ノ諸人意ノ如ク會スルコトヲ約セザルモノナシ、只尹泰駿適〻當夜宮中ニ直シテ來ラズト、是レ固ヨリ憂フルニ足ル者ナシ、其有無廣ルニ足ラズ、予乃チ家ニ歸ル、邊君樹來リテ某君ノ意ヲ傳ヘテ云フ、大君主今日天明ノ時ヨリ積滯ノ公事ヲ決スルガ爲ニ寢ニ就カズ、承侯ノ諸官皆午後三時ヲ以テ入對シ、之ヲシテ早ク退カシムト○予因テ邊君樹ヲシテ直ニ宮中ニ入リ（邊君樹常ニ宮中ニ在リテ近侍ス）、凡ソ聞ク所見ル所アラバ、予ガ今夜閧ニ入ルヲ待チテ即チ備サニ告グンコトヲ約ス、因テ徐君載弼ノ家ニ往ク（即チ予ガ家ノ比鄰）、約ヲ受クルノ諸人皆會シテ此ニ待ツ、細目ヲ以テ講定スルコト一遍、日暮昏黑、急ニ馳セテ郵政局ニ赴ク、來會ヲ約スルノ員齊シク集ラザルコトナシ、米公使「フート」、米書記官「スカットル」、英領事「アストン」、清領事陳樹棠、書記官譚慶堯、日本書記官島村久、通詞川上、稅關雇穆麟德、我ガ國ノ官員ニ至テハ主人洪英植、錦陵尉朴泳孝、督辨金弘集、前營使韓圭稷、右營使閔泳翊、左營使李祖淵、徐承旨光範、閔承旨丙奭、尹主事致昊、申司事樂均及ビ予十八人席ニ就ク（予暗ニ庖人ニ囑シ之ヲシテ徐々酒饌ヲ進メシム）●

島村予ト並ビ坐ス、時々日語ヲ以テ相話ス○予問フテ曰ク、君天ヲ知ル乎○島村曰ク、ヨロシ○酒數巡ニ至リ、人アリ忽チ言フ、紅幌（即チ予ガ家）ヨリ人ノ來リ訪フアリト、予即チ戶外ニ出ヅ、朴齋綱喘息定

席次之圖



マラズシテ曰ク、別宮火ヲ放ツノ事技倆ヲ用ヰ盡スモ得ベカラズ、事已ニ急ナリ、是レ將タ奈何セン。予答ヘテ曰ク別宮既ニ成ラズンバ、則チ他所ト雖モ、草家延燒ニ易キ者ヲ擇ビ、即チ之ヲ圖リテ可ナリト、匆々席ニ入ル。島村問テ曰ク、何ノ故アル乎、予實ヲ以テ之ニ告ク。島村亦色ヲ變シテ曰ク將タ之ヲ奈何セン。予曰ク、更ニ方便アリ、慮ル可ラク勿レト。又タ俟ツ可半時許、進饌幾ド了ル、予焦灼ニ勝ヘス、戸外ニ出テ四望ス、忽チ見ル、柳赫魯急ニ來リ言フ、又數所火ヲ放ツ皆ナ意ノ如クナラズ、初メ別宮ノ事覺ハル、ニ因リ、巡捕四方ニ發シ危險言フベカラズ、諸壯士皆此席ニ殺入セント欲ス、如何。予之ヲ止メテ曰ク、事萬々道ナキニ至ラバ、是レ亦タ一策ナリ、然レ𪜈恐クハ雜沓シテ誤テ外國公使ヲ傷クルノ虞アリ、必ズ巡捕ノ到ラザル處ニ向テ更ニ圖リテ手ヲ下シテ可ナリト。又席ニ入ル、閔泳翊ノ輩頗ル疑惑ノ色アリ、島村大ニ不安ノ意アリ。方サニ李菓ヲ進ムルノ𪜈忽チ聞ク外間人聲混雜シテ火災アリト言フ、予驚キ起テ北窓ヲ開ク、則チ郵局ノ咫尺火光天ニ亘ル、座中亦タ紛沓坐ヲ起チ、目ヲ張リテ看ル。韓圭稷先ヅ言フ、予輩將ノ任ニ在リ、急ニ赴キ火ヲ救ハザルベカラズト。忽チ見ル、閔泳翊ニ戸外ヨリ入ル、血流レテ身ニ遍シ（後ニ聞ク郵局ノ北隣火發スルノ後諸巡捕一併急ニ來リテ火ヲ救ヒ、警察ヲ爲ス、諸壯士各兵器ヲ持ス、勢接スベカラズ、乃チ郵局ノ門外ニ向フテ伺ヒ伏ス、閔泳翊ガ先ヅ出ルヲ見テ、日本人急ニ功ヲ先ンゼント欲シテ遽ニ手ヲ下スト云フ）。

此變起リテヨリ、堂内韓人ヲ以テ充滿シ、混雜甚シク、來會ノ賓客皆ナ散ジタリ。書記官島村公使館ニ歸リテ公使ニ其景況ヲ報ズ、時ニ英國總領事「アストン」公使館ニ來リ、書記官ニ面シテ閔泳翊ガ刺客ノ爲ニ重傷ヲ蒙リタルコヲ語リ、且ツ物情騷然トシテ事變ノ起ルベキ形勢ナレバ、日本兵ノ護衛ニテ自己ノ館ニ送ランコヲ請ヘリ、書記官之ヲ諾シテ公使ニ稟シ、兵二人ニ護衛ヲナサシメテ英ノ領事館マ

デ送リタリ。　當時日本兵ノ京城ニ駐屯シタルモノ一中隊（百三十餘人ナリ、或ハ云フ凡ソ二百人ナリシト、十五年ノ事變以來在韓ノ日本兵數却テ減ジタリト云フ）、而シテ清兵ハ之ニ數倍シ、殆ド三千人アリシヨリ兵ヲ召集シ置キタルコヲ記セリ（金允植ノ記事ニハ此日午後三時日本公使館泥峴（チンコーカイ）ノ兵營ヨリ公使館ニ馳セツキタリ）。　時ニ王宮ヨリ急使公使館ニ來リ、國王ノ親書ヲ齎ノ公使ノ闕ニ入リテ國王ヲ保護センコヲ乞ヘリ、蓋シ此事變ノ起ルヤ、金朴二人ハ急ニ馳セテ王宮ニ赴キ、寢殿ノ門戸ヲ開クコヲ得タリト云フ）國王ニ申スルニ、清兵亂ヲ起シテ閔ヲ殺害シタルコヲ以テシ（下ニ抄錄スル金氏日錄ハ之ト小異アリ）、且ツ日本兵ノ來援ヲ求ムベキコヲ勸メタルニ因ルナリ（變亂記事ニ曰ク『公使ハ斯ク聞キテ病床ヲ起キ出デ、衣服ヲ整ヘテ應接所ニ至リテ邊燧（邊樹ノ誤）ニ其ノ事情ヲ尋問セシニ、邊燧ハ事由ヲ詳ニセザレドモ、速ニ入衛アリタシト逃ベタリ』ト。同記事ハ公使館員ノ筆記ニ係ルヲ以テ、事ヲ記スルコ甚ダ詳密ナリト雖モ、公使ノ進退ニ關スル部分ハ頗ル信ヲ置キ難キ所ナキニアラズ、故ニ其他此事變ニ關スルノ事實ハ往々之ニ據ル所アリト雖モ、今之ヲ取ラズ、唯一說トシテ註記スルニ止メテ、姑ク疑ヲ存ス）。

朝鮮國王ガ公使竹添ニ日本兵ノ入衛ヲ望ミタル親書ニハ『日使來衛』ノ四字ヲ書シテ、次ニ『大朝鮮國大君主李熙』ト署シ『大朝鮮國大君主寶』ノ國璽ヲ鈐セリ、公使乃チ中隊長大尉村上正積ト共ニ護衛兵ヲ率ヰテ王宮ニ向フ、時ニ午後十時ナリ、途ニ一人ノ内官馳セ至リテ、大王殿下ハ景祐宮ニ移座アリタ

レバ、速ニ該宮ニ參センコヲ求ムルニ遇フ、依テ其內官ニ先導セシメテ景祐宮ニ至リタルニ、此時國王、王妃、世子、世子妃皆ナ該宮ニアリ、暫クシテ大王妃モ亦至ル○國王ハ公使竹添ノ來ルヲ見テ喜色面ニ溢レ、殿外ノ庭ニ出デ、公使ヲ迎ヘ、速ニ來衛セルノ勞ヲ謝シタリ○殿ノ內外縉紳、內官、雜役、及ビ女官等並列ス、曩ニ金ニ伴ハレテ日本ヨリ歸國シタル留學生其他日本黨ノ者亦皆ナ宮中ニ集マレリ○公使ハ書記官島村及ビ書記生淺山ヲ從ヘテ階下ニ立チ、京畿監司沈相薰等ハ殿外ニ立チ、劍ヲ揮フテ衆庶ノ殿內ニ昇入スルヲ制止セリ●

（金氏日錄四）　外間喧鬨沸騰ス、予因テ朴君徐君ト同ジク北窓ヨリ跳リ出デ、直ニ郵局ノ前門ヲ出ヅ、人皆逃レ散ジテ見エズ、即チ口ニ暗號（即チ天々、朝鮮ノ俗語ヲ以テ之レヲ譯セバ則チ徐々ノ意）ヲ唱ヘテ疾行ス、路ニ李寅鎔及ビ徐載弼ヲ見ル、之ヲシテ身ヲ予ガ家ノ後園ニ隱サシムル、因テ日本公使館ニ向フ、是レ別宮火ヲ放ツノ約差違アリシヲ以テ、一タビ往キテ其ノ氣色ヲ探ランガ爲ナリ、館前ニ至ルニ及ンデ、兵丁排立、密々間ナシ、即チ通報シテ入リ、淺山ヲ見テ竹添ニ面センコヲ求ム○島村早ク已ニ館ニ歸ル、內室ヨリ出テテ聲ヲ勵シテ曰ク、君等何ゾ大闕ニ向ハズシテ茲ニ來ルカ○予笑フテ曰ク公等ノ意既ニ變セズ、予甚ダ心ヲ安ンズト、直チニ闕ニ赴ク、泥洞洞口ニ向フ、金鳳均、李錫尹俟ツコト已ニ久シ、又申福模ガ勇士四十餘人ト四方ニ隱伏スルヲ見ル、金虎門ニ至ル、門已ニ閉ヅ、即チ守門ノ軍士ヲ招キ、之ヲシテ門ヲ開カシム○軍士曰ク、政院ニ問ハズシテ自ラ開クベカラズ○予高聲之レヲ叱シテ曰ク、今禍事起レリ、急ニ即チ門ヲ開ケト○守門ノ將予ガ音聲ヲ聞キ（即チ予ノ服心ニシテ約束アルモノ）直ニ來リテ鎖ヲ開ク、三人即チ鳳均、錫尹ヲ率井テ入ル、只見ル軍卒往々巡邏シ、寂トシテ人跡ナシ、時ニ月明晝ノ如シ、肅章門內ニ至ル、鳳均、錫尹ヲ發シ仁政殿下檗ヲ埋ムルノ所ニ往キテ三十分間ヲ俟チテ之ヲ放發セシム、直ニ協陽門外ニ入ル、把守ノ武監アリ、喝シテ之ヲ止ム（凡ソ闕ニ入ル者大禮服ニ非ンバ入ルコヲ得ズ、今予輩皆平服ナルガ故ナリ）○予乃チ大ニ叱シテ曰ク、汝等戶外何等ノ大事アルテ知ラズシテ、予ガ行ヲ止ムルカト○即チ攔入ス、諸人驚キ恐レテ其由ヲ問フ、予答ヘズ、急ニ閣門外ニ進ム、尹景完兵丁五十名ヲ以テ待ツ、密ニ之ヲ圍束シテ以テ號令ヲ待タシム○進ンデ殿內ニ上ル、上已ニ寢ニ就ク（邊君樹已ニ出迎ヘ耳ニ付シテ云フ、宮中尙ホ毫末ノ疑論ナシト）、只宦官輩廳外ニ出デ、予輩ガ平服ニテ儳忙入リ來ルヲ見テ、驚キ怪ミテ其來由ヲ問フ、予即チ柳在賢（宦官中最モ寵アリ權力アル者、此人ハ則チ刺殺ヲ行ハント已ニ算定スル者ナリ）ヲシテ急ニ請フテ寢ヲ起タシム、柳頻ニ事由ヲ問フ○予大喝シテ曰ク、今國家ノ危亂ニ當リテ、汝宦官輩何ゾ敢テ多辭ナル、柳乃チ驚キ怖レテ入ル○上已ニ予ガ音聲ヲ聞キ、急ニ寢室ヨリ予ヲ呼ビテ曰ク、何ノ事故アルカ、予即チ朴徐兩君ト共ニ寢室ニ入リ、具サニ郵局ノ變ヲ言ヒ、因テ奏シテ曰ク、事急ナリ、請フ暫ク正殿ヲ避ケヨ○坤殿密ニ予ニ問フテ曰ク、此變清ニ出ルカ、將タ日ニ出ルカ、予未ダ對フルニ及バズ、時ニ東北ノ間ヨリ忽チ砲聲ノ天ニ轟クヲ聞ク（是レ某氏ノ事ヲ通明殿ニ行フ也）、是ニ於テ大家驚動、則チ便殿ノ後門ヨリ出ヅ、予急ニ尹景完等ヲ招キ護衛シテ行ク○因テ奏シテ曰ク、此際ニ當リ日本兵ノ保護ヲ要セバ則チ以テ萬全ナルベシト○上曰ク、之ニ依賴セン（上ハ察スル所アルナリ）○坤殿曰ク、若シ日兵ノ護衛ヲ請ハバ則チ將タ清兵ヲ奈何○予急ニ對テ曰ク、清兵亦タ來護ヲ要スベシ○予即チ柳在賢ヲシテ日本公使館ニ往キ、必ズ其早ク來リテ護衛センコヲ求メシム、且ツ曰ク、是ヲ以テ汝ノ功トナスベシト○又某君ヲシテ清陣ニ往キ、之ヲシテ來リ護セシム（是レ固ヨリ僞ナリ、已ニ某君ト約スル所アリ）、繼デ邊君樹ヲシテ即チ日館ニ往キテ此大事意ノ如クナルノ由ヲ報セシム○因テ上ニ奏シテ曰ク、既ニ竹添ヲ招ク、若シ親手ノ勅書ナクンバ則チ命ニ赴カザルニ似タリ○上曰ク何ヲ以テセバ則チ可ナランカ○予ハ鉛筆ヲ進呈シ、某君

白紙ヲ出ス、曜金門内ノ路上ニ於テ上親ラ日本公使來護陛ノ七字ヲ書シ、急ニ朴君ヲシテ往キテ竹添ニ傳ヘシム○轉ヲテ景祐宮ノ後門ニ至ル、門鎖シテ入ル可カラズ、尹景完ヲシテ墻ヲ踰エテ入リ、魚鑰ヲ破碎セシム、凡ソ打チ開クモノ六重門ナリ○此時尹泰駿、沉相薫皆宮内ノ直所ヨリ變ヲ聞キテ來ル、又見ル韓圭稷已ニ郵局ヨリ亂ヲ逃レ、兵丁ノ服色ヲ裝ヒ、大闕ヨリ進ンデ此ニ至ル、柳在賢亦タ已ニ日館ヨリ歸ル(言フ門禁ジテ入ルベカラズ)、均シク言フ、外間驚クベキノ事ナシト○坤殿更ニ予ニ向ヒテ事ノ原委ヲ問フ、適〻此時仁政殿ノ近所ヨリ砲聲起リ來リ、連發二次、子乃チ韓圭稷ニ對シ、叱シテ曰ク、汝兵ニ將タルノ任ヲ以テ、此變亂ノ時ニ當リ、兵ヲ率井テ來リ護スルヿヲ爲サズ、單獨ノ一身ヲ以テ此不敬ノ服ヲ裝ヒ來リテ上ノ心ヲ驚カス、今此變事ノ何ノ處ヨリ出ルカ、汝固ヨリ之ヲ知ランノ○又柳在賢ニ向ヒ叱シテ曰ク、汝鼠蟲ノ輩大勢ヲ知ラズ、猶ホ兒女子ノ習態ヲ此ノ如キノ變事中ニ作ス、是レヨリ、多言シテ人心ヲ擾ル者ハ即チ刺スベシト○仍テ尹景完ヲ召シ聲ヲ厲シテ約束ヲ授ク、一行肅然タリ○韓圭稷頭勢ノ好カラザルヲ覩テ默々後ニ隨フ○景祐宮正殿ノ庭ニ至ルニ及ンデ、朴君竹添ト兵士ヲ率井テ來ル、是ニ於テ予ガ心始テ安ンズ○大駕及ビ諸妃嬪已ニ正殿ニ安坐ス、日本公使我輩ト左右ニ侍衛ス、日兵大門ノ内外ヲ警護シ、人ノ出入ヲ許サズ、前營小隊長尹景完當直ノ兵卒ヲ率井テ殿庭ノ内外ニ排立ス、徐載弼、士官生徒鄭蘭敎、朴應學、鄭行徹、林殷明、申重模、尹泳觀、李圭完、河應善、李東虎、申應熙、李建英、鄭鍾振、等十三人ヲ率井テ殿上ニ侍立シ、李寅鍾、李昌奎、李奎禎、尹殷鍾、黃龍澤、金鳳均、尹景純、崔殷童、高永錫、車弘植ハ殿門外ニ侍立ス、正ニ是レ鐵桶ト相似タリ、水漏ルヽモ通セズ、(聞ク清兵景祐宮ノ近處ニ至リ、遠ク探望シテ即チ營ニ歸ルト云フ)乃チ武監中親信ノ者十名許ヲシテ景祐宮ノ大門ニ出デシメ、諸宰臣變ヲ聞キテ來ル者アラバ即チ名刺ヲ以テ先ヅ通シ、入ルヲ許シテ而ル後ニ入レシム●

此時廷臣皆ナ宮中ノ變ヲ聞キ馳セテ至リシ者多シ、金朴ノ黨乃チ先ヅ後營大將尹泰駿ヲ斬殺シ、又外

衛門督辨閔泳穆、內衛門督辨閔台鎬、吏曹判書趙寧夏、前營大將韓圭稷、左衛大將李祖淵、ノ五人ヲ殺戮シ、其間金朴等自ラ劍ヲ提ゲテ奔走指揮セリト云フ○其一夜ニ支那黨即チ反對黨ノ首領タル此六大臣ヲ除キタルノ擧動實ニ敏速ナリト謂フベシ、而シテ此時同盟ノ士多クハ約ヲ履マザリシヲ以テ、事ヲ決行スルヿ頗ル危ク、成功ヲ見ンヿ殆ド難カラントス、獨リ後營軍司馬(近衛士官)李圭完年少ニシテ氣銳ク、單身奮勵、進ンデ事ニ任ジ、敵黨ヲ殺除セルヿ實ニ此人ノ力ニ依レリト云フ●

(金氏日錄五) 洪英植、李祖淵早ク又郵局ヨリ逃避シテ宮中ニ至ル、駕ヲ景祐宮ニ遷スト聞キ、轉ジテ至ル、李則チ韓柳、兩人ト頻々偶語ス、將ニ圖ル所アラントス(即チ淸兵ヲ引キ入ル、ノ計ナリ)○朴君李、尹、韓三人ニ對シテ曰ク、今變亂ニ當リテ日本公使ヲシテ兵ヲ率井ヲ護衛セシム、而テ三營使兵ヲ掌ルノ任ヲ以テ何ゾ早ク出デ、兵ヲ操リテ以テ來ラザル、只面々相看テ偶語アルハ何ノ故ゾヤ○尹泰駿先ヅ出ント言フ、乃チ人ヲシテ引キ出サシム、纔ニ中門ノ外ニ至ル、李圭完、尹景純之レヲ結果(殺害)シ了ル、人盡ク知ラズ李、韓ト予ニ向ヒテ言フ所アラントス、予亦朴君ノ言フ所ヲ以テ之ニ對フ。李祖淵聲ヲ厲マシ呼ンデ曰ク、予門ヲ衛ルノ命ヲ承ケ、命アルニ非ズンバ入ルヿヲ許サズト○且ツ諸壯士前ニ橫ヘ、之ヲ叱シテ曰ク、予主上ニ入對セント欲ス、予ガ門ニ入ルヿヲ許ルセ○徐君載弼劍ヲ以テ均シク舊然發セントスルノ勢アリ、韓、李ト萬止ムヿヲ得ズ、乃チ景祐宮ノ後門(此門外各營ノ兵卒盡ク來リ集ヲ守衛ス)ヲ出ヅ、黃龍澤、尹景純、李圭完、高永錫門外ニ於テ手ヲ下シ結果シ了ス○閔泳穆來リテ景祐宮正殿ノ外ニ至リ、日本通詞楓玄哲ヲシテ永錫ヲシテ擁護シテ入ラシム、纔ニ大門內ニ到リ、日本兵士衛立ノ中ニ於テ事ヲ行フ、趙寧夏之ニ次ギ、閔台鎬又之ニ次キ一例ニ結果シ了ル●

申報(上海刊行)ニ曰ク、此日二鼓ニ至リ、玉均、泳孝、光範ト同ク直ニ王ノ寢室ニ造リ、詭詞奏稱ス、大淸ノ兵亂ヲ爲シ、瀋城ノ百姓荼毒ニ堪ヘズ、宜シク日本公使ヲ召シテ入衛セシメ、暫ク別宮ニ避クベシト、乃チ逼リテ太王大妃及ビ王妃等ヲシテ景祐宮ニ至ラシメテ錮閉ス、事ノ未ダ起ラザルニ方リテヤ、玉均、英植未ダ兵柄ヲ得ズンバ以テ群臣ヲ壓制スルニ足ラザルヲ慮リ、乃チ人ヲ遣リ、祖淵、圭稷、泰駿ニ向フテ之ヲ說キ、事ヲ共ニセンコトヲ謂フ、三人佯リテ之ヲ諾シ、而シテ陰ニ之カ備ヲ爲セリ、是ニ至リテ一併ニ殺害シ、幷ニ詔ヲ矯メテ輔國閔台鎬等ヲ誅ス●

既ニシテ殿內燭盡キテ闇黑トナリケレバ、公使館ノ提灯ヲ內官ニ與ヘ、僅ニ一點ノ燭光微ニ輝キ照ラスノミ。中隊長村上ハ公使ニ向ヒテ、斯ク雜沓ノ有樣ニテハ國王ヲ護衛センコト甚ダ難シ、宜シク雜人ノ皆入ヲ制止スベシト云フ、公使即チ其旨ヲ國王ニ傳申シタリ、因テ命アリ、雜人ヲ殿門外ニ出シ、女官ハ宮ノ北隅ニ當レル一房ニ居ラシメ、日兵韓兵ト共ニ各〻守衛ノ部署ヲ定メテ警衛ス、夜半ヲ過ギテ喧騷漸ク定マル、國王乃チ殿ノ西室ニ出デ、公使ヲ召シテ護衛ノ勞ヲ謝シ、且ツ懇話アリ● 此夜一時ヲ過ギ、米公使及ビ英、獨、兩領事ノ許ニモ王使起キテ入闕ヲ求メタレドモ、深更ニ及ビタレバ、公使、領事ハ來ラズシテ、獨リ米國公使館附海軍信號士官「ベルナンド」通辯尹致昊ヲ伴ヒテ入內セリ●

翌五日早天、國王ハ承旨院ニ旨ヲ下シテ內閣ヲ改革シ、舊來ノ政官ヲ罷免ス、內衙門ハ一時之ヲ廢シ、外衙門ハ其官職ヲ存シタレドモ、亂中ハ名ノミニシテ、事務ハ悉ク宮中ヨリ出ヅ● 時ニ同志諸人朴泳孝ヲ推シテ領議政タラシメント欲ス、朴ハ年少信ナシトテ之ヲ辭シテ、國王ノ從兄李載元ニ讓リ、洪英植ノ德望才幹アルヲ以テ右議政ニ推薦シ、朴ハ前後營使(近衛司令長官)ニ任セラル、金玉均自ラ戶曹判書(財務及ビ農商務大臣)タラント欲シ、徐光範亦交涉督辨(外務大臣)タラント欲セシカドモ、朴ハ之ヲ不可トシテ曰ク、自己ノ官職ヲ進ムルハ改革ノ本旨ニアラズト、金乃チ戶曹參判(次官)ニ、徐ハ交涉協辨(外務次官)ニ任セラレ、又金及ビ朴泳敎(泳孝ノ兄)ハ承旨ニ兼補セラレテ王命ヲ承傳スルノ職ヲ帶ビ、又徐載弼ハ日本ニ留學セシ者ヲ以テ新ニ組織セシ親衛兵士ノ監督ヲ命ゼラレタリ(一書ニ、亂前領議政ハ之ヲ缺キ、左議政ニハ李載元、右議政ニハ洪英植之ニ任ジ、又戶曹判書ニハ金玉均任セラレタリトアリテ、金氏日錄ノ記スル所ト異ナリ、蓋シ一日一二回更任アリシニ由ルナリ)●

(金氏日錄六) 李輔國載完ヲハ許シテ入侍セシメ、之レト時事ノ艱及ビ此改革ノ擧ヲ傾談ス、李輔國樂テ以テ之レニ從フ、因テ中使ヲ發シ、邊君樹ト同ク送リテ各國公使館ヲ慰問セシム、米國公使ハ海軍士官「ボーンオート」ヲシテ尹致昊ト同ク送リテ景祐宮ニ至ラシム、即チ入リ來ル、「ボーンオート」ニ今日ノ事ヲ概言センコトヲ囑シ、猶ホ善後ノ道ヲ以テ公使ニ言ヒ、若シ答アラバ即チ報センコトヲ求メ、約ヲ爲シテ出ヅ(即チ回報アリ、曰フ事既ニ此ニ至ル、只善ク內政ヲ改革セヨ)是ニ於テ窘ホ政令ノ急ニ先ヅ行フベキモノヲ考ヘ、方サニ稟奏シテ而テ行ハント擬ス、坤殿東朝ト只急ニ大闕ニ歸ラント欲ス、宦官宮女數百人一室ニ雜處ス、嘿々喃々、少シモ驚恐ノ色ナク、百事只因循ヲ事トス(亦坤殿ノ計策ニ出ルナリ)、天大ニ明ク、乃チ徐君載弼ヲシテ諸壯士ニ令シテ宦官柳在賢ヲ縛シテ

之ヲ正廳ノ下ニ引致セシメ、因テ其罪目ヲ數ヘテ劍ヲ以テ之ヲ戮殺ス、滿坐皆色ヲ失ヒ屏息ス、即チ宮女宦官ノ用ナキ者ハ盡ク逐斥ス、因テ大ニ改革ヲ行ヒ先ツ重大ノ要任ヲ定ムルヿ左ノ如シ。

領議政	李載元(大君主ノ從兄)
左議政	洪英植
前後營使兼左捕將	朴泳孝
左右營使兼代理外務督辦右捕將	徐光範
左贊成兼左右參贊	李載冕(大院君ノ嗣子)
吏曹判書兼弘文提學	申箕善
禮曹判書	金允植
兵曹判書	李載崇(李載元ノ兄)
刑曹判書	尹雄烈
工曹判書	洪淳馨(王大妃ノ侄)
漢城判書	金弘集

凡ソ閔ニ屈セラルヽ者ハ概ヲ擧ゲテ以テ官ト爲ス、瑣ハ盡ク錄スベカラズ。

判義禁	趙敬昊(大王大妃ノ侄)
藝文提學	李載昌
戶曹參判	金玉均
兵曹參判兼正領官	徐載弼
都承旨	朴泳教(朴泳孝ノ伯兄)
同副承旨	趙同昊(大王大妃ノ從孫)
同義禁	閔胄植
兵曹參議	金玄鉉(順和宮ノ弟)
水原留守	李熙善
平安監司	李載純(大院君ノ宗親)
說書	趙漢國(大院君ノ外孫)
洗馬	李浚鎔(大院君ノ孫即チ李載冕ノ子)

前夜ノ變タル、事忽卒ニ起リシヨリ、內外人概ヲ之ヲ識ラス、淸營(城內東南北ノ三村ニアリ、兵數殆ド三千人)ニテモ殆ド之ヲ悟ラズ、翌朝ニ至リテ始テ事變ノアリシヿヲ知リシト云フ。

五日午前十時、米國公使「フート」及ビ英國總領事「アストン」入內ス、國王ハ直ニ謁見ヲ許シ、一室ノ內ニ於テ歡晤アリテ兩氏ノ無事ヲ祝セリ、此時公使竹添モ亦同席シ、國王ノ懇話アリ。曰ク『今回ノ變、日本公使ノ速ニ來衛アリシハ殊ニ滿足ノ至ナリ、今各使官ニ面接スルヿヲ得テ、益ス四海一家ノ懷ヲ增セリ、各使官ノ厚誼ハ最モ感激ニ堪ヘズ、凡ソ國ト國トシテ舊來ノ陋習ヲ破リ、開明ノ域ニ進マントスルニハ多少ノ變亂ヲ經ルヿ亦止ムヲ得ズト聞ケリ、即チ現ニ日本公使ハ數度ノ變亂ヲ經タルヿニテ、此等ノ事ヲ熟知セル人ナリ、英米等ノ諸國ニテモ蓋シ其例ハ少カラザルベシ』米國公使答ヘテ曰ク、然リ、國ノ開明ニ赴カントスル際ニハ斯ル類例少カラズ、弊邦ニ於テモ數ハ經驗シタル所ナリ。頃ク

アリテ國王ハ大王妃防塞ノ用意乏シキヲ以テ、共ニ李載元ノ邸ニ赴キ、日本公使及ビ米公使英總領事ヲ伴フ(李載元ノ邸ハ景祐宮ト相接シ、僅ニ一門ヲ隔ツルノミ)、韓兵邸ノ外圍ヲ環衛シ、日本兵ハ韓兵ト共ニ邸內ヲ守衛ス。此日午後二時、獨逸總領事「ヂエムブツシユ」亦入內謁見セリ。三時ヲ過ギ、外國公使等皆ナ相伴フテ辭シ去リタリ。此時公使竹添モ亦辭シ去ラントシテ傳申セシメシニ、國王ハ尙ホ暫ク留衛アリタシト親シク依囑アリタレバ、公使モ辭スルヿ能ハズシテ留リ、則チ此事變ヲ東京ニ電報セリ。

此日午後、議政洪英植國政改革案ヲ國王ニ呈ス、其要旨ハ國權ヲ擴張シ、各國ト對等ノ交際ヲ開クヿヲ目的トシ、淸ト宗屬ノ關係ヲ絕ツ事、兩班(貴族)ノ專權ヲ抑ヘテ常民(農工商)ノ權利ヲ伸ベス事、內官ヲ廢シテ人才登用ノ路ヲ開ク事等ノ條目アリ。又殿下ヲ尊ミテ陛下ト更メ、王命ヲ勅ト云ヒ、王自ラ稱シテ朕ト云フノ式ヲ定メタリ。　此時金玉均ハ國王ノ速ニ還宮アルベキヿヲ云ヒ、洪英植、徐光範等之ヲ可トス、獨リ朴泳孝ハ之ヲ不可トシ、凜然トシテ曰ク、敵黨我等ヲ目シテ逆賊トナス、今後ノ事

變測ルベカラズ、三千ノ清兵傍觀セザルベク、必ズ爲ス所アラン、我兵二千反覆常ナク、恃ム ニ足ラズ、只恃ム所ハ二百ノ日本兵アルノミ、夫ノ金允植ノ如キ、既ニ之ヲ禮曹判書ニ推薦シテ屢バ招キタレ𪜈竟ニ來ラズ、今ヤ却テ清營ニ投シタリトノ說アリ、我黨豈ニ晏然タルベキノ時ナランヤ、若カズ殿下ヲ擁シテ江華(カンホア)ニ赴キ、持久ノ策ヲ立テヽ援ヲ日本ニ求メンニハト。衆乃チ其說ニ服シ、之ヲ公使竹添ニ詢ル、公使ハ其說ヲ用ユルヿ能ハズ、之ヲ不可トシ、速ニ還宮アランコヲ勸言セリ。朴慨然トシテ歎ジテ曰ク、吁豎子事ヲ敗ルト。此夕國王ハ王妃、世子幷ニ諸臣ヲ從ヘテ王宮ニ還リ、政府モ亦暫ク之ヲ宮中ニ置クリ(變亂記事ニ曰ク『此日午後四時ニ至リテ國王幸アルベキ旨ヲ傳フ、公使ハ薄暮ノ還幸ハ不虞ノ恐レアラントヲ掛念シタレドモ、國王ノ懇命辭スルニ由ナク、陪從シテ王闕ニ至ル頃ニハ日モ暮レ果テタリ、國王、王妃、世子、世子妃、及ビ先王妃ハ皆ナ大王妃ノ寢殿ニ同居アリテ、我兵ハ其ノ周圍ヲ護衛シ、韓兵諸門ヲ守レリト。又同記事ニ(此時始メテ我ガ公使ハ昨夜韓廷ノ大臣數名ガ景祐宮ノ內外ニ於テ刺殺セラレタルコヲ聞知シタリトアルハ信ジ難シ)。

(金氏日錄七) 十二月五日午前八時、米國公使、英國領事、德國領事ノ所ニ各〻前營ノ兵丁三十名ヲ送リ保護シテ來ラシメ、上之レヲ接見ス、米公使予ニ對シテ隱ニ付托ノ意アリ、英領事頗ル不穩ノ色アリテ外ニ形ハル。是ニ於テ內殿ノ諸位意ヲ決シテ宮ニ還ラント欲ス、之ヲ拒ムコ殆ド難シ、皆謂フ狹隘ニシテ身ヲ容ルベカラズト、即チ桂洞ナル李輔國ノ家(即チ景祐宮ノ南隣)稍景祐宮ヨリ廣キヲ以テ暫ク移御ヲ行フ、李載完亦德國領事ヲ招キ入ル、後ニ聞ク米、英、德三使各〻言フ所アリ、皆坐シテ時

變ヲ觀ル、只外人ヲ保護セヨトノ意ヲ以テ懇々シテ退ク。竹添進ンデ大君主ニ對シテ多ク奏スル所アリ、又方今天下各國ノ大勢形狀及ビ內政ノ改革セザルベカラザルノ事ヲ以テ之ヲ言ヒ、繼デ又曰ク、兵ヲ養フコ尤モ精ナラザルベカラズ、今貴國ノ兵前營稍他營ノ兵ニ勝ル、是レ則チ曾テ朴泳孝ノ操練スル所、然レドモ朴泳孝今干與スルコナシ、何故ニ國ノ爲ニ力ヲ盡クスノ人ヲ如此廢棄シテ用ヒザルヲ審ニセズ、極テ惜ムベシト。上即チ命ジテ朴泳孝ヲ除シテ前營使ト爲ス、坤殿及ビ東朝頻ニ予ヲ招キ、大闕ニ歸ランコヲ要ス、予輩ノ慮ル所柱洞ナラバ即チ少數ノ兵ヲ以テ戰守スルニ易シ、大闕ニ至リテハ則チ地理ニ於テ不利ナリ、故ニ初メ駕ヲ江華ニ移遷スルノ一事ヲ以テ策ヲ定ム、而テ竹添公使ニ挽キ止メラル、只景祐宮ハ則チ屢〻商量シテ而テ始テ得タルモノナリ、今闕ニ歸ラバ必ズ不虞アラン、乃チ竹添ニ囑シ、若シ主上ノ敎アルモ、必ズ地勢ノ不利ヲ以テ奏シ、姑ク二日ヲ俟タバ、則チ吾黨自立ノ事準備セザルコトナシ、此時闕ニ還ルモ妨ゲナキノ意ヲ以テ之ヲ申言シ、誓テ策ヲ決スルモノアリトシ、予洪君及ビ李輔國ト外廳ニ出ヅ、忽チ聞ク、上竹添ヲ召シ、狹陋隘粗暫クモ居ルニ堪ヘザルノ意ヲ以テ、懇ニ大王大妃ノ意ヲ傳ヘテ曰ク、若シ淸兵不虞ノ變アラバ、大闕此處ト少シモ同ジカラザルコナシ。竹添乃チ覆奏シテ曰ク、即チ中隊長ヲシテ先ヅ宮中ノ事ヲ探ラシメテ後ニ奉對セント、一時間ノ後、宮ニ歸ルモ妨ナキノ意ヲ以テ奏ス、予之ヲ聞キ、急ニ諸君ト入リテ先ヅ竹添ヲ責ム、竹添笑フテ曰ク、守備ノ事一モ憂ヲ爲スコ勿レ、予已ニ主上ニ奏ス、君等多言スルコ勿レ。上亦タ竹添ノ許ス所アルヲ以テ甚ダ喜ビ予ヲ召シテ之ヲ言フ、事既ニ此ニ至ル、勢奈何トモスルコナシ、即チ朴君ヲシテ村上中隊長ト同ジク若干兵ヲ率ヰテ大闕ニ入リ、遍ク地勢ヲ觀セシメ、觀物軒ヲ以テ定(一ニ營ニ作ル)ト爲シ、而テ歸リ報ズ。午後五時諸宮大闕ニ還ル。竹添予輩ト共ニ一室ニ處ル、內外ノ守衛一ニ景祐宮ノ如シ、內衛ハ皆同黨ノ壯士ナリ、中衛ハ日兵ナリ、外營ハ四營ノ兵士ナリ(其中前營ノ兵士近衛タリ)。晩ニ至リテ、將サニ各闕門ノ鎖鑰ヲ下サントス(是レ國例ナリ)忽チ聞ク、宣仁門外淸國營兵吳

兆有ノ陣（聞ク袁世凱、張光傳、今吳兆有ノ陣ニ集ルト）ヨリ兵丁ヲ送リテ宣仁門ヲ閉ヅルヿヲ停ム、朴君聞ヲ而テ之ヲ怒リ、過激ノ事ヲ以テ先ヅ發セントス、予竹添ト共ニ之ヲ止メテ曰ク、門ヲ閉ヂザルモ亦タ妨ナカルベシト、乃チ前營後營ノ兵四百名ヲ發シ、各一百名ヲ要地ニ分屯シテ以テ動靜ヲ伺フ、竹添乃チ日兵ニ命ジ、戒嚴旦ニ達ス、此日布ク所ノ政令署錄スルヿ左ノ如シ。

一大院君不日陪還ノ事（朝貢ノ虛禮併セテ廢止ス）。

一門閥ヲ閉止シ、以テ人民平等ノ權ヲ制シ、人ヲ以テ官ヲ擇ブ、官ヲ以テ人ヲ擇ブヿナキ事。

一通國地租ノ法ヲ改革シ、吏ノ奸ヲ扯キテ、民ノ困ヲ救ヒ、兼テ國用ヲ裕ニスル事。

一內侍ハ盡ク革罷シ、其中若シ優才用ニ適スル者アラバ、同ク登用スル事。

一前後奸貪ニシテ國家ヲ病マシムルヿ著シキ者ハ罪ヲ定ムル事。

一各道邊上永々臥還事（此一項解シ難シ、姑ク原文ノ儘ヲ存ス）。

一奎章閣ヲ革罷スル事。

一急ニ巡查ヲ設ク、以テ盜竊ヲ防ク事。

一惠商公局ヲ革罷スル事。

一前後流配禁錮ノ人ヲ酌放スル事。

一四營ヲ合セテ一營ト爲シ、一營中丁ヲ抄シテ急ニ近衛ヲ設クル事（陸軍大將ハ世子宮ヲ擬ス）。

一凡ソ國內ニ屬スル財政ハ惣テ戶曹ヨリ之ヲ管轄ス、其餘一切ノ財務衙門ヲ革罷スル事。

一大臣參贊（新ニ六人ヲ差ス、今必ズシモ其名ヲ書セズ）ト日ヲ課シテ閣門內議政所ニ會議シ、以テ變定ヲ爲シテ、政令ヲ布キ行フ事。

一政府六曹ノ外、凡ソ冗官ニ屬スル者ハ盡ク革罷ヲ行ヒ、大臣參贊ヲシテ酌議シテ以テ啓セシムル事。

翌六日ニ至リテ朝野殆ド靜穩ニ歸ス、因テ公使竹添ハ再ビ護衛ヲ辭シ去ラントテ、其由洪英植ヲ經テ申稟セシニ、國王ハ其宮殿ニ歸リテ全ク無事平穩ニ歸スルマデ非常ヲ警メンヿヲ懇請シクレバ、公使モ强テ辭スルヿヲ得ズ、午後ニ至ルマデ、仍ホ王宮ニ止リタリ。

此一擧ヲ以テ朝鮮進步黨即チ所謂日本黨ノ企謀一タビ行ハレ、政權其手ニ歸シタリ。

〔日本黨ノ三日內閣〕